女子文壇



第五年第五號

女子文壇
第五年第五號

【本欄】（一—四〇）

目次

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

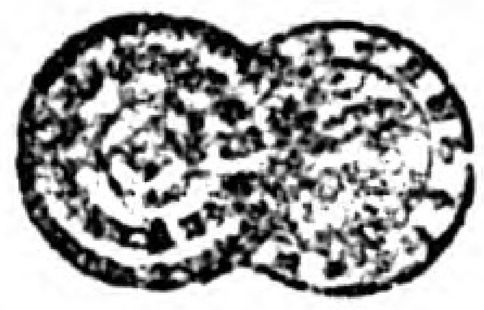
第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領



登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製　大壜二十四錢　小壜十二錢

水製　大壜二十五錢　中壜十五錢　小壜十錢

玉製

粉製

肉色各種

錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ淸々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「董おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に落し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

錫、藍、紅彩蝶嚮ひ罐詰入　錢

別製罐詰　五拾錢

大袋　二錢

小袋　一錢

登録商標

西洋白色くなるあらひ粉

SUMIRE
WASHING POWDER

壽美禮あらひ粉



製造本舗　東京兩國元町（兩國橋際）　壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店並藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

（電話浪花一七八五番）

薔薇



（大江顏色版部）

●模範的國語漢文辭書特價販賣廣告●

前東京高等師範學校教諭　小山左文二先生新著　（見本呈上）

新體 國語漢文辭林

上製全一冊紙數千百餘頁
定價金貳圓　郵稅金貳拾錢
內地小包稅金拾貳錢

▲特價金壹圓五拾錢……五萬部限りとす▼

〔內容〕……語數三萬有餘。現行の師範學校、中學校、高等女學校及び各種實業學校等に於ける國語漢文教科書中の故事、熟語、格言、俚諺、詩歌、俳句、物名、人名、地名等は悉く收めて此の一卷の中に在り。解說簡潔にして明斷、語々洗錬彫琢の餘に成る。

〔排列〕……漢語より成れる大多數の語句は首字の總畫によりて排列し、雅語及び西洋の地名、人名等は別に五十音順に排列し、其の檢索最も容易迅速なり。

〔索引〕……三十八頁の畫引索引の外、二百七十頁の五十音引索引を附し、種々の方面より遺漏なく書中の字句を索出するを得ること、恰も物を嚢中に探るが如し。

〔體裁〕……四六版六號活字三段組にして、紙數實に一千一百二十餘頁、全紙一行の餘白だになく、內容の整備充實は、外裝の堅牢優雅と相待ちて、陸離たる光彩を放てり。茲に其の完成を告げ、大方教育家諸氏及び全國三十萬學生諸君の高需を待つ。

發兌元　東京京橋區南鍛冶町　振替口座七九三四番　松邑三松堂

發賣元　大阪市備後町　吉岡平助　大阪市南本町　三宅莊藏　大阪市心齋橋　松村九兵衛

現代の閨秀作家



正岡秋子女史



國木田治子女史



竹内政子女史

文士の夫人



尾上柴舟氏夫人



生田葵山氏夫人

信用ある安藤井筒堂の製品

かばん形　新案特許



正價貳拾五錢

口中香水 **カオール**

價（箱入壹圓五十錢◎十錢入廿錢五十錢）

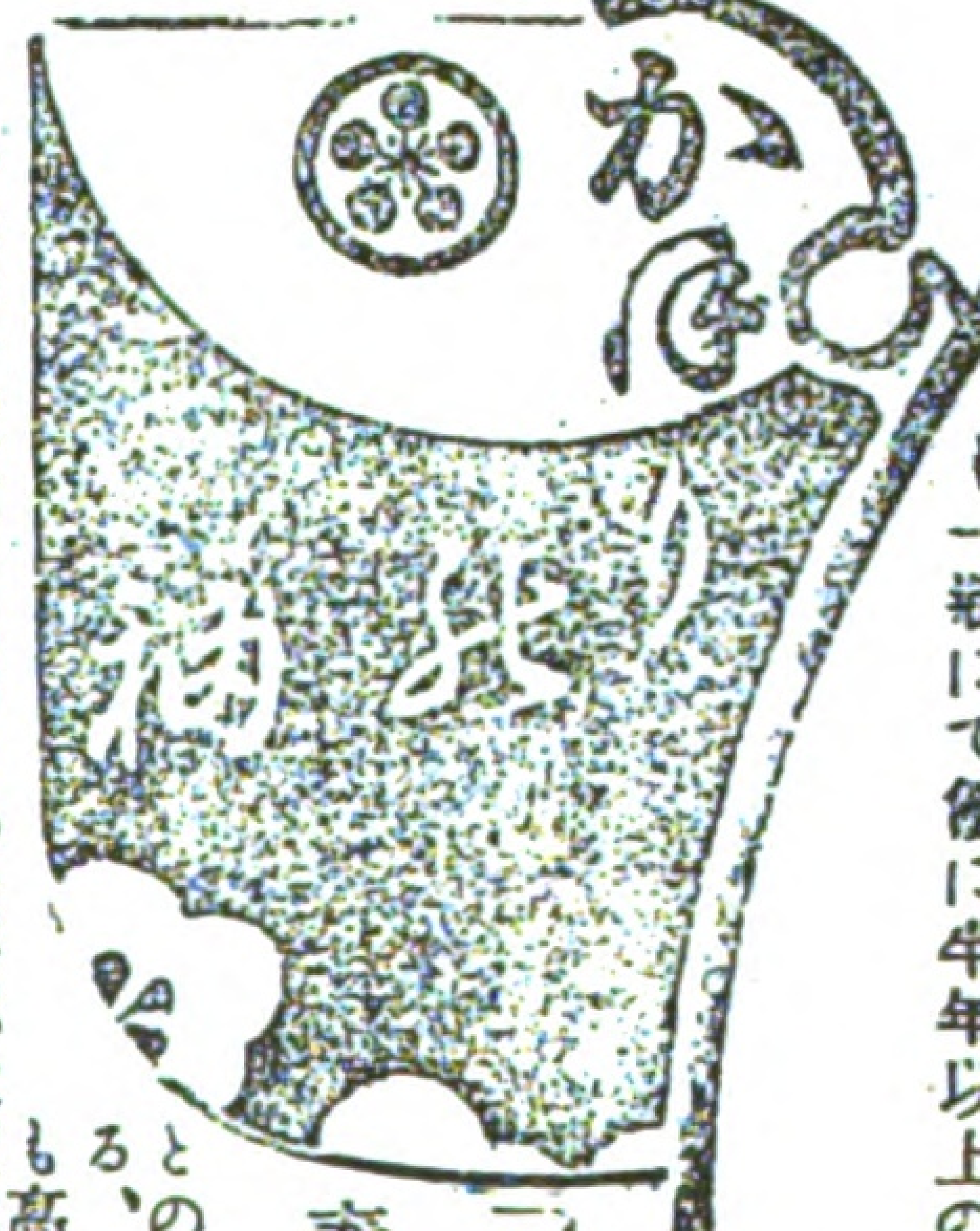
本品の特効は
㊀口中の惡臭を去り、口熱を起すことなく
㊁咽喉を能く潤はし、音響を最も美くす
㊂飲食の中毒を除き、容易く禁烟し得る
以て交際場裡に出入する紳士淑女は必ず
携帯なされ給ふべく、空氣中に浮遊して居る
細菌を殺す力を有つて居りますから學校
集會、運動會等常に多人數集會の場所
に於て呼吸より感染する肺病、ペスト、
赤痢其他恐るべき惡疫を豫防するには
口中香水カオールを一二粒口中に含
んで居るに限ります。

高等香油 **ビューチー**

價（大壜四十五錢 小壜二十五錢）送料八錢

椿油中に毛髮の營養となるべき多くの性分を含有することは嘗て村井弦齋氏が說明せられたるがビューテーオイルは即ち椿油中より毛髮の營養となるべき主成分を採り之に適當の香料と油の適有性を去るべき藥劑を配合したる最も進歩せる煉香油なり

◎御注文の節は必ず本誌愛讀者たることを御申添を乞ふ……………



大拾五錢小拾錢送料貳錢

「梅の花たが袖ふれし匂ひぞと春やむかしの月にとはゞや」との昔の名歌に因みて造りたる、いとも高雅の**匂袋**なり

本品の一度世に出づるや東京、大阪、京都、神戸の名ある呉服店より多大の御注文に接し且つ取次發賣を快諾せられたり。本品は優等なる芳香原料の外に最も有効なる殺菌、防腐、及、防蟲等の藥劑を配合せる故に寄席、劇場、汽車、汽船などの旅行、簞笥の抽斗、長持、書籍、骨董等の間に用ゐて大なる効あり

香水原料 **オリヂナルパーピユーム**

價定判貳拾錢

本品はハンカチーフ用として優等無比なるは勿論、御婦人方は花簪、リボン、まげ入等に其一滴を、紳士方は帽子、子クタイ等に又は男女襟巻、扇子等に四時絶へず其一滴を潤ほし給はゞ能く一週の永き間本品獨特の優美高尚なる芳香は坐臥常住馥郁として恰も花園の中に居給ふ如くならん。

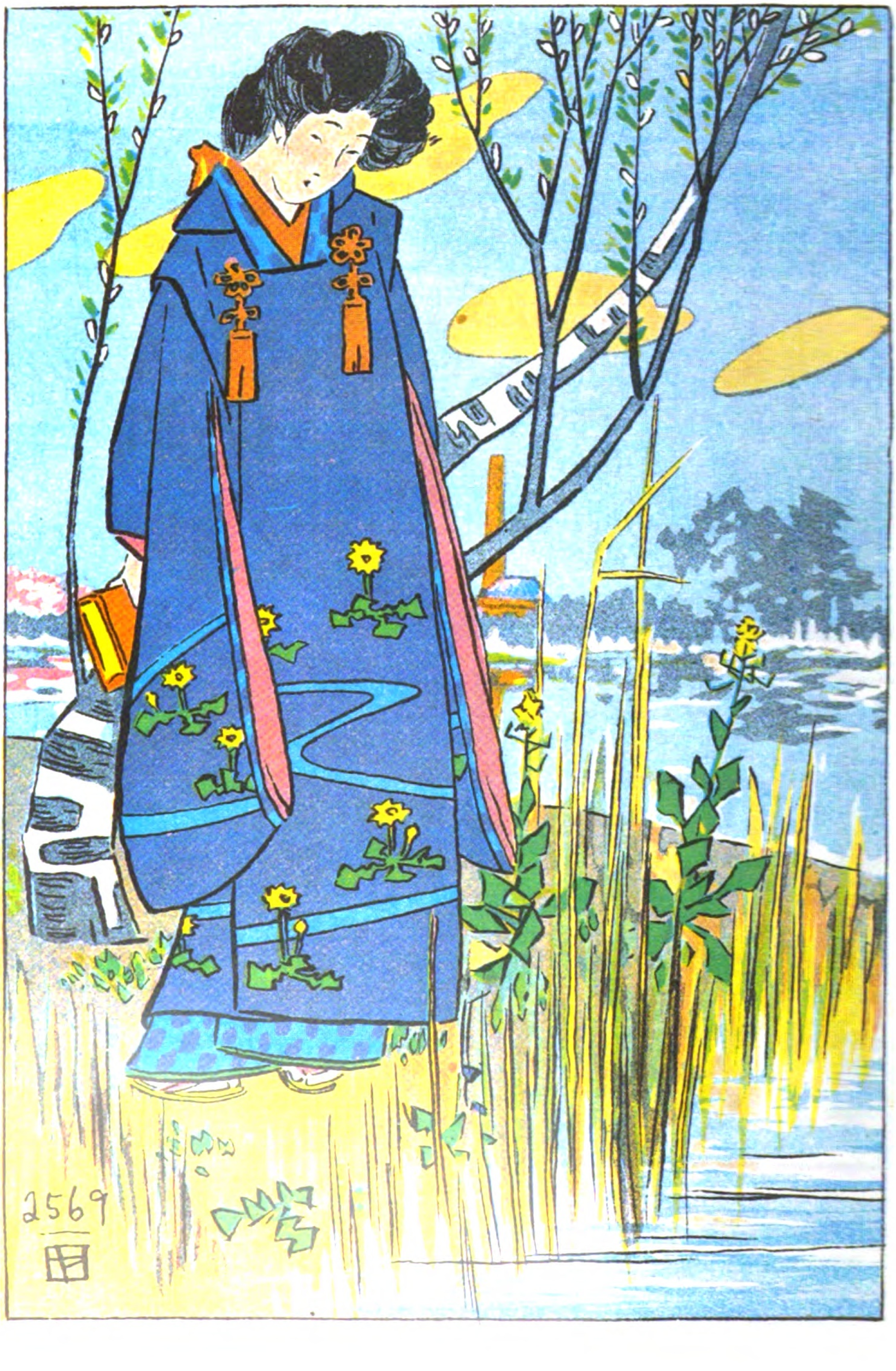
本品は一瓶の量は二百八十滴を充せる故一日に一滴宛を消費するも二百八十日如何に裕に使用するも一瓶にて優に半年以上の使用に堪ゆべし。

發賣元　東京市日本橋區蠣殼町水天宮前染印商店本舗　**安藤井筒堂**　長電話浪花二九四九番　振替貯金口座二九五〇番

▲本品は全國至る處の賣藥化粧品店にあり

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

春の雲





小兒養育者は商標を買はずに品質を撰べ
ミルクの種類もたくさんありますが其うち
最も品質の優等のは何印でしよう
それは我國の同盟國英本國の領地
カナダ州より輸入する

鹿印コンデンスミルクです

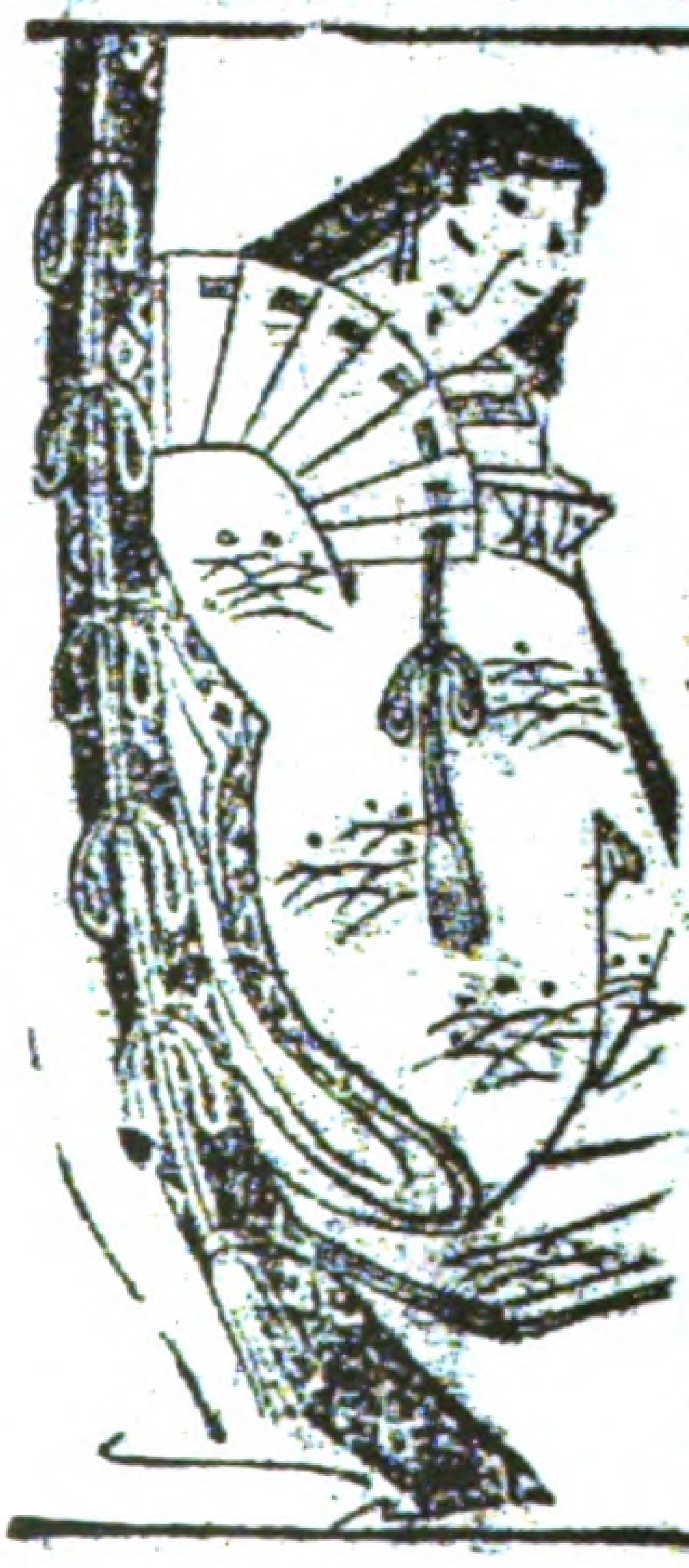
賣捌店は至る所の藥店、洋酒店に在り

外毒豫防ゴム製婦人必携之器

登録商標

一名きよおろも

子宮サック



定價

甲種一個金壹圓　乙種一個金七十五錢
甲種二個入一圓七十錢　乙種二個入一圓卅錢

▲効能及使用方

●子宮サックはゴム製にて嶄新の發明御婦人方の衛生上必ず携ふべき要用の良器なり●子宮サックを用ふるときはいかなる場合といへども黴病痳毒下疳等の傳染することなく又子宮を損傷する憂なし●子宮サックは懐姙を望む御婦人は用ふべからず是れを用ふるときは懐姙せざればなり●子宮サックは月經の際經水漏洩を防ぎ立居を便ならしむ●子宮サックの使用は本品に添へて委細傳授すべし●子宮サック入の御婦人は一個に付金十錢にて全國何處を問はず御送附申上候

月やくはらい通經丸本舗子宮サック發賣所

東京市兩國米澤町二丁目一番地
萬珠堂藥舖
吉田安五郎
振替貯金口座二〇六番
電話浪花千百三十八番

（僞物注意）

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

梅毒根治新劑

オ賣(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒特効根治の新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製誓って根治盡すること確證す從來醫療賣藥等百方手を分にて盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……(獨逸新輸入藥)

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スヒーゲル氏の發見に係る

内服 ヨヒンビン

男女 **生殖機不能即ち陰萎病。腎虚神經衰弱** 遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老發無力。生殖虚弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑重症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を達する天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を臚列する内地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢 着金即刻送藥す

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

▲世界唯一 麻病消渇の根治新藥 麻滅(りんめつ)

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治療範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す

但し彼の舊式洗滌劑の如き注遊無効有害の姑息藥と異なり峻効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

腋臭 わきが 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ

價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮皆々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

特別製分 金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添

◎女子師範學校四ヶ年の課程を一二年にて獨修せしむ◎毎月二回發行

女子師範學科講義錄

新學期開始

見本付會則申越次第進呈◎講師東京女子高等師範の教授教諭十數名◎奬學金會員奬勵のため千圓を支出す詳細會則にあり

此際入會特典あり◎東京市牛込區西五軒町十四番地（電話番町一三〇六）（振替一七〇〇二）

帝國女子師範學會

（其ノ三）

婦人界唯一の

週刊新聞

婦女新聞

女子教育界の

公共機關

毎週金曜發行◎創刊以來滿九年

定價一ヶ年前金二圓六十錢△半年八十四錢△三ヶ月四十三錢△全國無郵稅△三ヶ月以下注文謝絕す

一般の婦人にして婦女新聞を讀まざる者ありや
若しあらば時勢に後るゝ事を顧みざる人なり

女子教育家にして婦女新聞を讀まざる者ありや
若しあらば其の職務に不忠實の人といふべし

婦人問題研究者にして婦女新聞を讀まざる者ありや
若しあらば其の目的を遂する事能はざるべし

東京市牛込區西五軒町十四番地（電話番町一三〇六）（振替二八〇七）

婦女新聞社

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人画報

毎月一回一日發行　四月一日發行

四月の卷

定價一部二十五錢　郵稅二錢　六册前金稅共一圓五十錢　十二册同二圓八十八錢

書報

▼菜の花（彩色石版美人）（[illegible]）

◎天覧の女生徒製作品

◎御渡歐の久邇宮妃殿下と二王子殿下

▼珍らしき西比亞人形數種　▼華道奨勵會の活花大會と盆石

▼猿橋に於けるお茶の水高等女學校生徒　▼青年會館の雛祭り

◎女學校のバザー

◎診察室に於ける女醫の診察

◎女子美術學校上棟式

▼女學生が演ぜし活人畫

▼治包會卒業生一同

◎庭園に於ける鳩山博士一家

▼花下の少女　▼各國小兒風俗

◎名家の花の如き令嬢

◎三十年前の同窓者

▼來朝の韓國女官

◎師弟の愛

◎其他珍らしき寫眞滿載

讀物

◎女子の容貌と德操を論ず（井上博士）

▼訪問日記　▼鷲山女史の育兒法

▼姙婦の心掛一つで立派な子供を擧げし實例（下田歌子）

▲龜井女史料理談

▼衣服の紋（水口）

◎迷ひの淵に沈みかゝりし私の若き折の追懷（某富豪夫人）

▼流行

▼いゝわいやだわ（大町桂月）

▼懸賞和歌

◎小說高さん（岡田八千代）

◎浮田博士夫人の理想の臺所（女記者）

◎妾腹に生れし某爵令孃

告白

▼東西家庭の特徴（海老名彈正）

◎四月の歌に就いて（太田水穗）

◎現今の婦人は果して戀愛し得るや（中島德藏）

▼其他趣味豐富の記事滿載

花のすがた

四月十五日發行

定期增刊

如何に美くしきか？

如何に面白きか？

如何に愛らしきか？

東京市神田小川町一四　東京社

（廿ノ四）

國[illegible]は[illegible]民の[illegible]明[illegible]國多の生活を記し また國[illegible]に過去二千年の
歴史を作り又我民族と共に萬代不滅なるべき日本古文學の精粹を鍾む

稱して國民文庫と云ふ。これ汎く國民に讀まるべき我國古來の名著傑作を網羅せる一大文庫の謂也。即ち學者と云はず、政治家と云はず、實業家と云はず、何人も國民として必ず其一部を藏すべき底のもの也。校訂の嚴正なる、印刷の鮮明なる、將たまた裝幀の堅牢高雅なる、優に書齋の裝飾ともなすべし。思ふに世の愛書家は之れによりて其渴を醫すべく、また家庭の趣味を養ひ、高尚なる娯樂の料を得んとするものは之によりて其望を滿たし得べき也。……（往復端書にて御申越次第規定書送呈）

國民文庫刊行會

會員募集

略則

△會期滿二ヶ年 △入會期限來る四月末日 △入會金壹圓

△會費一ヶ月金貳圓 △製本 中村不折畫伯意匠 菊判クロース約八百頁 △定員三千名

書目

源氏物語 一冊
枕草紙 竹取物語 伊勢物語 土佐日記 一冊
方丈記 徒然草 寶物集 砂石集 一冊

大鏡 増鏡 今鏡 一冊
萬葉集 二冊
和歌八代集 一冊
山家集 金槐集 新葉集 其他數種 一冊
源平盛衰記 一冊

太平記 一冊
平家物語 保元物語 平治物語 一冊
曾我物語 義經記 御伽草紙 一冊
謠曲五百番 一冊

狂言集 一冊
落語集 一冊
近松集 二冊
八犬傳 三冊
西鶴集 其他數種 一冊
川角太閤記 甫庵太閤記 其他三種 一冊

德川時代小說集 五冊
俳句 俳文集 二冊
淨瑠璃集 一冊
弓張月 一冊
心學本 一冊
狂歌、狂文、川柳集 一冊
近世歌文集 一冊

計卅六冊（一冊一圓三錢余の割）

評議員（いろは順）

文學博士 芳賀矢一
文學博士 萩野由之
國學院講師 大學 畠山健
帝國圖書館長 和田萬吉
山路愛山
高等師範教授 松井簡治
文學博士 藤岡作太郎
文學博士 小杉榲邨
朝比奈知泉
高等師範教授 佐々政一
東宮侍講 本居豊穎
女子高等師範教授 關根正直

▲申込取次所 東京 至誠堂 上田屋 林平 東京大阪 寶文館

東京市神田區小川町一番地
（電話本局七三二一番 振替東京一八五七二番）
國民文庫刊行會

功勞ある外國婦人



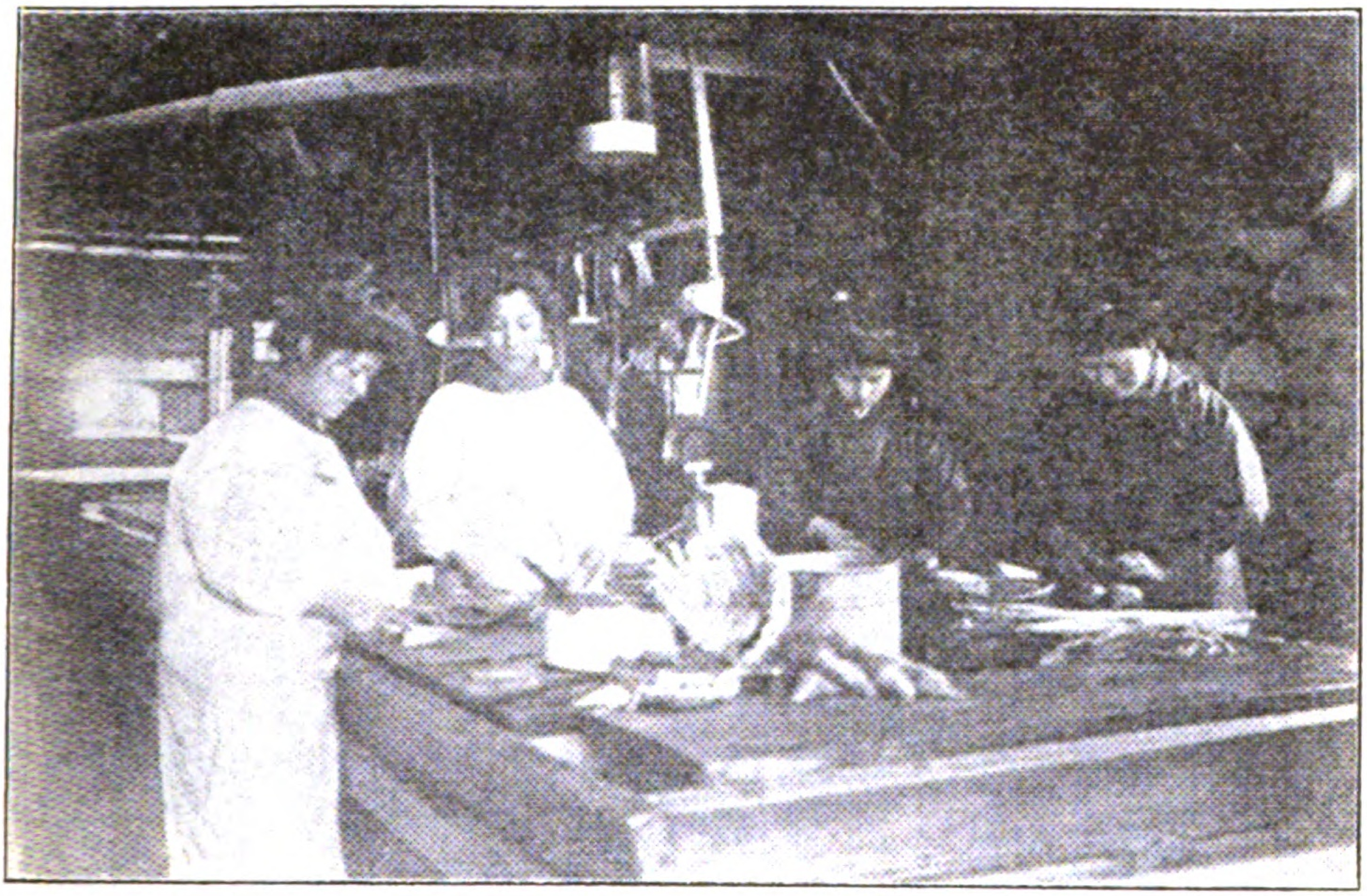
ルイス嬢

サンマース嬢

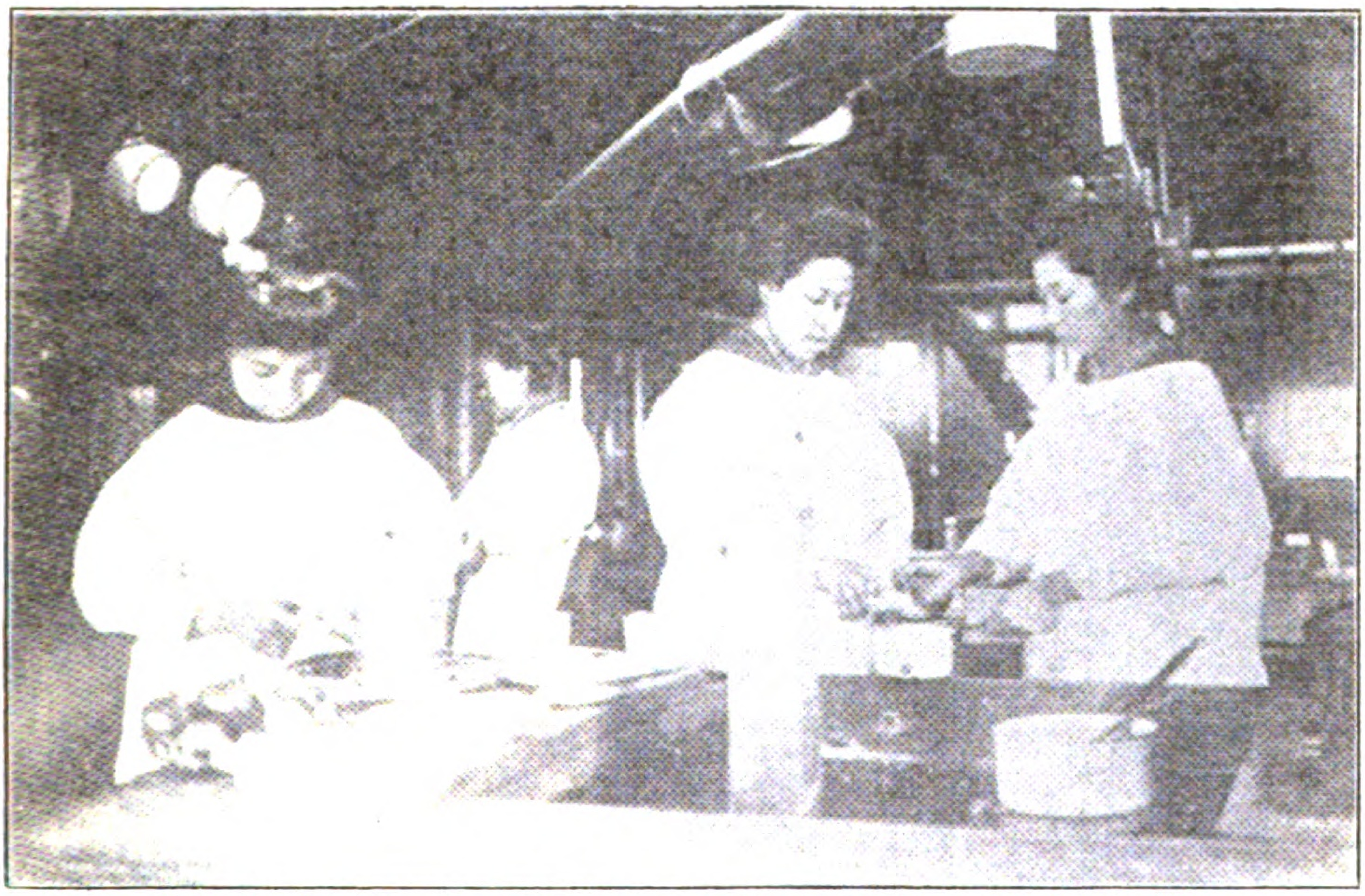


（雜報欄記事參照）

日本料理



西洋料理



（寫眞研究會主事 坪川辰雄撮影）

（東京割烹女學校舍監香取千代女史と生徒實習）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

日本禮法講習會長 深谷斗奈子先生著 二最新版二

◎◎◎

女子禮式作法及家訓

◎雛形圖入 定二十頁挿入 大和綴優美高尚 金五十錢送料八錢◎二

禮儀作法に心得乏しき人は教育の如何に關らず下卑て見え他人の會合の時殊に婚禮などに往々耻をかく事あり。されば御婦人には誠に大切なものなり本書は先生が平生多くの子女に教へらるゝ其儘を記述せられたればよく解り得る事他に類なし、娘を以つ親、嫁ぐ人は是非一たび繙かるべき著なり又贈物としては之に上へ越す物なかるべし

世に持囃されつゝある
梶山先生女子技藝叢書

刺繍術新書

雛形圖按百三十餘個挿入 大和綴美本 金五十錢 菊判一冊 送料八錢

摘み製作新書

雛形切圖百三十四個挿入 大和綴優美高尚 金五十錢送料八錢 菊判一冊

袋物製作新書

雛形圖按大判八十餘面挿入 大和綴 菊判全一册美本 金五十錢送料八錢

編物新書

本書は梶山先生が幾多の苦心と努力とに成れる百數十の編方と從來から行はれて居る編方の高尚なる物百餘とによりて完全なる編物の出來得る様百數十の雛形圖を添へられたれば在來の編物書とは趣きを異にせる者なり

大和綴美本 金五十錢 送料金八錢

造花術新書

造花摘みの如きは近來實に流行の熾烈しく刺繍袋物等の優美なる技藝も進歩せしめんとす、然れ共未だ其美の絶頂に至らず只だ粗悪に流れ高雅たるものなし本書は先生が多年教授の傍ら學理と實際とにより自然の儘に造らるゝ様記述せらる

雛形圖百五十 金五十錢 送料金八錢

發行所 東京市京橋區南槇町十八番地 振替貯金口座第四六八四番 廣文堂書店

（此廣告切拔二冊以上御注文は郵稅不要）

☞文界の好資料書出づ☞

塩井雨江先生
中村茂文先生 共編

時文軌範

燦爛たる哉明治の文壇、眞乎我國策ありて以來の壯觀とすべし。本書は現代の文章を知らんとするもの、讀本として其軌範たるを期して生れ出でしもの、維新以來今日に至るまでの各文界を代表すべき大家の名篇のみを網羅し、且つ其の大部分は各自大得意の作を自選せられたるもののみにかかり、而も皆一篇の完璧を掲げて、一切取捨省略等を試みず、文章を始め新體詩和歌俳句に及びて、粋中の粋を抜きて遺憾なく、堂々の議論洒脱の記事、莊重の篇、沈痛の章、幽遠の思想、慷慨の意氣、可憐の情緒、實に珠玉の音を聞き、錦繍の彩を觀るの概あり。

吁、明治の文壇を窺はんとするもの此の書を措いて、何物にか求めむ。願くは江湖の士人子弟、普き愛讀の榮をたまひて、永く明治文壇の伴侶たらしめられんことを。

全壹冊 總クロース製美麗 菊版四百五十頁 定價金壹圓 送料金八錢

竹台東先生著 (最新刊)

兒童の見たる各科教授

●本書は前編「太郎の教育」に倣ひ無邪氣なる兒童の口を藉り來りて現代最新の教授を最多趣味に最平易に且つ具體的に解説したるものなり。而して其の筆、縱横、其の文奇變一たび繙きて巻を終ふるを覺えざるは本書の一大特色にして、此の種の著書中絶えて無くして稀に觀る所なり

全壹冊 和裝頗優雅 定價金四十五錢 郵税金六錢

●發行所 東京市日本橋區通油町 (振替口座第三三四二番) 水野書店●

表情



（和歌山市）加藤重子



（高松市）横井露月子



（長野市）坂口よしえ子

双蝶



（東京市）
佐々木京子
同　千以子



（静岡縣）
高橋喜代子
田中ひさ子



（岡山市）森壽野子
國末實子



（神戸市）　有馬智惠子
若松惠以子



（東京府下）　西山嘉津子
其令妹

輕粧



（奈良市）中富よし子（十四才の時）

（山形縣）豊田牧子　（東京市）鹽飽絹子　（東京市）味方幸子

（千葉縣）高橋樂子

わが寫眞帖



（靜岡市）鈴木武子

（福岡縣）坂井まちゑ子

（大阪市）芥田孝子

（滋賀縣）磨志緒子

（岡山市）相賀行野子

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

定價各號 拾五錢

女子文壇

本社各號取揃あり

新年號要目

◉若き婦人の一人前に成る最初の心懸：羽仁もと子

●近代女性の自覺 姉崎博士、新渡戸博士、木下尚江、安部磯雄、成瀬女子大學校長、三輪田元道の六君◉描寫：小杉天外◉新年(英文)河井道子◉あを空：醉茗◉俳句：虚子◉個人の勝利：嘉香：

小説附録 青果 縄暖簾 秋聲 牧師 楠緒子 端書 水蔭 狂人島

◉泣菫◉有明◉與謝野寛三君詩歌

●口繪● ◉原色名畫快活◉石版着色畫獨奏◉寫眞版……友愛○聲○洋樂合奏○箏三絃合奏○新春○遊樂○誌友面影○親睦の十葉鮮麗

二月號要目

●家事見習の大切なる年頃……羽仁もと子

◉作家としての女子 文學士夏目◉見た所の西洋婦人 文學士上田敏●米國婦人結婚前 山田靜三◉これらを歌へて：泡鳴◉美文の作り方：醉夢◉和歌の趣味：空穗◉群：藤村◉花言葉：葉舟◉趣味の寫生文：虚子◉山桔梗：夜雨◉無題二篇：御風◉文壇時言：嘉香◉作家の住居：紫火◉眠るは醒むため(英文)河井道子◉河岸通り：田中久子

●口繪● ◉原色名畫雪女◉石版着色畫驚花◉寫眞版……閨秀作家大塚楠緒子、岡田八千代、與謝野晶子の三女史○文士有明、葉舟、御風の三夫人○御題入選二歌人○在米日本婦人○女學生[illegible]活人畫○誌友面影○おさな顔の十葉頗珍麗

三月號要目

●學校に通ひつゝ家事を學ぶ工夫……羽仁もと子

◉言葉遣と態度の注意 山脇房子◉女の心持 田山花袋◉男女交際は冒險 文學士下田◉芝居好きの婦人に 文學士小山内◉富士裾野：烏水◉丘上の花：柳虹◉ヴエルレーヌの詩：荷風◉和歌は女性に適す：與謝野◉花言葉：葉舟◉若き女の嬌態：東衣◉美文作法：醉夢◉子供の夕の祈(英文)河井道子◉文學に據りて救はれたる一處女の身の上話：わか草

●口繪● ◉原色名畫湖畔の歌◉石版着色[illegible]彼岸櫻◉寫眞版……閨秀作家瀬沼夏葉、小栗籌子、長谷川時雨の三女史○文士小波、泣菫、天外の三夫人○異彩ある三婦人○挿花と造花○新粧二婦人○女學校紀念撮影○半身三姿○誌友面影の十葉優美

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行 (振替壹七貳九) 賣捌 各地雜誌書店

なほ此増の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横濱獨逸病院長（ドクトル）の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴すると雖も其狀なく其外鍼灸限なく療養したれども効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同様に成り最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥褥の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に望みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て廣ろ之を世に公にして幾萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を經り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚は淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會及び印度パタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ夫等を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價：：七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模様を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖　川名助次郎

東京神田區花房町二番地　山崎帝國堂
東京淺草並木　遠山藥店
横濱吉田町二丁目都橋際　永井永進堂
東京銀座一丁目　佐々木玄兵衛
東京神田區橋本町二丁目　福井茂藏
靜岡市七間町　市川商店
北海道函館辨天町　國領平七
埼玉縣熊ヶ谷町　櫛田金造

肺治散特約店

東京銀座二丁目　岸田吟香
東京銀座三丁目　松澤八右衛門
東京神田區鍛冶町　大木合名會社
東京日本橋通　中田清兵衛
東京日本橋區本石町　守谷萬次郎
東京日本橋區瀬戸物町　玉置金八
東京日本橋區本町　大橋博愛堂
東京日本橋通　大野傳兵衛支店
東京兩國米澤町角　吉田安五郎
東京日本橋區上槇町　安川晃榮堂
東京兩國米澤町　大木口哲本店
大阪堺筋伏見町　谷回春堂
大阪西横堀舟町橋西詰　賣藥卸賣株式會社
越後國長岡市　藤井卯吉
長野市大門町　小林傳兵衛
馬關西南部町　賣藥會社
相模横須賀汐入町　茶本商店

（全國到る處の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す）

赤ら髪赤毛染

美人印白髪赤髪染「ベーヤ」は、瑞西國サンド化學工業會社最近の發明品にして、毛髪は損傷する憂なく染色堅牢にして、長日月を保留する點に於て一大特性を有す

完全無比の白赤毛染

TRADE MARK



美人印

BEAR

ベーヤ

定價	
小瓶	金貳拾錢
大瓶	金參拾錢
大瓶小瓶とも壹箱は一打入なり	

輸入元
東京神田區豐島町
江端商會

發賣元
東京市神田區花房町
山崎帝國堂

同
東京市日本橋區馬喰町四丁目
南川商店

●取次販賣店は全國到る處の賣藥化粧品、藥店、小間物店に有り

(三ノ一)

產科婦人科專門醫學士北畠孝夫先生閱

最近

婦人病ノ心得

子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齡の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學說を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳說せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の內無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

目次

婦人病の總論◉子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黃病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所　東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三千八百一）笹岡省三

洋畫講義錄

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す每號美麗なる挿畫數多あり、每月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆　三宅克己先生　岡田三郎助先生　大下藤次郎先生　中澤弘光先生　外大家十數名

繪畫講習錄

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に敎授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ每號美麗なる繪畫數葉を挿入す、每月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆　川端玉章先生　荒木寬畝先生　寺崎廣業先生　梶田半古先生　外大家十數名

新學期開始

東京市麻布飯倉四丁目

大日本繪畫講習會

代々家傳の妙藥

經通丸

月やく藥

調劑元

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難證の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ經症なるは其夜にあること請合也御藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は入錢を要す

東京市丸の內有樂町三ノ二

江戶屋



第五年第五號

明治四十二年四月一日發行

おぼろ夜や女盗まんはかりごと　子規

人目枯れ〳〵なるわが屋後の廢園にも春は來ぬ。こなたの籬に咲きこぼれたる沈丁花の高き馨りは、かなたの垣根なる木蓮のほのかなる匂ひをさそふ。木蓮は白と蝦茶と、やゝ離れて並び立てるが、巽やうに大きやかなる瓣いと重々しげに、人無き春晝を占盤せり。あたりに風もなし。やんごとなき際の盛粧せるが、地に曳く長裾のやゝ淋しげなるにもたとふべし。しほらしきは梅の大樹に宿り草の菫二もと、戀しりがほのゆかりの袂ほら〳〵と打靡きぬ。つら〳〵椿うつくしう、緋桃山櫻と照りはえて、滿地の蹁躚寸々の烟を吐き、薺、蒲公英のおのおじゝなる春の手振りも眺めをかしや。仰ぎ見れば一鳥高く、ゆるやかに大環を描つゝ、大江戸の春の碧落に泛べり。わが病骨の足一歩を運ばざるに比して、羨ましきは彼れが心ゆくばかりなる大自在の翼なりけり。れがふはその鳥船を凌ぐ健闘に我が空想を載せて、無窮の天路を翔りつくさまほしきを。それもはかなし。見よわが大空の鳥を、歐笛いと長閑に吹き鳴らしつゝ、わが地を匍ふ空想の世界を嘲りゆくなり。

冷やかなる嵐さと庭の櫻に入りぬ。梢ゆら〳〵花千點萬點音もせて降りしきれば、庭面はやがて雪と白うなりぬ。行く春の心あはたゞしうて、あはれ華の夢の美くしくさはいへど果敢なかりける人生の風情かな。永き日のやう〳〵霞に暮れゆけば、一庭寂々、芳魂の行衛もわかず。華やかなる思ひ我を繞りて、とゞめあへぬ涙ぞひとりすゞろなる。哀調の涙乎、諧癸の涙乎、花こそひとり花にそゝぐわが涙の心は知るらめ。

綱島梁川氏『春興』

若き女の根本修養

羽仁もと子



第四　よき頭腦をつくる事

次には何をなすべきか

十五才位までに手近な一人前の人になつた所で、今度はどのやうな修養に主として意を用ゐるのが、肝要な順序でありませうか。

皆樣は音樂も必要だし、挿花も知つて居なければとお思ひでせう。成程前の手近な一人前の人となる修養で、兎に角さし當りての實用向のことが出來たとすれば、次には音樂とか、挿花とか、或は習字とか、身嗜みに屬するものを稽古する筈だといふやうにお考へになるかも知れません。世上の識者を以つて目せらるゝ人々、又は女子教育を任とする人々の中にも、女は前回までにしるしましたやうな實用向の働きが出來て、さうして更に交際にでも長じ、音樂や挿花等の、通り

に行き渡つて居りさへすれば、實に好箇の婦人であつて、その上に何がいらうかといふやうに思つて居らるゝ方々も少くないといふことて御座います。

昔の世の中と今の世の中

けれ共私共はさうは思ひません。昔のやうに、世の中の寸方が一々きまつて居つて、唯習慣と仕來りに從つて居りさへすれば、婦人の一生は差支へなしに過された時代には、唯躰裁よく暮し、器用に働くだけて、濟んてゐたのてありますが、今日の我々の生活には、物質的にも、精神的にも、逢着すべき問題がなか〳〵に多いので御座います、一口にいへば昔のやうな單純な世の中てなく、六ケ敷い時代になつて來たのてす。男ばかりてなく、女ても、頭をつかはずには世渡りの出來ない時勢になつて來たのてす、妻ても母ても、獨立の婦人ても自己の身邊に起り來たる、種々樣々の問題を充分に解釋し、かつ之を適當に所置して行く丈の頭（頭といふのは、餘りに雜な言だと思ひますけれど、考へといつても少し足りないやうてすし、矢張りこの言が最もよくあてはまると思ひますゆゑ）と氣力とがなくつては、とてもそれ〳〵の役目のつとまらぬ世態になりました。

一般に六ケ敷い骨の折れる世の中だといへば云はるゝやうなものゝ、その實今の世の中は、己自らの頭と力を以つて、前にもいひましたわが身邊に起り來たるあらゆる問題を、解釋し所置することの出來ない人のためには、誠に面倒な、又甚だ辛い世の中てありまして、煩悶などゝ稱して、無責任なことをする人も、段々に多くなりました。併したしかな頭と、充分な氣力とをもつてゐる人のためには、ボンヤリした者も、賢こい者も、意氣地のあるものも、ないものも、同じ程の身分のものは、大躰に於て皆同じやうな一生を送らなければならぬやうに出來てゐた昔の社會とは違い、めい〳〵の力量に應じて、自分の生涯をどのやうに有益にても、どのやうに譽あるものにてもすることの出來る、極めて有望なる世の中であるので御座います。

今の多くの婦人は如何

お話は少しそれるやうになりますが、しつかりしない頭では暮されぬ世の中、頭の出來た人には、最も生甲斐のある樂しい世の中を、大方の今の婦人はどのやうに送つてゐるかといふことを、暫し考へて見たいと思ひます。

　誠に殘念なことでありますけれど、慾目を捨てゝ、私共今の日本婦人の多數の有樣を考へて見ましたならば、自己の身邊に起り來たる大小すべての問題を、本當に自分の頭で解釋し、自分の力で適當に所置してゐるといふ婦人は、果して澤山にありませうか。大概の母親はその子供を敎育するのにすらも、方々の子供はこういふ風にしてゐるから、宅の子供にもしてやらう、誰もしないやうだから、これはマアよして置かうといふやうに、何事も世間並を標準とし、大概の妻は自分の責任に屬することをも、殆ど自ら考へずして、何事にも良人の指圖を仰ぎ、大概の主婦は、物價は高くなり、收入はその割に增さずにゐても、生活の改良などといふことは、少しも思ひ浮べず、依然として女の外出には絹布を纏ひ、菓子折を抱へて出掛くべきものといふやうな氣がしてゐるかといふやうに思はれます。何事にも頭をつかつて考へることはせづ、一も二もなく從來の習慣と、世間並とを見比べて、唯々その通りに働いてゐるといはれても、いひとく事の出來ぬのは、今の私共の狀態で御座います。

習慣と世間並み

一寸考へると、何もさう事每に、一々自分が考へて判斷してやつて行くといふやうな面倒なことをしないでも、世間の人のする通りにさへして居れば、大した間違はない譯だ、現在それで濟んでゐるんだものと、思はれるやうで御座います、固より習慣と世間並といふことは、いつでもこれを參考として斟酌しなければならないものでありますが、併し仕來りと人まねばかりでも、どうにか都合がついてゆくやうに思ふのは、本

ンの目の前ばかりを見てゐるからで御座います。今と昔と世の様が違つてゐるのでも知れるやうに、また冬が春になり、春がまたいつの間にか夏になるやうに、時勢は時々刻々に移り異つてゆくものです。今綿入を着てゐるからといふて、年中綿入で通せると思ふなら間違いです。必ず暖になつた時まごつくでありませう。

これまでの習慣はかう〳〵であつたからと、それはかりあてにしてボンヤリしてゐると、當座はそれで濟んでゐても、必らずいつか不注意をしてゐたと後悔する時がありませう。家には家の事情があり、人には人の性質もあり、境遇も御座います。人まねをして失敗つた話は、昔のお伽噺にも出てゐる通りです。世間一般の風俗にてもよいこともあり、惡いこともありますのに、何でも彼でもその通りになつてゐた日には、矢張當分は不都合のないやうに見えてゐても、例へば奢侈の風潮に従つてゐると、餘裕の少い家では、いつかは必用のあるときに用ゐるべき金がなかつたり、金持の家で金錢上には困る程の影響をうけぬにしても、子供たちがそのために、惰弱に育つて役にたゝぬ人になつたり、俗にいふ長い目で見てゐると、今日のやうな複雜な世の中に生れながら、しつかりとした考へなしに唯習慣と世間並みとを便りに、その場〳〵を過してゐる人は、必ずどこかに、不幸なる影響をうけつゝあるもので御座います。

人間一生の大事業

今日はなんでも金の世の中だとか、又は交際が第一だとか、種々のことを申しますけれど、今の世に立派な頭ほど、貴き寶はありません。この寶を持たない人は、なによりも憐れな人で御座います。殊に婦人は、子供を持つて之を教育するといふ、何よりの大責任を持つてゐるものでありますゆゑ、若しも私共がこの憐れな人でありましたならば、遂には子供を憐れにし、延いては次の時代を憐れにすることになります。かゝる生涯ほど無意味にして耻づべき一生がありませうか。

自らのためには樂しくして望み多き生涯、わが周圍の人のためには、有益にして感謝すべき生涯を送らうとするのには、是非共確乎として立派な頭を持たなければなりません。さうしてこの頭を作りだすことは、第一段の手近な一人前になるための修養などのやうに、餘暇を利用して、一定の歳月の間に覺えて仕舞ふなどゝいふやうな手輕なわけにはゆかないもので、幼きより老ひて死に至るまで、實に私共一生の間に渡る大事業であるので御座います。

手近な一人前の修養といふことを、第一段に置き、肝要なこの事を第二段に置きましたのは、十五歳位までの方には、まだこのやうな込み入つた道理など考へて精神的の修養の大切な譯を本當に自覺することが、六ケ敷からで御座います。即ちまだ單純な子供の部類に属すべき時代に、たやすき修養を自ら力め、他は自ら兩親の責任になつて居りますが、第一段の修養を終りたる以上の年齢頃には、已に種々の自覺が出てまいりますゆゑ、初めてこれらの問題を考へるのに適當になると思ひましたからで御座います。いかにしてよき頭腦を作るべきか。これは次號より暫くの間に渡つて記さねばならぬ事で御座います。

農家の娘

小麥の熟する六月の中ば過ぎは、このあたりの農家のいつよりも忙はしい時で、いかに塗るゝ汗の肌を拭く間もあらず、脚も手もなゆるばかりに、强き連日の勞働をつゞけるのだといふことで御座います。一人の快活な娘が私共に話しました。——麥刈が濟むと、單衣を買つて貰つて、夜の目も寢ずにこしらへて、天王樣の祭りに行くのが樂しみて、皆一生懸命に働くので御座いますよ。天王樣が來るから〳〵と云はれるんで、ヤツト追附いて行くのですけれど、さうでもなければアンナ辛い仕事は、本當に出來ません——。何といふ無慾な望みでありませう、炎天にさらされ、熱砂を踏み、麥のいがに苦しめらるゝ連日の勞苦は、質素なる一枚の單衣、一日の行樂に酬いられて餘りありとなし、硬き麥飯を食し、つゞれを纏ふて働くことは農夫の本分と心得、派手やかな裝ひなしてゐる人を羨しと思ひながらも、農業の娘は先天的に彼の人々と同じでないと思つてゐるやうで御座います。何といふ素直な心でありませう。素直といふよりは、寧ろ氣の毒ともいふべきほどのもので御座います。しかもさし當りては、その素直なるために、また無慾なるために、極めて幸福に暮らしつゝあるのです。（羽仁もと子）

『婦人之友』三月號より

作中に現れたる女性

茲に「作中に現れたる女性」を掲載するに就き、一言のはし書を添えます、今回本社編輯局より現代知名の文士諸氏に向つて、お尋ねした要項は

本邦古今の戯曲小説に就いて、貴下が最も愛好せらるゝ作中の女性、及び其女性描寫の妙所に就いて一言を乞ふ。

と云ふのでした、其答は左の通り集りました。

特に本邦の文學に限つた所以は、其方が讀者諸孃にも親みが多く、研究の爲にも手近であらうと思ひましたからです。

之を發表するに當りまして、記者が唐突の問に對し、其貴重なる時間を割いて、本誌讀者の爲に懇篤なる答を寄せられた處の諸氏の厚意を深く感謝いたします。

記者識

長谷川天溪氏　岩野泡鳴氏　正宗白鳥氏
與謝野寛氏　與謝野晶子氏　小川未明氏
德田秋江氏　長井金風氏　松原至文氏
塚原蓼洲氏　平木白星氏　草野柴二氏
横瀬夜雨氏　畔柳芥舟氏　德田秋聲氏
森田草平氏　生田長江氏　伊藤銀月氏
内藤鳴雪氏　小島烏水氏　水野葉舟氏
杉谷代水氏　山田美妙氏　北原白秋氏
小杉天外氏　西村醉夢氏　水谷不倒氏
木下尚江氏　眞山青果氏　高須梅溪氏
戸川秋骨氏　田岡嶺雲氏　矢崎嵯峨の家氏
島崎藤村氏　宮崎三昧氏　須藤南翠氏
兒玉花外氏　佐々醒雪氏　村井弦齋氏
服部躬治氏　山崎紫紅氏　渡邊霞亭氏
平田禿木氏　佐野天聲氏　長谷川時雨氏
佐々木信綱氏　後藤宙外氏　薄田泣菫氏
正岡秋子氏　（以上到着順）

出遭ひし事なし

長谷川天溪

前略、如何なる途中を歩きても、これはとばかり驚く程の美女性に出遭ひしとなきと等しく如何なる文學を讀みても愛好する程の女性にぶつかりたる記憶無之候從つて描寫の妙所などに感服したるものは日本の文學には認めたると無之候、全躰こんな問題は意味あまり漠然として返答に窮するものに候、匆々

お才、お吉、お富、『生』『明日』

岩野泡鳴

女性描寫に就てお尋ねの件、「愛好」といふことが割合に深く印象を殘してゐるといふ意なら、近松物に於ては、「鎗の權三」中の娘にめあはさうとした男に自分がくつゝいたおさゐ、「油地獄」中の世話女房として餘り氣がきゝすぎて他の男に殺される樣になつたお吉、芝居では故秀調の藝風につり合つた「切られ與三」のお富、また田山花袋氏の「生」にある老母、正宗白鳥氏の「明日」に出た何とかいふやけッ腹で酒を飲み出す女房などが最もよく僕の心に殘つてゐる。單に感情的な愛好は僕にはない。

無し

正宗白鳥

作中に女子に對して愛好する者無之候

「煤烟」と「おみよ」

與謝野寛

御尋ねの儀なか〳〵範圍も廣く、考慮を要し候事にても有之候間、委しくは此狹き返信用の葉書にては盡し難く候故、唯だ最近に讀みたる少數の新作小說に就いて申述べ候得ば、森田草平君が「朝日」に出され居り候「煤煙」の女主人公眞鍋朋子と、水野葉舟君の「おみよ」とを面白く存じ候。從來邦人の小說中何人の作にも出ざりし女性なるが故に候。而して又兩女性とも

其モデルを小生に於て聊か乍ら存居り候故に特に興味多く感じ候。艸々拜復。

思ひ出しかね候

與謝野晶子

最も好きなる女性と申すのと又描寫の最も妙なる女性と申すのとは別なる樣に存じ候、さて平生は考へも致さぬ事につき、只今急には思ひ出しかね候。何か書物にても讀み候はゞと存候へども、其のひまも無之失禮致すべく候。

近松作中の女性

小川未明

女性を描くの妙は近松を推さゞるを得ず。僕は平凡な女性は嫌ひ、智的の女も嫌ひ、さらばといつて鏡花式の女も餘り好かず。女らしき女——涙あり、從順寡默にして貞節堅き——古今を通じて近松作中の女性の如きは少なし。女性の漸く近代化せんとせる時余は獨り此の天才の作を通じて、元祿の昔の、彼の如き女性に憧がる。

以前の小生

德田秋江

拜復、御問合せの件、一寸即答に困り候。
と申すは、只今の處差當り愛好する女子無之候。
御下問に思ひ付き、回顧すれば、以前は必ずしも無かりしに候はず、只今無之までに候。然り唯今は一人も見當らず候。其れを想へば、以て小生の女子に對する理想變遷の一面をも考へられ候。而して小生の以前に好いと思つた女子は

一、近松の梅川に候。

二、稗史に現はれたる靜ヶ御前に候。
乍併是等は、今日到底現實の理想を以つては見るべからず候。藝術上に於ても無論虚僞に候。

三、一葉女史の『大晦日』のお峰は唯可憐と存じ申候。

專攻は史學

長井金風

小生生れてピユーリタン的祖母の膝下に人と爲り、小説戯曲は幼時より習ひ性となりて今日までも讀みたる事無きを以て、恥しながら貴問に酬いるの光榮を領するを得ず候。小生專攻は史學、道樂は幾何學、現今の職業は百姓に候。

疑問

松原至文

我國の作物中、小生の好む女性といふもの未だ見あたらず、第一作家に眞に女性を描き得る人——男子を描く附屬物、對照物としてゞなく、單に婦人としての婦人をのみ鮮かに描き得る手際の人——有之候や、それが疑問に候。第二には『ルーヂン』のナターリヤの如き——小生の最も愛好する女——果して我邦の現代にありや、あれば誰が描き得るか、これも疑問に候。耽溺など申せども、要するに女を描く手際は、今の作家は活きて居らず、冴え〳〵しからず候。止むを得ずんば時勢遲れなれど柳浪氏が『縺れ糸』のおつまか。兎に角、女性を點綴したる爲めに小説の價値が下るやうにては心細く候。

靜

塚原蓼洲

靜。人のてかけものとなりたるはあかねふしあるもこは此時代の風俗上見ゆるしおくべし。かの女の性行のよく見えたるは義經記の若宮八幡法樂の舞の條。

靜

平木白星

光明皇后と靜御前と『白縫物語』の若菜姫とは、まづ以て僕の愛好する婦人だが、どれが一等好きかと聞かれたら淡路生れの靜さんと答へる。旦那が牢籠（鎌倉時代の俗語今の放浪生活）の身になつても愛想をつか

さず、死ぬまで慕ふところが今世の藝者風情に出來た藝でなからう。『吾妻鏡』『義經記』『源平盛衰記』『義經勳功記』など、いづれともいはず、どこと言はず、描寫が全體に妙だから、僕がかう惚れたのだ。

二人お夏及び漱石の作

草野柴二



古るいものでは源氏の空蟬の性格を面白く思つた事もあります。お夏淸十郎のお夏は西鶴のも近松のも好きです。鶴翁のは狂亂の夏が哀れに寂しく、巣林子のは寂しい中にも華々しい所があつて面白くおもひましたが、それは四五年前のこと、此頃讀み返したらどうでせうか。それから『趣味の遺傳』の美人も忘られない、寂光院で銀杏の木の下に立つたアノ女は實にいゝです。同じ作者の『草枕』の美人も大好き、畫家と鶯をきゝながら話す條は今でも覺えてます。ロマンチックの美人ですね。鏡花の三枚屏風(?)中のお夏も可ですね、茶の湯の宗匠の家で恥かゝされて歸るあたりの描寫はたしかに可いと思ひ升。近頃の新らしい意味の小說にはトント目にのこる樣な女性が出て來ませんねえ。同じ現實の悲哀を曝露したのなら作中の女性より現實の女

性の方が感興を惹くでせう、女性のトリヱは美にあるのに、現代小説の女は美として描かれてありません。だから好愛するといふ點からは今の作品の女は上げることは出來ません。

答へて曰く

横瀬夜雨

『源氏』女三の宮。

紙屋のおさん

畔柳芥舟

拜復、描寫の妙所から見れば嫌ひな女子でも感服するものが數多あるだらうと思ひますけれども、『愛好せる』と制限されては男性としては自然男性の面目を考へてくれる女子が第一であらうと思ひます。これとても人に古今を問はず作に小説戯曲を論ぜずときては一寸選擇に迷ひますが、其うちの一人として紙屋のおさんをとります、『簡單に』と命令されては『心理的に』とお答へするより外に方法がありませぬ。不具

雛衣と吉彌

徳田秋聲

最近の印象はたしか『八陣』の雛衣かと存じ候。處女ながらにして刄に伏せるなども好しと思ひ候。描寫の妙などは無論無之候。近頃の小説で、女の能く描かれたるは泡鳴氏の『耽溺』の藝者吉彌に候。パッチリしながら、何處か少し濁のある睫毛の長い目と、蒼白い顔とが歴々見え候。愛せざれども好き候。

巣林子、漱石、風葉

森田草平

沙翁の戯曲にオフエリヤ、マクベス夫人、コーデリヤ、デスデモナ、ジュリエットなど夫々特徴ある婦人のタイプを見る如く、日本では矢張巣林子にさま〲な女の型を見出申候。巣林子に描かれた性格の中では『心中宵庚申』のお千代と『堀河波の鼓』のお種とが私には

最も深い印象を殘し居る樣に御座候。漱石先生の筆端から生れた女の中では、單に好き嫌ひから申せば、草枕の那美子、虞美人草の藤尾、三四郎の美禰子等餘り好ましからず、矢張り糸公の人好きのするのが宜しく候。殊に藤尾などが死といふ問題に就いて、何か六かしい事を云ひ合つてる中へ、糸公が何氣なく口を出して、「死んぢやあ詰らないわねえ」と云ふ所、此女の顏まて見える樣にて何日までも忘れ難く候。風葉氏に描かるゝ田舍の女、お蔦、お房などいふ名前を持つてる女は昔から大好きに御座候。

面白いと思ふものは

生田長江

日本の物では、ハムレツトのオフィリアやファウストのグレチヘンのやうに、たまらなく好きなといふ女性もありませんが、それでも比較的に面白いと思ふのは、先づ近松では網島の小春、おさん。西鶴の五人女の八百屋のお七。新しいところでは『多情多恨』のお種、『濁江』のお力、『湯島詣』の蝶吉、『十七八』のお蔦、『戀暮流』のお葉など。勿論面白いと思ふばかり、好きなといふほどのは見當りません。描寫の妙所といふのも、一寸一口には申上げられません。

見出さず候

伊藤銀月

拜復、歷史上の女性と現實の女性とには愛好するものも憎惡する者も澤山に有之中には生命もと打込む者も無きにあらず候へど不幸にして小生が今迄讀みし小說戲曲の中には是ぞと愛好すべき女性を見出さず候。早々頓首。

政岡

內藤鳴雪

謹復、先代萩の政岡。

御殿場「あとにはひとり政岡が」の一段は忠義と慈愛と兩面をよく盡くして日本女子の眞面目が自然的に虛

僞なく現はされて居る點を取る。

『煤烟』の女主人公

小島烏水

小説や戯曲で活動するほどの女子を好み不申、青果氏『第一人者』の俊子など大人しく蔭になつて居る方を好み申候。乍併、森田草平氏『煤烟』の女主人公明子は近頃の小説で最も小生の胸を打ちたるもの、好不好の問題を超絶して初めて「迷へる近代女」の姿を活きながらに剔き出されたる心地いたし候。之に比ぶれば風葉、花袋諸氏の作などはアマイものと存じ候。

宮内卿

水野葉舟

僕のはずつと以前に、増鏡の講議を聞いて居た時に、あの中にある宮内卿といふ女が、泌々となつかしかつた。戀しいやうな心持が頻りとした。今でも何となく宮内卿を忘れられない。然し今『増鏡』を讀んだら或はもうその感興が消えるかもしれぬ。

赫夜姫

杉谷代水

何の因果か赫夜姫に戀して此の世の外の寶をたづねてゐる一人だ。擾々たる小說中の女子などに好きなのゝあらう筈がない。まア「弓張月」の白縫姫などはお轉婆系統ながら氣に入つた女だ。虛榮に狂つて男を苦めるより外に能の無い近代的の女性にあんな眞似はとても出來まい、しかし性格が無いから噓だといへばそれまで、個人性の面白いのは源氏物語や近松の戯曲にいくらもある。紫の上は念を入れ過ぎて要領を得なくなつて了つた。空蟬や朧月や夕顔や末摘花の方がよく描けて居る。女三の宮もいゝ、浮舟の姉妹は尤も哀れだ。近松では忠兵衛が梅川をつれて故郷の大和へ落ちて行くあの邊が何故か好くつて仕様が無い。實物にはもつと佳いのが幾らもあらう。引續いて歷史中の女性から募集に相成つては如何。

濱路

山田美妙

拜復、おたづねの、日本小說戯曲中に於ける小生の愛好する女子及びその描寫の妙所に就いては一寸御返辭がむづかしいのです。只簡單てよいとの仰せ故、ほんの一つだけ申すとすれば、八犬傳中の「濱路」などは何やら愛らしいやうて、又その邊の馬琴翁の描寫などは、是れは言ふまでもなく金玉の文字かと考へますがいかゞ。



紫上とお七

北原白秋

「源氏」の紫上。清くして美はしきゆゑ。
「五人女」のお七。美はしくして激しきゆゑ。

「さゝ舟」のお靜

小杉天外

拜復、一寸面倒なる御下問に候。近年は餘り邦文の小說に親しまず候へば、新しい所では何とも申上られずまた古いのは大概記憶も朧になりて此處お答に窮し候。が、露伴氏作の『さゝ舟』(?)中にお靜と云ふ若い未亡人の一人の可愛娘を育てゝゐるところは今も面白き記憶として、頭に殘り居り

候。雪丸といふ血氣の小英雄に對する鹽梅また何とやら、坊樣に懲されてゐて、知つてゐるのか、知らぬふりをするのか、著者の巧に筆を弄したる憎いほど妙に存じ候。

おさん

西村醉夢

○「天の網島」のおさんが最も好きだ。少くとも理想的である。女ばかりは餘りハイカラなのは嫌いだ。

○その妙所と云つて答に困るが、まづ「引立炬燵」云々の條から「鐵に夫婦の二股竹」のあたりまでが面白い、微細な描寫よりは寧ろ急所を突いて全人格を想像せしめるのが巣林子の特色である。

繁の井

水谷不倒

御尋ねの女性近松の戯曲中より申上候。尤も小生の愛好いたすものとては別に無之候へ共、其境遇に同情し作者の技倆に歎服するものは、「丹波與作」の繁の井に御座候。繁の井は御承知の如く養ひ君の御氣嫌を取らんとて計らずも我子三吉に邂逅して、飛び立つやうに思ひ候へ共、主家の手前且は彼れが風躰の卑しきを見ては流石に躊躇せざるを得ず、此の時繁の井の心の中を割り見れば、嬉しさ三分、悲しさと切なさとが七分にて、其煩悶譬へんにものなし、更に三吉が盜みをなすに至りては、其の成人が耻かしく、愛想もつきはつべきを、其の罪を救はんとして、百方心を苦め候は實に親たるものゝ熱情なり。近松ならでいかでこの自然を寫し申すべき、而かも繁の井をして腸九回せしむるものは、子役たる三吉が性格の活躍せる故にて彼れは父母の血を享け一きは怜悧には生れたれども、幼少より馬追ひとなりて虐使せられ、善からぬ友に交はりて、根性ねぢけ朱に交はれば赤くなるの譬へに洩れず、全くの惡たれ小僧と化し一身の大切な事も打忘れ唯人に賴まれたるばかりにて、賊を働くといふ性格はまことによく寫されたるものにて此作の悲劇たる部分は三吉

の子役によりて構成されたるものと存じ候。早々不備。

天照大神と狭穗姫

木下尚江

是れは小說と云ふて可いか如何か知りませぬが、小生は古事記に描かれたる「天照大神」と、「狭穗姫」とを愛します。

近松と西鶴

高須梅溪

お尋ねの範圍餘りに廣く、一寸お答へいたし兼ねます、近松、西鶴の作中に面白い性格の女を見受けますが、別に愛好する程のものもありません。描寫の妙所も一口に申し難い。

八百屋お七

眞山青果

いづ方へも御答申す通り由來婦人に不注意の小生ゆゑこの度の御尋に對しても返事に窮し申候。然しその內より強いて愛好する者を求め候ならば、西鶴の五人女中の八百屋お七などを擇び申すべき。手元に本なく、文句は忘れたれど、思詰めたる女なればこの頃の入牢にも面痩れする所なく、と痩馬に江戸市中を引廻さるゝお七の姿、思ふてもたゞいぢらしく候。異性として好むには無之その生一本なるおぼこ氣が尊く覺え申すのにて候。少くとも近代的の女性にて候べし。

武士的と平民的

戸川秋骨

八犬傳、弓張月、は理想的或は空想的に武士的女性を描き、淨瑠理本は誇大的に、平民的女性を描き然も妙所は澤山在候、草々。

純日本型

田岡嶺雲

拜復、少時より小說類は好にて多少涉獵致候へ共、元

來記憶力に乏しく讀む片ッ端より忘れて仕舞ふと云ふ有樣故、具體的に貴問に御答申上兼候。但自分の戀を犠牲にして其戀人のために竭す献身的なる女子の純日本型なるを毎に嬉しく感じ候。（ユーゴーの小說には男の方に如斯き型のものあり候、これは東西人情の差のある所なるべく候。）予は無我を以て道德の極致なりと信ずる者なるが故に、意識的に犠牲を辭せざるを男女に拘はらず美德なりと考へ候。

愛情と同情

矢崎嵯峨の家

拜復。御質問之趣委細了承仕候。然し此質問に對する回答は小生の頗る難んずる所に御座候。何となれば小生の愛好する女性は謙遜なる愛情と、健全なる思想より湧出る同情を有する女性なればに候。我國古今の小說又は戯曲に現はされし女性中には貴ぶべき、重んず可き賢母、貞婦、孝女とには乏しからず候得共、私の理想に適せる愛好す可き女性を見出し難ければに候是時代精神の異なるに依るものにて、時なる力には大なるものある所以と存候。若し夫れ第二の御質問たる「女性描寫の妙所」に至りては到底葉書にては陳難く又著者に對して失禮の樣に感ぜられて、私の敢てし難き所に御座候。右及御回答候也。

淸女と西鶴の女性

島崎藤村

淸少納言が女子としての感覺、及び西鶴が作中にあらはれたる幾多女性の觀察。

昔女

宮崎三昧

桃櫻目移りはすれども伊勢物語の
風吹ば沖津白浪立田山夜半にや君が一人越ゆらん
と詠んだ女がどうもよいてす

濱路、雛衣、小さん

須藤南翠

小說戯曲中、小生の愛好する女性と申ては、先づ幼少の頃、老たる祖母のために、公務の暇ある每に夜な〳〵父の讀み聞かせ知らせし『八犬傳』中の濱路（處女）と、雛衣（妻女）と、夫に祖母の好みて讀みて泣き候ひし娘節用の小さん（妓女）とに候らはんか。自ら小說を手にしたるも、此二名著が初めにて候らへば、その頃より三女性の印象は、深く〳〵彫り着けられ、多少甄別の心も出來、餘



りに理想に走せては描寫も勢ひ不自然を免れじなど訝しながらも、超絶的、模範的の崇高美に魅せられ、更に打勝つべき女性とてもなく、只々先入性の力の偉大なるに驚かれ申し候。戯曲……特に巣林子には、女性の描寫の極めて、妙なるものあるやに覺え候へども、多くは流を立つる身に候へば、敬意を表し　相省き申候拜復。

お七と美登利

兒玉花外

御訊ねの私の愛好する作中の女は、近松戯曲に現はるゝ多數の殉情的女性。鏡花の小說中のオキャンな女。艶麗嬌氣な淀君、蛇になつた清姬も凄いが、別けて火烙の刑に焚死んだ八百屋お七が最も愛さてす。

可憐な文章は、手近な所から拔出すと、一葉女史の、「たけくらべ」の中、（めづらしい事、此の炎天に雪が降りはせぬか、美登利が學校を嫌がるはよく〱の不機嫌、朝飯がすゝまずば後刻に鮨でも誂へやうか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見へる、太郎樣への朝まいりは母さんが代理してやれば御免蒙れとありしに、いゑ〱姉さんの繁昌するやうにと我が願をかけたのなれば、參らねば氣がすまぬ。お賽錢下されて行つて來ますと家を驅け出して。中田圃の稻荷に鰐口ならして、手を合せ、願は何ぞ行きも歸りも首うなだれ、畔路づたひ歸り來る美登利が姿……）

大姬君

佐々醒雪

小生は宇治十帖の大姬君が最もなつかしく感ぜられ候あんな女があつたらば、戀といふことも知るべきものをと存ぜられ候。

春日局

村井弦齋

拜復、古今人中の小說戲曲中特に私の愛好する婦人も無之候。强て求むれば、故櫻痴居士の作りし春日局など好ましき婦人かと存じ候。描寫の文、又は妙所等は只今書籍手許に無之、遺憾ながら何共申上難く候。右貴答申上候、草々。

夕顏とお三輪

服部躬治

「源氏物語」の夕顏、「妹背山」のお三輪。夕顏は、源氏に見られぬ前から。お三輪は、鱶七に刺された時まで。但し、夕顏の素性が、作者に知れてゐたのは殘念、お三輪の斷末魔に「あつぱれ富貴の北の方」を聞かせた

作者は惨酷です。

お七を初め―

山崎紫紅

愛好せらるゝ女子とのお尋ね、紙治のおさん、酒屋のおそのなどは、敬すべきも愛し得べきものにあらず、五人女（西鶴）の八百屋お七など、戀に目をくらましたる我國にては珍らしき女性、これらをこそもつとも愛好すべき女子とこそ存じ候。近來にては森田草平君の煤煙の女主人公面白く存じ候。併し煙はその日の風次第、明日になりては如何變るものにや、請合兼候。描寫の妙所今のところにては、これぞと申すほどに、感じたるものは見受けず、古き所にては源氏の紫の上これから脫化して種彥の紫など女性をたゞ美の方面から寫したる所に味ありと存じ候。しかし人物の活躍したるものには、やはり近松ものを算へ可申也、大經師のおさんなど、あり〳〵と目に見ゆる心地致し候。

「宵庚申」のお千代

渡邊霞亭

近松巢林子の世話物に現はれたる女性は大體好きに候へど、取り分けて「宵庚申」のお千代を愛し申し候。お千代を描寫せる筆路の巧みなるは巢林子戯曲中にも稀れに見る處と存じ候。中にも「も早何處にも蚊が居るに女房主人がなければまだ蚊帳の釣手もなし、アのさんが居眠りては袷どもの洗濯もできまい、この戸棚のほこりわいの、奥の疵もまだ塞がず、香の物も見廻りたし、何からせうやら氣がうろつく、居つけた所に居て見よと、とんと座りし茶釜の前」のあたり幾度よんでも飽く處なく候。草々。

「源氏物語」の女性

平田禿木

源氏物語にいてたる女性、その美はしき描寫の外さし當り想ひ出て候事もこれなく、取敢へず御答へまで申

上候。

三勝、お夏、白縫、紫上

佐野天聲

三七全傳南柯夢の三勝、歌念佛のお夏、弓張月の白縫源語の紫の上といふ順序にて愛好致し候。三勝の女性美は信州沓掛にて夫半七の病氣を看護するあたりに、最もよく現はれ居りし樣記憶仕り候へ共、生憎に南柯夢を座右に缺き候ため、貴意に添ふ能はず遺憾の事に御座候。頓首。

五人を選ぶ

長谷川時雨

一　八百屋お七（奈良五人女にても戯曲にても）
一　浮舟の君（源氏物語）
一　宇治の宮の大君（源氏物語）
一　落窪の繼母君（落窪物語）
一　おらん（井筒屋源六戀寒晒）

（大君）我もやう／＼さかり過ぬる身ぞかし、鏡を見ればやせ／＼に成もてゆくを、おのがじとは此人ども、我あやしとやはおもへる、うしろてはしらずがほに、ひたひがみをひきかけつゝ、色どりたるかほづくりをよくして、打振まふめり……はかなげなる身の有さまをと、仰てつきのほそやかにかよわく、あはれなるをさし出ても世の中を思ひつゞけたまふ。

（繼母君）……又うち腹立ちたまふ時、魚のほしき時には、我を尼になし給へり、産まぬ子は、かく腹きたなかりけりとなんの給ひける。

（おらん）ぜひ／＼うたがはしくば切らずととふてくれもせて、むごひつれなひどうよくぞや、此上にもまだいとしい、捨て早ふ逃さしやれ。

紫の上

佐々木信綱

拜復、源氏物がたりの紫の上北山の條、明石の上、女三の宮に對する情。

濱路と梅川

後藤宙外

拜復、小生は「八犬傳」の濱路「冥土の飛脚」の梅川のやうな女子が好もしく候。しかもそれに三分のハイカラ趣味と新色彩とが加へたのが理想に近い婦人と考へ居り候。女性描寫の例は市中に原本澤山あるゆゑ畧し申候。

同じやう

薄田泣菫

拜復、御尋ねにあづかり候件については、源語とか、巣林子とか、西鶴とかを今一度そのつもりにて讀み返へしたらば、確かなる御答へも致し得らるべく候はむが、唯今の記憶のみにては、これらの作品に現はれたる女性は、誰も彼も同じやうなる色合と調子とて、思ひ浮ばれ候まゝ、一寸取捨にこまり候。御尋ねの「愛好」すると申され候はどの樣な意味に候か、もし戀人にてもの御つもりならば、それには矢張今活きてゐる人の方がよろしと御答いたさねばならず候。唯知合とのみに候はゞ、皆同じやうなる資格にて……。

おさんと大君

正岡秋子

戯曲では紙治のおさん、描寫の妙所は、天の網島の始めより終りまで、小春や治兵衛や、孫右衛門や、さういふ人があつて始めて、おさんの妙所がわかると存じます。小説では、橋姫の大君、卷の終り『髮さばらかにおちたるなるべし、末すこしほそりて、いろなりとかいふめる、ひすゐだちていとをかしげに、いとをよりかけたるやうなり、紫のかみにかきたる經を、片手にもち給へる手つき、彼よりも細さまさりてやせ〳〵なるべし』

○伊原青々園氏

○泉鏡花氏

（此の兩氏の分は後れて返信に接し候ひし故遺憾ながら次號に發表いたすべく候　（記者））

學校を出てからの實行

女子高等師範學校敎諭　宮川壽美子

高等女學校などを卒業になつた方が、專ら家庭の人に立返つて其生活狀態等の異るところから或は倦怠を感じたり或は手持無沙汰の思ひがすると云ふ事は其根本に於いて學校を重く視、家庭を輕く視ると云ふ傾きがあるのでは無からうかと存じます。若しさう云ふ事ならば旣に學校で敎育を受けた目的の第一義を誤まつて居るのでせう、何となれば或は理科なり數學なり家政なりが家庭に於て實行さるゝ事になつてこそ初めて學校に居た甲斐もあるのだらうと思ひます。

社會の事は生産と供給と需要と此三つのものが寄り合つて成つて居り、之を保護して行くには政治も要る軍備も要る敎育も要ります。扨此三つの中、男は大抵生産と供給を司どり、女は需要の點を司ります、斯く此三つの原則をうまく配合して始めてよいので、何らか缺けても不可ません、即男が殖産して供給すると女がそれを需要して巧みに分配すると云ふ事になりますと宜いので更らに卑近に申しますと男が田畠に耕して得た殖産を交通機關に托して供給する、女がそれを受けて家庭に於いて萬事都合好く按排すると云ふ事は極めて自然に叶つた生活法だらうと存じます、それを殖産よりも卑しい事として自らを卑め男子の事業ばかりが高尙なるかの樣に思ひ、隨て自分の爲すべき事が疎かになると云ふ事は戒しむべき事だと思ひます。尤も近頃は分業法が行はれ家庭に於ても料理はコック、仕事は仕立屋が爲ると云ふともありますが、それには莫大の費用がかゝります、かゝる生活は誰にても出來るこれらは所詮主婦が家庭に於て自ら勞力を取ると云ふ經濟的な而も樂しき生活の美風には及ぶまいと存じます、かく勞力を以て經濟的に安く樂しき生活を作り又尤も大切な育兒とか養老とか云ふ方面にも十分努力すると云ふ犧牲の精神は日本婦人の特有とも云ふべきもので是等の精神が戰爭にも勝たしめ今日興國の原因を

生じたものかと思ひます。

私西洋に參りまして、其婦人を見ますと、如何にも頭腦が發達しては居ますが、其家庭を作ると云ふ段になつては臺所にコツクを置き縫物を仕立屋に出さねば一家を維持する事が出來ないと云ふ方が多いので、かゝる事を貧乏なる私共が習ふ必要は無いのであります。然るに教育があるからと云つて生意氣になつて折角學んだとの應用を怠つたりしては何にもなりませぬ。どうしても家庭に親しむて家を守ると云ふ事をシツカリ身に入れねばなりませぬ。前に申した通り從來の日本の女程犧牲の觀念を以て働くものはないので實に結構な事ですが、若し日本の婦人に斯樣な精神が無くなつたならば其影響はつまり男子にも及ぶだらうと存じます、どうしても昔の如き義理の爲めには一歩も讓ぬ偉い氣性の女が出來なければなるまいと思ひます。



私は學校を卒業せられた方に申したいのは實地に當つて家事向萬端に今まで教はつた事をドシドシ活用する事です、勿論卒業後と雖も良き講演を聽く事良き書籍を讀む事等も必要ですが、第一に高等女學校を出た位ではもつと確かり裁縫を學ばねばなるまいと思ひます、其れからお料理の稽古、又毎日實地に拵へる機がありませうし、或は學校では十分出來なかつたお茶だの花だのゝ稽古も必要でせう

し、又は英語の溫習もしつかりやつて弟達が間違つた讀み方でもして居れば其れを正して遣る位の事は出來ねばなりません、又既に英語の出來て居る方は佛語でも習ふとか云ふ事になれば、どうして手持無沙汰處では無い、なか〳〵忙しからうと思はれますが、そんな方は唯ボンヤリとして何も爲ないからではありますまいか、そんな事ではどうして一家を持ち舅姑なぞの氣に入る事が出來ませう、もつと眞面目になつて洒掃應對の些事から始める事が肝要です、若し女中が二人お有りになる所ならば其一人を還しても自分が引受けてやる、門の掃除なぞに人目立つて耻かしくばまだ人の通らない早朝に掃いても宜ろしいし、一家内にはまじめに考へればなか〳〵いそがしいことがあると思ひます。私も學校に參ります前には家事を手傳ふので隨分忙しう御座います、吳れ〴〵も手持ぶさたの事なくまじめにつとめたいと存じます。

實業敎育を起したる動機

日本女子商業學校學監　嘉悅孝子

前年私が敎えて居ました生徒の中で五人ばかり困まつた人が出來ました、其の中の二人は農家の女で、三人は商家の女であつたかと思ひますが、其の困まつたわけは外でも無い、高等女學校の敎育卒業後鄕里に歸らずに東京に留まりたいとか、學士の處で無ければ嫁入りしないなぞと云ふので、是れは私も困まりましたが鄕里の親元では猶更困まられたのであります、斯樣な事が四五年間に四五人も出來ました。

其時から私熟々考へたのでありますが、一方には高等女學校では氣位ばかりが高くなつて了まつて不可ない、勿論左樣云ふ貴婦人も社會に必要なのでありますが、又何うしても私共中流以下で暮らす者が多數無ければならぬ筈であるから、左樣云ふ階級に樂んで生活する者を作りたいと云ふので、今でこそ學校で割烹な

ども教へますが、前には开廢ものもありませず、女學生出の者は一向家庭て役に立たなかつたのです、これては不可ないと感じたのと、又一方には社會の上から考へますと、平和の戰爭と云はるゝ實業教育の必要が追々認められて來るのに女子に其の趣味が無いのはどうも殘念である、聞けば英國海軍の興つた動機なども女子の後援が與つて力あると云ふ事てすから、商業實業の思想を女子の間に普及させて、樂しく經濟的に働く事を奬勵致したいと、悉う考へたのてすが、私の兄も矢張り教育に從事致して居る者て、私の考へを賛して與れました、それてもまだ女子商業學校を興さうとまでは考へ及びませんてしたが、私の恩師土子金四郎先生に圖りて賛成を得、又故矢野次郎先生にも御相談申した處、大變お喜びになつて、左樣だ男子ばかりては無く女子にも商業教育が必要てある、其事業をやるなら及ばずながら矢野次郎も相談相手にならう、しかし自分も商業教育に就いては十一二年間苦むだ、やるなら苦しむ覺悟が無ければならぬが其れが出來るかと大層お勵まし下さいました、それて學校を開いたのが三十六年の十月てしたが、如何かと思つた事もやつて見ると、世の中ても着實にしなければならぬ、眞面目にならねばならぬと考へて居るものと見えて、精神てめてやつた丈けの事は幸に有つたのてご座いました。

私の學校は商業と申したところが何も會社員や銀行員を養成しやうと云ふのてはありません、人は身分不相應な非望を起すから苦しむので、それさへ取れば樂しむて暮す事が出來るのてすから、卒業の上は家に歸て喜んて働く、即ち商家てあらば帳場て簿記もつける農家なら畠に出て手傳をする、又相當緣があらば豆腐屋のお上さんても何ても關はぬから人を選んて嫁づいて働く、かく中流以下に甘じさせて置いて、着々と出世する事に心掛けさせ、決して氏無くして玉の輿と云つた樣な卑屈な了見を持さないと云ふのが本意なのでご座います。

それてすから課程も商業だからと云つて算盤ばかり教えて居るのては無く、どうしても高等女學校程度の

教育は必要ですから其れに據つて居ますが、亦自然無駄だと思はるゝ學課は省いて、常識智識の養成に心掛けて居ます、又漢籍を讀む頭腦は是非拵へねばなりませんから其方にも努め、家事を論語孟子でやり、倫理を中庸大學でやる覺悟で、嘘を云ふ商人の習慣を改めたり何かする、一言に云ふと士魂商才と云ふのが私の持て居る精神でご座います。

私は外國の眞似が嫌らひで、日本主義を日本主義として重んじ外國の良い點を取るばかりです、私は體操と云ふものを行つたこともありませんが、女には其れよりも猶ほ良い運動があるので、朝早くから起きてバケツに水を汲んで雜巾がけを致します、高い處へ手を擧げて鴨居を拭いたり、俯むいて閾を拭いたり、緣側を往つたり來たり幾度もすると實によく血も循環致します、私の郷里では未明からこんな事を家内中するので皆が健康です、全く天から授かつた手足を十分に動かして居る程幸福は無いのでご座います。

卒業後、娘の間に社會に出して働かせるとは望んで居りませんが、又徒食するよりは優しですから拒みも致しません、よく學校へも簿記方が欲しいとか、算術の上手なのが要るとか云つて見える樣ですが、事務員や銀行員になる爲めに私共の當初持つた樣に困まつた事がお互ひに出來るやうでは何もなりません、其れよりも、もつと此趣味を普及せしむる爲めに、其教師を養成して行くと云ふ事に心掛けて居ます、其れで日本主義の立派な女子を作て、外國の眞似は爲ず却て外國に日本の眞似をさせやうと云ふ意氣込みなので、云はば私の蠻カラ一流のやり方をして居るのでご座います

（談話）

非論理

戸川秋骨

二二ンが蠟燭

ツルゲチーフのルウデインといふ小說（二葉亭氏譯浮草）にピカソオフといふ皮肉な男が出て居るが、此

の男がお前さんは自分の云ふことには間違がないと思つて居るやうだと女にいはれた時、それに對してビガソオフのいふには、決してそんなことはない、男だつて間違はする、只併し男の間違は二二が四てなくて二二が五といふやうな間違てある。處が女の間違と來ると恰て異つて、二二が蠟燭だなんて云ふ事になると斯う云つて居る。如何にも二二が蠟燭は奇拔て又た婦人に對する痛烈な罵倒てある。余は此の皮肉屋の說が當つてゐるかどうか知らぬが、婦人の言行には往々論理に合はぬことがある。否、婦人に限らず男子にても往々論理に合はぬことがある。併し余は其の非論理なことが至極結構なことであると思ふ。ツルゲチーフと云ふ人は此の二二が四とか五とかいふことが好きと見えて、其の名高い散文詩の中にも斯う云ふことをいつて居る。『凡そ人の祈禱なるものは、二二が四とならざらんことを願ふのである、總ての宗教は二二が四でないことを願ふものである』とさう云つて居る。



二二が四と云ふのは通例の理屈てある、世間並の理屈てある。處が我々は通常の理屈、世間並の理屈には飽きて居る、飽きて居るといつては甚だ不理屈に聞えるが、我々は所謂世間並の理屈以外に猶ほ何物かを求

める者である。又た實際世間には所謂理屈以外に立派な物貰い物が澤山にあることゝ信ずる。

ハムレットがホレシオに向つて天地間には所謂哲學を以てしては夢想する能はざる幾多の事物があるといつた言葉はツルゲチーフが今述べた散文詩に引用されて居るが、實際世間には所謂哲學を以て窺ふ可からざることが隨分にある、所謂理屈以上の事が澤山にある、カアライルはミルを呼んで屁理屈屋だといつたさうであるが、如何にも世の中には屁理屈屋が多い。此意味から云ふと余は婦人が二二ンが四を間違へて二二が蠟燭と云ふのも面白いと思ふ、少し婦人はそんな間違をやつて單調な理屈を打ち壞して貰ひたい。只望む處はその間違が理屈以下に陷らないで理屈以上に在らしたいのである。

世の中は理屈詰に出來てゐる。教育も理屈で持切つて居る。女がお化粧をするとお洒落だと云ふ。絹物を着ると贅澤だと云ふ。女優になると墮落したと云ふ。余は婦人になるべくお化粧をして貰ひたい、出來るでとなら絹布の着物を着て貰ひたい、澤山女優になつて貰ひたい。實を謂へば男とても同じことでお化粧をして絹布の着物を着て貰ひたいのであるが、男は他に忙がしい勤があつて、殘念ながらそんな暇がない。せめて女だけでもやつて貰はなければならぬと思ふ。斯ういうと女とても忙がしい位でなければならぬ、といふ人があるかも知れぬが、それが元來余に云はせると間違つて居るので、女は働くものではない、美くして男の目を怡ばせ世間を飾る者である、二二ンが蠟燭とまてゆかずとも二二ンが四とならぬやうにすべきであらうと思ふ。

女優

今女優と云ふことをいつたが其れに就いても女子教育者が考へ違をしてゐる。二二ンが四の筆法を以て論じて居る。女優になる女は墮落した女だ、女優を出す家庭は腐敗した家庭だと云つて自分の學校から女優が出たことを憤慨した者がある。甚しきは女優の爲めに

女學の影響される事が多大てあると云つて自分の學校商賣から割出して怒つた者がある。實に怪しからぬ話て第一女優と云ふ者がそんな卑しい者てあるか斯れが抑々問題てある。二二ゝが五と云ふ論鋒といはれるかも知れぬが、余にいはせると女學校の先生も女優となるのも大した相違はないてはないか。少くとも女優と云ふものがさう目鯨たてゝ輕蔑する程のものてはないもし此の兩者に相違があるとすれば、教育家の方が僞善て女優の方が僞惡てあると云ふ位に過ぎぬ。成程女優や又た女優にならうと心掛ける人の行を立派なものとし、其の志願者の立派な口實を其の儘信ずるのは架空な事かも知れぬが、女優そのものに就ては決してこれを貶斥すべき理由はないのてある。又た一歩を讓つて論者の云ふやうに女優は惡るい者、其の候補者は墮落した人間てあるとすれば、これは二二が四の論理に陷るが、さうなければ反つて惡るい者が一階級に因り恰ど教育家の便利になる譯て至極好都合と云はなければなるまい。

併し凡て極端の論は廢にして余は女優が出來たとて敢て驚くにたらぬことゝ思ふ。自働車も馳り、空中飛行器も實用になるといふ時代てあるとすれば女學生の女優位は當然のことてある。殊に一方ては歴々の紳士が帝國座とやら云ふ物をうち建てやうと骨を折つてゐる時てあるから、寧ろ女學生の女優のもつと早く出來なかつたのが不思議な位てある。又たこれを特筆す可き大事件とすればそれは寧ろ賀ぶ可き大事件てあらうと思ふ、何となれば立派な劇場が出來やうと云ふに相當な教育のある役者がなくては折角の座も用をなさぬから、此れは最も必要なのてある。最も多寡が貞奴位のお弟子ては少々心細いと云ふなら、それは藝の問題てあるから自ら別になる。なほ一言附記したいが世間ては女學生の女優志願を女の虚榮心に歸する人があるやうてあるがそれは如何てあらうか。余はさうてないと思ふ、それは唯だ一時の熱に浮かされての仕業と信ずる、それて余は一時の熱に浮かされたのても管はぬから其の熱を長く續けて行くやうにして貰ひたいと云

ふ希望を持つて居る。
併し又た大勢と云ふ點から觀たならば此の女優も婦人獨立の一法かも知れぬ。余は二二が五の理屈から婦人の獨立と云ふものが果して可いことか惡るいかよく知らぬが、周圍の事情が其れを奬勵して居るとすれば女優も時世の氣運に驅られて出たものであらう。

獨立？

婦人のみならず男子でも獨立と云ふことは善いことであるか惡るいことであるか一寸考へものである。獨立が善いか惡るいかと云ふことは最初から議論にならぬと考へる人があるかも知れぬが、此れは決してさうではない。婦人はお芋でも喰べて時々芝居でも見物すると云ふ位な處が至當かも知れぬ。これは婦人の他に依賴して生存する塲合である、併しこれが獨立するとなると近頃の戰後の文學杯に見えるやうに其の極端は夫をさへ棄てゝ了はなければならぬやうになる。亭主の留守にお芋やはじけ豆などを喰べて居る女にも困るであらうが、夫を棄てゝ出て行かれても困る。所謂女子敎育家が此の邊をどう考へて居るのかたづねたら兩端を調和するのだと云ふかも知れぬが、これが調和をさせ得るものか如何か、その邊は深く考へなければなるまい、なほかゝる問題は婦人自からも考へなければならぬ實際問題であらうと思ふ。

苦勞性の女

福光東衣　譯

或る日、とある路傍に、若い娘が慟哭して居た。通行人は何事かと注意を向け、なにかなし同情の念に撃たれる。その中に或る人が立ち止つて。
「一躰どうしたのです？」
と深切に尋ねると、娘は、淚に漂ふ眼を擧げて、
「何時かは妾も結婚することになるのでしようし、さうなれば又、小兒も出來るのでしよう。いろ〳〵考へまして…………
と云つて、又一頻激しく歔欷いて居たが、急に聲を揚げて、

「若しも生れた兒が女であつたらどうしましよう」
ワア――――
手がつけられない。

世の中には、先の先を豫め慮つて最大悲境に陷んだ時の準備をする、といつたやうに極めて細心の人は有るが、夫が苦勞性の女となると、まるで樂の中に苦を發明して陰氣といふ酒に涵るのだから堪らない。永久に苦んで、悶えて、有りと有らゆる萬物を、極端なる想像の障礙で包圍めなければ承知しないのだ。

先づ、旅行をしようといふので鞄の装に着手ると、荷物がきつと悉皆は這入り切らないに定まつて居る、と心配する。漸く這入つたとなると今度は、鯱張つて錠が下りないだらう、と懸念ふ。錠が無事に下りると、次には又、貨車が延着しなければ良いが!?若しか延着でもすれば大變だ!目的地へ着いた時に自分の荷物は受取れないで何うにかなつて了ふ……と懸うてある。



若しも良人の歸宅が五分間も延びると、何かあつたのではないか知ら?と胸を躁がせる。てなければ又、何處え寄つてゐらつしやるんだらう?と怪む。さうかと云つて、平常よりか早歸宅だと、此やうに急いでお歸になつて、まあどこかお惡いのでなければいゝが、と來る。

小兒の顏色が少し蒼いと、實布的里亞か、猩紅熱か、腸窒扶斯にでもなることだ、と思ひ込んで、砂糖や饅頭の食過だとは一向に氣がつかぬ。

恁ういふ女に幸福のことは、商賣をやつて居ないで

とてある。其理由は、後て値段がきつと騰るといふ時てなければお客樣に商品を賣らないし、今に値が下ると確信じた時てなければ物品を仕入れないし、兎角向樣の御爲ばかり考へて、自分の損得がお留守になるからだ。

さはさりながら、苦勞性の女は一般に可愛らしくつて、心が優しくつて、自我を忘れて人を愛慕する、これは誠に得易からぬ女の美點てある。だから、たゞ沈靜いて居て氣苦勞さへしなければ誠に申分は無いのだが！　どうも左樣せずには居られないのだから、治療の見込が一寸立たぬ。脅したつて止むものてもなければ、又、慰めたつて治るものてもない。

差詰、冷靜て、思慮があつて、一寸した失敗に顏色を變へて大騷をやつて居るのをアハヽと笑つて了ふやうな良人を持つのが一番だ。要するに、手數はかゝるがまア、深切に庇つて、絶えず心を宥めるやうに注意して遣ることとてある。

（マツクスオーレル）

無垢の處女を陷れんとする恐るべき誘惑

かげろふ

都會の誘惑……初めの手段……封筒の表と中……袂に投げ込む……地方出の人は注意せよ……嚴格なる寄宿舍の庭に……新開地の弊風……白い紙と黑い紙……甘きささやき……血判……數枚の誓紙……艶書に收入印紙を貼る……敎育高き學生……柳に風……純潔は少女の生命

誘惑は人數の多い都會の地に殊に多いやうに思はれます、私も都て生れて都て人となりましたから、今日まて見聞致しました二三の實例を引いてお話し申ませう。先づ誘惑する手段の第一步として艶書を送る、これが抑の始りてござい升。底知れずの墮落の淵に沈むのも、人に浮名を歌はれるのも、始めは皆此の艶書に依て起るのてござい升。其艶書には何の樣な言葉が書かれてあるかと申しますと、熱烈な自分の初戀の感情を對手に訴へたものが大半を占めて居り升。或は又對者が文學に秀てゝも居りますとか、或は音樂の才があるとかてすと、つまり先方の喜びそう

な點を捕えて、併て上げて、陰ながら嘲はしひとか、嘲弄れて居るとか言て交際を求めるのでございます。其艶書を送る法は如何かと申しますと、他の人に怪まれぬやう、封筒の表裏は勿論筆跡も美しい女文字で、差出人の名も優しい女名前を以て發送するのでございます。受取る人は何の氣も附かず開封して見ますれば、女子とは他の人の目を瞞着する假りの名、立派な男子からの艶書であるのに驚嘆するのでございます、斯る書を受取ましたる場合、一片の返し事さへ致してはなりません、教育ある男子が氣の毒だからとか、反省させてやらうなど丶思て、返事を認めた所で、此樣な事を敢てする男子の方では、自分の非行を顧るは愚か、其心盡しをも仇で返すやふな事を致し升。又よく縁日などの主として人の多く出盛る場所に於て、秘に對者の袂に艶書を入れる事がござい升、或は歌留多會などで、名刺を與れたり致して、交際を望む事もござい升、男女交際は淺學な私の喋々する處ではございませんが、御兩親の許を受けました御方の外には、交際を致さないのが一番安全でございます。

立派な教育も受け、修養などおありの方はいざ知らず、普通の少女が兩親の許可もうけず、勝手に交際致すのは、よしや双方が潔白な精神でございましても、人の誤解は免れ難いものでござい升。話が餘事に移りましたが、誘惑される人は都會の人より、地方から出て來られる御方の方が、概して誘惑に陷り易いものでござい升。

故郷を遠く離れて旅の衣に人の情の肌寒く思ふ時、親切らしい言葉を聞いたり、優しそふな心を寄せられたり致しますと、世馴れぬ、人摺れぬ身の、たゞ一圖に其人を信じて仕舞やふな理で、どれ程意志が堅くともそこは一から十迄承知致して居る都の人に比べますれば、無理もございません事でござい升。質朴な僞りなき人にのみ接して居られた者が、急に魔の住む場所へ出たのでござい升もの、同じ都に居りましても、山の手よりも下町の方が餘計に誘惑は烈しい樣でございます。私は昨年の初夏まで某寄宿舍に居りましたが、斯樣な嚴格な處でさえ、隨分と誘惑の征矢を受けました、邸内にばかり居て滅多に外出も致しませんでしたがそれでも朝など窓の障子を開けますと、其處に手紙が投入れてありましたり、又門内でひろつた事も度々でございました。只今は此處に引移りまして以來、新開の地とて風儀は一層恐うございまして、殊に商家の事ではございますし、人樣に接する事も頻繁でござい升から、從て誘惑は殊に烈しうござい升。無名で手紙をよこしては、交際を承知するなら門の柱へ白い紙を貼つて置いて與れとか、不承知なら黑い紙を貼つて與れるやうになどゝは隨分とふるつて居りませう。又中には承知をして與れれば自殺をするとか、覺悟があるとか、書いてあるのも御座い升し、夜分など無暗と一人で他出は出きません。汚れなき少女の耳に甘き囁きを言ふ人は、美醜に拘はらず、花に狂ふ蝶のやふな者、例えば紅の花に接物致して居るかと思へば、さきに紫の花に移り、又すぐそれにも倦きて他へ移ると言ふやふなもので、美醜はさて置き、若い少女と見れば接近しやう誘惑しやう弄ばうとして居るのでござい升、又血判や誓約書と申

す事が流行致して居り升、即ち血判は生涯渝い交際を結ぶとか、偕老同穴の契を結ぶとか書きました終りに、自名の下へ血判を捺して、斯く迄に思ふて居ると言ふ事を表すのでございます。十八十九ともなりますれば、斯樣な愚しい事をされたからとて、私にも止めませんが、十五六の世の中の事情もまだ深く知らぬ嬢樣方は、兎角まどはされるのでござる升。

眞の友愛をそゝがうと申す人は、僅か一月や二月の交際で此の樣に輕々しく血判などを致しません、私の知て居る友などは、三枚も四枚も斯樣な血判を捺えた艶書をもつて居り升が、永久とか永刧とか、立派に書いてございましても、一月と交際を持續致したのはないさうでござい升。最もお可笑のは此契約書の肩に、收入印紙を貼つてあります事で、丁度書翰のやふで、何の意味も價値もなくなるつて、先日も兄と大笑ひを致しました、此やうな事をなさるのは、廿才以下の中學生間に多うござい升。

又ずつと年の多い。高等學校又は大學位の方になると、初めは殊勝に、潔白な交際を口にして居りましても、遂には人間は感情の動物、况して青春の時代に於ておやなどと本音を出すのでござい升よ、一般に現今の人心の腐敗致して居り升には驚かずには居られません。

高等な敎育も受け、名譽ある學校に學籍を置いて居られる方々の中にも斯樣な人達があるとは誠に心細い次第ではございませんか。

斯樣な風に誘惑は直に物に感じ易い少女の缺の其弱點を、巧みにねらつて來るのでござい升から、固き上にも固い意志を持て居りませんければ、なんでも古い言草ではござい升が、柳に風と受け流して恨みを買はぬのが一番でござい升、又誘惑と知りつゝ一時の感情に驅られて、生涯の不幸を招くやふな事がござい升。

前途幸多かるべき妙齡の女が、厭世自殺をされるとか、髮を切るとか、一生空閨を守つて獨身主義を實行するとか申し升のは、皆此の陥るべき誘惑の淵に陷た者が多うございます。

つまり意志の薄弱な爲でござい升、ですから私共は優しき中にも潔く、美しき中にも潔く、柔順な中にも潔くと言ふ事を忘れず、純潔は少女の生命である、純潔なる者こそ眞の少女であると確信致して居れば間違はございません。

まだ申殘した事も澤山ございますが、大略まあ右の樣な次第で御座升。

新派和歌の趣味

窪田通治

前號に引續いて、今少し與謝野晶子女史の歌を見て行きませう。

左にて小刀つかひ木の實など彫りける兄とはやく別れき

淡々と云ひ棄てゝ、力を籠めて云つてはない中に却つて寂しさが汲み取れます。

此兄といふのは生まれつき器用て、然るべき事を習はせて行く〳〵の活計の種を得させようとするのに、兎角に其れを厭いて、隠れては手すさびばかりして居る、其所に有り合はす小刀て、何所から拾つて來たか木實など持つて來て、其れを種々の形に彫つては喜んて居る。家の者が叱つてもきかない。かういふ者は仕方がないと云つて家の者も終ひには見放してしまふ。兄は結句よい事に



して、其れからは思ふまゝに好きな道に耽り。とうとう家を離れて其道の修行にと出懸けてしまつた。爾來幾年にもなるが、今にはかく〳〵しくは世にも出られず其れてゐて何が面白いのか一向に焦思つた風もしずに相變らず彫り物をして居る。

賴もしい兄てはないが、何所か懐かしい所があつて忘れられない。其兄を不圖思ひ出したのてす。思出すと、幼い頃同じ家に育つて、兄が彫り物をするのを側から不思議がつて眺めて居た、其頃の姿を思ひ浮べたのてす。さう思ふと、兄は左利きて、

左の手でして居た、其恰好までありくと浮んで來る。左利きは器用だといふ、さう云はれた事なども思はれるのでせう。

○

輦の宣旨これらの世の人のうらやむものをわれもよろこぶ

身は賤しく塵に埋もれて居るが。此中に喜びもあれば誇りもあり、我世の味も味つて、甲斐ありと思ふ生活を送つて居る。此れで足りてゐるとも思つてゐる。他所目にもさう見られて居る。が、心の底には、我世に對する執着の未だ消えはせずに殘つて居る。否々、かの雲井の空高く、身一つに榮華の極みを集める生活さういふ物でこそ願はしい。我れ白眼に、我世の華やかなる姿を見やるのでは無く、望みつゝも得られぬので諦めて居るのだ。萬人の望む程の物は、我れも等しく望んで居るのである。

輦といふのは、陛下が行幸の砌とか又は親王大臣などの際の者の乘るもの、手にてかく車です。時として臣下の者にも許される事があるが、其れはよく〱の場合で、此言葉によつて想起すのは、源氏の桐壺の更衣が、病んで里に罷る砌、特に陛下より許されたといふあの條である。此歌を讀むと、心を動かさずには居られぬ其條が自ら想起されて、其れを思ひ寄せて作られたのでは無いかと思はせる。

拗ねず飾らず、さらりと此普通なる願ひを打ち明けて云つてある。其所に染々とした味があります。我が日々の生活、捉ふれば直ちに歌で、特に歌の境といふものゝあるなどは無い事を思はせます。

○

翅ある人の心を貫ふてふことはあやふし貫はずば憂し

翅ある人――心鋭く、世の常の道にては捉へて置く事が出來ない、心の趣く其所を直ちに我が行くべき道として、如何なる物にも妨げられずに行つてしまふ。之れを普通の人の行動に較べて見ると、まるで翅を持つて居て、羽ばたいて翔けて行くやうにも思はれる。

身は女、何よりも先づ顯はしいのは、萬づ實直に、頼もしい所のある人である。此所に我が心の安らかさ、我が身の樂しさを得たいと思ふ、かゝる人の心を貰ひかゝる人の物となるのは、危い事である。さりとて、其人より思はれぬのも憂い。此危さと此樂しさとの二つに囚へられて、兎に角に其境涯に居る。

行き〳〵て歸るを忘るゝ男心、止まつて止まる中にみ安さを求める女心、其爭ひがやがて男女の感情の天地です。此爭ひの中に惱があると共に新しき愛が湧き盡きざる情趣があるのでせう。心鋭い人には割合に家庭の平和がない、一代の天才でありながら、しかも伉儷睦じかつたと云はれて居たカーライル夫人も、死後其日記を閲すと、最後のページに、女よ、忘れても天才の妻とはなるなといふ意味が記してあつたとの事です。輕やかに云つてある歌ではあるが、人の心の底にまで徹した上の聲です。

○

飲む酒の準ひにする人なしと笑ふさびしき男をさらふ

何ういふ譯でか定まつた妻といふ者も持たず、唯酒にばかり親んで、女なんてつまらないもの、世の中の事は酒に限ると傲語して笑つて見せる男がある、其れて居て何所かしら寂しげな所がある。さういふ男を見て、女の立場からつく〳〵嫌ひだと思つた、と云のです。

歌に含まれて居る言葉その物よりも、歌の陰に隱れて居る女の男を見る心持の中に一種の趣があります。その男を男から見ると、或は戀に躓き、戀にはぐれて僅かに酒に悶をやつて居る男とも想はれる、そして其れでも在れば在られるといふ心持が汲まれる。が、女から見ると、女といふものを眼中に置かず、杯の物にも劣るやうに思つてゐる、即ち女が男の全體の要求でないといふ所に、同情の出來ないのみならず深い憎みさへもあるといふのです。

廣く見通して居て、しかも其見通して居る心に隨へず、何所までも嫌ふといふ所に趣があります。

月の婦人

三木露風

華やかて、さびしい月の光……

床を出てゝ化粧する悲しき婦人。
電燈のもと、歌の名殘に、
また、疲れて夢む劇場の婦人。
或は夫人、扶けられてくだる、病院の手術臺。
看護婦の裳裾の襞。
美しき尼の祈禱。
輕薄なる樂聲におくられ、壇に昇り來る女手品師。
夜七時、音樂會は開催し、戀を彈く女會員。かれ
らの中の既婚婦人。

ああ、華やかてさびしい月の光……
青白い霧の中に、
これらの婦人が、悲しんで居る。

夕暮時

藍色の空に、
やはらかい光を帶びて、
月が懸る。

夢のやうな別れ。
樂しい別れ……

ああ花やかな、お前の聲がひゞく
夕暮時！

「別れてから」

別れの時に交した、
あの短かい言葉を
お前はおぼえてゐるか。

なつかしい彼の森の梢に、
わづかに鳥が啼いてゐたのを、
どうしてお前は？
そんなに忘れたのだらう。

いつかもう、知らぬうちに、

暑い／＼夏の日の
深い歡喜がくる。
しかし、とてもお前は、
歸るまいけれど——
別れてから初めて、
ああ、愛する女よ
別れてからはじめて、
つく／＼と、お前が戀しい—

抒情詩二篇

森川葵村

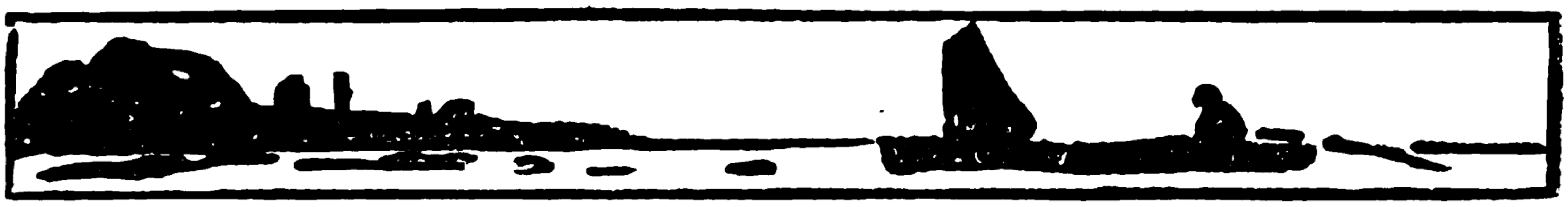
一

汝が重き眼瞼を閉ぢよ、
萎えし手を小草に延べよ、
柔肌をあらはに、温く
眠たげの風こそ甜ぶれ。
紅罌粟の顫るゝ花に、
耽溺の心の底に、
タンホイザーの譜ぞ焦ぐる…………
汝がおもき眼瞼を閉ぢよ。
萎えし手を小草にのべよ、
しかはあれ、まがひもあへず——
弾き倦みて棄てしヸオロン
地にひくゝ毀れる聲を…………
冷かに靑き流の
噎び行く「悔」の泣音を…………

二

病める薔薇——ブレーキ

おゝ薔薇、汝は病めり。
眼に見えぬ痛みの蟲の、
暴風吼へ狂ふとすれば、
夜來れば、飛びてそめぐれ。
見いてしや——
「歡樂」の赤き床、
はた汝が身をば滅す
そが暗き秘戀を。



君

服部躬治

日の本の三千年の春はいま君にならひぬさくら花さく。

○

燃ゆべくはかの熱帯の花のかずつくして君が唇あたゝめむ。

○

玉の錐とほるばかりのこゝちしぬ君がことばの胸にしむとき。

○

君がふむ地は離れじ惑星のあるかぎりすゑ撰ばしむとも。

○

蕗の薹あへしてまゐれ君が眉かるき苦みにすこし寄る見む。

○

泣かせつとさはいふものか君が手にぬぐひしそれは誰が涙ぞや。

○

君はゐずされども心君に和ぐされども君に息づかはしき。

○

召すとならは天が下なる花しぼり香油つくりてやらまし君に。

○

日は去らず君を見し日は遠ざかるはじめて君をわがと見し日は。

○

春の草君は裾あげ帯かくしあかき田舎のをとめさびすも。

○

君にやることばはかねてとりもあへず無きにだに聞け心の聲を。

活動せる婦人界

（女優養成所）　（花よめ花むこ）　（虚栄を虚栄を戒む）



花言葉

水野葉舟編

か。くわ

柿　自然の美の中に我れを葬れ。

かざぐるま　心の美。

かざぐるま―常磐の―　貧困。

雙鸞菊(とりかぶと)　世を悪む。憎人。

苧(大麻)　運命。

蛇麻草　不動。

カケリヤ　諂諛、

加密列　不運の時に奮ひ起す精神力。

カナリヤ草　忍耐。

カーネーション―深紅―　あゝ吾戀しき人の爲めに

カーネーション―絞り―　拒絶。

カーネーション―黄―　嫉惡。

桂の樹　光榮。

桂―花のついたもの―　不忠。卑怯。

桂―地上の―　堅忍。

桂―山上の―　野心。

カウスリップ　憂慮。美貌。

カウスリップ―アメリカの―　神の美しさ。君は吾が神なり。

貝細工草―アメリカの―　不快な記憶。

カックー、プラント　熱心。

カスキュータ。　貧。

枯葉　哀愁。

河原瞿麥、　獨身。

クヮモクリット　忙しい身体。

茅草　熱中。

かるかや―赤色―　蘇生したやうな喜悦。

橄欖　仲裁。平和。

纈草　喜んで、何事にも親切にしてくれる性質。

纈草―ギリシャの―　破烈。不和。

酢漿草　樂しみ。母の優しさ。

樫の葉　勇壯。

樫の樹　歡待。

白樫　獨立。

かわぢさ　女の眞實。

かわぢさ―ニガクサの―　温順。

かわぢさ―穂のある―　類似。

―(續)―

花言葉

水野葉舟 編

き、くイ、ぎ、ぐイ、きや、

（注意、このくゐ、及びぐゐは Qui, Gui などの場合を言ふ。）

「雉の目」（フィーザンツ、アイ）　記憶。

桔梗　判断。

龍芽草　感謝。歓喜。

キャベツ　利益。

キャリーカンザス　仁慈。

檉柳　罪悪。

金魚草　臆断。

常春藤　信実。結婚。

常春藤—巻鬚のあるきづたの若芽—　楽しまうとなさい。

長春花（ジオンクイユ）　私は愛情の回復する事を望んで居る。（このジョンクイユはナルシサス「水仙」の一種で、蘭のやうな葉のもの）

毛茛　富貴を望む。

懸鉤子　卑下。妬み。悔恨。（我国の山野、藪などに叢生する刺のある草。黄色の実のなるいちごの一種）

クインスロッケット。　汝は妖婦のクインだ。流行。

金盞花　悲哀。

金盞花—アフリカの—　粗野な（下賤な）心。

金盞花—フランスの—　嫉妬。

金盞花—予言者の—　予言（この花は Prophetic Marigold と言はれて居る金盞花の一種）

金盞花—園の—　不安。

梧桐　兄弟の愛情。

菊—支那菊—　不幸の時の愉快。

菊—赤紅—　私は愛する。

菊—白—　真実。

菊—黄—　かすかな恋

菊—大輪の作り菊—　化粧し立てた女。

菊—野菊—　はづかしさ。

菊—自然のまゝに咲いた花（咲くまゝに咲かせた花）　零落した貴人。

brighter. One night when she called them to come and light the sky, they came very slowly, and when she told them to shine, they did not obey her, but wore a csoss look on their faces. This made old Mother Moon feel very sad, and a very strange thing happened to the naughty stars. They felt themselves falling, falling down from the sky. Their places were taken by some good little stars who wished to help the people on the earth find their way. Faster and faster the disobedient stars fell, till they sank down into the earth. They cried themselves to sleep, because they were sorry that they had been naughty.

In the morning their father, the Sun, shone out so brightly that everything wakened from sleep, even the baby stars under the grass. They begged him to take them up again to the sky, but he said that they were to shine on the earth instead of in the heavens, and so make the earth beautiful. So every morning, when the Sun smiled upon them, they opened their eyes and shone all day. At night, we can see the stars in the sky; and every day in summer, the stars shining in the grass, (Adopted.)

Are not flowers the stars of the earth, and are not our stars the flowers of heaven?

呼び集めて，空を照せと命じましたら，星達は愚圖々々して，不興な顔色を示し，其命令に從ひません。母親は之を見て非常に悲みましたが，爰に不思議な事が起りました。子星は何となく自分達が天から落ちて來る心地が致しますと，他の星が自分共の塲所に座を占めて，地上の人が夜道で困らない樣にと盡力して居るのです，其中に頑惡な星達はドン々々落下して地上に達しました。其處で彼等は己等の惡かつた事を悔ひて泣寢入りをしました。

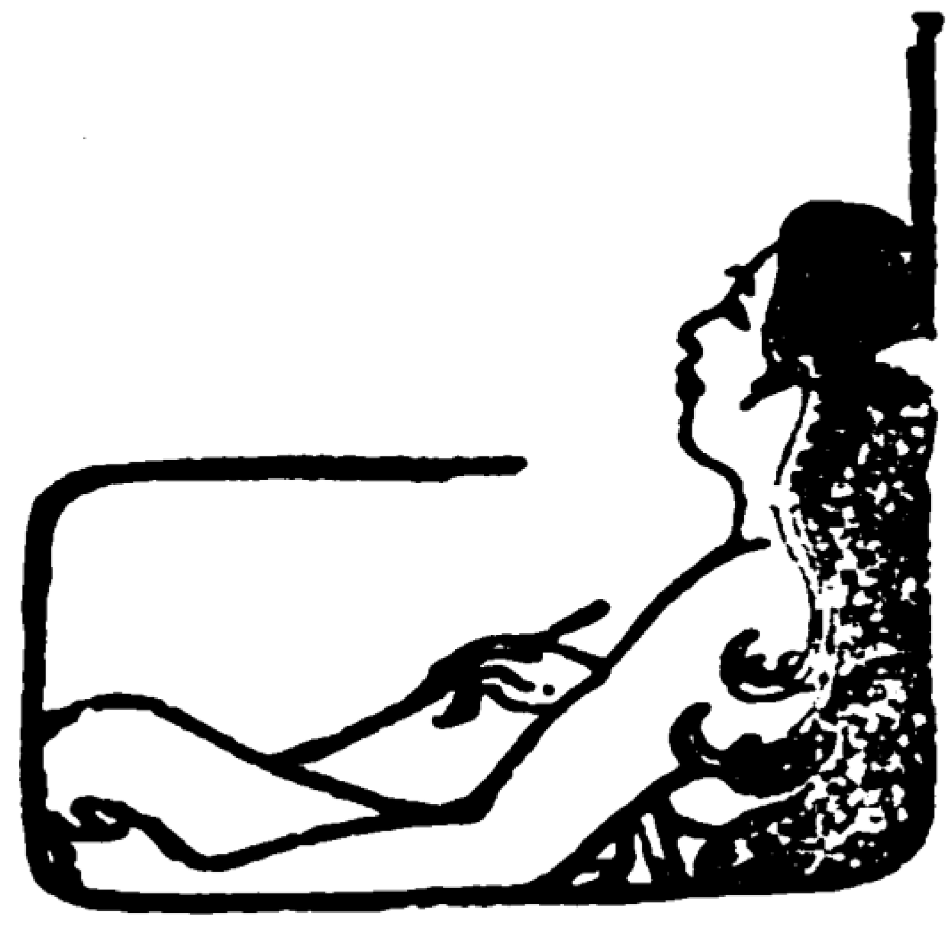
翌朝父の大陽は赫々と照りましたので，何物と云はず皆起き，草間の子星等迄も目醒めました。彼等は父に何卒再び天へ連れ歸つて下さいと願ひましたが，父は許可せずして云ひますには，「お前達は，天の代りに此地上にて輝いて，世の中を美しくなさい」。其て，毎朝大陽が笑みます時には，彼等は眼を開き終日輝いて居り，夜になりますと，我々は空に星の閃々するのを見，夏の日中に星の閃めくのをみる次第で御座います。

花は地上の星にして，星は蒼天の花ならずや。

英　　文

（第五年第四回）

女子英學塾講師 河 井 道 子



Swest Remembrances.

Let Fate do her worst;
　　there are relics of joy,
Bright dreams of the past,
　　which she cannot destroy;
And which come in the night-
　　time of sorrow and care,
And bring back the features
　　that joy used to wear;
Long, long be my heart
　　with such memories filled;
Like the vase in which roses
　　have once been distilled,
You may break, you may scatter
　　the vase, if you will,
But the scent of the roses
　　will hang round it still.

(Moore)

嬉しき想出

非運の脅迫何かあらん
　　我には歡喜の遺物あり,
輝々たる既往の想出は
　　いかで不運や破り得ん。
其想出は苦悶悲憂の
　　夜に訪ひ
呼び起すなり逝きし日の
　　喜樂の笑の顏を。
かくて久しく我胸は
　　嬉しき思に溢るなり,
一度薔薇の香を盛りし
　　器に胸を譬へまし
器は片々碎くとも
　　床しき薫は何日までも
　　失せてあたりに籠るごと。

The Dandelion.

Years and years ago, a great many little stars lived in the sky with their mother, the Moon, and their father, the Snn. Their mother liked to have them shine as soon as it grew dark, to help brighten the sky, and so make the eaath

蒲　公　英

昔々澤山の小な星が蒼天に兩親即ち父の大陽, 母の月と一所に住んで居りました。母は夕方になるや早々星達の輝くのを喜びました。これと申も畢竟空を輝して地上の明くなる樣に手傳はすのでした。一夜,月は小供等を

白い顏

水島佐久良

普請中の二階家の、新らしい木の香りが、鼻の先をころげて行くと、樹の葉が俄かにざわ〳〵と鳴り騷いで、生垣の角の街燈の灯光が、千斷れさうに淡くゆらめく。「あゝ大分變つたな。」と思ふと、もう妙な、擽つたいやうな懷舊の念の緒が、縱橫無盡に、しかも際限なく、する〳〵と自然に繰り出されて、何うにも恁うにも止め度なく、抑へ切れなくなつたので、足早に其處を通り過ぎ、ひよいと一つ角を曲ると、眼の向いた方の平家の簷下に一人白い顏の若い女が、大切さうに小犬を抱いて立つてゐた。

それと見ると自分は、はや總身の血汐がわく〳〵と足搔き始め、恨みと惜しみと、淡つこい窮屈な懷しい思ひとが、又も頭の頂邊から、足の爪先まで行つたり來たり、廻り始めるのを辛くも我慢して、昵と眺めたまゝて行かうとすると、何う思つたか、ふと此方を見向いた女は、慌てず騷がず、嫺かに挨拶をする。

かうなると、血が沈む、動悸が止む、氣が落着く、隨つて何うやら胸に餘裕が出來て、輕みになつた案配て、一つ復讐の、冷やかな一瞥を與へてやらうと思ひ直して、勢よく彼方を見やると、何處からか一疋の穢ない黑犬が、ムク〳〵と步いて來て、女の足下へ蹲まつたので、覺えず視線が外れる。氣がゆるむ、そして何時の間にやら通り過ぎてしまつた。

通り過ぎて、さて今一度白い顏を無理やりに、幻に浮べて、冷かな嘲笑をもらしたが、其の時はもう二丁も離れて居たらう。

今度は己を憐む心になつて、覺えず深い太息を吐た。

老嫗

霜溶けの畦道を、ぶらり〳〵と妙な氣で步いて行く。邪見な風に泣き號ぶ椋の裸樹や、無暗矢鱈に搖つく遠近の農家の灯光、早や夕闇の空を高く鳴いて過ぐる五位鷺の聲など、物皆一々哀れを添へて、つい彼の頃の何やかが追懷の上を掠めてゆく。

と、頭巾にショール、其の色合から扮裝格好まで、もうそつくり其まゝの老嫗が、よぼよぼと近寄て來る。懷しい、慕はしい、溫かな思ひに波うたせつゝ、自分も寄て行つて、五尺二尺、やがて右と左に擦れ違つた。

あゝ、その時自分は故鄕の母の俤を思ひ浮べてゐたのである。



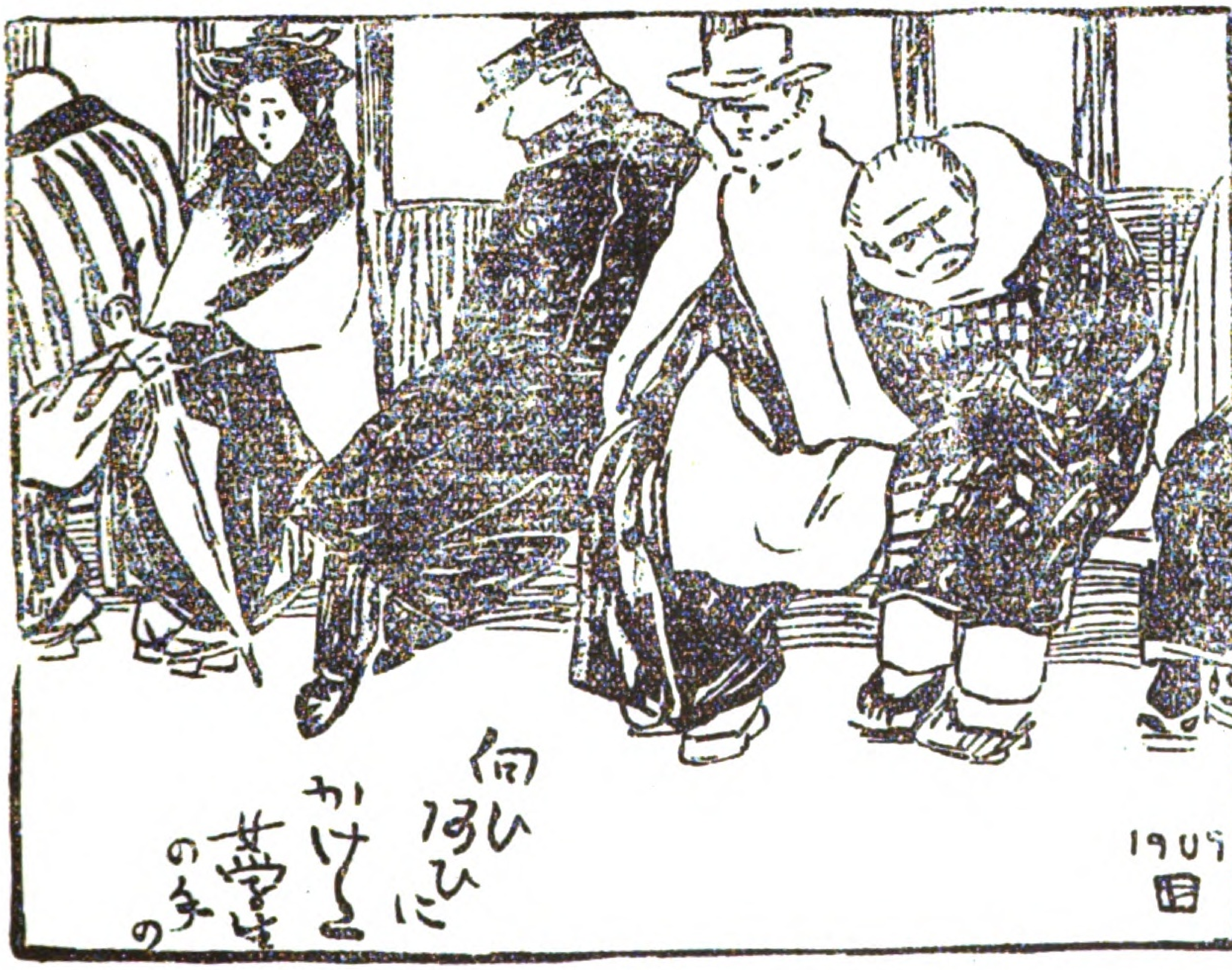
○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○交換手（天賞）

神田　田中英子

お米は今朝も、色の褪めた紫紺めれんすの、袴を低くはいて、玄關に下りると、下駄箱からねぼけたやうな、牡丹色の鼻緒の結つた、鬼藤の吾妻下駄を出して、此れも隨分甚くなつたと、思ひ乍らはいた。……妹の寐息が、かすかにきこえる。雨戸をごとりつと、明ける。冬の朝の六時は、未だまつくら!、しつとり露の下りた朝の道に、つと身體を入れると、目から鼻から冷い空氣が流れ込んで、心持まで變る樣に思はれる。長らくリウマチを病つて居る母。……人の顏色を見る事の上手な、色の淺黒い目のぱつちりした、妹。……此樣な事斗り幻の樣に思浮べ乍ら、とぼ〳〵歩いた。あゝいつまで、……いつまで、此樣な事してるんだらう。……「娘盛りをねえ、可哀相に、……つて云つてくれる只た一人の、叔母の顏を思ひ出すと、「あゝどうせ〳〵、……交換手で一生こうやつてるんだ。いゝわ、いつまでだつてやつてるわ。」と心で叫んで、……とむら〳〵と口惜しい、悲しい思ひが、迫つて來て、涙が湧いてくる。裾を吹きまくる樣な、電車の響に驚くと、もう電車通りを歩いて居たのだつた。……あたりは、朝らしくなつて來た。……紬の被布慎しやかな、女學生に行きあつた。……さう……昨日だつた、聲の美しい、身分ある、令嬢かとも思はれる女が、かけた時、先が御話中だつたから、「御話中でございました。どうもお氣の毒樣!!!、……つて云つた。……冷やかな笑が、包み兼ねた樣に、頰に上る。……ほんとに彼の時位、嬉しいやうな?、そりやなんとも云へない氣持、……さう〳〵丁度、九つ位のお雛樣の時、御隣へ呼ばれて、花ちやんのお代裏

樣が、私のより見おとりのした、……あの時の樣な、……心から嬉しいと思つた事はない。……むず〳〵胸をこすぐられる樣に、感じて、活々と頭をもたげると、……：同時、……ビビーと口笛が聞へる、ハッとして低向くと、又情けなくなる。チラと上目で見ると「屋」と白く染めぬいた、のれんの字、……：眞ぐ側をはいてゐらしい草ほうきの先きが見える。口笛は、此家から出たのだ。口惜しい！、此樣な小僧にまで侮辱されて、……と、毎朝の事が、何故か、けふは、格別に強く響いて、線路を横切り樣、夢中に停止つて居た、電車に飛乘つた。チン！と動き初めると、やつと、落付いて、懐中を探つて、十錢銀貨



て片道だけ買つて殘錢を貰つた時、何故電車になんか乘つたんだらう。もう跡二町とありやしないのに、……弱虫だ。……とうつむいて冷笑つた。向ひ合ひに掛けた、女學生の手の、回數劵を見ると、つい例の痛罵の念が起る。「えばつてるわ、親のすねかじつて居て」と、つぶやいた。外ははつきりと、白くなつた。けたゝましく浪花町交換局前と、連呼する聲に、思はず立ち上つたが、乘客の目が一樣に自分に集まつた樣に思つて、其儘腰を下した。……私が下りて彼の門を入つて行く時冷やかな目に見下されるのだらう、と思うと、どうしても下りられない。乘過して、今此方を見た人達の、いや、さうぢやなかつたか、と云ふ

やうな、顔を見て、笑つたら如何なに可い氣持だらう、！電車はもう、次の停留場に留つて居る。此樣な日は、休んぢまはうか知ら!!!、チラ〳〵ッと、走馬燈のやうに、母の事、妹の顔、叔母の言葉などを、思ひ出して、彈かれるやうに立つて、今動き初め樣とする電車を、眞赤になつて下りた、ふとけふは、月給が下りるかも知れない、……と、袋の中で銀貨の響くのを、聞く時の、嬉しさ喜ばしさを思うと、いそ〳〵して、乘り過した道を、引返すのである。

（評）イラ〳〵した女の情が能く出てゐる。恐らくは作者の實情實感だらう。文章も殊更ら作つた迹が無く、奔放自在と云ふべきもの。今後はもう少し客觀的の餘裕あるものを試みられたらば如何。

○敎會（地賞）

筑前　吉野久美子

今年の春、異人の學校を卒業してお歸宅になつた、お孃樣は、日曜には何時も晝間はお獨で、晩には一番年下のお春さんを連れて、一丁程先の會堂にお出掛になる。

「あれで耶蘇を拜みなさらないなら、眞實は御容貌なら御氣質なら、何處に出してもお立派なお孃樣だのに」と年老つたお安さんは時々心から云ふ。

お恰度、お春さんがお父さんの大病だつて郷里に歸つた翌晩、部屋に下つて足袋に繼を當てゝ居たら、お孃樣が入らして「米や、お氣の毒だが會堂に來ておくれ」つて仰有る。私は別に何とも思はないで、お伴した。

會堂と云ふのは、古い二階造りのうちで、可なりに廣くはあるが、床が高い上に腰掛けるようにしてあるので、どうも天井が低いような氣がして、大きい洋燈が下つてるのに突き當りはしないかと思つたが、それ程にもなかつた、

もうお說敎が初まつて、白髮の生えた背の高い人が、正面の一段高い處に立つて、然うしてだの、即ちだの能ふべくはだのと、頻に云ふて居る。

男子席の方には廿人許もあつたが、女の方にはお孃樣を加えて五人と、もう一人はオルガンの側に腰掛けて居た。

一度通りずつと見廻したが、別に知つた人もない、然し右手の一番前に腰掛けた、貧乏色の不恰好な洋服に刈り立の髮を奇麗に撫付けて、時々厭な眼付してお孃樣の方を見る横顏が、どうも見覺えがある。「誰だらう？」

と一心に考へてる時、入口の戸ががたんと開いた拍子に撫で付けた頭がクルッと振返つて、其序に又お嬢樣の方を見た。

右の眼尻から頰にかけて疵の有る……違はない…！先日村山樣にお使に、お春さんと上つた歸路に逢つた方だつたつけ。ギロリと疑深さうな眼付した、機嫌買らしいキヨト／＼した擧動の卑しい、私は鄕里でよく見受けた鍼針の先生によく似た人だとツク／＼思ふた。

「やあ、どちらへ？」

「一寸御親類にお使に……あなたは？」

「參謀本部に出て居ます兄が、○○師團に訪問使として次の列車で此處を通るつて云つて參りましたから……何卒、お嬢さんによろしく」妙に氣取つた風で行き過ると、お春さんがクッ／＼笑ひ出す。

「誰なの？妙に厭らしい男ね」

「敎會に來る日曜學校の先生よ、あんな風してヽね」あれがお嬢樣につけてるのさ、お嬢樣は、あんな溫和しいお仁だから何ともお云ひにはならないけど、余程厭らしがつて入らつしやる樣よ」とお春さんが云つた……あの人だもの。

左側の壁に掛けてある繪も見てしまい、壇の上の机のやうなものヽ正面の窓に彫りつけてあるばらの花も莟も葉も丁寧に、數へつくした頃説敎がすんだ。

私は急いで下りてお嬢樣の下駄を揃へた。

お嬢樣は、隣席の奥さん風の人と何か一心に話して入らつしやる。例の男はと見るともう外套をつけて居る……私が急いで下りたから直に返るのだと思つてだらう……小い包を抱えて手袋を握つて、婦人席の方に來て、一言三言何か云ふと、皆、オホ……と笑つた。すると左も滿足したらしい樣子で、お嬢樣の處に來て何とか云つた。お嬢樣は澄して一寸頭を下げたまゝ、話を續けて入らつしやるので、ポカンと手持無沙汰らしく例の目付で、お嬢樣を見て居る。

「佐藤さん／＼」と向方から説敎した先生が呼んだ。

「先日の慈善會の切符は、あなた何枚でしたつけね」

「あれはね」と何かクド／＼云ひながら、向方に行つた。

お嬢樣の眼がピカリ其後影を追ふ。「それぢや、明日でも古着なりお屆け致しますから、御序に遣つて下さい、可哀想ですわ」と少し聲高く云つて「失禮」とお下りになる。出際に好奇心に、一寸振り返つたら、もう帽子片手に暇乞して居た。お嬢樣はさつさと、大急ぎに

急いで入らつしやる。
御門近くなつた時、靴音は余程近くなつたが、到々追付はしなかつた。私は後に殘つて御門を閉めてると足音がパッタリ止つた。

「失禮ですがこれは私が、以前大變に迫害を受けた地方の教報てす、お嬢さんにお上げなすつて……

「どうも有難うムいます、お届け致しましよう、とは云つたが能くまあ、耻しくもなくと可笑しさはこみ上げて來る。

其次の日曜には見えなかつた――病氣とかて――お嬢様はゆつくり先生方とお話してからお歸りになつた。

二月許りすると、お嬢様は以前から決定つてた通り遠縁のお方と御婚禮が有つて、東京にお出になつた。

ドサクサと例の男の事なんか思ひ出しもせずに居たが、昨日お春さんが表庭を掃いてたら、病氣上りらしく瘠せ衰へた例の男、御門の方を振り返り見て通つた相だ。


(天)工夫部屋　三重　加藤つたへ

「未だ御結婚の事は知らないんだよ。馬の足に蚊の足及びが有るものかね」とお森さんは笑つて居る。

私は今でも矢張り、例の男は郷里で見た、あの汚い鍼針の先生の兄弟か何かのように思はれて、仕方がない。

（評）觀察が精細で活々としてゐる。而して一人稱の「私」なる者が作らず飾らず、渾然と出てゐる。斯ういふ作は強ひて作らうとして作られたものでは無い。敬服。

○夜語り（入賞）

周防國都濃郡須々方村　横山正子

嵐の夜はいつもより早く更けた。

「もし、もし……」といつて、ホト〳〵門の戸を叩く。

嵐は轟々と木々の梢を吹いて、落葉はもはや悉く揺ひ落された時節であるから、たゞから〳〵と折々枝と枝と擦れ合うて、折れて地上に落ちる音が聞えた。

「おかねや、誰か來たやうだよ。」

「お婆さん斯様大嵐の日に誰が來ませう。」

婆さんは「さうかね」と云つて、また針仕事にかゝつた。

「もし、もし、……」と戸を叩く音。

娘は始めて眼を見張つた。

「ほんに、誰か戸を叩くこと。」

婆さんは手燭を以て、暗い臺所の方へ行く。娘は後についた。婆さんは痩せた骨ばかりの手に力を入れて、雨戸を引きにかゝると、どつと吹き込んだ雪風に燈火は掻き消された、ひよろ〳〵と倒れかゝつた婆さんは危く、娘の腕に支られて、

「あゝ、ひどい嵐だよ。」

「まあ、お婆さん妾におつかまんなさい。」

娘は婆さんを助けながら、外の暗の中を覗いた――眸をぢつて見据ゑて、嵐と雪との闘に騒擾しい廣野の裡にも夜の冷かな歩みが自から沈默の境に聞き取られた。

「何も見えないわ。」

娘は眸を見据ゑたまゝ、身動きもしなかつた。

「あれ、誰か立つてゐるよ。」と婆さんは、嵐に白髪を吹き飛しながら前へ進み出てる。

「妾には見えませんの。」

「あれ！か。」と婆さんは指さした。

暗の裡に小さな黒い影がだん〳〵と遠ざかつて廣野の方へ消えてしまふ。

「オーイ、旅のお方。」と婆さんは呼んだが、聞えない
ひとしきり嵐は靜つた、またしと〳〵と降る霙まじりの氷雨が地上に落る音！

「今頃何人てせうね、――斯様に遅くなつてから。」

あゝ忘れました。今日は爺さんの御冥日てなかつたかい？」

（評）一寸メーテルリンクと云つたやうな神秘的の作で珍しい。描寫も簡潔で斯ういふ風の作に適してゐる。

【秀逸】

○假感家

播磨　内藤松園

「ほゝゝ、ちよいと又よ」

「厭や、氣取つて」

「一躰毎日何をあー茫然見てるんてせう」

「定まつてるわ……例の文學士、ねー正木様、」

「文學士？何の事なのそれー」

「御存じないの？、まあ、彼の方の許嫁の文學士が戰死なすつたの、それて憂鬱病を起してるのよ」

「ふゝゝ、又假感じやないの」

三年前に北寮の二階てふざけたこんな冷評を思ひ出した、春雨のしと〳〵と降る窓際に立つて物思はしげに凝つと池の面を見入つた優姿。

友人間には菫の君々々と敬して遠ざけられて居た。今の笑聲は確かに其の人、私はハッと思つて立止つたのてした、

明石は相生町を北へとそれた淋しい片側町の但ある家の隙もる灯影を瞬きもせずみつめて凝つと耳を澄ましたのてした、

一躰此の町は軍人や官吏が多いので夜などは早くから寢に着くのが常が夏と雖もこんな十一時過ぎに人聲などむしろ不思議な位なのです、しかも其の笑聲が私の友人に似てゐるのですもの驚いたのも無理はありません、暫くすると、

「ほゝゝ、思つて見ると夢の様ねー」と甘へた様な女の聲、私はいよ〳〵三田様だとうなづいたのてした。後は寂々と時々男の濁聲が交つてきこへる、と遠くから終列車の音が轟と響いて來た、私は急いて踏み切を越えました、

厭やな氣取り家、一寸文章が上手て小説など何んなのても讀まないのは殆どない位、そして自ら小説の主人公氣取つて髪の結ひ方などても雜誌の口繪を見ると直ぐ其の通りに結び替える、矢がすりの被布などを着て時色のハンカチを一寸口元にあてゝ「何に？」と小頸

を傾けて見入られると、誰れても顏をそむけずには居られない、一躰が甘へた調子て、或る時は妙に燥やいて高笑をするかと思へば又、欝ぎ切つて夕方窓に凭れて凝つとあらぬ方を眺めては、ほろりと意味の解らぬ涙を零したりする、左うかと思ふと男生の寫眞を机の上に立て掛けて來る人毎に自慢相に見せたりする其の頃百合子と言ふ名前ていつも山陽新聞を寄來して居たのが其れだと言ふ人も有つた、日露戰爭の時分婚約の文學士が戰死したといふので其れは級中ヶ騷せた、私はこれから淋しい〳〵孤獨の生涯を送るんだと言つて殆ど御飯も喉を通らない位悲しむで、蒼い〳〵顏をして頸に眞綿を卷いて厭やな咳をし乍ら敎場に出て居た。

心配相に胸に手を當てゝは私肺病じや無いかしら、と見る人毎に言つて淋しい笑をもらして居たが誰れ言ふとなく肺病氣取つて居る事になつてしまつた、實際小說の主人公は多くは肺病て而かも不遇の戀に泣く、彼の人も其んな戀を戀して一時假感を設けて悲哀の快感を覺えて居たのかも知れない。

許嫁の文學士も孤獨の生涯も、肺病も皆噓だつたか三月程經つとけろりと直つてしまつて、名古屋の醫學生とかと熱烈な文通を初めかけたのを初めとして諸方から疑はしい封筒が來て居たが、卒業後間もなく早稻田の文學士と不得要領な結婚をしたときいたが、去年の同窓會の時にはもう獨身て須磨に居ると言つて居た。

翌日の夕方買物が有つて町へ出て居たり、風呂行き姿の三田樣が同じくゆかた着の背の高い男にひたと寄り添つて樂し相に話しながら橫町の角を曲つたのを見ましたが聞けば此の男は電燈會社の社員て、近頃神戸から轉任して來た男だと言ふ事てした。

(評)小說の女主人公が氣取つて、假感に活きようとする女性、見付けどころは面白い。文章も自在なものである。唯惜むらくは全篇說明的て、具象されて居らぬ。

○友

丹後　中澤いし子

春も半ば頃のある日曜日の夕、千代子は久しぶりに澄江の家を訪れた、折よく在宅の澄江と鐵道線路に沿ふて小逕の生ひ繁つた塘を、南北にいつたり來たりして語少なに學校の事、雜誌の事など話しあつてゐたが、何だか澄江は千代子の面色をうかゞつては、いひ出しかねたことがあるらしう、がつくりと俛首てしまふ。千代子が折々問ひかけた事にも、ぱつの合はぬ答ばかりしては、すぐふかく考へこんてしまふ。

「澄江さんどうなすつたの、どつか御病氣？」と千代子がのぞき込んて、心配さうにいふ。

「いゝえ、私そんなに、わるくはないのよ、たゞ少し頭痛がするだけ、あなたそんなに私の事が氣にかゝつて」

「いやな人、お友達てすもの知れきつたことよ。あなた御病氣てなければ、何か思つてゐらつしやることがあるのでせう、きかせて下さいな、ねえどんなことと？私て出來ることならお手傳しませう、あなた一體何をそんなに考へてゐらつしやるのよ、」

道がやゝ曲つてもう此邊は笹が生へて居ない。ビロードのやうな軟かい若草の、土一面を覆ひかくした所々に、周圍が一尺ともない一重櫻の木が、二本と三本とかたまつて、八方に枝をひろげてゐる。その一等太い幹にもたれて、千代子はじつと友の顔をみつめた時、そのすきとほつた、白い顔が、涙に洗はれて居るやうなのを見て驚ろいた。

澄江は草の上に力のぬけたやうに坐る、千代子もすわる……。

澄江は幾度か友を見てためらつて、やうやく、

図



（地）あらひもの

水戸市 北川うめ子

「千代子さん怒つちやいやよ、私ねあの……家の都合で學校をよすことにきまつて、實はおとゝひの晩、先生のお家へ退校屆を持つてゆきましたの、なぜやめるつていろ／＼わけをきかれたけれども、私どうしても言はなかつたわ、」

「それから昨日も今朝も町へお使にゆく度に、あなたに逢つてお話しやうと思つてはゐても、其度毎に氣おくれがして……、」

澄江は千代子が何といふかと言葉をやめた。

千代子は涙にうるんだ大きな瞳をまたゝいて自分の顔を見て居る。此方は俄に目を落して唇をかむ。

あゝ私は學校をやめて、明後日からは交換局へ出ねばならぬ、學校へゆくと同じ服裝で、毎日通學になれた道を通つてゆかねばならぬ。千代子さんはよく交換手の批評をなすつたつけ、まんざらいゝものとは思つて居なさるまい、まして外のお友達が何といつて囁き合ふてあらう……。

「千代子さん、私それから交換局へ出ることになつてよ、お友達がわる口云つたつていゝ、今まで中よくして居た人が笑つたつて……。親のためだは、私は威張つて働くのよ。あなた交換手はおきらひ？けれども私ばかりは以前のやうに交際つて下さいよ。」

とこれまで堪えてゐた溜涙を一時に落して、聲を立てて泣いた。

千代子は澄江の性質を知りぬいて居る。しつかりした心、しつかりした頭腦、學科の出來榮も申分なくよかつたに拘らず、位がちがふ！といふやうに一般の生徒からちやほやされなんだ。だん／＼氣性は烈しくなつて、そして成績は愈々進んだ。またその上にこんな事ます／＼おひがみだらう。情の深い懷しい人だのに。

千代子は涙を拭いて愛らしい瞳を輝やかして、

「あなたと私はいつまでもお友達よ、たとひ他人がどういつたつて、どこまでも親友よ。」

「ほんとう?! 千代子さん!!」と澄江は友の肩に身を投げかけて泣いた、千代子もないた。

町の灯がぬれ絹に紅い花をゑがいたやうに、霞の中にたゞよふて居る。それが何だか妙になつかしくて、二人はじつと見つめた。蛙のころ／＼うたふのにも、耳をかたむけた。櫻の花が追風に二三瓣散らされて、川の方へ舞ひ乍ら落ちていつた時、二人は手をひき合つて、長い堤を南に、すきな埴生の宿をうたひながら歸つていつた。

つばり止さうかしらとは思つたが、ふと、もしや彼の人が來てるのかも知れないと思つたら知らず知らず、足は玄關へ運ばれた。

（評）親の爲めに醫學して、自活の道を求める雄々しい女性の哀れな心持が能く出てゐる。文の習熟、會話の生動確に才筆と認める。以後は材料に今少し意味あるものを選ばれたし。

（人）あばらや　須津とよ子



○お恭といふ女

山形　くしは子

日直とて日が暮れてから學校を出たお恭は、お靜の家の前迄來て、よさうかと躊躇つた、が、こゝ迄來たものと思ひ返して門を入つた、とお靜の溢れるやうな笑聲が快活な男の聲と交つてドット突いて來る、お恭は二足三足逡巡した、そして何となく嫉ましいやうな氣がしたので、や

内の方からは絶えず賑やかな笑聲が漏れて來る、御免なさいつていふと下女が出て來た、奥樣はつてきくと御在宅で御座いますとて奥へ入つた、と思ふとお靜が其處に現はれた、お恭はお靜が束髪を大人しやかな丸髷に替へたのを美いことゝ目につけた、お靜は『まあ、よくいらつして下すつたわねえ』と眞から嬉しさうにいふ、『御客樣？』つて問ふと『え、あの、相馬さんよ』と莞爾する、お恭はさうだつたと思つた、そして其人を見たいやうにも思つた、

導びかれる儘にお靜の後について客間の前の縁を過ぎやうとすると、源藏が『田代さん、素通り？』と例の元氣の好い言葉『イ、エ……』と答ふる間にお靜は其處の障子を明けた、と花やかな電氣の光がパット射す、お恭は少しく身を退いた、源藏——此の家の主人て當年卅三、温和な然かもどことなく締りのある男で某會社の重役を勤めて居る——は長火鉢にゆつたりと靠れ、『田代さん、素通りとはひどいですね』と笑ひながらいふ、お恭は答へやうとしたが、飛白の綿入に黒斜子の羽織を着て、巻煙草を薫らしてる相馬の姿をチラと見ると、もう喉がつまつたやうになつて物もいへず唯挨拶ばかりをした、すると相馬も挨拶をしたので周章てゝ應じた、お靜に『あなたこゝにしませうか』つて聞かれて『むかふの方が……』と小さい聲で答へて、奥の六疊——お靜が裁縫等をする部屋——に入つた、炬燵がかけてある、婦人雜誌が二三冊のつて居る、お靜は仕かけの縫物を隅の方へ片付け、座蒲團を敷き乍ら『あなた炬燵の方がいゝでせう、さアこゝへ……、すみませんが私一寸座敷へ行つて參りますから雜誌でも見てらして下さいな』と輕く會釋して出て行つた、お恭は其の後姿を見送つて何となく嘆息した、そして、教員なんかつまらないわとつぶやいた、

客間の方で相馬の笑聲がする、とお恭はいつか思を相馬に走らした、相馬さんは立派な人だつたことと思ふと妙にたのもしくも考へられた、其れと共に、あゝ不可々々、吉泉——お恭と同じ學校に務めて居る男教員——さんに對してすまない、あゝ自分は吉泉さんを措いては決して……、吉泉さんと結婚出來ぬ間はいつ迄も獨身で居るんだといつものやうに考へ直した、そして吉泉と自分との周圍に、何か混亂した事情が持ち上つた時、熱烈、清い戀に泣くべき自分を豫想して如何にも美しいと感じた、そして今も泣いて見たいやうな氣になつた、

お恭は雑誌を披いて見た、貴婦人、令嬢、花嫁花婿等と題した寫眞が澤山出て居る、お恭はなぜこんなに美くしいんだらうと、つく〲眺め口惜しいと思つた、終には其の寫眞を滅茶苦茶に掻きさいてやらうかとも思つた、不平で〲堪らなくなつた時、何か自分の弱所を見出さうと苛つた、フイと耳の側で戀がといふやうな氣がする、さうだとは思つたが、ともすると沈んだ泣き出しさうな顔をする、皺苦茶の袴、汚れたシャツ等を着けて來る吉泉が、例へば生存競爭に敗北した劣等の人間のやうに考へられた、お恭はゾットして炬燵に伏した、足音がするので頭をあげて無意識に雜誌の頁を繰つてる、頓てお静は入つて來た『まあ失禮しましたね』とお恭の傍に座つた、お恭は勉めて愉快をよそほひ『貴女髷がよくうつりますよ』と賞めた、お静は『どうですか』と微笑んだ、お恭は又寫眞を見て居る、お静は洋燈の燄を凝視てゐたが何を思つたか莞爾した、『なんて美麗なんてせう』とお恭が投出すやうに云ふと『どれ?』つてお静は覗いて『ほんとにね、でも華族やなんかはどんなによくもなれるわ、衣裳はよし、其れに化粧が……ね』と無造作に云ふ、お恭は木綿の衣服着て、髪はぐる〲巻にして毎日通うて月給十三圓――よし世の成功者となつても吉泉の十八圓の月給を思へば心細いと思ひつめた、お静は思ひ出したやうに『あなたいつ迄も獨身で居る積り』お恭はつまつたやうに『さういふ譯でもないけれど……』『ぢやいつになれば結婚なさるの』『いつッて』と又口ごもる、『結婚なさいな』とお静は口を切つて『いつかも云ひましたが相馬さんはそりや堅固した方よ、未だ三十ですけどもう四十圓も取つてますもの、あなたいや?』お恭は默つて居る、お静は幾度か其の幸福なるべきを説いた、お恭は痛く迷うた、て返事せずにお静の家を出た、二月始めの絃月は冴えきつた光を下界に投げて居る、道は凍つてゝ往來の人の履物の音が囂しい、

お恭は足を引きずるやうに歩きながら、どうしやうと幾度か繰り返した、町の四辻へ來るとドヤ〲と四五人の書生體の群が行き過ぎた、と思ふと其内の一人が『イヨウ、別嬪の夜歩き』と哦鳴る、と又一人『ホヽー、御同伴を願ひたいもので』とつけ加へる、此時お恭はふと私だつて女だ、ちんと飾つて世の男に見せびらかしてやらう、何人の春は二度こないものと蘇生したやうに元氣づいて歩き出した。

其後お恭は別人のやうになつた、そして繁くお靜の家へ行つたが二月許り立つた日相馬との婚約はなつた、結婚後お恭はお靜に相馬の縁談に直ちに應じなかつた理由を語り「ほんとに馬鹿てしたわねえ」と嘲つた。

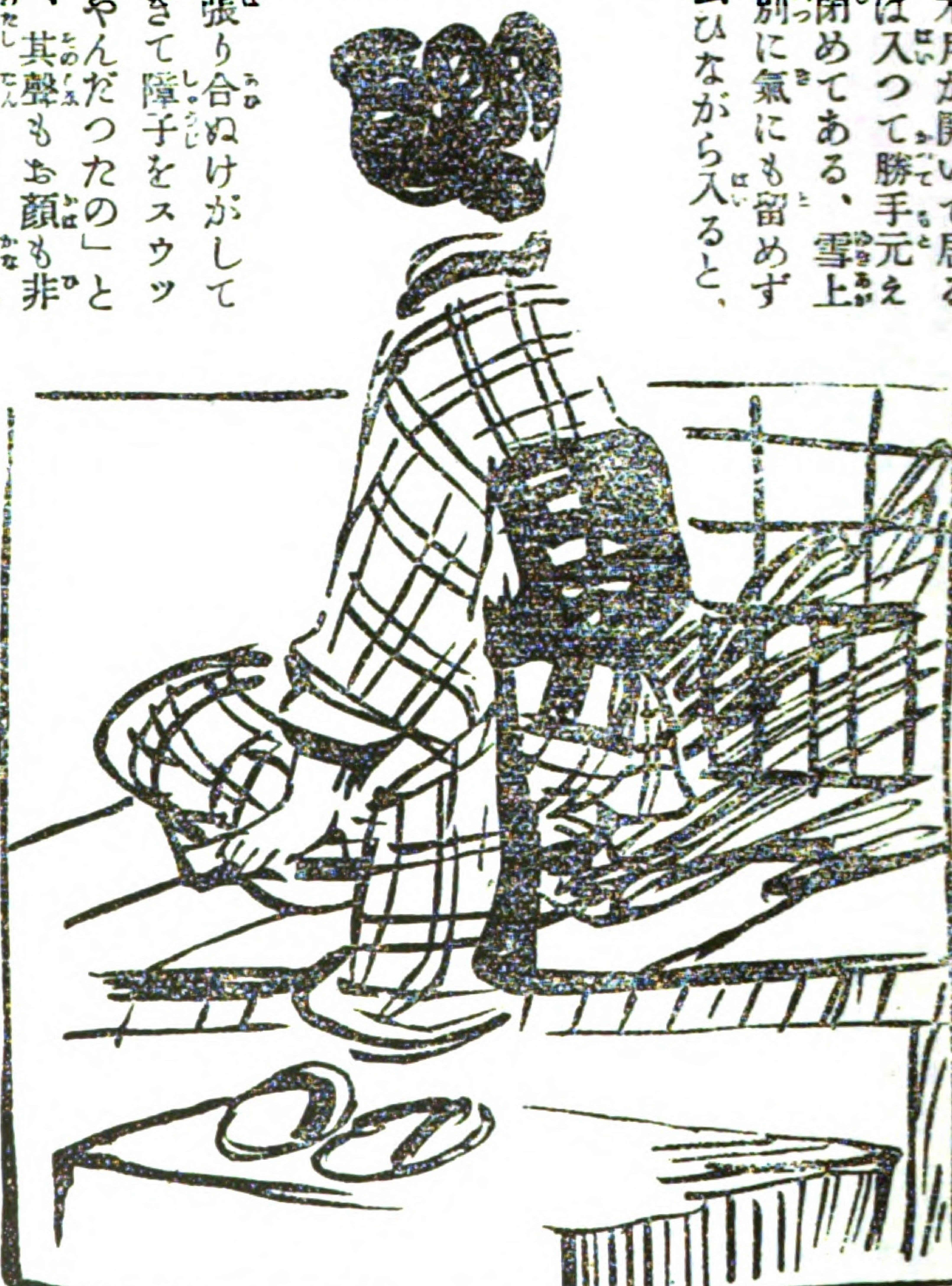
（評）虛榮心の滿足を得ん爲めに、理性の判斷と闘ふ女の心情を、力のある整つた筆で巧みに描いてある。此後力を以て今少し新しい材を捉へたらばと思ふ。

○年の暮

常陸　木村那賀子

「例の如に永く居るのてはありませんよ」と母よりあんころ餅の重詰を渡されて家を出た、昨夜から今朝方迄降り續いて雪は六七寸も積つた、けれども大通りは奇麗に片つけられて、屋根からは、ボタリ〱と雫が落ちる、暮の押つまつた廿六日と云ふので、商家ては何の家も忙しげに見える、淸ちやんの家も定めし忙しいだらうと思ふ、淸ちやんの家は洋物屋て、御兩親に兄樣が二人と妹が一人、其れに店の者が三人て都合九人の家内なので羨しい程賑かい、けれども淸ちやんは決して賑かなのを喜ばない樣子、何日ても會ふ度に「私益々嫌やになつて了ふは、せめて五人位の家内て暮して見たいわ」なんて仰言るから「あら彼麽事仰言るの、私の家なんかたつた四人計りの家内て、淋しくて〱、何日でもお母さんと、貴女のお家を羨しいつて話すのよ」て私が云ふと「其りあ賑かいのはいゝけど暮しが骨が折れてね、其れにお母さんがあの通りの輕卒者だからね、外えは爲なくても好い義理等して、お金を使ふの、其れて家の中はお恥しい程……」なんて、這麽風だから淸ちやんの堅いと云つたら、十八の娘盛りだけれど、心持は六七十にもなるお老母さんの如に、髮飾り等と云つたら貰つてもやらない、隨分女中の一人位ひ使つても好い家だけれど、淸ちやん一人て家事一切やつて居る、何日行つても筒袖の袢天着て働いて居る、其れだから家のお母さんなぞは非常に信じて居て、淸ちやん〱と云つて、何所に行くにも淸ちやんが一所てなければやらない、それに時々「お靜さん（淸ちやんのお母さん）は幸福だ、淸ちやんが好く出來て」と口癖の如に仰言る、其都度私は一種の誇りを感じる、其れは淸ちやんのお友達と云ふのは私一人、姉妹も及ばぬ程に仲がいゝ、お互ひに多忙の身なので、お祭り日位ひに訪づれ合ふのが關の山、間に用事のついでに立寄つて、一所になると「這麽に長居して叱られて了ふわ」て云ひながら一時間づゝも話して了ふ、今日も行くと必とあの慈悲深い顏に、滿面笑を

たゝえて、何日もの快濶な調子で「欣ちやん」と駈け出して來て下さるだらう、と思ふともう堪らなく嬉しくつて。恰ど側の木戸が開いて居るので、狹い口路をば入つて勝手元え行くと、戸が二枚閉めてある、雪上りだから、と私は別に氣にも留めず「ご御免下さい」と云ひながら入ると、何日もなら「あら居被い」と直ぐ出迎へて呉れる淸ちやんが、今日に限つて何うしたのかなか／＼出て來ない、私は何だか當がはづれた如に、張り合ぬけがして立つて居ると稍過ぎて障子をスウッと開け「あら欣ちやんだつたの」とニッコリなすつた、其聲もお顏も非常に沈んで居た、私は何となく悲しい感じが胸に迫つて來た、けれど何氣ない風で「不出來なのですが」と云つて母から渡されたお重詰を出す



日當ぼつこ　青森　てる子

と「まあ大變早いのね、今日なんてすか家でも搗かなくつては成ら無いが、眞當に大仕事ね」と老年泌た事を云ひ／＼お皿え移す、私がいゝと云ふのも訊かないで「ても入れなくつては氣がすまないから」と二枚のつけ木をお重の中え入れて「私眞當におかちん搗が思はれて」と仰有るから「私ても好ければお手傳ひに來てよ」て戲談半分に云ふと「あら實際なの來て下さるなち是非お賴したいわ、お母さんが居ないんてすから」私は驚いて「おや小母さんお留守なの」て訊く

と、急に伏し目になつて「實はね今日十一時頃、水戸の伯父さんが死亡したつて、電報が參りましたのでね、行きましたの」と云つて長い〳〵嘆息をした、此場合私の如な口不調法な者には、何と云ふ言葉も出ないて只「おやまあ飛だ事ね、嘸小母さんがお力落しでしやう」て云ふと「其りあ力は落したでしよが、最早取る年ですからね、死むだ者より此方が愁らいわ、此事に……」と云つて直ぐ語をつぎ「這麼お金いりがあると、今年も又着物買つて頂く事出來ませんわ、おほゝゝゝ」とわざとらしう淋しく笑つた、あゝそう云へば何日からか、十八にもなつて未だ紋付き一重ねもないから、今年こそはと云ふのを訊いて居た、て「お召物なんか又別てすもの、買つてお貰ひなさいな」て云ふと「だつて財政が許しませんもの駄目よ」と仰言つた時にはもう涙が目の中に一ぱいになつて……。私も思はずはら〳〵とした、ても濟ちやんは直ぐ氣をかえて、急に元氣よく初めて氣が付いた如に「おやもう暗くなりそうね、私自分勝手な事ばかり話して、おほ……ぢあ眞當に明後日はお手傳ひに來て下さいよ」と云つて私を木戸迄送り出して下さつた。

五六間位い歩るいてから、些とふり返つて見ると、濟ちやんは、薄暗い木戸口に身を寄せ兩手を帶にはさんて、愁然と立つて此方を眺めて居る。

私は歸る道すがら思つた、濟ちやん家の小母さんは彼麼氣風だから、今度の不幸になんか必と、造花が一對其れに香料の十圓位ひつくだらう、行き歸りの汽車賃や何かでは、何麼に少なくても二十圓は要つて了ふ、此きわ二十圓なんて云ふ金は容易てない、況して商家等ては猶更の事、濟ちやんが、よまいごとするのも無理はない、いくら彼麼風な濟ちやんだつて、美しい着物は欲しいんだ、矢張り女だもの……。

(評) 派手好きの母の犠牲になつて、見えも實て恋も忘れて一家の切り盛りをする年頃の女。而も矢張り美しい着物も欲しい、帶も欲しいと云ふ其所に眞情が見える。事件が生活に關してゐるだけ人を動かす。

て、彼れは暫く疑つて見たが、別に壯太と深い關係があるのでもないから、間もなく忘れてしまい、聲を出して靖獻遺言の復習した。折々木の倒れる音、木樵の唄が聞える。復習が終つた頃、その唄も止み山は靜になり、春の日も山へ入つた。狹い谷間だから、日の暮れるのが早い、が容易に暗くはならぬ。淡い長閑な夕暮が長く續く。今湖は閑に腰掛けて、朧ろに霞んだ淺公の藁屋を眺めてゐると、宿の娘が「向ひに風呂が湧いたからお入りなさい」と知らせて來たので、何氣なく「壯太さんは播州へ歸るさうですれ、どうしたのか知らん」と聞くと、「私、存じません」と、卒氣ない返事をして、何時もの愛嬌を見せて呉れなかつた。

——(白鳥、村塾より)——

新體詩

横瀬夜雨選



○みてぐら（天賞）

信濃　太田喜志子

天そゝる下界のみてぐら。
山は、萬有の始終を
大いなる胸につゝみて、
創生しまゝに地に立てど
海戀のわが胸和す大河
さゝれ石さざむぬときにも、
あふぎては泣くあこがれ、心――。
あな戀し、
靜なる海原の際涯生るゝ曙光と、
沈む光とにうちのぞみ
心たらひのゆるぎ、なき不朽のみ靈。
かゞやかの天津日王座の大前に
何をか祈り
何をか啓示す

あゝ下界ゆ擎げしみてぐら。
生れて弱きさがゆゑに、
心靈のほろび早ければ
永久とねがへる生命だに――身は―
―、人の生の榮華に笑た强ひられて
わづらひ多く生むより、
目もどち、胸も覆ひて
はせのぼらむ、彼の山巓に。
今、燦たるは、
西の大海、金波の流れ、
射かへるか……身ぞふるふ
あゝいかめしき下界のみてぐら。

『大つごもり』と同じ型に入つてゐるのでさう珍重すべき詠ぢやないが、山ばかりの國に生れて海を戀ふるのがいぢらしく想はれるせいか「太田きし子さんは大好きだ」とさゝやき告ぐるものが、いくらもある。まだ〳〵獨り歩きは危いけれど、自分の努力の

○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

結果がやうやく見えて來たのではあるまいか。醉茗先生の前に少しは高くされる鼻をどうぞ凹ませないで下さい。

如月の丘に立ちて（人賞）

丹波　糸井　はつ

如月の晴れたる空や――
うら寒むき、風そよたちて
靜かなる眞晝のをかに、
哀愁の絃のひとすぢ、
かすかにも、消ゆかになげく。

如月の晴たる丘よ。
立ちがれの榛の木梢に、
何しらず――生のほのめき。
たゆらにも、日は照り透り、
安らかに、白きくもらく、

かなたいま、眼路のひろみに
鳥の影ふとしも消えて、
れきろくと車のひゞき――
小いさなる、胸にひゞけど、
さはれその、響はとほし。

白き雲、夢かにねむる
靜やけき、眞晝の丘に
ひよ鳥の甘音を慕ひ、
すゞろかに歩みつ我れは、
幾たびか、胸をひろげぬ。

ひよつとすると冬が夏にかへりさうで危くてならない、白き雲の靜に眠るといふが二月の景であらうか、ひゆう／＼風の吹きとほす丘の上を胸をわざ／＼おし明けて立つてさまようなんて、女でも丹波の方は强い。

【秀逸】

○尼に

越後　横山　文枝

地に曳く袖の肩さりて
丈は姉にもまさりけり、
結ひし髪のなれねばや、
重しと顔を傾むけぬ、
頰にまつはれる
びんの毛を形ばかりにかき上げて、
えもん作りぬ、ふところは
三重、四重、五重包めども、つらき
はひとり母ならむ、つひにはと染し
晴衣の色はかはらて運命の
吾子は尼に‥‥。

「お才あれ見よ越後の國の雁の來たにとだまされて」お才は越後蒲原の人、君と同郷なので、たま／＼其父と語りて君の姉の富豪〇〇家に嫁いたとを聞いた、詩を學ぶ名家の娘の相率ゐて本誌に來るを見よ。

○君

麹町　はぎ

おん瞳、眞向に我を射れども
まぶしくもなし、胸もさわがず
對座ひつゝ　語り更かして
沈默におちし　現今かな。
きのふてゝ今日はかしてと
愛てらるゝや　淡きあだ花
我もその、ひとつと知りて
ねたくもなし、うれしくもあらず。
ひたぶるの花、めでませと
相應へる名、すゝめまつれば
「それよりも、其文金を
結ひ更へん、日ぞ待たるゝ」と
一語毎に、なぞとも解りて
さぐり／＼、摘みあひにし
それは、「去年」といふ夢
安けしや、現在は。

あはれなべし、銀鞍白馬の公子、流星光底長蛇を逸す。

○赤き夢

茨城　若杉　鳥子

ふと覺めし刹那の驚き
鋭き瞳に胸を射られて
思はずも手をふりときぬ
あゝ世に染まぬ赤き夢
ヰナスの胸に觸るるごと
人の腕に縋りつゝ
靜に道を踏みて來し
あどなき夢の戀しきかな

花散る里に人と爲りて
朱の袂を弄れど
起ちて舞ひ舞はず
居て唄はず
すねて行く世の長ければ
矢と射貫かれし侮りの
傷は心にとゞまりて
あへぎ蹌めく耳元に
亂聲とゞろき人は押す
ああ大盃を傾けつくし
醉ひて死なばや醉ひ死なば
わが肉も霊も
自由の翼を空に打ちて
聖母の許にかけ昇るべき

顔にさはつてたまらないのでやつたといふ様子がある。間違つてますか。

理屈をいつてゐるのだか、感情をうたつてゐるのだか殆わからぬ。「きかんぼうの鳥ちやん」と言はれるだけあつて、はたの人間が



鏡　青稼　稲垣かほる

○形骸

神田　田中英子

荒原は人氣もなくて
あゝ月影のにごりなく
地にひくは——
衣の行き長きに過ぐる我肩よ
掛けよとて人に貰ひしひがの子も色あせて——
少女の春を髪も結ばで世にすぬる——
かゝる夜なりき夢見心地の失せざりし
胸の情はやはらかう
紅の春の夢も
君を招きし荒海の音に、はっと、さめては風荒む荒原に
——残しつる一つの形骸
魂は地に入りて
來ん春の思にもゆるみどり葉の葉脈

とぞめぐる。
あゝかくて形骸はこゝに朽ちなば

拙し、よわし

○雜木山

岡山　臼井　幸子

沈默の雜木山、ひやゝかに
日は沈む
朽ばみし黃なる葉のたえず散り行く
かゝるとき、人の死ぬらし
サラサラと、木と木のひゞき
あゝ死滅
天地の無窮の下に
人と言ふ弱きもの我とわが影たゞ一
つそてはかと
流浪の、疲れ人
あゝさびし不安の靑める星は
ほのくらき空に吐息して
うなだれしわれを照らしぬ
朽ばみし黃なる葉は、絕ず散り來て

「朽ばみ」ふしぎなり、「ばむ」は「ほのめく」也、「黃ばむ」「紫色ばむ」とこそ言へ。詩はされど巧みなり。

○我眼

丹波　鹽見　若子

我眼銳かに射拔けかし。
君が胸柔かう見ゆるも固く、
美はしと思ひしも仇の、
其胸に秘めし魔の影、
蟲心毒蛇の眸豚の血を、
發かましかくてわが、
足らひ心にからくと、
君が煩惱の其眸と紫ばみし、
唇をひやゝかに嘲笑はまし。
嘲笑ひ我眸遠く中空の、
つめたき星に懸れかし。
永劫に君が眼を痛むべく。

たとへば杯中に浮沈する氷片の冴ゆるが如しをろちの眸をあばくとは第一どうするのだ豚の血などはれかすをは愚です。

○冷白

越中　內記白百合

あひ見てはことのはもなく、
うなだれてものゝたまはぬ、
麗はしのきみを離して、
なやましのはるの灯に居ぬ。

ふさ〳〵の髮のすい影、
まふしげの和頰のほてり、
露やどすくろき瞳の、
うつとりと夢みるけはひ。

八口の紅きを愛てし、
十六の襟はさすがに、
あらはにもかたりしきみの、
なにゆゑのためらふすがた。

たかぶりの胸をおさへて、
そとみればひとみそらして、
みだれ髮かき上げつゝも、
ひやゝかに背ひたまひぬ。

毛は黑かりき有映の、ともしたる對ひ居に、つゝましかりし物ごしの、夢のようにも見えながら……（廿八宿）

○夜半

早稻田　忘れな草

南小窓の小机の

敷布も紅の唐模樣
右肱を倚せて目を伏せて
胸の琴線の奏て音を
更け行く夜半に我は聞く
少女の胸の我なれど
華美の調は更になく
亂れもせねばされぱとて
ふるひも止まぬ奇しの音
例はば花なき冥冬野を
縫うて流るゝ溪川の
咽ぶ其音を聞くが如
胸にひゞきは寂しらに――
切めてと抱くうつしえを
君よと呼びて我は目とぢぬ。

美人、わづらひ多し。

○夢

靜岡　コスモス

雲か花か花かくもか
梢はぼうと霞んで
無象の門は私の前にひらかれた
そこには七才の小女が立つて居る
人を引付ける樣な瞳
にほやかなまゆ
ばら色のほゝに白い衣きて
花輪を首にかけて――
私はかけよつて思ふ樣其ほゝを吸ふ
としたが躰が動かない、
小女は相かわらず笑つて居る
そして一足ごとに遠ざかつてゆく
私はたまらなくなつて一生懸命身を
もがいたどうしても追つ付けない小
女はとう〳〵花の中にかくれてしま
つた
そして顔だけ出して何やら暗示ても
する樣な目付きした
私はこう悟つた
此子は先の世に於て吾子になるので
あると

美しき夢、やさしき夢。れがはくば、先の世といはず君やがて人に嫁がば……

指名課題

○顏

入代　やゑ

双びなく崇高めたりし母に依りて
人生を覺知りそめし日にてありき
豆達磨弄びて飽きて
み膝に縋りては仰ぎ視たりし其面
奇し色に瞳揺ろうかゞひけり
片頰照る白光の熱
朝日浴ぶともかく輝かじ
幸ある光滿ち滿ちて、美しき希望添
ひつる
血のほてる若き頰を摺らむとせした
まゆらに
頸に搦めし手も顫ふまで訝る眼もに
再びを見詰めぬ
暗き矛盾の姿なる哉
千仭の斷崖
嗟嘆搖るゝ冷たき浪の
吐息もあらなく凄き沈默
星と輝る瞳も青く沈みて、
ああ、銀の一線中央をくぎりて
そは光明の影なるもの
世を厭ひ初めし小女ゆゑ

胸に顔埋め怖れ泣きにし
其面よ深く刻みて、記臆はいと辛かり
今宵安眠持ち得て席すべり
廊下に獨り立てば
手にせる雪洞の火頻搖るゝ
夜半の風片頰刺して
光の末の瞼斜に閃きては
あな眩かる。其昔の
母を包みし運命や迫り來し
吾不識たじろぎつ、燭火を消して
崩ほれては切に幸願ぎぬ

詩は必しも平明なれとは言はぬけれど、かうこぐらかしては何處が糸ぐちかわからないので弱る、豆洋燈に飽いて廊に運び上らうとして見た母の顏と、燭を消した刹那に廊下の暗を透して見た母の顏と、明暗ふたつながら描き分けてほしかつた

○鳥

はぎ

とぼ／＼と　枯野をひとり
北へ北へ　ゆく法師、
落日の　かなた眺望んで
つかれたる　身をかてつらし。
小流れに　かげはうつりぬ、
破れ笠　短き杖の——
——狸に似たる面影
かん高き　馬のいなゝき
灰色の　馬子近づきぬ
指す方をみちたづぬれば
まじ／＼と　姿ながめて
物をもいはず　行き過ぎぬ。
何處ともなく　鳥の聲
つかれたるかしら　もたげて
鈍き眼に　空をみつめぬ。
されど　鳥はかげもなかりき
杖とりなほし　またもゆくなり、
キヽとなく　あやしの聲は
何鳥ならん　またもや啼くと
かすかなる　感興をおこして
とぼ／＼と　法師は北へ

日が落ちた、どこかで鳥が啼く、坊さんは急がない、野は草のかげから夕やみにつゝまれて雲あかき西の空もおぼろ／＼、鳥また啼いたむさし野は行けども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ。

○顏

田中英子

雪もよひ風荒む火點し頃を、
町の外れの四つ辻に、
たゝづめる女一人。
編笠まぶか、目鼻だち定かならねど
そゝけ髮、やつれし片頰——
——さはれ尚ほ消えがての若さ色あれ。——
細き頸筋傳うて震ふ妙なる小唄。
『……こがれて來たに、樣は啞かよ
——』と通りすがりに、口ばやに
『あのいはぬ……チチツン、
いてわれも昔の處女塚、
『ほ』とへら笑ふ老女あり。
提げし德利にうさを忘るゝ幸はあれ
どつと迫るうら悲しさに——
彈く手止めそむけたる
唄女の顏のぞきよる。

のぞかるる美人？の白い顏よりか、覗きこむ婆のひしやげた顏の方がよくうつせてある。

○たけくらべ

木村春江子

同じ甲の酉年を
春に生れて從兄となりし
君は眉こそ秀でけれ
遠き浪花の母を戀ひ
鵲塚のお上より
夕日眺めて泣くを見て
哀なりともおもひしか
月すむ沼に舟うけて
なれぬ水棹の操りに
色あるうてをぬらせしも
螢なりとてだまされて
渚の草の葉かくれに
蚯蚓の火まで探りしも
獨に殘る追憶かは
葡萄の房に手のばして
二寸足らぬと悔いたりし
背は五尺になりぬれど
大和へ越すか雁がねの
南するを仰いでも
夢の浮橋中絶えぬれば
よそのうなゐのたけくらべ
見るに寂しさ心地して

平淡

○たけくらべ

太田きし子

「なに！まだ脊が足らぬ？
そいぢや吉のぞけ」
「己らいやい、高いもの——
兄ちや窺け」
門脇に押つくらする乞食の子。
「あゝ節穴高いな、
脊が足らんな、」

奇抜

○詩を作る時の我心

東京 江森美子

時計はチク／＼と絶まなく進んで行く、
詩はまだ作れない、
どうしても作れない、
是だけくるしんで出すのを、
沒書にされるのがくやしい
ぜひ沒書にされたくない、
上手に作らう
上手に作らうと思ふと、
換氣がしたくなる、
換氣はしまい、
眞々と幾度か心にくり返して、
暫く天井とにらめつこして考へて見る、
やつぱりだめ、
いつそ筆を投げ様か
と、思へどやつぱり詩に上達したい、
何處かで雞がないて居る、
こけこつこー——
のろいれ——と、
さも人を嘲笑する様に。

○山彦

サツマ 迹瀬川俊子

かち——ん——
遠くの山まで山彦がする
何だらう？
ふりむくと高い山腹の石切場で
すゝいろの顔した男が三人
ぴゅう／＼と吹く木枯たまともにうけて
大なる岩をめがけて
鎚をふつてゐる
破れたシヤツとヅボン下が
枯野の色とそつくりだもの
あの鎚のふられる度に
岩の魂が飛び出して
どつかの山にはひつてゆくのだらう
散れ／＼にさまよふた
魂は再かたまつて
新らしい岩をなすのだらう

○黄梅

松本市 川上恵子

庭前や春の夕ぐれ、

兒伐等の鼻ひや頭に、
過ぎ去れば春風かろく、
黄梅の花こそ散らせ。
只一つの花にはあれど、
音もなく散り行く樣に、
我が胸は悲み覺え
黄梅の花を讃めぬ。
放れ逝く時のなきがら、
美しさ希望も戀も、
日輪の時の轍に、
押されてはアゝ回すなし。
冷かの愁ひにたえて、
黄梅の花を見詰めて、
夕ぐれを一人歎きぬ。

○めまひ

河内　木村しま子

風もなき春日和
病める身を
珍らしくまどにぞ倚りぬ
萬象は生の光り
光りかゞやく
目くるめき――
暗きへ暗きへと呼ぶ聲のする
そのたまゆらに赤き花
つとばかり蹴せ戻れば
かすかなるこの世のひゞき
永久にぬかじと契りし
指輪の敷石に落ちたるひゞき

○こもり妻

筑前　田中登代子

若草のこもり妻
糸ひきやめて柴折戸出てぬ
日はうらゝ草の香ゆるう新綠
瑞々と輝き榮えて野は一面に陽炎もゆる
若草に埋こそこもれあゝ君は霧降る國に――。

○梅

廣島　岩村迷花

戀しいと思ふ人に向うから聲かけられて
飛び立つやうにうれしいが何だか恥かしいので
うつむいてゐるとこひ人は浮たのべて
振れとせまるそれでもまだうつむいてゐると今
度は美しい薔薇の花を妾の手に握らして唇に當
てよといふ、いふがまゝに當てると痛つ刺が立
つた血潮はたら〳〵と、齒を染めて白齒まで赤
くにじんだ、思はず薔薇の花を地になげ捨てゝ
さんざんに踏みにじつたが
刺はまだ唇にのこつて、たえず妾をせめてゐる

○涙

秋田　梅澤すみれ子

あゝ涙こそ嬉しけれ
園の白百合　鹿の子百合
ふと見れば、
ま白腕の美女が
輝る日にかざす紅の袖
涙の露とこそ散れ
月の小窓に
さし入るなべに
垣根つくりし紅薔薇に
おほらかにいとおほらかに
其花びらと我が瞳に
匿ぞうかぶ
あゝ涙こそ嬉しけれ
仰ぐも月の玉かつら……
美し眉を
ことほがむ
其の盃に
漲溢たして

○春の夜

丹波　藤田靜枝

春の夜草はまだ萌えず、
うるめるは月のみか、
小さき星も涙眼して微かに照す。
靜なり月のにほひは、
しめやかに小野にくひ入り、
音もなく胸に秘むよ。
かゝる時かゝる沈默を、
うつ〳〵と追憶の小野。
辿り行く吾や小羊。

○絞首臺

岐阜　藤田芳子

目隠しの白き布、
わが目たゞ今掩へり、
世は見えず煩悶に、
幽かにも光もる。
今登る絞首臺、
登り行く跫音は、
怪しくも胸にしむ、
陰府に行く足蹈み、
陰府の獄もれ來るよ。
今登る絞首臺、
薫香する搖籃に、
薔薇なせる赤き頬、
玉光る稚子の末、榮あれと祝ひけむ、
木曾川のほとりなる、
兩親よ許してよ、
歴突の音聞ゆ、

世は永劫に、
活動の、
海潮のめぐること。

○壁の花

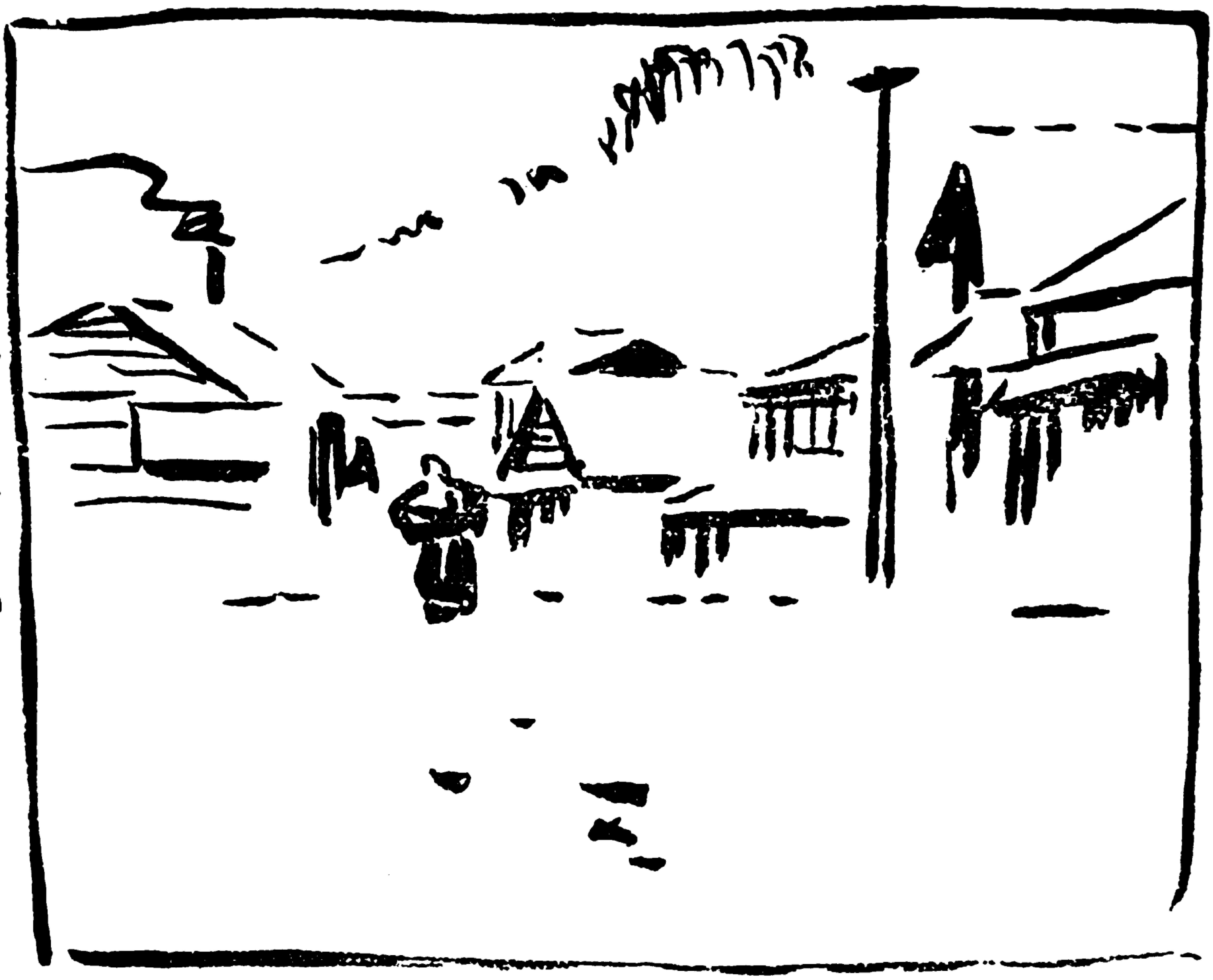
日本橋　佐藤みどり

名なし夏草つる〳〵と、
君在す窓に忍びより戀ふる思ひ
に丈伸びて、
夕の露朝の花、
微笑みうつる壁の面、
白きは清き心にて、
紅きは燃ゆる戀かそも、
匂ひほのめく燭の、
艶なる花に照り添ふて、
花の光ゝ葉のゆらぎ、
こぼるゝ露に光りあり、
燭の光は汝が生命。
想に沈む宵しゞま、
組むでくづして顔あげて、
靜かに花に親しめば、
寂き平魂和ぎ、
胸に泌み入る氣韻かな。

○夢なる暗

大阪市　井上　靜

明暗の眠れる砂は、
夢の波ほのかに白し。
その砂のその波の遷りつゞき
色も音もさ霧に溶けて、
ひとすぢに搖ぎゆらぐ——、
そのなかに、いとかすかにも、



霧の朝　室蘭　大坂なほ子

わが戀か……
はた何のときめき……。
流れゆく色の……音の……、
はた君おもひの、その果の、
おぼろの海に、
いとほのに燈火ひとつ——
そのかみのうつゝに見たる、
道こそ夢路に燃ゆれ。
明暗の眠れる砂に、
夢の波、ほのかに白し。

○餘韻

石見　八島　君子

穹窿なせる　梁高き、
胸の空洞の　おほ廣間、
血の色したる　帷垂れ、
黄金の燭臺に　燭明る。
姿艶なる　妖女、
調巧みに　奏づるは、
情熱迸ふ　心音の、
常夜にひゞく　管絃樂。
即興樂の　一節、
渕めくこゝろに　しらべしが、
樂の名殘は　今もなほ、
胸にひゞきて　消ゆる日ぞ無
き。

○靜寂

新潟　村山　湖子

暗の夜を　しと〳〵と降る雨の
音
魔道の青き戀の國よりか、

あゝ少きわが胸をやく苦痛の
暴き灯や、あな赤き灯や、おぞましく。
室の隅そぼちぞかすか靜寂に
まどひぬる心はひた泣きぬらし、
その昔ゆ――追憶に醉ひ追憶に
胸ふるひ血の冷へ渡る靜寂や。

○萩小路

筑前　田中登輿子

花がはら〳〵白萩小路、
露がはら〳〵白萩小路、
ちよいとお待ちよ、そう急ずに
待つておくれよ、のう栗毛
花をふむのが冷たいならば、
私がこうした三年間の
泣くに泣かれぬ此の胸の内
御前ばかりは、よう知つて居る
まゝよ白萩亂れよ散れよ
萩は私の名、えゝ恨めしい

○鎮守の森

大阪　はるかぜ

あな、神さびし
宮の森
鳥居に苔つく
宵にしき
御燈こそゆらげ
風ゆるく
社前の小徑
さわ〳〵と
高き、低き
はだか木や。
宮の森
あな、神さびし。

○初袷

越後　佐藤浪子

新ぐりの香たき込めしは、
都の風俗に親みて、
おごるなよとの意味ならん、
着るは惜しけどさらばとて、
きよと賜ひし品なるを、
おし頂いて肩にかくれば、
長き袖からひら〳〵と、
母様からの文おちぬ。

○失望

臺北　稗貫みつ子

寒月空に影やせて
池の眞清水氷る時
双羽つかれしわが鶴は
進むに進む氣力なく
あはれ希望もあらばこそ
旨しき戀も打ちすてゝ
風のまに〳〵はた〳〵と
轉び入りしよ古堂に
戸細に開けて堂内見れば
壁のかたへの大理石に
奇しく彫られし御裸形は
もろくも双手くづれおち
御手に光りし寶玉は
果かなやさびて轉がれり
魂は戰きとびさりて
涙の中にわが魂は
鳴呼ほうむられぬわがたまは

○兄が家

茨城　初澤さく子

兄が家は、田舍の醫師
空蟬の、柄葉に殘る
淋し秋、病みて歸れば
兄嫁は、萩散る緣に
泣く兒を抱き、頭剃るなり。
總領の、姫の子
お下髮にして、七ツといふ
れん雅布の、小狼にも似て
手土産の、菓子折抱き、
中の子に、泣いて逐る。
裏繰き、芋の畑より
霧立ちて、闇の迫るに
廐女は、湯風呂の前に
煙い顔して、洋燈もつけず
いろり邊に、こほろぎなくよ。

○夢の華

長野　安坂富美子

寂しらや、色もなく光もあらぬ、
果もなき混沌の眠りの野邊に、
ひた〳〵と生命の匂ひ迫まれば、
水の面にうたかたの浮ぶ如、
咲き出づる、かづ〳〵の夢の華、
紅や紫や、現なき現の爛りあは〳〵と、
束の間に、鳥の通ひ路、日の雫

○火の魔

奈良縣　笑ふ女

十丈の焔は　人を呪ふ火の魔
狂ほしや眞紅の　髮逆立てゝ
われ見よのためき　家をやき森をやき
罪の世の終末も　かくこそと嘲けり
逃げまどふ男女を　微笑の眼に見やりて
天をふるふ凱歌　十萬戸の市をのゝく

美文



○規定　抒情、敍事、敍景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

（特別賞）

○甦り

名古屋　八代やゑ子

靄ばかり立て込んだ光の無い路を歩いて居る――川に沿うた崖道らしい。後を見てもぼうとして、前も何處迄行けば出られるか分らない。急ぐともなく休むともなく、たゞたぐり寄せらるゝまゝに進んで行く。川の面は折々白く閃くやうに思はれてならない。そして自分は無形の鎖でつながれて、引き舟のやうに引かれて行く――光の無い國を――果てしのない時の道を――それは何時だと訊かれても何時か其日のあつたやうだとしか答へられない。

自分のまぼろしは聯想に聯想を生んで、始めはぼんやりとして居た物が、稍或る形づくつて、仕舞ひにはかつきりとした物躰になつて、什麽しても幻影だとは思はれない。

幻影ぢやない或者が私の肉體に囁いた言葉でせう。前の世で地に埋れた私の肉の精が、深い暗い地の底を旅して、現在の世に來る時の事だつたでせう。人は何と解釋するか。私は然うきめて仕舞つた。

だつて今まで暗い或る者の影が追つかけて來るやうに來るやうに覺えられてならないもの。

はら／＼と葉の散る秋には、生から永遠に逐はれるやうな愁いに閉ぢられて實に寂しかつた。

そして幾晩、此窓で泣いたか。けど今夜は星が美しい星が美しいのぢやない私が、さゝやかな嬉しみを持つてるのです、何の嬉しさか言ひますまい。

いつも、天は遙かに高くて、星なんか冷たい眼光と斗り思つたけど、今夜のは總てを純潔にする愛の焰と思はれて可懷しい。

天が近い、今夜は聖らかな天の氣が野や山に滿ちてゐる。神樣は此のやうな晩に、新らしい天と地を創造な

さるんぢやないかしら。あれ奈邊かで棕櫚の葉擦りのさやかな響がきこえるやうに――天使が舞うてゐるのでせうか。そして新らしい草の精は地に降つて――明日の野は乾度美しいでせう。輝く朝日、燃ゆる新草。水の清流。草も甦る。野も甦る。私も暗い影を離れてあの潔い光に包まれやう。

感情的の現代の女が實世間に隔れて煩悶し苦惱するのは當然のことてす、然うあつてこそ生の經驗も分つて來るのです、其煩悶が如何にも淺薄なのは誤りますけれど、わが文壇にも其、某二三の方は確に或る深い所まで行きさうです。もつと心を修練して、僅かなことに驚いたり泣いたりするやうてなく、喪心したり、自意識を無くしたりせずに、大いに煩悶し、大いに苦惱すれば始めて大傑作が出來ます。此文章、初めは冥想的に、後は神秘的に、覺めしが如く、覺めざるが如き、女性の感情が生きてゐます。暗い地の底を旅して、現在の世に來る時の叫び聲も聞ければ、甦る前夜大自然に感謝して、天が近い、明日の野は乾度美しからうと憧憬るゝ若き命の輝きも美くしい、此情、此才、珠ならば溫めて袖に秘めたい（評）

○再び上京して（地賞）

牛込區早稻田南町四四　早川のぶ子

村に百舌鳴く秋の末から、富士が白く見える冬まで三ケ月の間、私は故郷の湘南に暮した故か、ねつい神經衰弱もやつと薄らいだので、この正月に再び上京しました。そして今更ながらおしつけける樣な、難かしく云ふと都會の壓迫と云ふ樣な感じをひし〳〵と覺えました。あまり艶消な話ですが私は上京して以來今日まで一度も御飯を御美味しく食べた事がありません。八百屋が持つて來る物は皆萎れて乾干びて、葱なんか枯葉ばかり多いのを見ると、裏の畑からとつて來ては牛肉のあへにして御美味しく食べた、あの田舍の岩槻葱の艶々して甘味の澤山なのが思出されます。御魚なんかも古い故か煮るとクチヤクチヤになつて仕舞ひます。然しこんな無理も云はれません、夕方兄さんが御歸りなさる少し前に、魚屋へかけつけて、一皿へ切身が二つて附木葉に三錢としてあるのを買つて來たり、又は二三日前にもお菜にこまつて鰹の粗の御汁をこさえたら。そんなものばかり食べてゐると又神經衰弱になるぞつて兄さんに笑はれました位の二人ぎりのはかない自炊生活ですから。私は田舍にゐる時は母にすゝめられて、よく田は盡く刈られ麥の綠猶ほのかなる里の畦道のそゞろ歩きをしましたが、東京へ來ては全く出る氣になりません。町と云ふ町は塵で灰色になつたその中には引きりなしに通る電車の地響、工場の汽笛、人の足音、こんな所へ來て見ると私はこの大都會の底におしこめられて、疲れきつた吐息を胸の底まで感じます。一瞬の華かな虚榮に醉ふ爲めに諸國の漂泊者が、乾干た彼等の身躰から血と油とを絞り出しに集まつ

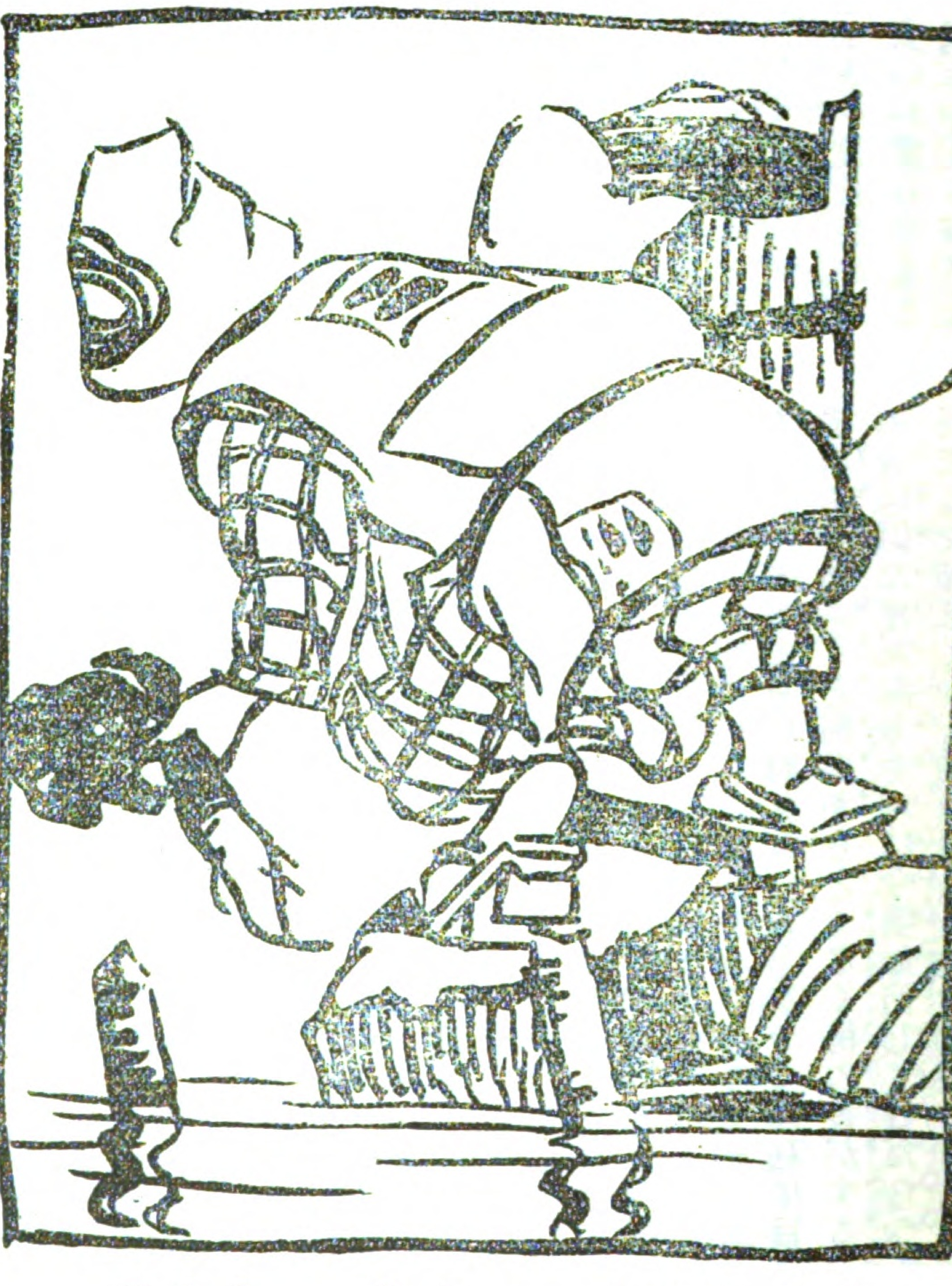
て來る、私もその中の一人かと思ふと云ひ知れぬ悲しさと淋しさの感にうたれました。

若い女の眼にも映る都會の窮迫、例は手近な八百屋や魚屋に取つてあるだけ、實際の感じが起ります（評）

○月下に立ちて（地賞）

下總古河 横山町 若杉とり子

筑波をろしは又一しきりピユーと襲ふて、髪は亂され軀は冷き月光を浴びて、白日の如き地上に薄い影を寫した傑へながらも、唯私はこゝを去りたくない、月に脊を向けて歸るに忍びない、暗い室の冷たい床に、苦悶するよりは、西の涯に沈む迄は月に語つて居たい、斯うして月の面を見詰めて居るのは千人の戀しい人々に逢つたよりもなつかしい、遠い羽後の柳子さんも今宵此の月を仰いで苦悶してゐらつしやるのではないか、泣いて泣いて、泣きたゞれた瞼を閉いて、此の月に何を私語いて居るだらう、人を恨み世を呪ふのではなからうか—、斯んな深更—月に立つのはりうさんと私許りぢや無いかしら、あゝ今宵此處にりうさんがゐらしつたら—苦悶の子は二人抱き合つて、熱涙に曇つた四つの瞳はど



あらひもの　攝津　とよ子

んなに無限の悲しみを浮べるであらう、若しも月が、月が鏡であつたら、遠い柳さんの瞳と管をかはして、此の心の苦しみを、告げる事も出來るであらう、おゝ然うだ、柳さんは仰つた『二人は影と形だわ』つて――聲はなくとも瞳は會はずとも此の影はりうさんの靈だもの、私の此の心も今殉後にかけつて居るのだ――幾度か毒矢に射拔かれた胸の疵はもう淸き人の靈に溫めらるゝより他にない！去りたくない――去りたくない、もう扉の中に入れば此の月影は消へるのだ……りうさんに告別するのだ、――いやだあゝいやだ今宵一夜を立ち盡して思ふまゝ泣いて見たい！あゝ月は沈む。

羨ましきは青春の人。（評）

○京の思ひ出（地賞）

河内　木村しま子

今朝向ひの内儀さんから「お露さんにもう情人がありますえ此間の雪の日に二人淸水の方へ行かはるのを見ました」とまあ――馬鹿らしい明けて十四の露ちやんにそんな事があるものか、馬鹿らしいと一度は思ひ消して見たが――前世の約束とてもいふのか露ちやんと私は眞の仲よしお互に同胞の少い故か露ちやんも姉さん／＼と慕へば私も他人とは思はれぬ――此京都にも多くはなからふといふ評判の美しい子、あの物思はしさうにうつむいた瞳など私でもふるいつくやうに思ふものを、又どんな誘惑者がなどゝ思ふと心配でたまらない、もし眞實なら露ちやんも露ちやんだと少し腹立しさも添ふて立つても居ても居られぬ、もう日も暮れたが宅なら越して下さるだらうと下女を迎にあげた、私は自分の居間で花活の梅をいぢりながらあゝもいはふこふも云はふと言葉の順序を考へて、其處へ襖があいて露ちやんは「姉さんなあに」と待設けて敷て置いた坐ぶとんの上へ坐る、やゝ上氣した頬に少し亂れて柔かい毛は肩にかゝつた其にこやかな樣を見ると云はふと思ふ事が根つから出ない。遂々思ひ切つて「あんた此間の雪の日淸水へお行きて？」と問へば見る／＼顏赧らして眞赤になつて口の中で曖昧な返事、さてはと力を得て聞いた事思つた事のありだけを口說き立てたすると露ちやんは悲しさうに「姉さん誰にも云ふたらいや、あれ兄さん」と堪えきれず泣き伏した、私は、はつと忘れて居た露ちやんの身の上を思ひ出した。と一年前のその時其夜の人となつてた私は目覺た樣にふりあふぐと何處からともなく梅の香がする、あの晩に似た夜だ露ちやんは今頃如何してるだらう人間同志契た姉妹よりも神の同じ血で造り遊した兄妹が嬉しいだらうと淡い嫉妬も交りながらとにかく堪へがたい程のなつかしさを覺えた。

此は小説の方へ行くべきものかも知れぬ、併し美文として來て居ますから、美文として取扱ひます、話の筋と云ひ筆の運びと云ひ、小説らしい句がします、何れにせよ女らしく、美しく書いてあります、(評)又曰く、此作の文中には露ちやんの身の上話もあつたので、それを讀むと、兄さんと連立つて行た理由も分るのです、が行數の制限を踰えますから削除しました。

記者曰、本誌も例に據り、入賞三篇を選みましたけれど、何れも同列の作て、天地人の優劣をつけることを甚だ困難に思ひましたから、特に本號に限り、三篇洩れも地位に置くことにしました。

【秀逸】

○てすさび

信濃　太田喜志子

さつき、忘れましたが何事かをふと胸にとめてそれを底の底まできざわめやうと殆んど無意識に反物に貼つてあつた紙で、男の方の頸から上の横向きの形を刻みました、窗際　何の氣なくて、ポイと吹いて縫ひかけた着物の上に落ちたのを見ると、またそれが急に戀しいやうな何とも云はれぬ不思議な思がむら／＼と湧いて來てヂッと見つめました。

海が戀しくなりだした夕の海が……

さうすると涙がコン／＼と湧いてくる、其のきざみ散らした頸に目が出來、口が動き、髮が黑くなつて體が出來て妾を見つめて歩いてくる、だん／＼と暮れゆく海づら、路はざく／＼と砂を踏て居る——松の大いみきがちき横手にある——風が冷や冷やと頬に當る——妾は思きり泣て見たくなつた、身が濱に居るのだか、濱が胸にあるのだか、さつぱりわからない、波のどよみに胸の血が吸ひ出されて仕まうやうで……。

さつきかけ出した時、おゝ、それよりもあのあかりの薄れていつた時——一心にこゝまで驅けて來たての足、胸

ふと吾れにかへるとカラリとした明るみて日の光りは障子の穴からもれて丁度猫の耳の形に見られるよく考へて見るとさうもあらう、かうもあらうと思ひながら讀んだ「牧師」秋聲氏の清子となつて居たのでございました。恥かしい、恥かしい、あれは行雄だつた。笠井さんだつた、と吾れ知らず顏がぽッと致しました。

すつかり思から醒めた日てその頸を見つめますと、あのさし畫にある行雄の頸の恰好がちつともちがひません、あゝ行雄の顏は誰れも知りますまい、たゞ妾と、あの清子とばかりはよく／＼知つて居ります。

ほんの何氣ない手すさびから、此れだけの感じを起す、女の文としては申分ない、(評)

○妹

麹町　胡枝子

妹。あゝ妹は今が燃えさしの炭だ、或はもうもえたつ

た火氣の壓なのかもしれない面白いだらう、元氣のあるはづだ、冷やかな社會の水をあびせられると燃え終りもしないでくろ炭になつてしまふのだおゝさうだ私は灰ではない、灰になるまで保ちはしなかつた、黑炭だ消えた炭だ。

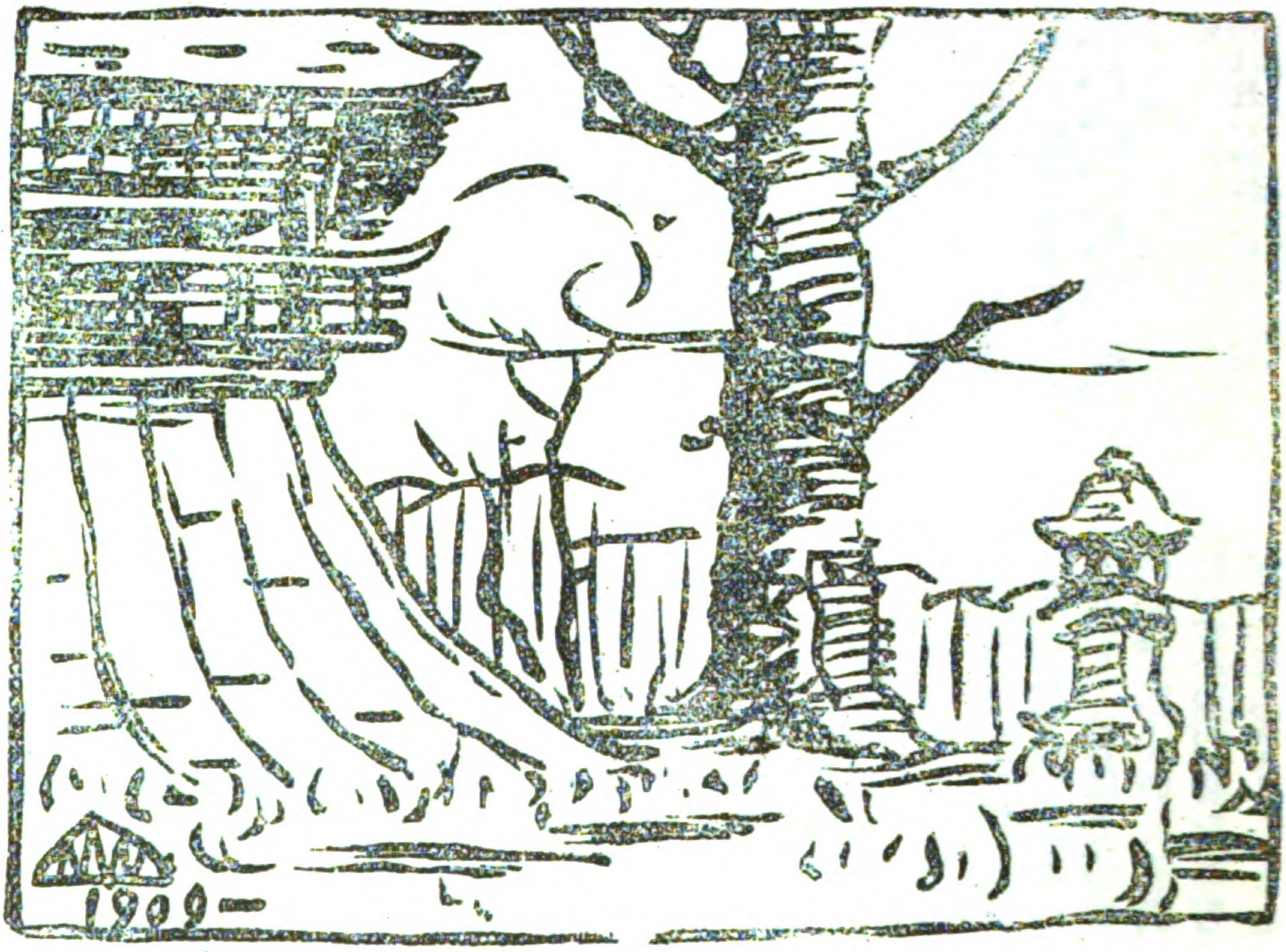
「あら待つてゝよ遲かつたぢやないの！」妹の聲だ、いつまで、てよだのよだのつて小供ぼい言葉をつかつてるのだらう明けて廿になつたのに。

今日は濟子さんがいらつしやるつて大待ちに待つて居たつけ、濟子さんつてどんな人かしら、ちらと緣側を通る後姿、濃お納戸の何だの亂菊の樣な、裾摸樣をきてお立矢字高まげ、君子と同年位かしら、脊のすらつとした、前向いたら涼しさうな顏だらうと思はれる。

去年また大里の人になつてから君子の樣子のあまり變つたのが何より目につく一つだ、派手好み、交際ずきあつちの園友會、こつちの音樂會と、いろいろ手をまはしては切符をもらつたり、買つたりまたはおしつけられる事もあるできつと出掛けて行く、去年の秋は運動會といふ運動會あるきをしたとかいつて居たつけ、帝大の運動會の時は是非私にも行けつていふ、いやだと云つたら云草が氣にさはる、姉さんは學校時代には帝大かゝした事はなかつたのに、つて薄笑ひして私のかほを見て、いらつしゃいよ、氣が變つて可いわ、昔の記憶をたどるのもわるかあないものよ、なんて知つた風な事をいふ。御殿山で佐川さんが漸くさがし出したといつた時の風が如何だとか、工科が勝つた時佐川さんと顏見合して遠方同志笑つたとか何とかうるさい事ばかりいふ、少しは察してくれてもよさゝうなもの今は私佐川と何の緣もゆかりもありはしない、大里露ではないが、それはさうと、こうした華美な風になつたのだからお友達も多勢、たゞ一遍の紹介で親友になつたり、名前きいただけで手紙やりとりしたり何のおそろびだとか寫眞がどうしたとか、側目にも忙しさうだ、濟子さんといふのはいつから知り合ひになつたのか、いづれ何處かの會で名刺でも交換したのだらうどんなことを話してるかと物ずきに離亭にゆきがけ、次の間で一寸座敷の樣子をうかゞふともしらず「父や母はもう大方きめてるんですけれど私きのりがしないのよ、だつて工科ぢやあねえ、安つぽいわ」と濟子さんと云ふ人の聲らしい、安つぽくもないわ、私の醫科だつて香ばしくもない、法科は一寸いゝ樣だけれどやつぱり工科にとゞめをさすかも知れなくつてよ」とこれは妹。

「だつて大工さんぢやありませんか」、つていつて語を更へて「あなたもうぢやあ近日？」つていふと妹は「はあ、先方ぢやね何しろいそいてるのよ、でもねもひとつの方が話がちやんと切れてからでないと後に

面倒てすから、……まだいろ〳〵ごた〳〵してちやんとまとまるまてにはなか〳〵てせうよ、なになら私ことはつてほしいともおもつてるのだし」つて平氣ていつてる。驚いた、妹に今何も縁談のあるはづはないが、とおもふと日外きいた、今のお友達はね、やれ何學士に行くところだつたが姑があつてことはつたとか、何子爵世嗣からのぞまれたけれど貴族はきらいだからことはつたとか、いつも云つてないと體裁がわるい様なのよ、賣れ口がないと云はれるのは口惜しいんだからつて妹がいつて居たのを思ひ出してまあ、とあきれるよりほか無かつた。さうまて結婚は有り難いものか、妹たちのまつてるのは華燭の夜ばかりてある、振袖花やかな、當日夢見る様な新婚旅行、それはかりえらい様に樂しんてるのだらう、と私も過ぎてきた坂路をふり返つてなつかしい様な氣がしたので暫時、やつぱり今の大里露に返れば夢の様だつた處女時代ものろひの聲をきく様な氣がして、いやだ、いやだ。



境內　仙臺　佐藤たすく

虛榮に充ちたる女子の一面、實にもとうなづかる、之を讀んで憤慨する男子は共に現代の女性を語るに足らず、嘆息の外なし、(評)

○歌がたり

大阪　西戸政江子

南向きの縁側に座つて暖かな春の日を一ぱいに浴びて恍惚と青い空を眺めて居ると「アラ政江さん此處にいらしつて」と八重子さんがいらしつた、「いらつしやい　さあお上り遊ばせ」と云ふと八重子さ

んは嬉しさうに笑ひ〳〵「あのね先に御話しのあのツラ晶子様の思ひ玉へ御胸の島に糧たらずされど往なれぬ流され人を」つて歌や、あれから毎日々々考へたの、だけれどどうしてもわからないので兄さまにお尋ねして今日やつと二人て考へがついたのですの、貴女まだわからなくつて?」と仰しやるのでフト妾も思ひ出した「ア、そふ、妾もね、あれから一人て考えたのよ、やう〳〵わかりましたの、貴女はどんなお考へなの、眞實に六つかしい歌ですわね、聞かして頂戴な」「あの兄さまと二人の考へなのよあの歌はつまりね、「よい人の御胸へ送る詩才が足らぬから恰度流され人のやうになつて行く敢果ないこの身を思ふて下さい」と云ふのではないか知らと思ふの、間違つてをるか知らないけれど、之れよりよい考へは浮ばなくつてよ」「そうかも知れないてせうけれどもね、妾はこう思ひますの一思ふても見て下さい、妾は貴君より外に愛をさゝげる人はない、それに貴君の御胸から下さる愛の糧は僅かですから妾を満足せしむる程ではない、丁度流され人のやうだと云ふ意味じやないかと思ひますわ」とそれから二人て夕方まで考へたがどうしてもいゝ考へは浮ばなかつた、

歌の解釋の當否は別問題として小品文には好い材料てした、（評）

○病後

日本橋　佐藤萬壽子

うらゝかな小春日和、午前の日光は南向の椽側に一杯さして、玉は心地よさそうにねむつて居る。私はいつになく氣が清々して、髮でも上て見様と、鏡臺を出して其の前に座つた。思へばもう三月の間と云ふもの、さびしくいやな病床に暮して、今年になつてから鏡に向うのは今日が始めて、自分の顔ながらなつかしい様におぼへて、しげ〳〵と鏡の面をみつめた……が、―細いためいきと一所に熱い涙はほろ〳〵とひざにこぼれた、どうてしよう、三月以前のふつくりした頰はきえてまだ年若の頰ぼねこそ出ないけれど、目はくぼみ、あの美しかつた紅のくちびるの色はあせて白つぽく、女の命だと云ふ髮のつやさへ失せて。眞正面に受た日の光に茶かつ色をして居るんだもの。あの丸々とふとつて居たからだのあたりはげつそりと、そいだ様にやせてじつとみつめた目のそこには、釼さゑたゞよつて居るではないか、あゝいまわしの病氣、しかししかし、私はこのいむべき病氣になるのを願たてはないか。……いゝゑ病いになるのを願たのてはなく餘りにふとつた身をはぢて、どうぞやせる様といのつたのだ、そして…… そして今其の願のかなつたすがたを見て、かいでの涙にくれるとは、――あゝやつぱり元の

身躰になりたい、なぜ病氣になぞなつたのだらう、ふとつて居た方がどれ程いゝかしれやあしない。あゝ——力なく立こがみをとかし始めた、今までは伯母樣に計りむすんで戴いてたので少しも知らなかつたが、此のまあ毛の少なくなつた事……知らず、心細くなつてくし持つ手さへわな〳〵とふるへ、はげしいづゝうにたまらずぺたりと座て、つッぷした。先程から椽につるした鳥かごの中に、そうしちやうは常より美しいこゑを上てさゑづゝて居たが、其れさへ我身の淺はかをのゝしる樣に聞えて、思わずきつと、ねめ上て其のまゝ床の中へ——とかしかけてまだむすびもやらぬみだれた髮を其のまゝ頭からすつぽりとふとんをかぶつて泣いた。

此の位の事に涙を惜まぬ、流石に女性だとは思はれますけれど、餘り一寸したことに、泣く癖をつけるのは考へものです、（評）

○お祖母樣

攝津　寺部君子

「お祖母樣、眞個にお歸りなさるの」「ハア皆がいねいね言ふさかい、最うとんといんで來升」「アレ歸るのはいや、是から何も言ひませんから居て頂戴」と妹はお祖母樣のお袖に縋つて泣聲で云ふ。「噓や〳〵何のいにますもんかいな一寸行て來て直き又もどつて來升」と仰有ると「そう私吃驚仕たわ、お祖母樣がお歸り成さつたら誰と寢ようかと思ふて」と既に嬉し相に莞爾〳〵仕て居る。

實に私等姉妹は今迄お祖母樣に育てゝ戴いたのです。其に是迄何か一つ氣に入らぬ事でも有ると、お祖母樣のお內は此家じや無いわ、歸て頂戴てな事を能く言つたものです、此度實家の叔母樣が亡く成られたに就てお歸り成さるのです。下女が「お神樣もお肩が惡く御座います事、何に御不自由は無うても、彼處と此家も早く奧樣がお亡れ遊ばして、御察し申升よ。置て頂いてる私も矢張肩が惡いので御座い升わね」と什うやら泣いて居るらしい。優しい母樣の事でも思ひ出したので有らう。「眞になな若い者に先き行かれて、年よりが後に殘て逆樣事を見升わいな。是も何彼の因緣じやろかいな。私が歸つたら子供を賴み升ぞ」と言ふて居被る。

既うお祖母樣が歸て了はれるのかと思ふと、是迄の事が一々胸に浮ぶ、一つとしてお祖母樣の御滿足遊ばす樣な事は仕て居らぬ、憎らしい事を言うたり仕たり、噎濟まぬ事で有る、一日なりと樂しい思ひをさせて進げれば好かつたのにと、今更思うても甲斐無い事です、好い心持で晝寢仕て入被る傍へ友達を澤山呼んで來て喧しく言て怒られた事、するなと言はれる事をわざと仕て腹立てさせた事等思うと家へ入らつした時は未だ元氣で居被たのが那麼にお弱り遊ばしたのも、皆

其所爲かと思はれて愈々申譯が無い。とう〱お祖母樣の前へ手を突いて今迄の事を一々謝まらうかとも思うたが、其も得せぬ。責めてもの心遣りに、と今迄一寸梳いてと言はれて見向きも仕なかつた、おもじを叮嚀にそろへて、私が大切に仕て居た銀の簪で止めて上げた。

人の好いまめ〱したお婆んが如何にも能く見えて居る、今までつれなく當つたことを後悔して、髮を梳上ろ處も何となく人情の美くしさが溢れて、ほろりと涙がこぼれる、佳作（評）

○山の靄

姫路　富岡綾子

本箱を整理すると其底から先年八月辻村樣と一緒に城崎溫場に三週間ほど入湯してゐた時の日記が出て來た、ふとあけて見ると。

入浴しやうと欄干に干してあつた手拭をとりに行つてふと見ると、僅か半町ばかりの距離しかない愛宕山は勿論裏座敷さへ少しも見えない。隣室に行つてらつした辻村樣を呼んで一緒に見た。その邊一帶は靄の海て一寸の何物をも認め得ない、丁度雲の多い日輕氣球に乘つて中天にある樣て、空氣が無色にも見え白色にも見え、重くにも思はれ輕くにも思はる丶から恐な話だが、及ぶだけ手を伸ばして掴み得らる丶だけ空氣を掴んで見たが、手には何物をも得なかつた。暫くすると愛宕山の山巓と思はる丶邊が極めて薄い鼠色で極めて狹くポーット現はれた。刻一刻目に見えないのが靄が去るのか一分一厘ほどづ丶山の見えるのが廣くなつて既に見えてゐた部分は聊かその色が濃くになり、次第次第に明確の度が增し鼠色に靑色に變つて來たが麓の方はまだ茫としてゐる。裏座敷は早や總ての物の輪郭色彩が其まゝに表はれてゐる、空中の妾等の身體に與へる濕度は無論涼しさを過ぎて冷かで今が夏とも思はれない。やがて山巓の鳥居も殆んど其色を現はした時麓の方も靑色を注いで、續いて山道、林藪も詳細を見得るに至つた。してあの靄は今どこへ行つたのだらう山の靄、人によつては見るに價せぬだらうが妾等は筆紙に盡し得ぬよいものだと思つた。辻村樣も同感だと、遂に兩人とも今日の拂曉の入浴はやめた。

八月十八日。」

あゝ山の靄、再び都市の塵を脫して姉妹のやうな友と山の靄を賞するのは果たして何時の時であらうか。

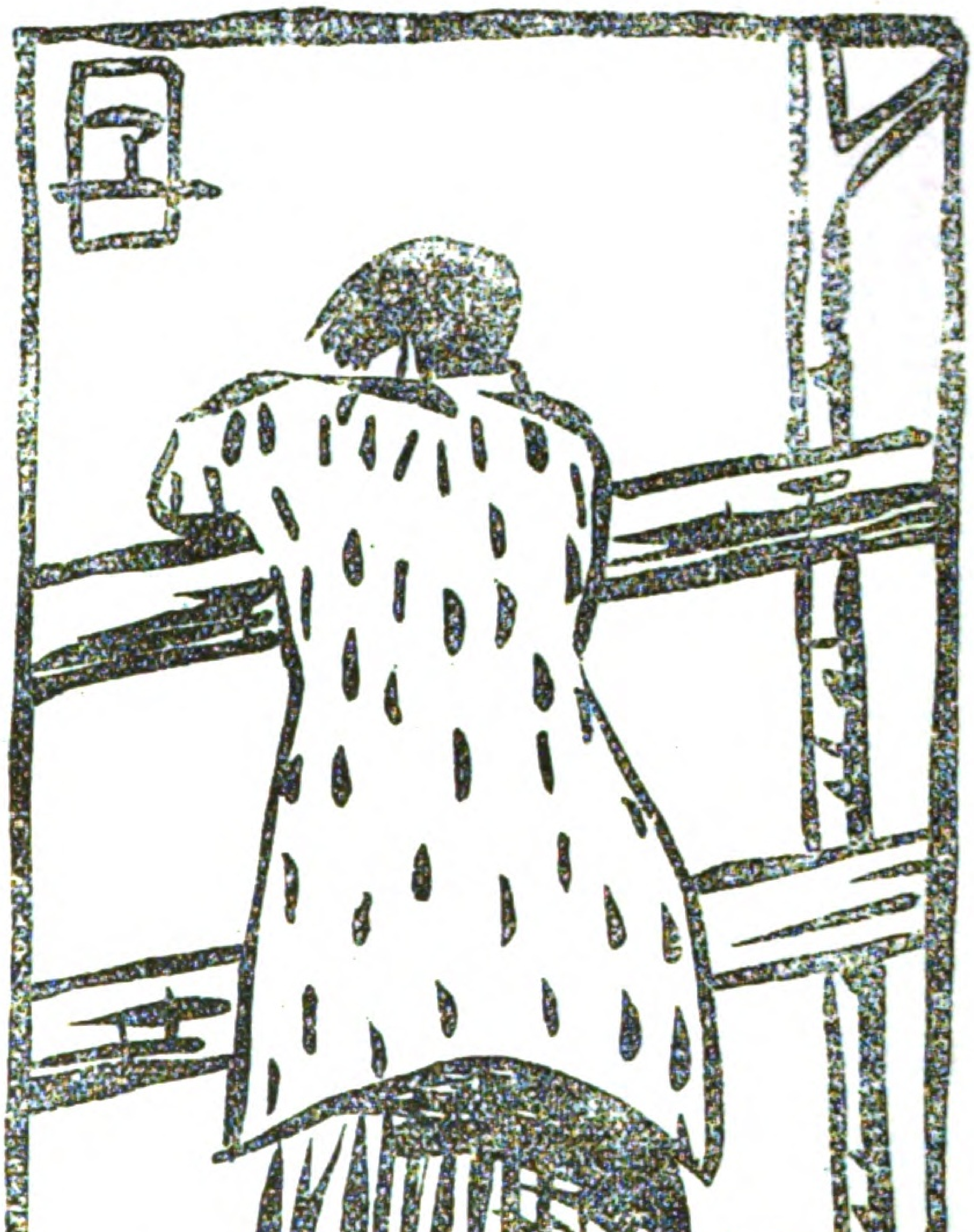
近來わが美文欄は、殆んど「人間」を以て埋まつてゐます偶には「自然」にも接したいものです（評）

○角兵衛獅子

麴町　吉田露風

テケレン〱といそがしそうに太鼓の音が聞える、やがて小さな日和下駄をはいて、頭の所に羽根の二三本

付いた赤いきれと黒いビロウドとで出來ている變なものを長くたれて居る、着物もたゞのではない、あらい更紗形の妙なものを着て居る。霜やけだらけて所々くずれかゝつた見るもいた／＼しいやうな手はつめたさにたへきれないのか堅く握つて居る太皷の音にせかれて小ばしりにちよこ／＼走つて居る、私の家の前へ來た、そして悲しそうな聲て、かすかにお目出度うといつている、今まて二階の窓からそつとのぞいてゐたが可愛そうてならないから一錢銅貨一つなげてやつた、角兵衛獅子の小さな子は、土の中に半かくれた銅貨をひろいあげて上を向いておじぎをした、私は其の顏を一寸見たらいかにもあはれて／＼たまらなかつた、あゝ悲しい人の子、終日泣きあかして居るのかその顏はひとて一面、目からは涙があふれそう、はなはたらしてゐる、いかにもきたならしいがまたどとなく愛らしいあはれつぽい顏だ。向ふの路次から、ねづみ色になつたふりまきをした太皷を持つた目のぎよろりとした二十男があらはれた、太鼓がまたテケレン／＼といつそういそがしそうになり出したので角兵衛獅子は一錢をしつかりつかんでかけ出した。



牧場　本所　安藤ゑい子

寫生的ですが、あはれな角兵衛獅子の樣子が、明かに表はれてゐます（評）

○京人形

大阪　今西はるゑ

新らしく張り換えた倚麗な障子にパッと黄色い日が照つてくつきりと山茶花の樹が寫つてゐる。山茶花の樹の中程から下は八つ手の葉のために消えて、折々影がゆら〳〵とゆらいてゐる——。

先刻美しい「京人形」を送つて下すつた京都の大西やゑ子様えの禮狀を書き終つた私は、ボヲウッとなつた頭を静めやうと、青ラシャの机掛けで蔽われた机の上え打つ伏して静平としてゐると、誰れか來たらしく後ろの襖がスウッと開く音がして、つゞいて衣擦れの音サラ〳〵——

『どなた?』と私は振り向くと、妹が丁寧に手をつかえて、頭を疊え擦り付けてゐる。『何御用なの?』と私は重ねて優しく云ふと、『はい。これはお粗末で御座いますけれど、今日お友達から頂きましたので、ホンの少し計りですけれど、お裾分け致します……』と云つて何か風呂敷に包んだものを差し出し、そろ〳〵頭を上げた、額が見えて眉毛が見えて、鼻が見えて口が見えて、紅いリボンが後ろえ消えた。

私も幼ない折宜くこんな遊びをした。そして度々お父うさんや兄いさんの居室え持つて居つたが、いつも『うるさいッ』と跳ねつけられた。其時の悲しさ怨めしさ、『あいよ』と心宜く受けて下さるお母様の優しさを思つて、私は欣ぶのが常であつた——

不圖私は幼ない昔の事を思つて心宜く其れを受け、風呂敷を疊んで返さうとすると、妹は『おためを入れて頂戴』と云ふ。私はおためと云えばお金の事だらうと思つて、祝儀袋を出して入れやうとすると、『あらそれおちやないワ。おためにお金なんか入れては失禮だワ』と妹が云ふ。『ぢやア何を入れるの?』『そりやアね』妹はちよつと考える眞似をして、『女の子だつたら人形にきまつてるワ』『えッ!!人形ッ!!?——』

私はさては計られたかと初めてさとつた。京都のやゑ子さんから先刻とゞいた小包——。あの事を知つて來たのである、クリマスのサンタクロウスのやうに、妹の寢てゐる間に密つと驚かしてやらうと思つたのも水の泡——。然しどうせ一つは遣らうと思つて居た事とて、私はだまつて入れてやつた。

『おほきに有難うさん……』と妹は急ぐ立つて、それでも氣にかゝるのか、ちよつと布呂敷の間から覗いて、見て人形が眼に這入つたのであらう、ニッと笑つて出て行つた。氣がつくと、何時の間にか障子の影は、サンを二つ三つ上え昇つてゐた。（二月十日午後）

小品文の極く上乘なるもの、妹の態度も寸分の隙間なく描寫されてゐる

ます、讀んで居る私までが、昔の幼い夢を見るやうです（評）

○屋根の上にて

羽前　眞沙子

私はいま屋根の上に上つてゐるのです。――弟が雪投げをするといつて、梯子を掛けたついでに、屋根の上から見た景色はどんな物かと思ひまして――。

野も見えますし山も見えます。空は高く晴れ渡つて、その蒼いうちに、凧が唸りをあげてゐます。茅葺屋根のつゞいて黒いなかに、瓦屋根と小學校の建物ばかりが、際立つて目につく、日曜なので、ひつそりとしてゐますが、眞向ふの二階の硝子窓が開いてゐます。翼があつたら飛んでいつて、中へはいれそうですが：：：裏は廣い桑畑つゞきて、右手の栗の木の梢を透いて、法音寺の屋根が見えます。その横手の空を遮つてこんもりと立つた、が靈屋の森の杉は赤く枯れたやう。見るからに神さびて、何鳥か――、百舌でせうか、――キイ〳〵と鳴いてゐるのが聞えます。

日はほか〳〵と背の綿もふくらみそうて、折々北の方から冷りとした風が、心地よい程スーと面を撫でゝゆく。南の方には雪を戴いた、吾妻富士の連山が、白茶繻子をのべたやうに、日に映えて聳えてゐます。

向ひの家を越して見える野は、唯眞白で、黒くポッリとした物が一點、動いてゐるやうなのは、村から出て来るんでせう。

もう日の影になつた西の近い山際の杉や松の立木のかげにまばらに見え隱れする、村の家からはもう少したつと、夕げの烟がたちのぼるのでせう。

私は下りやうとして、また四方を見廻しました。

屋根の上からは奇抜でした、見た通りを現はしてあるからなか〳〵面白い、白皚々たる原野の様な今少し印象を強く書いてほしかつた（評）

○悔

大阪　富佐子

小刻みの、世とへだつて行く様な暗い草履の音：：：：ふと歩きながら足音に耳を澄まして、人通りのない川岸へ出てたのに氣がついた。

夜の町の雜踏した中を、無心にうろついてたが、華がすに輝やく店頭の鏡に、思はず我姿の映つた時、ぎよつとして魂は云ひ知れず戰いた、嚴かしい神の御前に行つたかの様に――て只闇、醜い心の姿の見えぬ處にと走つたので、妾は日毎此様な恐怖に襲れて、宛然髮を逆に底知れぬ穴へ落ちて行く様な、頬美しい友等と團居してゝも、妾計りは人を欺き世を僞つてる、斯うして妾の居るのは、眞白な花辨に汚染がついてる様だと、何とも云へぬ淋しさ便りなさ、其度に躰が衰へる様に思ふ。

下りの船の灯を、暗い流はだん〳〵吸込んで了つた、彼樣にわびしい胸の幽な光、少女の春ものまれて了つたのであらう、噎せめて、血は沸いて頰のほてる樣な思出でもあれば、越方を反り見乍ら沙漠をも行くけれど「房さんは十六だのに、少女らしい若々しさはない鋭い人、」いくら思出の糸を繰つても、この言葉より他にはないもの。月が出たので四邊が雪の夜の樣に、蒼白くなつた。

いつも思つた、生と死の連鎖はもろいと、身も魂も萎えて了つた妾は自ら斷たうとした、――がよしや明日きれるにしても、神樣がお結び遊ばしたのだ、きられぬ――それとも妾だけは、鎖に犯かした罪がさびついてるのではあるまいか、我行く限りなき暗い道、如何して行かう、幻のみの父母は會ふ時もあらうが、少女の春は何處を探しても會へない、命にも替る胎兒を、闇から闇へやつた人の樣な思ひを抱いてか……………。疎な梢をすいて、足下の泥深く溜息する月のまた〻きたゞ泣きない、が涙さへもう出ないて………。

また茲にも暗愁の人、悔恨の涙の痕があります、斯う皆が暗い感情にばかり走つて行つて了ふと何うなるかと疑はれながらも、其文字の血が絞るやうな句に引かされて――(評)

○胸を病みて

麻布　靜枝

ぬか雨がしと〳〵靜かな日です此の部屋には私獨りですけど誰か居る樣で仕方がありませんの。肩の邊から力一杯押すのですもの、苦しくて苦しくて………。こんな事云ふと皆手術すれば愈ると云ひますが愈るものですか、あの冷たい刀で手術等したら私は死んで仕舞ますよ。私の胸を流れる熱い血が溢れ出たら、私は屹度石になるでせう。

もう打捨つて置いて頂戴、今にどうかなりますよ。

皆が種々云ふて私を考へさせるから獨の方がと、こうして純白な枕に顏を埋めて胸の上に手を組んで居ますが、又獨になると泌々自分の弱い事が思はれて、誰か力のある手に抱かれて思ひの儘泣きたくて………。

私は弱い心算ぢやなくても、髮でも何でもこんな少なくなつてしまつたんですの。先刻乳母やが梳いてくれたのでずつと延して貰つたら、やつと疊の巾より三四寸しか出なくて、拇指と人指ゆびでゆる〳〵ですもの眼を開けたつて何も珍らしいものもないのですよ。五本の横ぶちに限られてゐる天井板は、もう幾度か七十六枚と數へたし、襖の紅葉の摸樣も倦きてしまひましたの、人ぢや厭ですけど口をきく人形がほしくて。

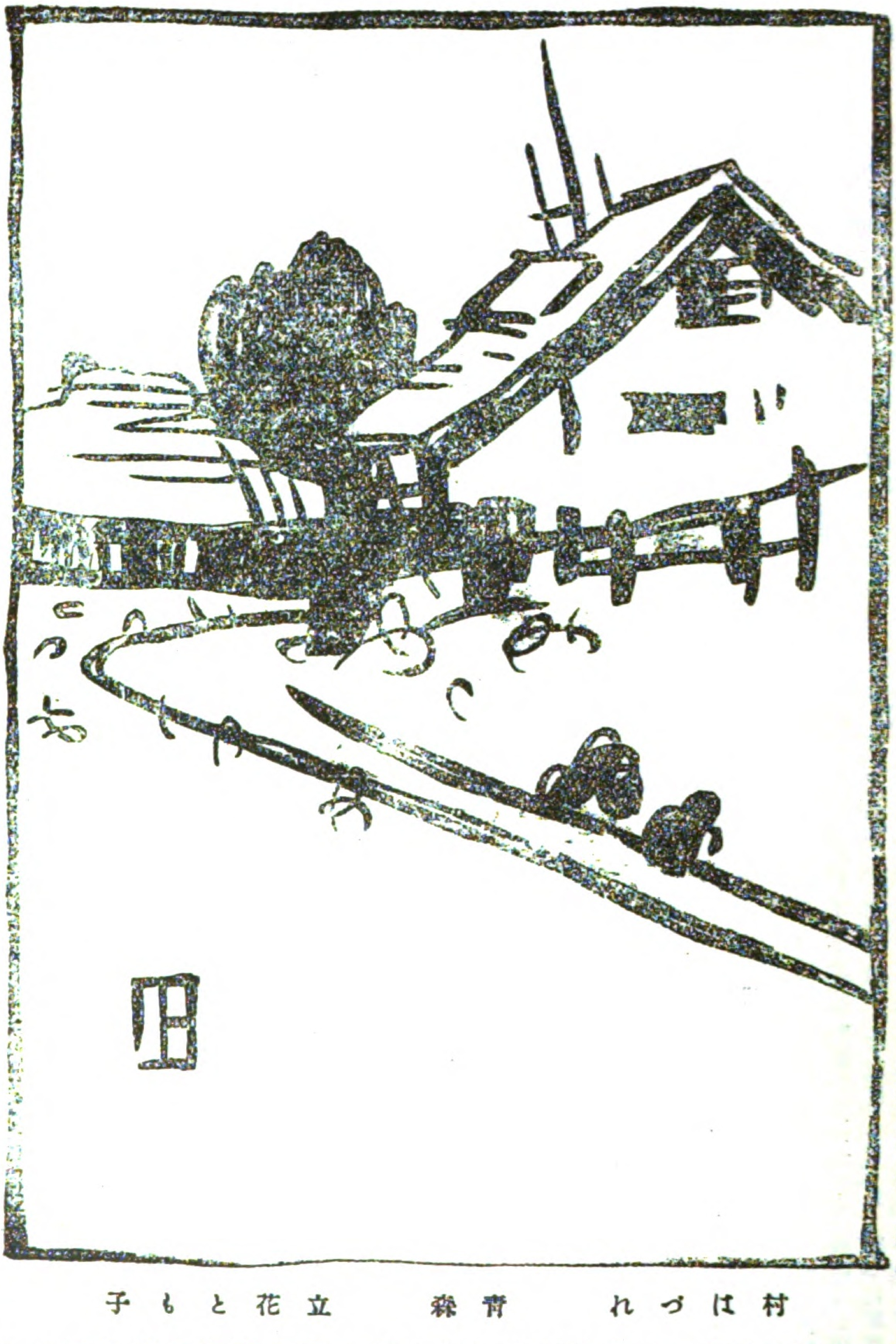
起きたいのですが足がふら〳〵してとても。眼をつむると紫や赤や黄の火の樣なものが上つたり下つたりして、身躰が浮いてゐる樣ですの。

今一寸思ひましたのよ、眞白なくちなしの花の咲く頃

こんなに雨のふる日、落ちてくる露の樣にしつとりした土の中に、吸ひこまれてしまつたらよいでせうね。あの泌み渡る樣な香の中で……。

あゝ何だか乾いて來ましたけど、あの葡萄酒の入つたお藥が厭で〳〵。お密柑の樣に甘い林檎の樣にすいそして母樣のお乳の樣に暖かいお乳がほしいのですの。

病人の言葉ですから病的なのは當然かも知れませんけれど、神經質文學の純白なるものとも云ふべく、全く文中にあるくちなしの花の香のやうです（評）



村はづれ　青森　立花とも子

○わたくし　梨花

世間の人は一人娘で殊に年老つて生れた末の子、親達からは大切に可愛がられ結構な御身分と云はれる、實の處、あまり大切にされない。父は義理がたい昔者、何かと云ふと女のくせに本をのぞきたがると二言目は女のくせを連發される兄は今時の女で高等女學校も卒業せぬ者は好い家へ嫁かれるものかと當こする、父が私を高女へ入れて吳れない原因は身にありながら

其を擲へ上げて、自業自得と云はぬ許りてある。

又一人の兄は末へ生れた者は仕方があるまいと云ふ。

又一人は何今の高女へ皆入れるのは娘を廣告に出すのさ、高女卒業生が何れだけの力があるかい、其と脇くらべする積て勉强しろと云ふ。兄嫁はお母さんに似ておしやべりさ（然し自分は此人の様に作つてまで人の悪口を云つた事がない）女學校へも行かぬ者は何になるものかと云ふ（自分の娘は入學して居るから）。

親類の人は中々しつかりやですと云ふ、但此裏にお轉婆と云ふ意味あり。

學校の先生は快活て面白い、文章も好いと云つて下さる。

同級て仲の好かつたのは陽氣て淡白として居ると云ふ仲のよくなかつたのは、負惜みが强くて人を侮ると云ふ、決して侮る積がないが自然に壓協な處があるから斯う云はれる。

年上の友は氣質が可愛らしいと云ふ。

年下のは大ていな人は物を尋れると知つて居ても空とぼけて敎へて呉れぬが貴女は、親切に云つて呉れると、云つて何でも相談される、滿更悪い氣持もしない。

私を温和しいと云ふ人は十人に一人あるなし、勿論温和しいと云つて入らぬ、其の温和しいと云ふ裏には意久地なしと云ふ意味が含まれて居から、何うせ負けぬ氣のひがみの强い私だもの、まあ此末何んな運命がくるやら。

弱點も缺點もむきだしに現れてゐます、心掛に惑服しないと思ふ點もあるやうですが、斯う云ふ人が存外多いかもしれぬ、此作者の雅號梨花とあれど、岩代の梨花さんてはない（評）

○寂しい日

熊本　峡よし子

空曇りとてもいふのだらう、灰色に打沈んだ空は寂と[illegible]を切る様な冷たい風は ヒューヒューと電柱に唸つて鳥も啼かない寂びしい日だ、病葉が時折がさ／＼と寛碎の私語の様な音を立てゝ地に落ちる許り、天地は此儘かうして滅入つと仕舞ふのぢや無いか知ら、咲寂びしい、私は書齋には入つて埋火を掻き起しながら其側て開いたのは寫眞帳てある、眞中頃まであけて行くとふと眼についた政子様の御姿、私は最う胸が一ぱいになつて仕舞つた、學生時代は活潑でゐらつしやつた此の政子様、孤月といふ雅號の許に雄渾な筆を振つては天晴れな秀才よと友に仰がれたあの政子様、運命とは盲へ秋も暮れの霜月中旬よりふとした風だといつて冷たき床にいたづかれたがもとて今は悲しくも恐ろしくも肺結核てふ病名の許に遙か茅ヶ崎の南湖院に果敢ない生命を繫いていらつしやる。一昨日もお端書を頂だいたが何時もの様な優しいおかきぶりてはない、薄墨の筆の跡亂れた悲哀の御言葉疲れ切つた御様子が歷然と見える様。若しや此の様な日に……咲私はもうたえきれず其儘寫眞帳の上に泣き伏して仕舞つた。

おちついて書いてありますけれど、底に力がない（評）

○嫉

松山市　華子

お喜美さんが、とう／＼死んだと云ふ。尋常の病氣てないとは以前から聞いて居たが、さつき隣の婆さんが——目ふちの黑い、黄色い齒を出す婆さんが、

「横町の易者さんが言つてましたとさ、あの娘は女の精がたゝつたのだつて、餘り別嬪すぎても困つた物てすねえ、奥様」と母様に話して居た。

私は。びつくりした、ほんとかも知れないわ。だつて美しいのが生命の女だもの。お喜美さんさへ居なかつたらと、恨んで居た女が、澤山あつたに相違ない。現在、私自身てすらも、喜美さんと一所には歩き度くなかつた、あゝ女のたゝり？もしや妬ましさに燃える女の瞳から、目には見えない魔の黑絲を吐き出して、其れが喜美さんのあのスラリとした身體を縦横なゝめに搦めて了つて、蟻が餌を引く様に、冥府へ引つ張りこんだのてはあるまいか。そして其の絲を手操つていつたら、遂にはお梅さんの目おつるさんの目……それからもしや私は……おゝ厭やだ馬鹿な、私は知らない、ちつとも覺えは無い。おきみさんが死ねばいゝ等と言つた事はないのだもの

知りませんよ／＼私じやありませんよ。



○機織日記（天賞）

備中　篠原しげ子

一月十二日。始てだから糸に糊をして、ついでにかせを取つてやるから、よく見てお出てと、昨日母様が仕度して下さつて、今日此をへて見よと云はれるので、私は母様が云はれる樣に糸を取つてへた、此がどうして木綿になるのやらさつぱり譯が分らない、漸くへ終つて梭に入れる、見なれぬ梭の目故、とばしたり二度入れたりしてしかへる、之を二時間かゝつた、其から母様が櫛でといて下さつて私が卷いた。

同十三日。私が一本づゝ糸をのすけて、母様が通される、其がすんで又梭に入れる、此度はまよわなかつた、其から機に上げてちやんと機織りかけをして下さつた。

私が織つて見ると中々手と足とが揃はない、一寸しやくると、さゆでみゝをつき切つた、かうしてつなぐのだと、すぐ母様がつないで下さつた、もうつき切るまいとそろり〳〵用心してしやくつて織つて居ると又一筋切れた、其を私がつないで、織らうとして踏板ふむと、其糸が引ぱつて口が開かない、どうしたのかと母様をよんで見て貰ふと、此々御前が糸を正うつながないから、此れ見よ、此方に引かけて置る、あゝ私は直うつないだと思ふのにねじれてをつた、糸の樣な直い氣を以てと昔から云ふが、此通りじや、一筋ねぢれても切れても布にならぬ、お前もこう云ふ氣になつて居れと云はれる、眞に其通りと今更私は感心した、又織つて行くと、私の織つた所は非常に見苦い、蚊帳の樣な所もあれば厚い所もある、みゝは、ぼろ〳〵としてしまらない、雜巾にないとせねば用ひ向きがない樣な、母様は此此樣になるから始めては白木綿をして習はせるのだと云はれる、最もな事と感じる許り、夕迄二尺許り

○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙種の賞を送呈す

織られた。

同十四日。朝起きて見ると少し股が痛い、機を織つて見るとさ程にもない、やはり木綿がだん〱にボカシた樣になつて仕方がない、隣の婆さんが來て今の者はいつ迄も學校に行て機を習はないから私等は十二の年から機を織つたと云つてじまんなさる、今日はやつと二ひろ程になつた織るのを止めて歩いて見ると足が痛い、座らうと思へば股はよけい痛い、お尻も痛い、此でも明日織られればよいが。

是れはほんとう機織の稽古らしい、もう斯う云ふことは田舎でないと見られない、文章は要領を得て居る、飾り氣もないが、むだもない、(評)

○朝の二時間（地　賞）

（新報日記の一節）本郷　千代子

朝早い内から澄ちやんと京ちやんと二人が枕元へ來て「姉樣、綾ちやんを貸して頂戴よう、よう」と頻りにせがむ、眠つて居るのに可哀想とは思つたがソッと抱いて寢床へ入れてやると、二人共大喜びでまた其兩側へは入り込む、妾も昨日一日汽車でゆられた上、此夜遲く迄起きて居たので未だ眠い、も少しと床へは入ると間もなく綾夫がワッと泣き出した、急いで行つて見ると、まあ！五人共皆一ッ蒲團の中へもぐり込んでワイ〱と騷いで居る「あのね兄樣が耳を引張つたから泣いたのよ」と云へば「虚だい京ちやんが頰ぺた嘗めたからだ」と各自に言譯して居る。其處へお母樣が起きてゐらして「綾夫は私がお守りするからお前はもつと寢てお出て」と仰る、けれ共お母樣もゝうお起きになつたのに妾許り寢て居ては濟まないからそれ切り起きてしまつた、其中に皆も起き出す、大きいのが蒲團を疊めば小さいのは寢卷や枕を運ぶ、下女も居るのにそれにさせずに自分でする、お母樣のお躾けはいつも乍らいゝと思つた、片附が濟むと今度は髮を結ふやら顏を洗ふやら大勢だからなか〱の騷ぎだ。

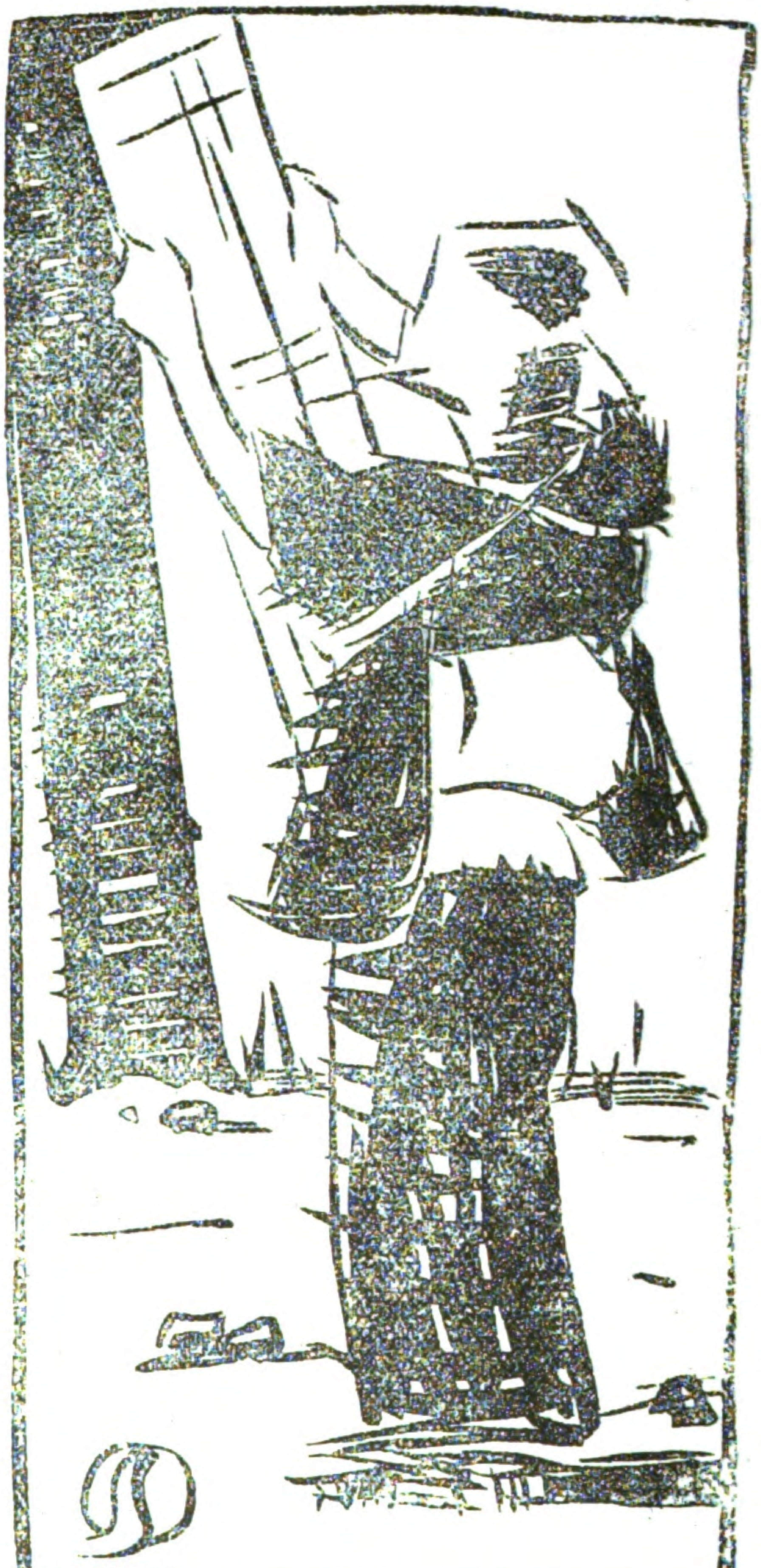
やがて揃つてお父樣お母樣お早う、姉樣お早う、と云つて來る、ホントに可愛い。

間もなく御飯時になつた、お客樣だからお膳を別にとお母樣は仰つたが、妾は矢張り昔の樣に一所に揃つて喰べて見たいのでチャブ臺の前へ座る、向ふには廂やら、お下げやら、五分刈やら、おかつぱやらが五人、可愛い顏をしてズラリと並んで居る、何だか涙が出る程嬉しい「千代さんもう終へたの」とお母樣が仰るから「あらもうこれて三杯戴いたのですわ」と云ふと、

「姉様、そんな少さいお茶碗でタッタ三杯で足りるの僕なんかこれで五杯喰べるんだ」と丼の様なお茶碗を差上乍ら賢ちやんがいふ、皆大笑ひ、スルとまた小さい京ちやんが「姉様も綾ちやんもいゝう家の子になるのと可愛い事をいふ、大きい妹は「けふうちに居たいわ日曜だとよかつたのにねと云つてなか〳〵傍を離れない、お母様にせき立てられてしぶ〳〵登校の仕度をする「賢ちやんインキを忘れずに持つてゐらつしやい柳さん會費を持つたかい」など丶四人に一々注意してゐらつしやる、ホントニお母様はなか〳〵大抵の事ではない「それぢや行つて參ります」と頭を下げて皆殘り惜しそうに出てゆく。

「あゝやつと私達の世界になつた」とお母様がさも樂々した様に仰る、ホントニまるで大水の引いた後の様にヒッソリとしてしまつた。

鄕踊りに多勢の家族と一しよに話したり食事したりするときの樂しい様子がありありと見える（評）



はりもの　茨城　栗よし子

○兄の誕生日（入賞）

本郷　千とせ

二月三日、今日は兄様の誕生日ですから例の通り、お

友達を四五人招いて心計りの晩餐會を催ふします、朝から母樣と私と豊と三人掛りで、煮る、燒く、ゆでる、夫は〳〵大騷して大體出來上つたのはもう午後三時、昨日活けた萬年青を一寸手入れしてお座敷のお掃除を了つたら兄樣がお歸りになる、今日に限つて「大層綺麗に成つたね！」とはお如才の無い事、食卓の用意も出來た、西窓が明るく成る四時半頃父樣がお歸り遊ばす、續いて佐々木さん。猛さん、西川さん、寺田さん、が相前後してお揃ひなさつたけれど、未だ堀さんが見えぬのでお客樣方の中ではそろ〳〵欠伸が出る、堀の日本人、が二三度繰り返された時分漸く大きな琵琶を抱へて被入つた、皆さんに遲參を責められて、實は琵琶のお復習をして居たのだ、との申譯で夫は御苦勞〳〵と方々からコップが集まる、宴酣なる時西川さんが立つて五分演説をなさつた、夫から兄樣の吟聲、猛さんの劍舞、西川さんのラッパ節、堀さんが蓬萊山を尙ほ私が願つて辨の內侍をも一曲、寺田さんと兄樣が尺八の合奏を二三曲、どなたも仲々藝人だが只佐々木さんのみはグッともスッとも云はずに獨て祝盃計上げて被入る、さあ此度は私に是非バヰオリンをさなくば盃をと四方から責め立てられるので、そつと座を外づして、無理に强いられたビールの醉を醒まそうと、鼓動の高まつた胸を抱いて庭に下りると、ぷーんと床しい香が襟元に付き纏ふやうで、晝かと思ふ計りの梅月夜、吁いつぞや繪書共進會で誰やらが筆に「春夜の怨」と題した畵中の美人が、今宵此の白梅の下に脫け出て來はしまいかと思はれる、いつしか夢心地にうつとりとイんで居ると、ギンシャン〳〵の撥の音が愈々冴えて……月も雲も動かぬかのやう……。

例の通り輕快な筆づかひだが、殊に月下に佇むあたり神韻があつて好い（評）

【秀逸】

○朝蜘蛛

甲斐　網野やす子

朝起きてお掃除仕樣とお座敷へいくと大きな蜘蛛がお座敷の眞中に危うさうにぶら下つて居た。私が騷ぐとすぐ母上驅け來られて「これは——まあ好いお客蜘蛛がお下りなさつた、靜や早くお掃除をすませてお客樣を待とうよ」と有仰る、此さわぎに耳の遠いお祖母樣までがゐらしつて「おゝ〳〵これは有がてい、四つ前の蜘蛛だお金が入る樣に早く大黑樣へ捧げるよい」と有仰る私はお客樣にしろお金にしろ大黑樣へ捧げよう

とそーつと握つて持つていつて捧げた。

今朝の蜘蛛は客蜘蛛ときまつた、東京から叔母樣が出し抜けにいらつしやるんだもの。そして私がお勝手できいて居れば苦勞してこしらへた私のお料理の惡口ほんとにもう憎らしく成つちまふわ、そう有仰る叔母樣に一寸の時間であゝ體裁よくキントンや羊羹が出來るだらうか。私けふ位上手に出來た日はないと思つて褒められる心算だつたものを、などゝ七輪の前で獨語をして居るといつの間にか母樣が後に立つてゐらしつたそして「ほんとに叔母樣は惡口だね、流石のお料理人も叶ひますまい、靜や、一つ母樣の前で吐く氣焔を叔母樣にも御聞かせな内辨慶ては駄目よ」ととけそうな笑を浮べてゐなさる、今日の樣な母樣の晴々しいお顔は此頃はじめてだ、私も嬉しくて堪らない。

夕飯が濟むと、又皆で大火鉢を圍んで東京のお話を聞く、十一時頃床に就く叔母樣の兩傍へ私と妹で寢る。

一晩も母樣の懷を離れて寢た事のない富ちやんがうたゝねからさめて「あたちも東京の叔母ちやんと寢たい」つて大さわぎ迄々叔母樣に抱つこして寢た。眠りについたのは一時半だつた。

和氣洋々とは此樣の家庭を云ふのであらう（評）

○羽織を縫ふ

下谷　細谷鋭子

八日、昨日標をして置いた羽織を出して先裏袖に袖口切を掛ける、次に表裏の袖を縫上げて胴はぎをする、あら胴はぎの折はどつちへ返すんだつたかしらん……、一心に帯を綴ぢて居被る姉樣のお顔を一寸見たけれど、何だか伺がうのが氣まりがわるい、是で羽織を三枚縫ふのに折が解らないなんて餘り覺えがわるい樣で、そつよ自分の羽織をのぞいて見てやつと解かつた、もう是から忘れない樣にしやうと思ながら裏の方へ返して躾をかけてしまう、「秋さん又下りの標をまちがへない樣にネ」と突然聲を掛けられてはッと思つた、「えゝ」と返事はしたけれど何だかまちがいそうでしかたがない、でも怎うにか縫つた姉樣是でどうでしやうと御目に掛ると、「どれ一寸」と丈を合して見て「そら秋さん又表へ返るよ」と仰被る、私は知らず知らず泪が出て來た、姉樣はどし／＼といてわけもなく縫なをして下さる「さあ此度はまちてすよ又縫なをさない樣にネ」と針をうちながら仰被る、そつと泪をふいて一心に針を運ばした、夕方迄掛つたけれどなをさずにやつと兩褃を附終つた。

九日、今日は、姉樣がお出掛けになつたからお留守の内にすつかり縫てしまはふと思て、一生懸命に表裏の袖をつけ含み綿もしてしまつた、そして「チ」を作りながら待て居ると間もなくお歸りになつた、「秋さんどこ

迄出來てーと仰被る、もう綿入れるばかりよと縫上げた羽織をお目に掛ると、まあ早やかつてネぢやあ直ぐ入れて上げませうと早速綿を入れて下さる、まだ時間は早いけれど今日はかりとぢだけでお終にした。

羽織を縫ひあぐみて渡したと云ふは眞に女の涙なるべし（評）

○女髪結日記

埼玉　愛子

二月一日。朝の仕事も終らぬ内から田舍の娘さんが二人連て見へた、今日は月後りのお正月なのでお二人共高島田といふ注文、日頃人様に上手と言はれて居る私は一層奮發した。一時間計りで二つ結んだ、娘さんの歸へつた後で下すきのお米がお師匠さん田舍者はほんとに不精ですね、お正月だと言ふにあの汚れた毛ではと嘲けつた。早速朝飯をすましたと思ふ間に又三人、これは町場の娘さんなので意氣な銀杏返しといふ注文、手早く結んでしまつた。

午後から小川屋の御新造さんが至急にと言ふので急いで行くと、例より別段にもてなして下さる、四疊半の間へ通されて煙草を一服スッテ居ると、けふはお佐久と私のを二つ願ひますと仰るので、ハイ承知致しましたとお佐久さんの高島田を品よく結んだのが何うして御氣に召さぬかしらぶつ〳〵ばかり言つてゐらつしやる、お佐久さんはツンとして出てゐつた、入れ變りにお新造さんが來て私のをも一つとかるくおつしやつた。

今日は東京へ入らつしやるのは見合だそうだ、御亭主樣とは從兄同志だと云ふ、私は少し眉をひそめた。氣むづかしい御新造さんは好く結んでも今少し彼處をあゝやればよいとか、彼處をあゝやらねば好いのにといつも合せ鏡て御說明、私は有難迷惑だ、歸りに我身の上をよく〳〵考へた。

二月二日。明日は大師樣とかて今朝は起きない內からトン〳〵戸を叩かれたのでいそ〳〵と仕度をしてお米には二つの火鉢へ山の樣に火を盛らせ、私はザットお座敷をはき出して上らせた、昨晩入らしつて餘り澤山だからとお歸りになつた町はづれのお高さん、根下りの銀杏返しが大好きと見へて例も其計り、今日は朝から芝居見物だから其の積りでといふ前置きほんとによく芝居へ入らつしやる事月に何度行くかしら私なんか一年に三度位、それも御夫婦連で高土間とやら云ふ處へお腰をおろしなさるつて、芝居の變る每にお召返へといふ、ほんとに私のやうな境遇ではとても出來ないわ私の亭主は車夫だものお高さんは日に三度づゝ夫婦喧嘩をなさるつて評判だ。私は去年の春此處へ來たが

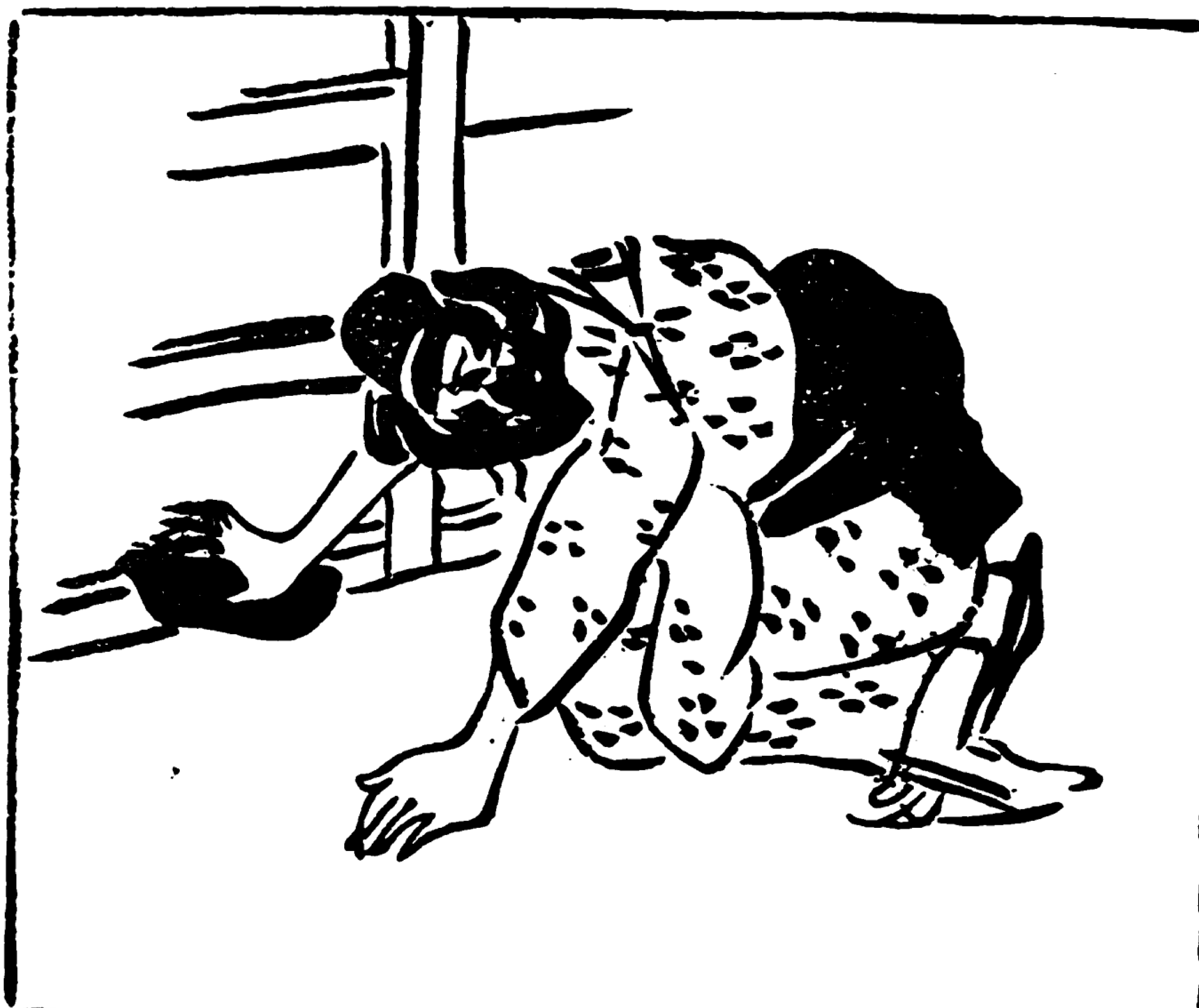
未だに一度も口返しすらした事がない、良人の優しい事私は心から感謝して居る。

髪を結ふて貰ふ人の日記は御山に來るが、女髪結の日記は、是が始めてだから珍しい、而かもまんざらつくりものとは思はれぬ、實際の女髪結でなければ書けないと思ふやうな事がある、要するに毛色の變つた日記文の一つ（評）

○寒い日

東京　江森美子

一月卅日、寒い日、父様は十年一日の如く朝な／＼に冷水浴をかゝされた事さへなく、どんな寒い日でも、ついぞ寒い等と、仰しやつた事はないのに、今日は實に寒い日だと、幾度びか仰しやる、私は今日大いばりで先つきから火鉢と首引をして居る、父様は今日どうしても、横濱まで行かなくてはならない用事がある、行つて來ようかな、と、立つて見る。寒いからつかぜが一入強く吹く、是れてはどうもしかたがない、行けば夜汽車になるから、風てもひくとつまらない、と、又座つて終まう、とつをいつ考へる事一時間、とう／＼用事は手紙が弁命して、七里の道を行くべくポストへ入れられた。夜、先つき買つて來た二月號の女子文壇を、父様にお目にかけたら「うん大分此の本も立派になつて來たな、どうだお前のが出て居るか。」「だめよ私は下手てはないけれど、皆様が上手だから」「それては同じ事だ此の本が立派になる様に、お前の文章も立派になつて此の本へのる様にならなくつちやーな」「へ、今に乾度私の文章も此の誌上て見る事の出來る様に、する事よ」「そうならなくつちやーな」其の夜私は十時頃まで女子文壇を讀んてなほ殘りをしく思へど、本は決してにげて行かないよと、母様に言はれて漸く床に入る。



お掃除　下總　宇井花月

家庭圓滿

和歌

與謝野晶子選



この涙つひにわが身を沈むべき海とならんを思ひはじめ
○（天賞）　陸前　原あさえ子

春日山赤き鳥居に身をよせて白藤にふる春の雨見し
○（地賞）　大阪　今西はるえ

我泣くにかゝはりなしとすさまじきこと云ふに似る冬の夜の月
○（人賞）　信濃　櫛原たづ子

【秀逸】

夏の雨かなしかりけり白百合の小さき蕾を土におとしぬ
○　廣島　迷花

おそれつゝ一言君に批なうちぬやゝ馴れし日のうれしきまゝに
○　伊賀　山村龍子

きつね啼く聲にめさめて窓あけぬきさらぎころの有明月夜
○　周防　小野本貞子

昨日までわれと思し我ならで君が瞳のゆくまゝにゆく
○　麹町　半人女

○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

冷たき手胸に當れば暗き灯におもかげ浮び枕のぬれぬ
○　信濃　赤津富美子

空の香の土にしみ入り新しき息するがごと泉わきくる
○　下關　阿部しげ子

若かゝりし日をまた見せよ天つ神さなくばわれなとく墓に追へ
○　喜惠女

笑見せぬ石の佛をおろがみて願ぎ事すらく君を戀ふ我
○　大阪　鹿島綾子

ひるの雨櫻の樣にさにづらふ中を傘して君の來ましぬ
○　大阪　山内溪子

天地の大き光にてらされて怖れぬ戀を君とするわれ
○　信濃　くれなゐ

もの思へば涙のつたふ冬の夜は亂れし髮も氷らむとする
○　神奈川　木村春子

はたやわれ君知らざりし昔にも歸りうべきか我心から
○　丹波　鹽見よし子

○ 讃岐　波奈子

君みればつとわが胸は黒鐵の扉立てたる心地こそすれ

○ うれひの子

怖れなく終の御座に立つを得る信もしあらば誓ひたまひね

○ 埼玉　岩田江舟子

われ笑めと花作る子の送りこし梅の花かざし歌よみてゐぬ

○ 丹後　谿代子

處女てふ若き名に笑み生きにける昨日おもへば涙ながる

○ 濱田　小松原德子

星飛びて一ッ小石にまじる見て泣きし夢か二十の春よ

○ 佐賀　田中美枝子

香具山の山の麓に家居して朝な朝なのうぐひすをきく

○ 品川　平林ゆり子

春の月塔立つ森の下路を鹿の子たちはうちむれてゆく

○ 下總　荒しづ子

目を閉ぢて落葉をきけば百千の蝶なく聲とおもはるゝかな

○ 石川　山田なでしこ

昨日見しつらき心の君をなにしたふ心のあさましきゆゑ

○ 鳥取　竹本春江

緋桃さく垣根の人はふとこなたふりかへり見てはなやかに笑む

○ 牛込　藤原けん子

初東風や君住む島の花の香を含みて來たれわれ磯にまつ

○ 信濃　山越えい子

わが君のものおもふ顔のかなしきをいやす藥の我れにあるかな

○ 新潟　村山しう子

目に見てはいづれもよろし吾妹子の亂れし髮よ朝なて髮よ

○ 越後　佐藤浪子

初夏の山路を行けば岩のかひ霧湧く底に紅き花咲く

○ 神戸　平田たか子

ものおもふ妹汝は花嫁の探のたもとを何と見つらむ

○ 上野　茂登子

君にわれ別れてくるし相ありしくるしみの日の嬉しさおもふ

○ 信濃　駒澤比呂江

云ひしらず少女心になやみけり切れし三すぢの髮を見つつも

○ 金澤　むらさき女

紅榴ほろ〳〵おつる夕ぐれに涙ながして君をまつかな

○ 京都　大弁順子

戀ふ人の胸の大野にさく花の一もとならぬことをかなしむ

○ 尾張　小島春子

春風は小羊を吹き塵吹き流るゝ如く草の上行く

○ 淺草　中谷岑世

春の日の片側街の日あたりに衣ほす人を思ひそめてき

○ 神田　三好ふく

夕ばえの金色の雲くだけつつ沖よりふきぬ夕暮の風

○ 福井　やまさと

いとあつきみ手にとられて病身のちしほは沸きぬ苦るしきかなや

○ 越後　志賀美代子

我心知る由もなき君にして我の花つみたまふかな

○ 兵庫　三俣光枝

世に出てし日こそ異なれなき母をひとしく思ふ姉と妹

○ 沼津　渡邊とよを

雁がれの聲もきこえず風の遠方にある人のこひしき

○ 岡山　桐本悅子

夕風や君忍び來る足音すとまがひてききぬ花のしづくを
○　奈良　中富よしみ

この戀ひ秋吹く風にことづてば嵐となりて君にしむべき
○　京都　春日朱鷺

紫のよき衣被ぎ六尺の黑髮垂れて君にとつぎぬ
○　陸奥　靜子

母居ます古里思ひ寂しらに夕べも雲の行衞おふ目よ
○　駿河　芙蓉子

相見んを何日とも分かぬ果敢なさに御文抱きてひた泣くわれは
○　函館　ふぢ子

おもはざる君にはげしく思われてかよはきこゝろ死ぬべき思ほゆ
○　秋田　貞子

人違き深山の奧におひたちて歌さへ知らず春十九へぬ
○　長野　百瀬して

おん手なば日ごとに取りぬあゝされど君知らぬ日の安けさを戀ふ
○　駿牧　磯家こゆき

まばゆしといとかろやかにうすぎぬをかむりてありぬ春の山みな
○　常陸、秋山欣子

花の精あまた暗きに灰色の衣きて泣くか冬の日の雨
○　丹波　藤田靜枝

夕されば君は小暗き柱にか身をもたせつつわれおもふらむ
○　磐城　立谷繁子

堪へがたくまたとり出し亡き姉のみ筆のあとに春の夜を泣く
○　美作　杉山忠代

ひやゝけき君の文みて今宵またいねられずして濤の音きく
○　麹町　牧野銀杏庵

吾か植えし一本柳うなだれて眠るが如し春の雨ふる
○　伊賀　岡　花子

みじろぎもなしえぬ狹き獄に入る悲しみなして君ちかひけむ
○　安藝　大山君代

謂えてふ神に近づくきざはしを戀と云ひつつよろこびのぼる
○　伊賀　岡谷光子

鈍色の光りも弱き朝燈あゝ今日も亦憂き日にぞある
○　門司　臼井幸子

ひややかに君をみし日と百日へし日を思ひつつ涙ながれぬ
○　駿河　杉山順子

光あまた都の空をはせかひぬ息づく人は地に這ひありく
○　伊豫　賤子

天地の覆りたる驚きと怖れにおちて我手とられぬ
○　上越　北田信子

鶯のなくなるかたをながむれば夕月いでぬ山もとの村
○　千葉　長谷川文江子

櫻咲く里に住へる人なれば心の花も咲くものと知る
○　下谷　大柴靜枝子

誰すみて誰がながむらん古郷のわが家の軒の秋の夜の月
○　青森　馬場ちよ子

時雨るゝや寺の薮影おん墓の穴掘人の唄の悲しさ
○　秋田　加藤うん子

雨ふれば君を思ひて外を見て白萩散るを悲しみにけり
○　明石　きよ女

わが心雨ふる宵の野の宿の薄き灯かげの淋しさに似る
○　廣島　末丸逸子

朝露はすでに消えしを吾が袖はぬれこそまされ人おもふころ
○　熊本　金子苺子

しひられて舞の袖あげふと思ふわれこのまゝにまぎれていなむ
○　豆州　木村綾野

舞の子が暗き嘆きの瞳より墜す涙に似る時雨かな
○　山口　梁山生

風寒しみ空を走る黑雲は何處の里をうづめにゆくや
○　京都　段谷野鳳子

行く春のうれひの夕に息こめぬやよ笛の音よ君が胸刺せ
○　島根　長崎春子

夕月夜や舞姫のせし小扇のすぎたるあとにしら梅のちる
○　岐阜　谷田とみ子

君が爲めつまるゝ野邊の名もあらぬ小草たらむと來世いのりぬ
○　若狭　津田壽子

おそろしき覺醉の翅にふれたりと魂はおのゝき身をふるはしぬ
○　加賀　勝崎きく子

小流れの柳つゞける岸の上紫の傘さして君ゆく
○　備中　三宅こつる

あたゝかき障子にうつる紅梅の影ぞ日に日に春めきにけり
○　本郷　小稗榮江子

おぼろ夜の空かと見ればあなたには月のありけり花の下道
○　宮城　沼倉ふく

わらびつむ山の細道しら／＼と名も無き瀧に櫻花浮く
○　山口　宮原たか子

春風にさそはれつゝも梅の花あしたましろに散りはてにけり
○　讃岐　小野定子

花かげに身を忍ばせて思出の香に泣く我となりにけらしも
○　茨城　荒木柳子

病む姉の枕の傍にうたゝねの夢路に聞きし鶯の聲
○　大阪　田宮嘉蘭

死ぬと云ふ風雅の人よいさぎよく我が前に死れさらばかなへむ
○　奈良　白ぎく

山寺にやどりする夜は木枯の風の聲さへみ經と聞きぬ
○　相模　山本文枝

春風は南の國の戀人の家を囲りて我家をふけ
○　大坂　木村花子

梅の下永劫に眠れるかなりやのをくつきどころ花ほろゝ散る
○　牛込　小林古都子

病む人の枕邊薄くさす影は氷る許りのきさらぎの月
○　京都　岩淵圃子

白銀のさかつき一つ流れ來ぬ嵯峨の大井のやよひの水に
○　羽前　萬州子

吹雪うつをぐらき窓に終日を少女のわれは末車縫る
○　下谷　細谷鏡子

緋桃さく窓にもたれて外を見れば夢のごとくに白き蝶舞ふ
○　兵庫　田村米江

春の朝野に立つ人の袖を見て涙流れぬ紫なるに
○　失名

眞黒なる双羽ひろげて我たまを奪ひいなんず奇しき鳥あり
○　山口　河村しづ子

愛らしく童ならべる春の野に花ちる如く蝶のまふなり
○　千葉　椎名八重子

あるものが心のかげに忍び入りわが幸は破られにけり
○　横濱　石井芳子

うたはんにあまり小さき我歌と歎して見けり夕の雲哉
○　四谷　珠方こう子

戀てふは光おごれる明星の朝うすれゆく悲しみに似る
○　石川　岡谷久江

靜かなる雨降る日あり少女子が病む額をいたはる日なり
○　播磨　内藤松園

日うら／＼若き女の染を洗ふ池の面に桃の花ちる
○　近江　周防美佐子

よき人の送り來ませし玉章をひらけば匂ふ紅梅の花
○　岡山　角田はる

今日十日われ文やらむ梅の花君おもふ間に一輪さきぬ
○　近江　辻芳子

そよろ吹く風にまじりぬ百たりの少女が唇に觸れてこし風
○　三重　吉川澄江

月乍ら小雨する夜を仄白きかつぎして行くわが少女かな
○　岐阜　村井かね

春の川花をうかべて涯し無き大わだつみに流れ行く哉
○　白ばら

君がこぬ庭のまがきの梅が枝にうぐひすなけば涙こぼるれ
○　長崎　小野文子

君くると待ちうらなへどかひなしひとり淋しく琴ひく夕
○　和泉　金田香雲子

おくられし姿見今は古りたれど君戀ふ心今も變らず
○　はな子

さしのぼる朝日に匂ふ梅が枝にはつねをつぐる鶯のこゑ
○　兵庫　靜子

紅の矢の字の帶にひら／＼と櫻ちりけり蝶の如くに
○　備後　土井香江

大ぞらにはだら雪山そびえ立つあたゝかき日を我は芹摘む
○　越國　原登里子

些かの人ごと憂ひわれ捨てし君を恨みぬ町を歩みて
○　東京　みれ子

暗の夜に梅が香たより名となへば君おと應へ我袖とりぬ
○　岐阜　藤田芳子

春の山さくらちりうくあけぼのの水に影しぬうす紫に
○　石川　山下芳子

長閑にも波の鼓をうち添へて春をしらぶる磯の松風
○　上毛　樋口絲笛子

眞白にも雪降る夕べ破衣きる君かともみし南天の花
○　能登　旦田曉星子

月に泣き波の音に泣き松に泣き泣きの涙に人をこそおもへ
○　高野秀駿子

目閉づれば浮ぶ草原鳥の影こは若き日の習れの姿よ
○　茨城　立花こう

うらゝ日や胡蝶あまたは美しき夢に入らんと憧れてゐぬ
○　伊豫　井上いち子

おごそかに明けゆくみ空仰ぎつゝ神のたまはる若水をくむ
○　兵庫　菅原綽子

培へと欲りする花は咲きもせず徒ら葉のみ生ひ茂る我
○　靜岡　游子

風の翠なみのひとときもさへかへり柳にかゝる月のさむけさ
○　明石　落葉子

舞の手に細き燈火さゝげつゝくらき御堂の階段のぼる
○　近江　中村都音子

我胸に咲けるももちの草花をひとたば摘みて神にさゝげぬ
○　大阪　西戸政江子

逝く春の花散る窓にたゞひとり何思ひけゝ去年のわが胸
○　芝區　ゆかり花

うれしけれ宿世の人と君を知り君に知られて過す月日よ
○　横須賀　渡邊八重子

ますらをが白馬に乗りて金鞍をかざすにも似る春のあけぼの
○　京都　あきだに

落ちて來し赤き椿の花びらを一つ／＼に息かけて見ぬ
○　北海道　入萩津樓

君在さず歌よまぬ夜は香焚きてひとりさびしく琴彈きて居ぬ
○　京都　綿引古都

佐保姫が小琴の糸の切れにしやいさゝ音する夕ぐれの雨
○　武藏　綠女

霜凍る今宵も君と共にありのどけき春の心地のみして
○　淺草　佐藤露子

君を思ひ君に思はれなほ我はさびしごころに囚はれて居ぬ
○　大阪　香崎靜子

いぬの子か降りくる雪をかつきつゝ遊ぶ姿の愛らしきかな
○　名古屋　太田秀蘭

ましろなる雪もいつしか消へはてゝかすみそめたる四方の遠山
○　栃木　小川幾世子

人こふる胸をいだきて野にたてばきなるしろなる蝶たはむるゝ
○　北見　今村りせ子

父母に別れて君に捨てられて十九かなしき運命に泣く
○　京都　井上靜

朝まだきそゞろ歩きに鶯の初音きゝけり杉垣の内
○ 島根 細木安枝
見渡せば白雲いたゞく出雲富士松のみどりの霞をひきつゝ
○ 大島 大内比路
春の朝いさゝ小川に影うつし青くたれ柳をつくろいにけり
○ 静岡 波多野いち子
花かごはかたへにおきし里の子がうまいの姿小蝶に似たり
○ 河内 平井ひさ子
こゝろさす濱いづことたづねまし霞む中ゆく七つ大船
○ 伊豫 越智美恵子
我が病かるしときゝし胥の薬も親のめぐみの一つとしりぬ
○ 東京 小國とさ子
ねやの戸をあくればやがて床しくも梅の香おくる春の初風
○ 信州 東條様三
七人の御神の御座に黒熊の伏せられてありいかめしきかな
○ 長野 若林まさ子
べに椿わが少女子の唇に似しと思ひてそと口づけぬ
○ 神奈川 男 子
嬉しさを分たん人の多き日も憂きを語らん友をしもたず
○ 秋田 三浦文江子
枯野原細き流れは敗残のはかなき生に似てかなしけれ
○ 茨城 平岡幸子
たらちねは無事にいまさんしかはあれど物思はする初雁の聲
○ 高岡 篠原深雪
溪に澄みて流るゝ春の川瀬に入るなりあしふの中を
○ 羽前 斎藤つる子
しづやかなる胸の夕よ埋火の灰おのづから崩るるここち
○ 備中 篠原しげ子
春雨は細かに降りて輝けり小松にかゝる蜘蛛の古巣に
○ 石見 八島きみ子
片袖に鏡のくもり拭ひつゝ涙しつつも紅とく夕べ
○ 山城 入田文子
よろしきは今も風雅の京の衆に花うりあるく大原をんな
○ 埼玉 むらくも
ほろ／＼とかしの實落つる音のして北風さむき山かげの家
○ 滋賀 高畑充
佐保姫は時の帳をあけまして笑み温かにあらはれましぬ
○ 三重 松下金子
横雲か知多の岬かまがひつゝ見ゆるもうれし船の旅人
○ 西多摩 三ヶ島秋子
けさ霜はしろかれのこと枯草のかわきし上ぞかゞやきにける
○ 信州 山本[illegible]
木の葉皆うら葉かへして稲妻に嵐ぞ見ゆる雨來るらしも
○ 日本橋 松岡千代子
ふく風も静けき春の宵ながらおぼろ／＼に白梅のちる
○ 牛込 佐藤いつ子
わが見てし野邊の千草はかれはてゝのこれる菊に霜白く置く
○ 豐前 石田百合子
來るものは去らむとつよくのゝしりて去りたるあとの淋しさに泣く
○ 札幌 杉葉女
胸に燃ゆる戀ひの炎のむら／＼と躍るに似たり陽炎の野よ
○ 日向 佐藤しな
大きちさき潮の白浪くだけちる巖にたてるあはれ姫百合
○ 備後 作田鶴代
とゞめてもとゞまらなくに行く秋をひまなくまねく花すゝきかな
○ 伏島直子
わかれてぞありし日おもひ逢ひ見てはたゞ日に向ふ心地のみする
○ 兵庫 杉山春翠
春の野に雲雀きゝつゝつぼ菫つみてながしぬ小さき流れに
○ 東京 和子
思ひ絶え文がらたきて窓によればいくつともなき黒き蝶飛ぶ
○ 札幌 澄子

○病める子の母呼ぶ聲もきこえつつ賤が軒端に春雨のふる　河内　木村志滿子

○春くれば山ぞ嬉しき梅にほひもゝ鳥啼きぬ君とわれ住む　札幌　土門秋子

○二つ三つ髪にこぼるゝ櫻花すくひとゞめよ君が御手に　近藤しげ

○神垣のいかきに匂ふしら梅の香に似てましぬたふとき禰宜は　千葉　高濱春枝

○われとわが心はをかし野狐の姿と化けて歩むがごとき　大阪　いとやなぎ

○波よする磯の月夜の花ふゞき舟よそほひて君をまつかな　筑後　梧桐知登子

○この日頃何におびへのわが魂ぞ君といふ名に胸どよみする　大分　本田一枝

○持ちそへて筆とるすべを敎へたる師の戀しさよ七夕の朝　上野　思草子

○何となう胸苦しき日來し方のあまたの愁つとかへり來ぬ　若狹　蝶步子

○菜の花の續く野末に草の庵三つ四つ見えて梭の音する　美濃　吉見房子

○濃紅に輝く夕日背にあびて今少女子は神に似るかな　遠江　島花子

○吾が胸のまぼろしいにて月の夜に雁行く方をしばしながめぬ　相模　小林英子

○しら梅を活けしちひさき室に居て日れもすわれは人をこそおもへ　沼津　長井とら

○谷間より梅を誘づれて渡り來る初音の鳥のうぐひすまちぬ　美濃　酒井とみ子

○つよく言ひて見返らざりし野の夕暮をおぼへて落日を見ぬ　静岡　富永朋子女

○川へだて船と船との少女子のもの言ひかはす花の春かも

○金襴の袈裟ひるがへし聖たちいのるに似たる夕映の海　伊豆　中村園枝

○姉君の墓に來りてひざまづき涙ながしぬ春の雨の日　埼玉　中山ひろ子

○ふと覺めし園の絵磯さざ波のさゆらぐ心地しまた夢に入る　福岡　圭枝

○この年も一人の君をしのぶかな睦月二日のゆきの夕ぐれ　信濃　喜夜

○變れりと君は怨むや我は只永久に熱きを逐ふ性なるを　佐賀　萬子

○待ち詫びし君は來ましぬしかづかに思へることもわれは得言はず　備後　伊藤ひさを子

○かずしらぬ梅の匂に霞むらんひるもおぼろの月の瀬の里　京都　安岡富美子

○小夜更けて窓打つ風に目さむればともし火うすし亡き母思ふ　上總　森嬉美子

○この思ひ君に通はゞ白すみれこきむらさきに咲きやかはらむ　兵庫　菅原よしゑ

○花の香に迷ひて出てし白の蝶むなしく歸る少女のむれに　門司　吉水琴子

○我が心秋夕雲の色あせて野の黄昏るゝ如しといはむ　神奈川　岩澤幸實

○春立ちて霞分け入る我が心行衞はいづこ君に問はまし　静岡　土屋野蓮

○冬の雨枯野を辿る旅僧の歩みにも似てとぼ〳〵と降る　群馬　須藤みどり

○さくら咲く櫻の宮のたそがれに水にうするる雲の色かな　大阪　土橋仙花女

○紫の水美き加茂の瀬や友禪さらす人かすみけり　牛込　平塚白百合



○規定 論文と云へどむづかしきことにあらず諸嬢が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以內一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○お茶菓子に就いて（地賞）

越後長岡市　佐藤浪子

何事も身分相應と云ふ事が大切で御座います、私、いつも他家樣へ伺ひます折、おもてなし下さるお菓子に就いて考へます、お歷々の御家柄で御座いますなら兎も角もですが普通のお家で一ケ四錢も五錢もするお品をお茶うけにお出しになる事がよくあります、申すも失禮ですけれどそれは少々身分不相應でせう、それが又不思議な事には幾度上つても同じお菓子で、時によると塵がついたりしてゐる事があるのです、かうなつては折角お品好く七ツばかり並べて、お進め下さつてもほんの義理一偏後が見透かされる樣で如何にも頂くに心苦しいので御座います。下等な生活に慣れた私なぞは、たとへ、お豆煎なり、搔餅なり何でも結構、心から食べさせようとして下さるのが何より嬉しいのです、私の宅でも何日も、恥かしいとも思はず身分相應に煎豆であれ、安パンであれ只心よくお客樣へお進めするのを何よりと心得て居ります。

何でも無いことながら面白き思索です、大體に於て首尾亦よく調ふて居ります（評）

○貴き手（人賞）

播磨　內藤松圃

餘りに荒れた手を人の前に出すのは失禮だと云つた人が有つた、私も左う聞けばさうかとも思はぬではないけれど、然りとて仕事もせずに朝夕のらくらとして居るのは猶更國家に對して濟まないではないか、私ならば先其の人の平常を思つて敬意を起さずには居られない、惣じ手が荒れるから指環がうつらぬからとて、女で有りながら自己の身の廻りさへ一々人手をからねば無らぬ樣な事で立派に親に孝行が出來るだらうか、夫

に仕へる事が出來るだらうか、女子の敎育が出來るだらうか、子として、妻として、母として其の務めも出來ない樣な事では如何に美しき手と雖何の價値が有らう、成る程、柔い白い手にダイヤの光輝いて緋縮緬の襦袢の袖が優しうからみ付いて居るのも惡るくはない。けれど其れよりも是れよりも、親の爲め夫の爲め延いては國家の爲めに、朝は未明に起き夜は更くるまて、汚ない仕事、冷めたい仕事を物ともせず、營々と働いて居る婦人のひゞと皹と煤とて荒れ果てた汚ない手の方が、餘程貴いては有るまいか。

後者の手は前者の樣に柔い美しい手ではない、又些の寶石の光もない、けれど彼の手の裏面には幾多貴き感謝の淚がそゝがれて有る、見よ彼れの親、夫、子女は如何に彼れに感謝せるかを、親の嬉し淚、孝の極てはあるまいか、夫の感謝、如何許りそが心に奮發させる事だらう、子女の感謝、如何に柔き胸に淸き溫き感化を與へるであらう、

あゝ貴き手、果して人前に出して失禮に當るだらうか、私は此の汚ない手に接する每に隱れたる偉人の勳章と思はれて轉た敬慕の念に堪へないので有ります。

見つけどころは佳いが單純なことを强いて引延した樣な理の爲めに理を說いた弊はあるまいか、煤けた手なら一應洗てから人の前に出したら宜からうと思はれる（評）

【秀逸】

○學問の錆

本鄉　千代子

久し振で縫物をし樣と思つて針箱を出した、そして針をぬかうとして見ると、まあ！此間迄美くしい銀色に光つて居た針は、もう殘らず厭な色に錆びてしまつて一本も役に立つのがない、あら此針の錆びたのは使はずにおいたからだと思つた妾は、しみ〳〵と自分の身に引比べられました。

今から恰度二年程前妾が學校に居た時分は、三十何人かあるクラスの中で、三番より下つた成蹟を取つた事はなかつたのでした、其妾が二年後の今はどうでせうきのふも妹が「姉樣これはどういふ譯？」と云つて物理の本を持つて來た、けれ共いくら考へても分らないとう〳〵分らずにしまつた、あゝこれで昔秀才とか何とか云はれた妾なのだらうか、女學校の二三年位の學科なぞは睡むつて居たつて分つたものをと思つて、妾は恥づかしいのと口惜しいのとで覺えず淚がハラ〳〵と落ちました、あゝそれは今此錆びた針を見て始めて分りました、學問は學校丈で習ふものとの間違つた心から、卒業式と共に習つた學問も其儘葬つてしまつた

のですもの、矢張り此針の樣に妾の學問も使はずにおいたから錆びてしまつたのです。これを思へば學問といふものは、敎室の椅子の上計りてなく、家庭の机の前ても、また社會の黑板に向つても、いつも〳〵決して離してはならないものと、つく〴〵悟りました。

適切（評）

○忠告と實行　　伯耆　新田文野

妾の母校に、同窓會がありまして、妾も其會員の一人として、出席しました。其時母樣に、強ひられて、小豆縮緬の羽織を着て、參りました。處が、一番心安い、二三人の友だちが寄つて來て、「貴女に忠告することがある」つて、眞面目におつしやるから、妾は「どん麼こと、云つて聞かして頂戴」つて、云ふと、三人とも、口を揃へて「貴女の召してゐらつしやる、羽織、あんまり、はでに見えるわ」「さうこれからは屹度氣をつけます」つて妾は、誓つて置きました。



雪景色　　青森　松尾千代子

其後、又、母校でちよつとした、茶話會がありました。妾は、今度は、母樣のおつしやるのも、聞かずにじみな縞の羽織で出かけました、すると、まあ吃驚するぢやありませんか、此前、忠告して下すつた、お友達は、揃ひもそろつて、小豆の縮緬の羽織を召してゐらつしやるんですもの、妾は何だか、僞られた樣な、氣がして、有難い恩ある忠告を、不快に思ひました。そして、妾は、人に忠告するには、必ず自分も實行せねばならんど云ふことを、痛切に感じました。例ひ、何萬言、言葉を費して、人に忠告しました處で、自分も實行せなけりや何の効もありません。却つて、人に、反感を起させる樣なものです。ですから妾は、言葉で多くの忠告するよりも少しでも、自分が行つて、忠告する方が、はるかに優つて、又お互の、爲めになるだらうと信じます。

事柄は女ぢや無ければ分らない樣なことですが、面白い教訓を實驗になつたのは幸福です（評）

○書き直しに就て

横須賀　鹿島みどり子

凡てものを書き直しするのは決して賞めた話しでない、が又絶對にわるいとも云はれない、何故なれば書き直しは奮發心があるからで、つまり勉強になるのです、先づ硯を洗つて筆をおろし漸く一枚書いたとする、思ふやうに巧くない、最つと上手に書かうと又書く、どうも巧くない、が前のと比べると餘程上手の樣に思はれる、こんどは尙も巧く書かうと又書く、恁ういふふうに度重なるから、終には知らぬ間に恐ろしい程上達する、若しも奮發心がなくて、どうでもよいと云ふ人は上手でも下手でも、きれいでもきたなくても、かまわない、只書きさへすれば事足れりだから、何年たつても決して上達する氣遣ひはないのである、けれど書き直しも習慣にならぬ樣に注意するのが肝腎です、即ち紙に餘裕のない時、急ぎの場合に困るからである、故に用紙も十分にあり、時間も餘裕ありて、經濟のゆるす限りは、書き直しもわるい事はないだらうと思ひます。

書き直しは又遣り直しです不屈不撓の途晃に存するわけです（評）

○自然のいましめ

信濃　黒田なを子

私共の周圍にあつて目にふれ又耳にきくものによく心を用ひて見れば必ず何かの教訓を與へてゐると思ひます、寒い霜雪を冒して奥床しく開く梅の花には、誠の勇氣が表れてゐます、美しく咲いて潔く散り行く櫻の花は、大和民族の精神を表はしてゐます、四時色をかへぬ松や竹は、女の操の手本であります殊に春風のま

にまになびく柳は何と從順なものてはありませんか、秋去つて春來る燕てさへも、正しい規則を守つてゐます、花にたはむれて遊び狂ふ胡蝶は、意志薄弱な現今の少年少女をいましめてゐる樣に思はれます、依然とそびゆる峻嶺は、動かぬ心をあらはして居ります、之等は只一例にすぎませんが猶其他のものに意を注いてごらんなさい、一としてよい敎を示して居らぬものはないてありませう、私は自然の敎訓を良敎師として每日はげんて居ります。

新らしく無いのが殘念てすが穩健な觀察てあります（評）

○交際狹き必要

讃岐　秀眞蓉子

人さまに依ると動もすれば交際廣くすべき必要があると謂はれます成程その交際廣いことは或る場合には幸福てあるかも知れませぬ、が、凡そ社會のことは表面から觀察致すと共に又裏面からも觀察せねばなりませぬ、てすから一方から觀て幸福と見られまする手廣き交際も、一方から觀れば却て不幸となり交際の狹き方が人世の幸福てあるかも知れませぬ、殊にお互さまの女學生の身にとりて考へて御覽なさい、其交際の廣き爲め格別用もなき來訪者のために幾何の時間を費やさせられますか、終日來客の新陳代謝て、家政の秩序も紊れ、讀書思考等の時間も之れが爲めに費さるゝ事が果して何の幸福てしようか、妾は其不幸たるを知つて幸福たる所以を知りませぬ、而して、來訪者の少なき其時間の餘りある時萬事を爲しましたならば、或は學者たり、將た技藝家たり、自分の意の欲する儘に之れが奥を究むることが出來ると思ひます、之れ不幸と謂べきてしようか、否幸中の最幸なるものかと思ふのです、故に妾は「人間交際の廣いのは是れ幸に似たる不幸にして、人間交際の狹きこそ不幸に似た幸なりと」否？まづ日常の經驗に徵して御覽なさい。

一理あると思ひます、しかし餘り自分の修養の爲めと云つて閉鎖主義を採つて友誼まで忘れては偏屈か利己心の樣にも思へませうこれからの世はこんなことが六つかしいのですが、現に刎跳れかへりの所謂交際家に頂門の一針てす（評）

○運命

播磨　辻井浪子

急轉直下とか、意外の好運とか、人の一生には驚かれる事件が隨分とあります。豫期した事がみんな外れたり、望外の成蹟を得たりすることは稀てはありません。運命とはかうした事をいふのでせう。

女學生なんて威張づてゐられる方は、やれ理想だとか希望だとか戀愛が神聖だとか自由だとかいつてゐられるが、私はそんなに仰山らしくいふべき事じやないと思ひます。いづれは棚から牡丹餅なんて當にはならないし、といつて自分から惡い方へ、迷惑の方へ歩むこともないと思はれます。だからてす、運命に服從するこれが人生唯一の手段だと存じます。運命に逆らふなんて本氣の沙汰てはなくて私の眼からは狂ひじみた眞

似としか見えません。

それは私とても目的を立てること、理想にあくがれることを排斥する程野暮ではないので、理想の家庭を望むのも嬉しい事だし、あれやこれやと思ふのも樂しいものだから却つてこんな慾望がなくちや女と雖も駄目だ位は存じてゐますけれども、あまりそれに執着するなんかが愚だといふまでです。

御覧なさい私等の力を。たゞ自然天然を利用するといふまでではありませんか。古來自然力天然力に抵抗して勝を得た人がありませうか。私は運命に從ふといふ事は自然力を利用するといふ人間在來の歴史にも鑑みた仕方で、これが安全な道だと思ふのです。世渡するのには。

運命のゆるす限りはすこしづゝでも向上するがよろしい、もがくのも面白いです。併し一旦四周の事情に捕はれたらもう尋常に浮世の波にもまれるのがよろしいではありませんか。俎板の上に載せられた鯉は動かぬと聞いてゐます。私はこの鯉の考が利巧だと思ひます。

所謂運命宗の弊所を出したものです、されば其措辭に「牡丹餅は棚から」だの「野暮で無い」だの「鯉の考が利巧」だの随分不眞面目な不謹愼な語がある、絶望者の言としては止むべからずとするも是れ運命なぞの大問題を論ずるもの丶態度では無い、今運命があなたに死れと云へば仰しやる通り俎板の鯉となつて殺されますか、もつと修養して運命と自由意志の關係とか理想と現實の關係等について靜かにお考へなさい。（評）

○私の悟り

靜岡縣　波多野　いち子

今日の晩方、學校の歸途に私はふとこんな事を思ひました。

人が悟り悟りと謂ひますが、それは眞の悟りぢやないと、なぜなれば、皆様の所謂悟つた人と申しますのは「冷靜なる理性」の人を指して、言ふのぢやないか知らと、私はさうぢやありません、そんな尼坊さん臭い事、私はそれよりか、悲なしい時には大に泣き、樂しい時には大に笑ひ、憎くらしければ大に怒りまして、凡人と何の異つた所もなく、平々凡々と送るのが、眞の悟りぢやないか知らん、喜怒哀樂色に現はさずなんて、高く止つて、冷つこく、嬉しくても笑はず、辛くつても強いて泣きもせず居るものは、まだ悟り様が足りないぢやないか知らん、私は醉つて醉つて、底迄醉つて、迷つて迷つて身も世も忘れる程迷ひぬき、憧憬れて、憧憬れて、歌つて咽喉も裂けよと唄ふのが眞の悟りだと思ひます。

即ち人生を有趣味に送るが眞の悟りだと思ひました。

作者が指摘したる所謂尼僧の悟の弊はさる事としても迷ひや醉ひその事が悟りであると云ふのは實に奇矯な議論です、悟りと云ふものが眞にどういふものでどれ丈けの價があるものかこれらの議は決して容易ぢやありません（評）

○笑ふと泣くと

信濃　赤津じつ江

私は小さい時から滑稽と言ふものが好てありました、それてありますから川柳や狂歌など作つて見ます、すると私の親や兄さんなどは女のくせにと小言を云ひますけれど私は何うしても止められません。

本誌へ投書なさる諸姉様方の文など見ますとみんな悲しい様な筆づかひキット涙と云ふ字を見ます私だとて悲しい様な時は無いてはありませんがいくら悲しんだとて仕方ないと諦めて笑つてます。そこで妾が姉様方に此面白い川柳や狂歌をお進めするのてあります、私が二三年前讀賣新聞の川柳やへなぶりて名高か〻つた朴山人先生の發行した雑誌滑稽文學を讀んだ事があります、其雑誌に同先生の女性と狂歌と云ふ記事がありました、私はそれを讀んで非常に嬉しく思ひました、一寸摘みますと、



らうや　晶川　内田よし子

滑稽文學は大口を開いてゲラ／＼笑ふ馬鹿々々しいものではなくてにこやかに微笑むべきものだと云はれ、其次に『笑は涙と共に、人の生命である。女性にとりては、殊にさうである。面も涙は、タマに一滴ハンケチを霑ほすによつて、値があるので、不斷にメソ／＼泣かれては困るが、笑は時としては可ならざるなして、朱の唇頭にいつもにこやかな微笑を湛えて居る事は寧ろ女性の德と云ふべしてある。』と云はれ、尚次に『(女の癖に、狂歌の、と騒いでは不可ません)など〻云ふ阿母さんや、教師は女性の値を害し德を妨ぐるものである』と書いてありました、また外に昔の狂歌師の事もありました、其中に　持統天皇の歌もありました。私は其雑誌を「女の癖に」など〻云ふ人に見せてやりました、同じ此世に生きて居るものなら常に笑つて暮した方が外聞もよい

し又自分も愉快であるから是非此笑を買ふ樣に滑稽物をお進めするのであります、昔から笑つて損をするのは箔屋ばかりだと申しますが姉樣方が箔屋でない限りドン〳〵お笑ひなさい。本誌にも滑稽談があるけれども誠に振はないのを私はなげいて居ます。

如何にせん笑ふとばかりて無い世の中だから仕方が無い箔屋の損得づくぢや無いが笑ふ事が出來ないのです、笑とか滑稽とか論ずれば六つかしいが現に角若い女がたゞ茶かしたり駄洒落を云つたりして世に處する事は斷じてよくありません（評）

○儉約すべき事の例

大阪　鍛　鶯

井底の蛙の樣な私はつい近頃まで日本國中は至る處、汽車や汽船の交通が開けてゐますから、山の奥海の果までも開化してゐるだらうと思つて居りました。處が次の樣な話を聞きました。四國の阿波から十里計り隔つた田舍の事です。そこの人の常食は粟が主で非常な御馳走の時は混物のない麥飯ださうです。肴は年に何度とか定日があつて其時は木を一荷擔つて行て買ふのださうです。砂糖も年に三度と限り、而もそれが黑砂糖で御飯の後で大皿に盛り上げたのを皆の人が順に嘗めては廻すのださうです。牡丹餅を拵へても砂糖は入れず鹽からいのを食べるさうです。それでも學校の設けはありまして子供は大きな辨當箱二つに粟の握飯を持て行きます。其田舍の人が大阪へ嫁に來ましたので家の人は鯛を丸煮して出しましたらこれは何と云ふ物ですと尋ね、お肴ですからお食りなさいと云ふと一口入れてこんな甘たるい物は食はれませんと。それから方々見物にお供しますから下駄をはいて下さいと云つた半町計り行てから、矢張恐くて歩けんから草履にして下さいと云ひましたさうです。私は此れを聞まして、未だ此樣な片田舍があらうとは思ひませんでした。それと同時に、漸々世が開ける程贅澤に流れ徒に西洋々々とお金もない癖に裕福な文明國の眞似してゐる私達日本人は此樣な田舍人と比べて見て少しても儉約をして國の爲に盡さうではありませんか。

これも一應御尤もですが世は杓子定規では行かず、角を矯めて牛を殺す樣なのも困ります、今チョン髷に結つたり行燈を點けたりして居ても時の勢はお構ひなく押寄するのですから（評）

○醉茗樣と夜雨樣

攝津　みなしご

醉茗樣が新體詩の選者でゐらつしやつた時分には、拙い私の作でも投書する毎にお載せ下さいましたが、夜雨樣になりましてからは、始め二三度の外、出しても、出しても沒書になります。殘念で〳〵たまりませぬ。が私はこれによつて兩先生の御性質を悟りました。何故なれば、私は平凡な女性らしい詩をつくります、それを醉茗樣はお取なさいます、夜雨樣はお取なさいませぬ、これによつて醉茗樣は女にたとふれば、優しく而も平凡なる女性的であると思はれます。また私はまだ初學の事ですから六ケ敷いのは分りませぬので、夜雨樣の評ばかりを毎號讀んでゐますと自然に分りました、極めて神經質で熱烈の氣の逬るやうなそして心の美はしい女性的だと。然し感情のかたよるやうな傾もあるやうに思はれます。

處が寫眞を拜しますと大違ひ、醉茗樣はどこかきかぬ氣の神經家らしく、ひよつとしたら厭世觀でもお起し遊ばす方のやうに見受けられますが、夜雨樣は反對に樂天家らしく見えます、然し實際はあべこべだらうと思ひます。こんな事かきまして、夜雨樣はお怒り遊ばすでしやうねえ。また今月も沒書かしら。

散文詩



○絲（地賞）

佐賀　蔦子

ある生ぬるい日。紫と、紅の、糸が
する〳〵と天から下りて來た。そし
て、ふら〳〵と寄つて來て、もつれ
て、くる〳〵と、右に廻うた。と、ど
うしたのか、今度は向を變へて、左
の方へくるりと廻うた。おや、と思
うてゐると、はらり。兩方へ分れる
そしてまた、づゝと、下りて行く。
自分は默つて、それを見てゐる。あ、
また寄つて來た。よれるのか知ら：
：いや。よれない……。づゝと下り
て行く。まだ自分はそれを見てゐる。

太だ神秘的、斯う云ふ詩に能くある解決も説明もないから却つて詩の感を成してゐる（評）

○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十五行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○かたみの鏡（人賞）

攝津　みなしご

これは女の靈魂ですよ、
忘れるんぢやありませんよ、
と、云はれた言葉が、
暗いくらい私の胸に、
浮影のやうにふと現れた。
俄に散歩て見たくなつた、
何處をあてともなしに。
鏡はしつかり帶にはさんで、
山を見たり野を見たり、
いつか海邊にきて了つた。
太陽は今沈みかけてゐる、
あれ鳥が啼く、
木の葉がひら〳〵落ちる。
鏡を出して
顔をうつさうと思つて
見ると、あら！
金の波やら、銀の波やら
きら〳〵した色が活動いてゐる。
ドドードッと後の方で、
凄まじい音、
鏡の面は眼が廻るやうだ。
また大きな音がした。
あつと思つた其せつな、
私のからだは
よろ〳〵とうしろへ、
何者かに抱きしめられた。

内容は確に詩に相違ない、形式が整えないから一見詩らしく思はれないけれど、能く味ふて見ると確に詩だ（評）

【秀逸】

○小窓によりて

信濃　喜志子

妾はどうしてこんな寂しさが好だらう、他の姉妹は皆若々しい言を云つたり行たりしてゐるのに、妾はどうしても人並の子の血は享けていない

のかしら、皆人は足早に明るい新らしい樂を〳〵とあせつてゐるのに妾はちやうど雨のやうに日に照りはへてよろこびのぼる雲の下にゐる、雨のやうにいつても反對に自然に沈んで暗いところへ好んでゆきますもの、けれど其がまた忘られず快樂なので全く我を忘れて居ます。

夜はいゝね靜かで、――妾はあの水、松の森が一番好なの、みんな外の木は枯てゐるのにあればかりは雄々しい姿をしてこの寒さにもひるまないだもの――かず〳〵の星を瓔珞にした黑髪のやう――。枯野の常盤木、こんな氣高い胸に泌みる言葉はないと思ふ。

(ハヽヽ兄さんよわいのねネ!母様、妾は強いまだ一度も敗けませんにね……)妹の聲、あゝあの勝敗がきまつたのか。

人の胸はなぜあゝ安らかなのだらう、なぜ妾は、常に滿足と云ふ蜜を吸うことができぬのだらう。

感情がなだらかに爽はれ、强て抑へつけてないから此の暗黑な思想に自然に引き込まれるやうだ(評)

○古い時計

熊本市　近野　涔子

ふと見上げた、
矢張り其儘だ――音もせぬ。
或る寒い〳〵冬の晩であつた、
針が止つて了つて……
忘れもせぬ泣いて別れた日。
梅も散つた、鶯も聲がさびた。
も――そろ〳〵桃の節である、
溫かい春風が和かに吹いて
道端の艸まで生氣付いた。
ても矢張り〳〵……
死んだ時計は今日もめぐらぬ。
嗚呼いつまでも〳〵。
短い針が指してるXの字……
……そのXの字……
別かれて逢つて、
逢つてもまた直ぐ別れる。
別かれては何日また逢へるだらう?
熱い涙がハラ〳〵と膝頭に落ちる。
死んだ時計は今日もめぐらぬ、
――いーえ、あすもあさつても。

思ひつきてあらうが、一寸目先が新しい、も少し叙事の分子を少くして、感情を出したら好かつたらう(評)

○春の冷え

松本市　川上　惠子

暖い春の日は、薰こめた被衣をくとつて柔かな肌に抱かれたやう、ぽうツとほてる頰をなぶる黑髮――うつとしい――。
紫の裾はふツくり、立矢の帯の下はぬく〳〵する。
小鳥が二羽、樂しげに語りながら、霞の奥に消えた――と一羽のみ、淋しくまひもどる、

私の頭上を冷たい羽根音をして。
ふと、別れたる人を思ふ――、
受けた痍――あとは消えても、受け
た其日の痛みは忘られない、
捨てられても情に温かゝつた昔は戀
しい。
貴い愛情を弄ばれたのを怒るより
今、捨てられた淋しさが悲しい
熱せられて冷えたのは一層つめたさ
を感じるもの。
ア、――亂れた想、冷たい心、
春の日はぼか／＼暖いけれど。

少女心の戀が能く表はれてゐる、捨てられた悲痛、胸を刺す(評)

○笛の音　長門　田中　華子

幽かな雨のにほひが、
すうと漂うてくる。
遠い／＼森のあなたから、
今夜もまた笛の音が、
きこえる。
――潤みを持つた、柔い
涙を誘ふ――
私はいつの間にか自然に
頭が垂れた。
しつとりした空氣、
濡れた日光。
ふと笛の音が絶えた。
この時、
森の中にかすかな、
落葉の音がした。

僅に「落葉の音がした」と云ふ一句あつて、此詩が全體に生きた(評)

○上り坂　秋田市　沖口みさ子

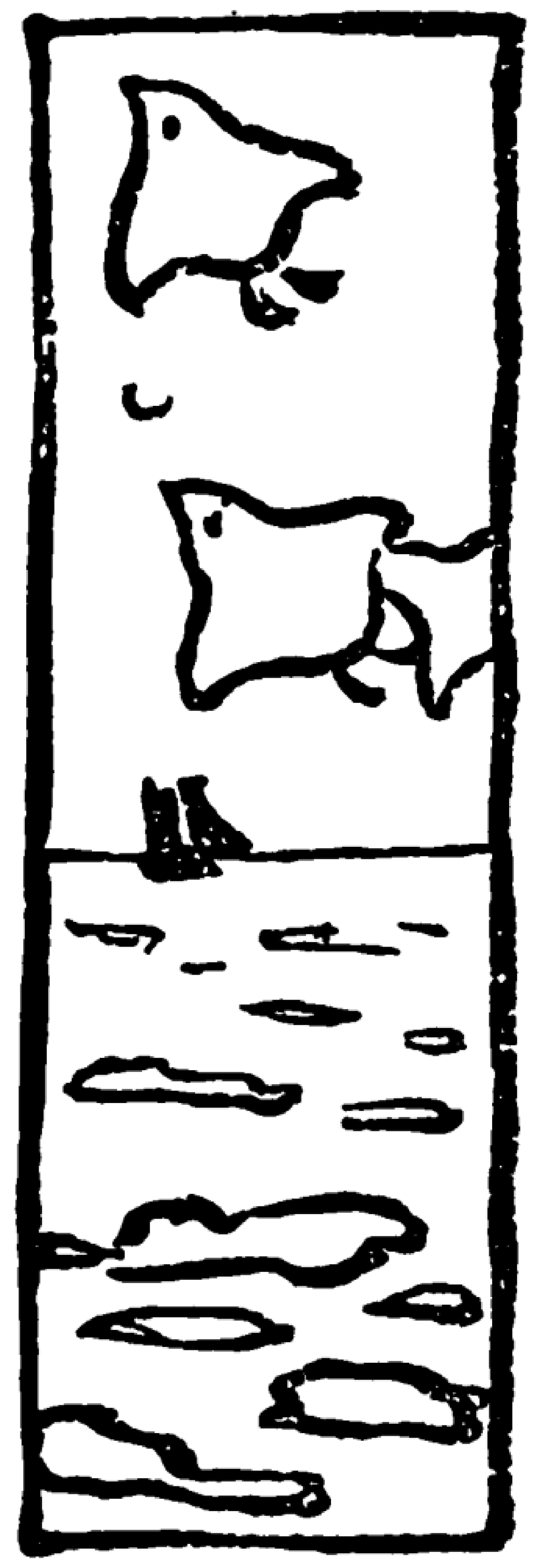
ダラ／＼坂を　呼吸きつて
半分登り　つくした、
道ばたの木に　寄りかゝつて
ぢつと下を見た　あれ／＼
一人の若い　旅人は
大きな重さうな　袋を背に
負ふて　登つて來る
旅人は　私の側の木に
腰を下ろした
つか／＼と前に行つて　叔父さん
あなたの大きな　袋なあに
此れは人生の　重荷ぢや
私は目を　丸くした、
それお前の背にも　私よりも
大きな袋が　あるのに
知らぬのかと云ふ　後ろをむく
途端ふと目に　ついた袋
寝はじめて背が　重くなつた
年をかされると　かるくなると
旅人は云ふた

○足音　播磨　松園女

足音がする、
何だか後の方へ引き寄せられる樣だ、
私はふり反つて見たいのを無理に辛捧して知らぬ顔で矢張編物をして居た、
足音は段々近づいて來る、
頭が自然に後へ廻り相だ、
私は凝と耐えて居た、
足音は私の後でハッタと止むだ、
頭が縮まる樣だ、
背の高い人が立つた儘首筋を見下して居るのが見える樣だ、
苦しい、
何だか私を壓迫して居る、
編物の手迄捕へられて居る樣、
と大きな手が左右から出て來た、
四方はくら暗である、
それでも私は凝つとして居た、重つたい手が段々ゆるくなつて指の間が赤く透いて見える、
やがて其の手は一時に取れた、
「怒つたの？」と輕るく肩を打つ、
私は初めてふりかへつた、
甘い目が奥の方からさゝやく――

短文

中村文學士選



○規定　氣の利いた文章を募る　短くして十六字詰七行以内凡て振假名つきハガキは許さず一人一章に限ること　賞は両種を送呈す

○思ひ通り（天賞）

名古屋　胡てふ

▲大鏡の中にスト浮出る姿、江戸紫の二枚重ね、褄の玉鞘がぱつと亂れる、障子からさす朝日に金糸がちら〳〵する、帶の洗朱に蝶々の大柄がスツキリと浮出た樣、お大鼓をなでて後姿を鏡て見て、金の一りんぼたんの帶留めをメめて、ポンとたゝく、重い高島田をもたげる樣にして鳥渡衿を直して居ると、女中が、御姫樣お車が……一寸からうして暮らして見たい。

御尤も

○妾の想ひ（地賞）

京橋　翠調子

星の光を壺に溶いて、それを百合の香に練り、美しい鶯の音を吹きこめて、簪に瓔珞、頭に首輪、腕に輪かけて、五色の雲にのつて、碧瑠璃の空を飛んで見たい。

これは又詩人の願

○奥津城（人賞）

京都　岩淵玉子

今は昔古き都の上達部、白く優しき面に新月の眉美しく、ゆかりの色の御衣召して、櫻花散るみ園生に蹴まりして遊びます其姿、思ひ出せば果敢なき世、今は唯此の奥津城の主、あゝ恨は深き春の夕、風なきに紅椿の二つ三つほろりと落ちて。

秘々の恨、

【秀逸】

○時

四谷　味方てう子

「ナアニ」未だ若いから、——と私が十七才の縁談が破れた時伯父さんが言つた、父も母も、私もそう思つた。今二十を越した獨り身の彼の時から五年經つてる、伯父は相變らず「ナアニまだ若いから」と。——時計は絶えず命の綱を刻んでる。

かくながら一生？

○宵の春

大阪市　木村波奈子

橋の欄干に靠れた。素絹に覆はれた樣な月は、火の見櫓を軟かく辷つて堤の櫻を朧に包んで居る、すぐ下を艶々しい笑聲を乘せて船が下る、川下を眺めると、小提灯がちら〳〵と柳を潜る、私は恍惚として、何かなしに、春だなあと呟いた。

千金の春宵。

○雨の日

大阪市　山内溪子

椿がそゝと低い音をさせて落ちた、糸の樣な雨はまだ止ない、どこから

か、鶯の聲が、かすかに聞える、私はジーと耳をすましたが、もう聲は聞えない、また椿がそゝと落ちたかうして今日の日は暮れるのでせう。

閑寂、

○鶯餅　長野　西條字女子

私は四月頃になると、讃美歌を歌ひながら摘草致します、鶯の聲はどこからともなく聞える、茶碗のかけまの音とが聞こえる、かくして摘んだ草は、やがて優しい母の手によつて鶯餅となるのであります、

御裾分けにあずかりたいものです、

○落花　信濃　たづ子

紋お召の東コートを着た上品な奥様が金襴の背負帯をした可愛らしい女の兒の手を引いて石段を下りて行く、暮の鐘がぼーんと響くと落花がはら／＼とその後を追つた。新發意が悄然鐘樓に立つてそれを見送つて居る。

好個の畫題

て見える二尺位の小川は、下手の方に在つて絶えず私の調子を取つて居る、上手の方からは馬子の歌と驛鈴



女中仙姿　鈴木みさ子

○影　長門　田中華子

冬の日の午後、日がうつすり照つてゐる。自分の前を老人がひとり歩いてゐる。うすい影がその後を従いてゐるが、今にもすうと消えて了ひさうふと、後をふり返ると、自分にもうすい影がボンヤリ従いてゐる。私は思はずぞつとした。

入相の鐘がボーン。

○朧夜　信濃　岩波むら子

光りの鈍いぼんやりした月は今落ちやうとして僅に柳の枝に支えられて居る、蝙蝠が一羽つゝと妙な聲をして彼方此方二三邊往來して軒下の暗がりに隠れた、裏手の道を町出の馬の歸るであらう

か、鈴の響きの絶間〳〵を追分の唄節面白く聞えて來る、

人懐しい晩、

○長閑の日　牛込　塚原けん子

紅色がゝつた霞が緋桃咲く野邊に流れて何んとなく長閑である。淸い流れの川べに鶺鴒が一羽何か餌を求めてゐるらしい、川の向ふ岸には菜の花が咲いて蝶が二ッ三ッ樂しげに戯れてゐる。遠い〳〵向ふの湖に小舟が浮かんで霞の中に幽かに見える。

空には雲雀

○たまらんのだもの　阿波　長曾我部菊子

莞爾笑つて亮は母樣のそばに寄つて座つた。眞實ににこ〳〵もので(母樣もううつるの、)(お動きぢやない只好い顔おし)(ふむ)と可愛くうなづいてきまつてたけれど、寫眞屋樣に(まつすぐに)と言はれてはと笑ひ出した。(亮！)としかられて、(だつてたまらんのだもの)ときよろんとしてる間に、(へイ寫りました。)

活動寫眞、

○春日和　埼玉縣　岩田江舟子

るり色、美しい烏川の、眞砂圓石ザク〳〵と、白い手拭を冠つた里の娘が二人、長閑な歌を唄つて行く。赭いのは赤城山で、青いのは秩父群山河向の里々が紫に霞んで、遠くうつすりと、淺間山に殘んの雪が見える。

風がぞつと寒い。

○乞食　信濃　黒田奈尾子

木枯强く吹きすさぶ夕暮の道に、一人の若い女乞食が破れた着物をきてふるへながら、吾妻コートに暖く身をつゝんだ奥樣や、美しいショールをかけたお孃樣を見返りながら、目には一ぱい涙をためてゐる、あゝ皆同じ社會の人でありながらと私は同情の念にたへなかつた。

明と暗。

○同じ年　ゆかり子

向ふの嫁は私しと同じ年なのに早や二人の子の親となつてむづかられながら暗い内から機織の賃仕事……去年の暮れには其織賃が八圓有つたので玄米一俵と殘りで姉妹の袖無羽織を買つてやつたとて喜んで居た。私しは不足無い老孃　眞の幸福はどちらに有るであらう、

それは向うの方でせう。

○親友　土井澄江

形式上丈けのお友達ならいくらもあるけれど、親友の無い私はほんとに不幸で御座います。淋しいような恐ろしいような薄暗の世をたゞ一人で辿らねばなりませぬ私は他に何も望む物は御座いませんたゞ一人の親友が欲しう御座ます。

誰も皆かくこそ、

○エンゼル　京都　くち　なし

「いつしよに卒業した中でも宮城野

様は小學校に奉職して天使のやうな子供達のお相手とはお楽しみてしやうね、」と云ひましたら「なアに貴女、天使だなんてそんな氣の利いた子があればですが、私の受持の天使はそうですね皆んな鼻垂しエンゼルてすの。」

鼻垂らしても忘はれ、

○夕暮　三重縣　吉川澄江

夕暮てあります。小羊の群は、牧守の童につれられて、今土橋を渡つて小屋に歸ります。里の少女は、刈草を背負うて、節面白く唄ひながら、吾家をさして速ぎます。山寺から打ち出す鐘の音は、ゴァンと長う尾を引いて、遠霞の中に消えて行きました。

夕の詩、

○秋の蠅　本鄕　千代子

厭に薄暗い、淋しい日だなと思つて居ると、蠅が一ッ飛んで來てコップの邊へ止つた、と見る間に足を辷らしたか中へ落ちて頻りに身をもがいて居る、妾は默つて見て居たが、あヽ可哀想に、今殺さず共どうせ永い命でもあるまいにと、ソト摘んで露を拂つてやると、覺束ない羽根を動かし乍ら向ふの煤けた障子へ行つてヒタと止つた。

憐悲、

○順禮　備中　篠原しげ子

小川の堤を春風に吹かれて歩いて行く二人の順禮は、とある若葉の下に座した、そして懐中から小さい鏡を出して見て居る、木の間からもる光線が其鏡に反射して時々キラリ〱とまぶしう光る。

今一段の眞がほしい、

○光陰　府下　菱枝

幼ない時は母様が他からお歸りになると「お歸なさい。」も忘れて何より先にお荷物のひもをといてお土産をさがしたものですが今は母様が玄關にお立ちになると、第一にお顔色を見やつてお氣嫌を伺ます。何の賜物でしやうか。

學、

○今のハイカラ　大阪　上田光子

洗濯屋へ、洗ひ物を取りに行きましたら、後へ、廂髪の美人が這入つて來て、「足袋を一つ洗つて下さい」と紫メリンスの風呂敷包の中から、新らしいのを取り出して、履いてをる足袋とはきかへ、洗ひ上る日を問ふて、相札持つて出られた、主人は其足袋持つたまゝ、「今のハイカラさんは」と云つて、私の顔を見られた。

かういふ理想の方も少くはありますまい

○朝　遠州　加藤敏子

書齋の窓を開けます、と、暖かい朝日が室内へさし込んで山麓の藁屋から白い烟が立昇つて、山腹へ棚引いて

居ます、強い梅の香がプーンと鼻をうつて何所かで鶯がホーホケキヨと、長閑に鳴きました、何んと云ふ靜かな朝でせう。

玉露でも入れませう。

○着更　秋田縣　貞子

私は毎日五度着物を着更ます、先づ朝は筒袖を着て牛乳を絞り、出來れば町着に更へて之を賣に出ます、歸ると此度は仕事用の短を着て田や畑に下り、上つて來れば直ぐ袖のある常着に更へ、夜は又お母樣の寐卷の中に。

結構です、無意味に着更るのではないのですもの、

○五色　德島市　時雨女

一點の雲だにない空の青いのとやう〳〵さきそめた蒲公英の黄色いのと赤い紫雲英とを美しく寫して流れて來る小川の水が白く乾ききつた土でおほはれて居る板橋の下を行く時そのなかにある石の上には今はひ上つた龜が露のしたゝる黒い甲を温い初春の日にさらして居る。

一幅の畫生面、

○花さん　若狹　津田春子

菫摘む手を蜂にさゝれ、泣き出したのは一と昔のこと、今はもう立派なお母さん、理想のホーム、定めしおたのしみでしやうと、實家へ歸つて隣の花さんに言はれ、妾しは涙ぐんだ。お父さんもお母さんも無い一人身。

美しき同情、

○近火　四谷　櫻子

ジャン〳〵〳〵〳〵、半鐘の音けたゝましく火事だ火事だと人が走る、讀みさしの本投げすてゝ、外にでると空はまつかで火の粉はパラ〳〵、足もとに落ちる、恐い樣ととりすがる弟をしつかり負つてゐると、「とてもだめ」とみにてた兄がかけこんでくる。何だかもう一切夢中。

胸のみわく〳〵、

○私は一枚の手拭を　甲斐　網野やす子

朝起るとお掃除するとて頭の上に姉樣被りに載せ、それが濟むと直ぐ髮を結ぶとて肩に懸け、又すぐはづして此度はビッショリに水に浸して冷水浴に用ふ、それから學校に出かける迄には表の竿ですつかり乾かして仕舞ふ、そして此度こそは四角四面にちやんと疉んで袂の奧深く秘めて置いて一日中手拭きにするのでございます。

御丹精の筆です

○花嫁　本郷　須藤さだ

濃紫に白を重ねた裾を青疉にさらりと引いて、こぼれ梅に松の縫ひのあるお振袖を、ゆらりと動かして、花嫁は一足前に白羽二重のお下着から緋の長繻絆がこぼれた華やかな電燈にお時計の鎖がキラリと光かつて俯向きかげんのゑり元は雪の樣。

そして目は？鼻は？

○滿洲の冬　奉天　内田達子

暖爐は優しい支那人の小聲が、ドン〱焚いて呉れます。フワリと暖い氣に包まれて、私は椅子に靠れた儘二重の硝子越に外を見る。と雪が疾風の爲めに殆ど並行に流れて居ますウォーゴロゴロ：：と暖爐の燃える音が低音の樣なので知らずと獨唱を始めるのです。

胸を張つて顔をしかめていますか

○理想の鶯　河内　木村志滿子

初樣から「理想の鶯獻上致すべく近日内御屆け申候」との手紙が來た、私は鶯が欲しいと思ふてた所なので大喜び、心待ちに待つてると、二日して包が來たあけて見るとおもちやの鶯笛、添書がある「餌はやるに及ばず掃除に及ばず亂暴にしても死なぬこれ理想の鶯」



若菜賣　埼玉　江倉子

○召使　越後　姫百合

今度雇ふた召使、名は文と呼ばれて年は蕃の十五、山家育ちの事とて無邪氣で實に可愛い、私は妹が無ので妹の樣な氣がして、未來た許りなのに亂れた桃割を、私の大切な櫛でよつくりと梳してやつたら、髷に手をあて〳〵嬉しそうに有難うございますつて云ふの。

折角目をかけておあけなさい

○女教員　伊豆　中村園枝

女教員、何故そんなに冷遇されるんでせう、高子さんのあんな罵り方、悔しいわ、一そよそうかしら、いや〳〵母さんの爲め……、けれど悔しいね、ふと顔を上げると村へ出た「先生お話を」二人の教子が兩袖にすがつた、瞬時私の胸はからりと晴れて思はず微笑んだ矢張樂しい職だと思つた。

のろふ神あれば救ふ神あり

○私の年　兵庫　山下芳子

私は今年十七なのですけれど、どなたても十八か、九、實にひどいわ、此

間も井上の姉様は、二十か、二十一だつて言つてゐらつしやるんだもの人には其様に見えるかしらん私は毎度も言はれる度に、そつと鏡を出して見るけれども、私には十七より上に見えない、どうしてもどうしても。
十五といつたら、

○銀座　淺草　布留川まさ子

グワーツ、ギーツ、ピタピリッ後から前からも、右から左から、降る人乘る人、男も女も、自轉車はフーツと擦る、驚いて振向く、自動車が一臺、行く人來る人女學生も事務員も、こんなに何んて用事があるてしやう。
ほんとに！

○春の一日　神戸市　櫻町　楓子

格様がギーと緩やかに音して鶴が不意に一聲、後はたゞ靜かに聞ゆるは隠居所で丁丁と碁石の音、遠く眠そうな地唄の三味線がホロ〳〵鳴り出した、私は針の手を休めて川向ひを見ると張物板の立掛けた垂下す門邊からゆら〳〵と陽炎が昇る。

○父様の書齋　伊豆　木村　綾野

父様のお書齋をソットのぞくと、まあ和製の本やら、洋製の本やらがごたごたに、天井をにらんだり、本の套につつまれたり、障子の細目からのぞいてゐるやら大混雜ですの、父様はそれが目標だと申されてお掃除の時一寸でもいぢると大目玉頂戴いたしますのよ。

○親心　大分縣　立川　悌子

鶏の雛を鳥屋から出して三日目大變な聲で皆お椽の下に小さく成て居るのでお米をまいてやつたら親鳥許コッ〳〵つついて居るから變だなと思てよく見るとまー自分の口には一つも入れないて大きい米を一一砕て雛に食べさせて居るのであゝこうまで我子が可愛ものかと思はず私はホロリとしました。

○橋　廣島縣　大關　ちえ

翠巒綠峰の谿間のさゝ流にかけた丸木橋の風情は幽雅で、洋々として漣波靜にゆく大河にかけた鐵橋の態は宏壯偉觀である。土橋や木橋には何となく質朴な趣が見え鐵橋や石橋には豪邁な氣字が溢れて居るやうだ。そして夫婦を堅めたる橋渡は此二つを備へた上に美しい花のやうな愛情が籠つてほしい。

○雨の日　伊豫　井上いち子

霧がこめて霧の樣な雨がやんだり降つたりするので、どこも彼もしつとりと濡れて、木の枝の露も中々落ちそうに思はれぬ、何日まで降るか分らぬ西北の隅からドロ〳〵と地鳴りが響いて來ると、あちらの山でもこちらの山でも何日も見た事のない山鳥が寂しい聲でケン〳〵と鳴くのが、何となく胸一杯沁入る樣な雨の日である。

○忌やな宵　札幌　杉　葉女

暗らい晩だ、向ふに見える郵便局の電氣の光りが、絶えず往來の人に遮られて、まるで死神の瞬くかのやう感じられる、空には星一つない、なま温い石炭臭ひ風が停車場の方より吹ひて來るにわかに北の方が明るくなつた『火事…火事』と叫ぶ人がある提灯が走る、犬の聲が聞える。

○朝の心地　常陸　木村那賀子

朝起きてブラシにばら齒磨を付け、思ふ樣に齒を磨いて、そして清水で顔を洗ひ、東を向ひて大陽に合唱し拍手を三ッポン〳〵と。最後に空を仰いて、大きく〳〵呼吸をする、此時の私は不平も希望も煩悶も、皆、消えて、永久に此樣な心地て、居たいと思ひます。

○參錢　韓國　富迫露萩子

一金參錢、韓錢では十五文である、先づ内地への郵税、大概の野菜百匁代、洗湯代、近頃盛に漁るゝ鰈一尾代、釜山、草梁驛間の汽車賃等として毎日私の財布から、一等出安い金高。

○理想の家庭　靜岡縣　波多野いち子

私は、鳴露を祖父に戴いて、ビクトリアを祖母さんに、南洲を父に頂いて、ナイチンゲールを母になつて戴い、空穗さんを兄樣に、歌子さんを姉君に晶子女史を妹に持つて一家樂しいホームを送つてみたいと思います、之が妾の理想の家庭です。

俳句

内藤鳴雪選



○（天賞）
琵琶だいて梅の月夜をさまよひぬ　上總山武郡千代田村岩山　小川露子

○（地賞）
塔の灯の星とまがひて夕霞　下總古河鍛冶町　荒しぐれ

○（人賞）
うそ寒き蚊帳の月見や妹一人　伊豫松山　曉子

【秀逸】

姫君の頬にも春の吹雪哉　愛知　うめえ
陽炎の忽ちきえて風寒し　石川縣　山田まつ子
神官の白衣の上に落花哉　新潟　村山潮子
靄こめて桃の小村は暮れにけり　信濃　駒澤ひろ子
春の夜の町へ出てたる狐かな　長野　小林喜美
神の灯や春の水面を渡る風　長野縣　山舘よし子
つくづくと猫の見て居る毛蟲哉　京都市　大井順子
朧夜の黑衣の人や梅の下　京都市　くちなし

女舞銀燭ゆらぐ風かな　下關市　安部しげ子
白梅雨に濡せたり女人塚　南總　尾加輪浪子
若草の里に住み侘ぶ歌人哉　山城　山田幸子
春の水大根屑も流れけり　廣島　末丸逸子
藤原や公達競ふ風　紀伊　勢以子
小袖干す椽の日向や梅の花　千葉縣　安井さい
北風の又ふき飛ばす落葉かな　小倉　赤田すみれ
春雨や京の揚屋の文つかひ　伊賀　福谷光子
潮の白う更けけり夏の月　駿河　杉山順子
焚火する在所を見てや鹿の聲　上總　北田のぶ子
菜の花に蝶の消えたる日暮かな　千葉縣　長谷川ふみえ
古衣店並ぶ通りや春寒き　羽前　萬洲子
草紅葉高尾の塚は荒れにけり　下谷　細谷銕子
のどかさの籬にかめの親子かな　靜岡　青木靜山
鶯の聲も霜れたる時雨哉　河村しづ子
桃咲くや養鷄場の竹圍ひ　大阪市　鹿島綾子
浮かれ猫啼くや夜明の一嵐　秋田縣　加藤うん子
うたたねのよき黑髪や宵の春　讃岐　小野定子
大原女のわらじの露や春浅し　京都　鹽田みどり
初霜の窓に顔出す女かな　千葉　萩原巳
霜の竹くぐりて來る醫者哉　近江　周防美佐子
うぐひすの枯木に啼くや二月月　良子
梅も咲く世を墨染の若法師　三重縣　吉川滸江

○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使つても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

門守る犬の午睡や桃の花　明石　落葉子
奥の間を淋しがる兒や春の雨　横須賀　齋藤松代子
春の月化粧の窓を照しけり　横須賀　渡邊登喜子
羽衣の松に春行く嵐かな　千葉縣　すみ子
梅飛ぶや蹈ふむ人の肩の上　下野　みつ葉
若草や一かたまりの鬼の子　常陸　西ため子
雛の子とたはむれ遊ぶ日永かな　大阪　香崎靜子
春の夜やつかれしさまの下駄の音　大阪　平尾とき子
春の月戀猫走る屛の上　長野縣　丸山榮枝子
小春日に猫と少女の共樂哉　熊本　松本秋子
鶯も親となりけり春の暮　秋田縣　荻川女
公達の駒を逐られて春の山　長崎　小野文子
朝月に池の氷の浮びけり　和泉　金田香雲子
春雨や文よむ窓の片明り　兵庫縣　祥子
朝そよと吹く風憎し梅の花　靜岡縣　鈴木さくえ子
詩集手に人は眠れる日永かな　常陸　立花こう
朧月や人に馴れたる夜飼鳥　豐前　宇津井千代子
東風吹て額やぬけ出し神の馬　羽後　三浦鶯子
春寒く米粒拾ふ雀かな　姫路　富岡綾子
牛鳴いて牧場は靄し春の雨　東京　しづ子
父こひし母こひし京の夜寒かな　東都　人の子
鳥起きた跡に波うつ若葉哉　福岡　福田靜月子
冬の夜や濠に光る常夜燈　備中　篠原しげ子
のどけさや筈にひろれの漁夫哉　和歌山　寺中みやい
このあたり家も木もなし鳴く千鳥　信州　山本操
朝風に高く飛ぶなり春の蝶　三重　松下金子
梅の窓に小肱かけたる女かな　兵庫　臣上白百合
夕月や我も宵岡はん郡島　攝津　阪上翠子
船の蝶大海原に掛きにけり　韓國　寬迫稻子
三芳野の一目千本冬木かな　岐阜縣　早矢仕朝子
氷きる川原に夜の霧哉　佐賀　田中笑枝子

五十鈴川靜けき雨の神樂哉　岐阜　小野靜子
夜寒さに兒供の寢顔覗きけり　三河　永田舞鶴子
大空に玉追ふ龍の花火哉　札幌　澄子
鶯の松に來て鳴く山家哉　秋田縣　鈴子
鳴きたらぬ筑波田甫や初蛙　常陸　木村那賀子
尼寺の櫻一木や朧月　秋田縣　秀子
箱庭の富士も初雪したりけり　大分　本田一枝
鬪鷄や花に幕張る武家の庭　愛知縣　祖父江咲香枝
里芝居舞臺に落葉しきりなり　豐後　阿南きな子
春雨や和泉の宿の小酒盛　神奈川　岩澤辛夷
虫なくやひとり切れたる琴の糸　近江　田川ゆう子
春雨や垣の外なる蓑の人　大阪市　中野喜代子
櫻ちる櫻の窓に騷ぎけり　安房　阿部けん子
寒椿落ちて地にあり廿日月　德島縣　佐川かなる
海棠のわが庭せまき春の雨　紀伊　蒼生枝
春風に櫻こす人や馬ひいて　丹後　吉田せき子
初雪や犬と子供の駈けくらべ　千葉縣　北田好子
春雨に焚火けむるや寺普請　常陸　中内泉子
紅梅の雨にふくるゝ夕べかな　千葉縣　北田のぶ子
白梅や昔源家の隱れ里　日本橋　佐藤みどり
山寺の萩のいけ垣清水哉　兵庫縣　三俣繁子
蓬萊や寒くはあれど伊勢の蝦　岡山市　古城しげ
朧夜の我が肩を打つ人は誰れ　妙子
此頃階てゝ雛の部屋哉　在郷民　みゆき
衣うつ音も冷たし後の月　大阪市　辻芳子
山茶花にしだれかゝりし枯柳　大阪市　井上芳尾
陽炎や櫻貝なんど多き濱　兵庫縣　辻井濱子
鶯の籠の掃除や春淺し　岩代　泉華子
春の宵響落ちし響かな　岩代國　泉白雪子
睡はれる小池の水のぬるみたる　札幌　森山彰子
切溜の中の蓬りや走り獨活　相模　清宮はつ子

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行賞は丙賞

○日本魂（入賞）

北海道　ふじ子

私が尋常二年の男子を受持て居ました時、讀方の時間に正成の話を聽しました。敎室は水を打た樣靜肅になつて涙さへ浮べた子もありました。話終て正成の樣に天子樣の御爲に盡さうと思ふ人は立てご覽と云ひましたら、全級こぞつて我さきにと立ました。私は其時こんな少さい子供等の内からはや日本魂が植付られて居る事を思て、心からうれしく思ひました。

○辨償

靜岡縣　青木靜山

一生徒が、ガラスをこはしました且て辨金する事にきまつて居りました、此の生徒は家が貧しかつたのです、あくる日しほしほと參りましてガラスのお金は今一週間まつて下さいと申しましたナゼとききけば、私かせぎます今日から車の、あとをしなしてお金を頂き升と申しました、はたして一週間たつとチヤンと持參致しました。

○可愛い教へ子

大和　しらぎく

私は毎日半里計りの處を通勤してゐますの、學校は去年改築した計りで職員が五人と兒童が二百五十餘人。私はいつも二十分前に登校致しますが、其時分にはもう兒童は大方揃つてゐます。そして門を入ると皆がならんで叮嚀にお辭儀をしてくれますの。あゝ私はいつまで、此可憐な天使のいつはりない、お辭儀に接して行けるでせう?。

○師弟の情

ゆかり子

欠勤した事の無い私が、病氣の爲め二日間休みました。‥‥三日目に出ますと受持の生徒が交る〲職員室の前に來て、私の居る所をのぞいて見てはさてにつこりして『先生お早うございます』と云つていきますので、私はしみ〲目に見えない師弟の情を痛切に感じました。

○生徒のよろこび

三重縣　金子

私は尋常一年生を受持つてゐます。算術の時間には算術がうまくできると時々丸をやることに定めてあります。丸は白、赤、靑等のちようくでやるのです、白い丸をやります と餘り喜びませんが。「こんどは赤い丸をあげますよ」、と申しますと小使は大變喜んで皆が思はず手を打ちますそして一生懸命に數を數へます其時は皆揃つて答を合しますそれ故之も教育上多少利益のあることであらうと思つてゐます。

○劣等生

福岡　登代子

劣等生といへば、誰も馬鹿にします。それは馬鹿には違ひません。又人並みの者は、ありませんけれども、優等生に親がある樣に、劣等生だつて、やつぱり、人の子ですもの、其成蹟のよくないのを見る、兩親の心はどんなにあらうと、考へますと、もう〱氣の毒で、たまりませんので、どうかして救ふてやりたい〱とは、思ひますが、私の其の誠心が通じませんので、殘念だと思つてをります。

○我子の樣な

札幌　坂せい子

私が講習會に出席して、歸校しました。汽車が着きますと「オヽ嬉し先生お歸りなさいませ」「先生々々」と云つて取縋ります のは日頃敎へて居る二年の生徒が迎ひに來て吳れたのです、私はどんなに嬉しかつたか知れません、「アレヤア迎ひに來てくだしたの」「先生毎日待つてたんです」「先生私も〱」と云つて兩手や袂を引いたり、押したりして、漸く學校へ參りました。私はこんな事のある度に、さも我子の樣に思はれて、何とも云へん懷しさと嬉しさに打たれます。

餘興



○規定　毎號課題を出して諸孃の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は卷末にあり見落す勿れ

隣（課題）

○山、沼、池（天賞）

埼玉縣川越在鴨田　長澤せつ子

西は名も知らぬ山々を隣と親しみ、南には廣い沼を控へ夜はいつも名も知らぬ鳥の清らかな聲にねむります、魚が住む池をへだてた東隣りの家の色の黒い叔父さんと赤い叔母さんは共にそれは〳〵好い人です、まい年六月十四日の月下で獅子の狂ひを躍る時だみ聲はり上げて、ね山の兎を歌ふのも隣りの叔父さんてす。

太古の遺風あり

○竹林（地賞）

臺北艋舺江瀕街一三八　稗貫光子

私宅の左の方の隣は其昔多くの狐が住んだと云ふ深い深い竹藪で其先は昔鄭成功の暫しひそまれたと傳ふる義妙の山につゞいて居ります、其欝蒼と茂つた竹林の前に立ちますと晝ても中は眞暗てちつとも見えませず濕つぽい陰氣な香がすうと鼻を突きます、凝と耳を澄ましますと此林のずつと奥の奥には何物かひそ〳〵と何事か囁いて居るやうです……それはさつと小笹と小笹とのすれ合ふ音でせうけれども……、

能く其場所を現し得たり

○病室（人賞）

鹿兒島　みゆき

私の家の庭とお隣の病院との堺につげの若木が澤山植ゑてあります、そこを一間許り隔て丶二階立の婦人科の病室があります、私が月に花に春に秋に庭に立て其つげの間から二階を見上ます時に世は移り人は變りますけれ共、いつでも五六の患者がガラス窓に身をよせて如何にも如何にも私を羨ましさうに見て居ます。

あつてもよい隣、なくてもよい隣

【秀逸】

○讃美歌

澁谷　冬子

私の隣はクリスチャンの某女學校てす、三百六十五日、毎夜九時になると、それはそれはもの寂しい神のみ聲の樣な讚美歌が聞えます。そうしてその音を聞くと總身を引きしめられる樣な何とも云へぬ寂しい感じに打れます、秋の夜、夏の夕、毎夜私はその神聖なる讚美歌を耳にしつゝ、安らかな夢路に入るのでございます。

○眠るまで

甲斐　網野やす子

宅の東隣は六七間距て丶鍛冶屋と石屋、西は一町計り離れてお寺が一あります。南は道一筋へだ

てゝ義太夫語りの家、北は子供の五六人も有るといふ家なのです。東の方が白らむ頃に成ると、ゴーンと先づ西隣の寺の鐘に安けき夢を破られる、其中に東の方からチーンカン／＼、チッチ／＼と聞えて來る、中々寐ては居られない、其中に又北隣の家で大騷ぎ、子供の泣聲やら、母の叱る聲やら……どうやらまあ壹の問丈けは少しは靜かだと思ふ間もなく夕飯頃に成ると、ツヽンテンシヤンともう始まるさあ今夜も又一と切りと私は南方に頭を向けて炬燵に寐ころんで聞き乍ら遂ひうとうととして仕舞ふのです。

○魚岩と魚藤

紀伊　勢以子

南隣も北隣も魚屋、南隣の魚岩の内儀さんは、人をそらさぬ愛想よし、しかし値は少々高い方、北隣の魚藤の內儀さんは、反對に至極の沈默、其代り値に如才は無い、利益勘定からゆけば、毎日の買物は魚藤でするのが可いのだけれど、三度に一度はお愛想につりこまれて魚岩で買ふ、そしてどちらで買ふにしても、他の方で見てゐるとツイ義理が惡く、ソッと裏から廻つて買ひにゆく、都會と違つて種々の氣兼が要ります。

○二月のはじめ

越後　飛鳥

五十戸の村に朝起き自慢の下隣家からの藁打つ音。漸と三時だ。どれ今一睡と寐返へり打つたお目が開いて了つた。ポトリ／＼と軒の滴り、ォヤ暖氣になつたのでつららが皆落ちるらしい、上隣りの方から、ギーガタン／＼／＼と、まあ珍らしい水車の音、既う春だもの。ふと私は思ひ出した、水車場の米搗き男――。歳は五十餘り、漂泊、ノソリ／＼といつも米搗きはおるす、の景をポカンとして眺て居る。



顔　小樽鈴木とみ子

○湯屋

韓國　宮迫露萩子

右隣に韓人の湯屋がある、新しいのと水が軟いのが評判で、日本人も韓人も支那人も入りに來ます、韓婦人は一體に大食の故か腹は大層張つて居ますが肌は美麗です、困る事は一種變な香が鼻をつくのと、稍もすると虱がうつりさうで中々鄧呑ですが韓人の子に白粉つけてやるのが面白いって、物好なと笑はれ乍らも矢張私は行きますの。

○琵琶歌

門司　愛子

右隣のせまい家は某巡査の住居、四十五六の主人に六人の兒女、琵琶の先生をしてた奥さんは去年の十二月に去くなつてやつと十四の娘さんがご飯炊き、夕方會社や學校から歸つて來ると喧嘩や遊びて床も落んばかりの大騷ぎ、それでも主人の叱り聲一度聞いた事は無い、只朝は早くから夜は遲く迄塵や垢で黑ずんだ破壁の上で悲しい聲をふるはして琵琶をひきます。

○御隣の朝

都　久子

御兄妹が十一人で毎朝五時の時計がなると、一番上の兄さんから五人目迄を順に起す例で二聲て起きない者は後の弟妹の寐床を片付る六人目から三人は學校へ行く迄の三人の守を一人つゝする例なので八時頃までの十一人は笑ふやら歌ふやら泣くやら本當に賑かですよ

○海苔干

横濱　岡本ゆき

「蔵ヤアー使に行つてこうよ」又隣のおかみさんがどなり出した、するとやつ

と四歳ぐらひな男子が鼻をたらして鐵刺片手にすた〳〵と出かける、お天氣の時は赤子を背負ておかみさん一生懸命海苔ほしだ、八寸四方の簀ノ子を丁寧に一枚〳〵板にならべて家の垣へそつとたてかけるあとから〳〵と大抵正午頃までやつて居る夕方は又それを取こむので一と騒ぎ、决して默て居た事がなく、はなうたかさもない時は鐵ヤアの運搬だ、ても まだ且那様の聲を聞いた事がない。

○呉服屋の娘

横濱　林　さく子

左隣は瓦斯管商て右は呉服屋様てす私は二階の窓から往來 の人を 見乍ら默想 するの が好きてす、夕暮になるといろん な人が通りますが時々若き男が通りが けに呉服屋を覗いて行きまして夾隣の前ては た と立留り後へ引返して呉服屋を眺めながら私家の前て「回レ右」をし、尙眺めながら殘り惜しそう に行き過ぎます、呉服屋の娘さんは此年廿歳て非常な美人てす。

○あゝ鐘

三重縣　瀨木八重子

私の家の隣は杉垣から覗く と大きく高く聳えた鐘突堂あゝ彼の鐘、私は毎日針 の道を勵みつゝ、亡き母を追懐したり、色々の默想に耽つてゐる、何時も夕方になると寺男は 大きい手て一生懸命につく而して終りの一つゴ ーンと高く低く吟吟つて天の一角に消える時「念佛衆生攝取不捨」の句が浮ぶ、あゝ彼の鐘なく ば私は神經衰弱ても意識して死ぬてあらうに彼の鐘あれ ばこそ偉ない命を慰めらるゝのてある。

○張り合ひ

福井　やまさと

妾の地方はご存じの通り、羽二重が盛んてございますから、お隣二軒の若嫁様も張り合ひて、朝は五時頃から夜は十 一時頃まて織りまして、それから十二時時分まて に明日の管を巻いて、三日に一本（十二丈）とか二日半に一本とか申して一生懸命に織つて 居りますが、もし片方が休みに里へても行きますと、とても二人居る程には織れないさうてす。

○鍛冶屋

越後　幽　子

庭逆きの東隣は 鍛冶屋 さん亭主 は朝から晩まて、トッテンカンの獨舞臺、神さんは夏中は糸取りてす、舊式な座繰をガラ〳〵とやつては、口ぐせに寐ぼけた追分を うなる端からがみ〳〵と子供を叱り付ける、肥つた三十女。十歳を頭に五人の見わけの付かぬ、男の子逹は、裸體て、跣足、爺さんの丹精した茄子畑をふみ發しては能く、どなられますと、神さんが此度は、爺さんに食つてかゝる。

○十幾人の養子

日向　佐藤しな

百姓原の金満家から士族の株 ほしさに私の次男な、やれ三男な、と酒まてとつてくるのを片つ端から貰はれ ゐ隣の養子は、今度て十一人目、會澤人の小母さんに迎 へられて、一時なめるような愛をうけるの はどれも同じてある、やがては變る秋の空、ほめ言葉が陰口 に變つて そろ〳〵昔の養子の話が もち上る頃には、小母さんをたよつてきた子も、小父さんは ほめるが小母さんは毒づいて出る、トモー候補者の二 三人は、小母さんに向つて盛んに運動してる。

○五人と六匹

丹波　鹽見芳子

隣には仲のよい若夫婦 の他に、猫が二疋と犬が一疋と、鷄が三羽とお子供が二 人とお婆さんが一人とあります。其上此秋には またお子が生れられるさうてすから、此家からは人 の數と家畜の數と全じ事になると 云つて、大そう喜んてゐられます。

○餅屋と下駄屋

大阪市　島川琴枝

私の内の東隣は餅屋て、西隣は下 駄屋て年終ポン〳〵と云ふ餅つく音 がやみません又下駄屋はかち〳〵と云 ふ音がやみ ませ んポン 〳〵カチ〳〵てせめ立てられて試驗前等大變困ります。

○電　話

越後　木島しのぶ

私の町に一昨日から電話が 開きましたので光さんは面白半分て電話口 へ行つて「もし〳〵」と大聲て云つて居りますが 私はじつと聞いて居ますと「私家のお隣へつ いて下さい」 と云ひますので私は思はずふきだしま した暫くすると局員が何か云つたと見えて 「姉様お隣は 何番なの」 と

家画もせずに闘ひました。

○夫婦喧嘩

熊本市　近野春子

妾の宅の左隣に、源さんと云ふ、車夫の夫婦住ひがあります。源さんは三十位、女は二つ程若く、二人共大の呑助て、平素は至極靜かな方てすが、一杯傾けると、サ！大騷動、「出て行けつ」「オー出て行く……」。それも毎度の事てすから、仲裁する人もありません。でも一晩たてば、追出した源さんが迎に行くか、すまして、女が戻つて來るかて、早速平和の笑聲が聞えます。

○河岸

海棠女

西隣は石炭問屋て此處の小父さんは、いつも店先て御飯を食べます。滋亞塀の廣告のやうな鼻鬚て、座つたら一時間も二時間も多辯ながらお酒を飲て居ます。向は吉井川と云ふ大きな川て、夏は汐干に大人も小供も面白い風して蜆拾ひ。冬は夜の明ぬ間から船漕ぐ音がグウー／＼と聞え、舟子のヨーホウホーとうなる聲は絶えず聞えます。河岸へ紀州の蜜柑船が着いたと云ふと濱は時ならぬ黄金の山を作るので御座います。

○花嫁樣

山城　入田文子

お隣樣は此度そつとお嫁樣をお貰ひになつたと聞きました三日目、餘りよくお笑ひになるので、そつと建仁寺垣を透かしてみました、若い男の子が二人、お嫁樣と何か話してゐる、とお嫁樣はキヤツキヤとお笑ひになる、何が可笑ひのでせう……顔の圓ひ、透きとほる樣な眼元、口のしまつた愛のある、京の子だといふことです、後てきゝましたら、會席御料理をなさるさうてございます。

○芋屋

土佐　初子

東隣はお芋屋てすから朝まだきよりゴロ／＼と洗ふ音が聞えます、顔洗いに井戸端に出ますと美くしく屋根に干されてホツホと水蒸氣をたてゝゐます、香ばしい香が風のまに／＼漂ふてくる頃には小供は一錢さげて「おくれ」と走つてきます。

○ゐない筈

神奈川　小林英子

妹を見つけあきて又お隣へいつた。やはり聲もしない、下駄もないけれど念の爲伺つてみた。おば樣は「知りませんよ」と仰しやつた、けれどお顔の笑みが妙だつたので、「おば樣いやよ隱くしてお置きなさるんだわ」、ブカ／＼奧へはいつてみると、ゐない筈高鼾ておば樣のお仕事のそばて、お晝寢てすもの。

○尼寺

丹後　桃代子

妾の家のお隣は尼寺てす。嫁して來た時分には、尼さまの讀經や木魚の音を寂しくて厭だと思ひましたが、今てはうれしく聞きます。薄い闇につゝまれて野も村も暮れる頃、若い尼樣は鐘を撞きます。それがすむとポン／＼と木魚の音。そのたび私は手を止めてじつと聞く。この音を聞いて作つた文章や和歌は、きつと尼さまに見せます。お庭の櫻がもうそろ／＼咲くてしよう。

○女學生の自炊

本郷　小稗菊江子

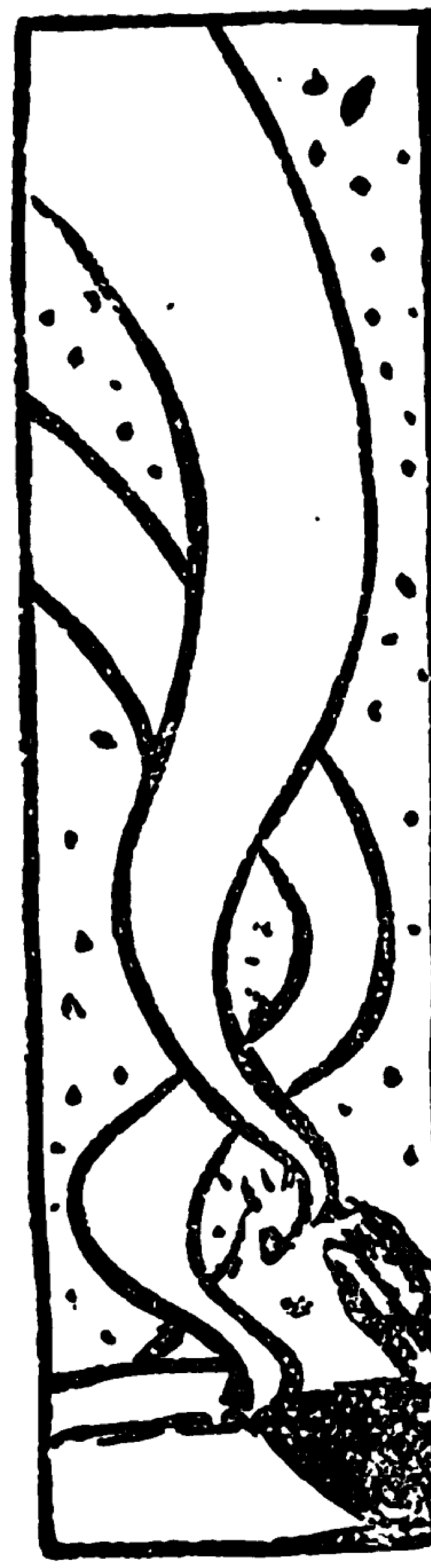
私の家のお隣は廂髮の高等女學生の自炊宿て朝は互に仕事の手分けて御飯たく人お掃除する者、髮を結ぶ人やがて八時頃になると四人四方へ別れてブックの包かゝへて出て行き、其後は風が留守番、工場の汽笛も柱時計も四時を報ずる頃には皆踊つて夕飯の支度に八百屋へ行くやら魚屋へ馳せつけて、茶碗の音などし升、止むと樂しげな笑ひ聲、復習の聲、時にはお琴の音も洩れ聞へ升、日曜には早くよりお洗濯物が庭せまきまで干され升。

○隣りの八公

名古屋　胡蝶

八之丞とは疊屋の職人にはあんまり變なといふので、八公て通りきりの私の長屋に母と二人住て居る評判の孝行者、私は丁度落語に有る名の樣だと思ふが、先達も母親が風を引いて熱が有るとて自分が病氣な程心配して居るので、宅からお醫者にかけて居ましたが二三日立てから裏へ出て見升と、湯殿の水落から小溝のあたり地面を堀返してある有樣故吃驚して居ると、切戸から入てきた八公、ヘイ誠にドウも濟さんすみません事て、ヘイ實は熱には蚯蚓が一番だと聞きましたので取るとてこんなしましてヘイ服ませましたら今朝はお蔭ておかゆを二ツ頂きましてヘイ、と嬉しさう。

新歌謠



○規定　古來の俗謠の形式を取りて専ら優美洒脱なる作を歡迎す野卑猥雜なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○（地賞）　上毛　關口梅子

峠七坂尾花がまねく熊の平に汽車止る

寸分の隙間なし

○（人賞）　靜岡　青木靜山

うちのまはりは梅の木ばかり花にからまる春の月

自然の調、自然の景

【秀逸】

○　越後　木島しのぶ

舟はゆら／＼白浪をどる私平氣で烏賊を釣る

○　大津　八千代

朧月夜に出て來た蝶を袖でおさへた櫻花

○　讃岐　福家こゆき

わが毛むしりて巣にあみそへて雛を育つる時鳥

○　信濃　胡蝶子

信濃山路にいつ春が來た山は眞白に里は花

○　橫須賀　渡邊登喜子

姉も妹も雛の酒に醉ふて桃色櫻いろ

○　千葉　吉井光子

搖られ搖られて飛び行く雲は天の宮への渡舟

○　三重　吉川澄江

二枚三枚八枚九枚お菊泣きます皿屋敷

○　信濃　小林喜代

乳を離れて牧場の隅に小牛二匹が晝寢する

○　和歌山　鳥居邦子

雪か霙か霙か雪か冬と春との間に降る

○　京都　山下はる

思ひやるのは郵便脚夫雪の峠を日に三度

○　信濃　藤原たづ子

あら〻松原霞の中に熊野下向の鈴が鳴る
下野　みつ葉

○草の匂ひに眠氣がさめる馬に鞍置く月明り
宮城　沼倉孝子

○春も更けたよ北上川に續く日和に水が出る
備中　三宅こつる

○朝日東に朝にじ西に中をわたらふながれ雲
四谷　櫻子

○おほりめぐつて行くかよひ路溜があればとみてすぎる
麹町　あきにき

○秋のさ百合の露はらふたに二尺八寸振りつらロ
滋賀　幽志笑

○人も出さかり櫻も盛り霞む吉野の花ざかり
旅順　内田れん子

○月の出る夜は何時ても靜寂水の調が聞えます
安房　阿部けん子

○今日は遠足明日は花見いつも苦にする花盛り
群馬　藤橋きみ子

○白と赤との花瓣を集め人に選れて君が名な
京城　ゆかり

○雪はちら〱しば焚く夕里の伏屋に梅かほる
信濃　岩波むら子

○山と山との霞の中に富士が見えますほの〲と
羽前　齋藤つる子

○秋は煙火人なき室に吐息漏らしつ消えてゆく
土佐　高橋綾子

○僧になるならお三をやめて花の都へ學問に
徳島　野童

○梅が咲いたと村一番の娘見んとて人は行く
愛知　今枝須磨

○ねんね〱の子守の歌も遠がなつてはくらくなる
肥後　佐々木奥智惠

○吾妹は嫁て花紅ゐてをどる胡蝶は白と黄と
河森　竹野秋子

○裏の小池に釣竿かけて月夜月夜をながめたい
大阪　香崎靜子

○一葉二葉と木の葉の散つてにはのとび石うづもれた
上毛　須藤あさ子

○妾しや淋しい田舍の生れ汽車や汽船は夢で見る
長野　山崎悦子

○振りの袂な蝶々がくゞる吉野うれしや摘草に
北海道　八萩津根

○夕日かくれて彩雲走る乘りて行きたい故里に
芝區　田村初子

○姉は十七妹は十五二人仲よくよいやまち
千葉　澄子

○人は嫁とりむことるけれどわたしや毎日田草とる
張津　みなしこ

○散つてくれるな花瓶の櫻よ母の病が氣にかゝる
四谷　味方こう子

○春の女神のうすもの越しに月が見えます朝月が
上總　長谷川文江子

○雨が降るから宿れと云ふに宿れないとはわけきかう
千葉　安井るい

○雪はふる〱御殿につもるさぞや寒むかろ下の人
熊本　高根ちか

○花はさいても見る人なきにさびし相うなる山ざくら
青森　馬場ちよ子

○年は流れる十九の年も雲はふら〱何處へ行く
備中　吉岡しげ子

○春を歌ひに谷間の小鳥花の散るまで啼き暮す

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通常の書信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以內とす一人一章に限る卷紙を用ゆべからず
乙種の賞を送呈す

○嫁して後都の友に（天賞）

伯耆　萬　枝

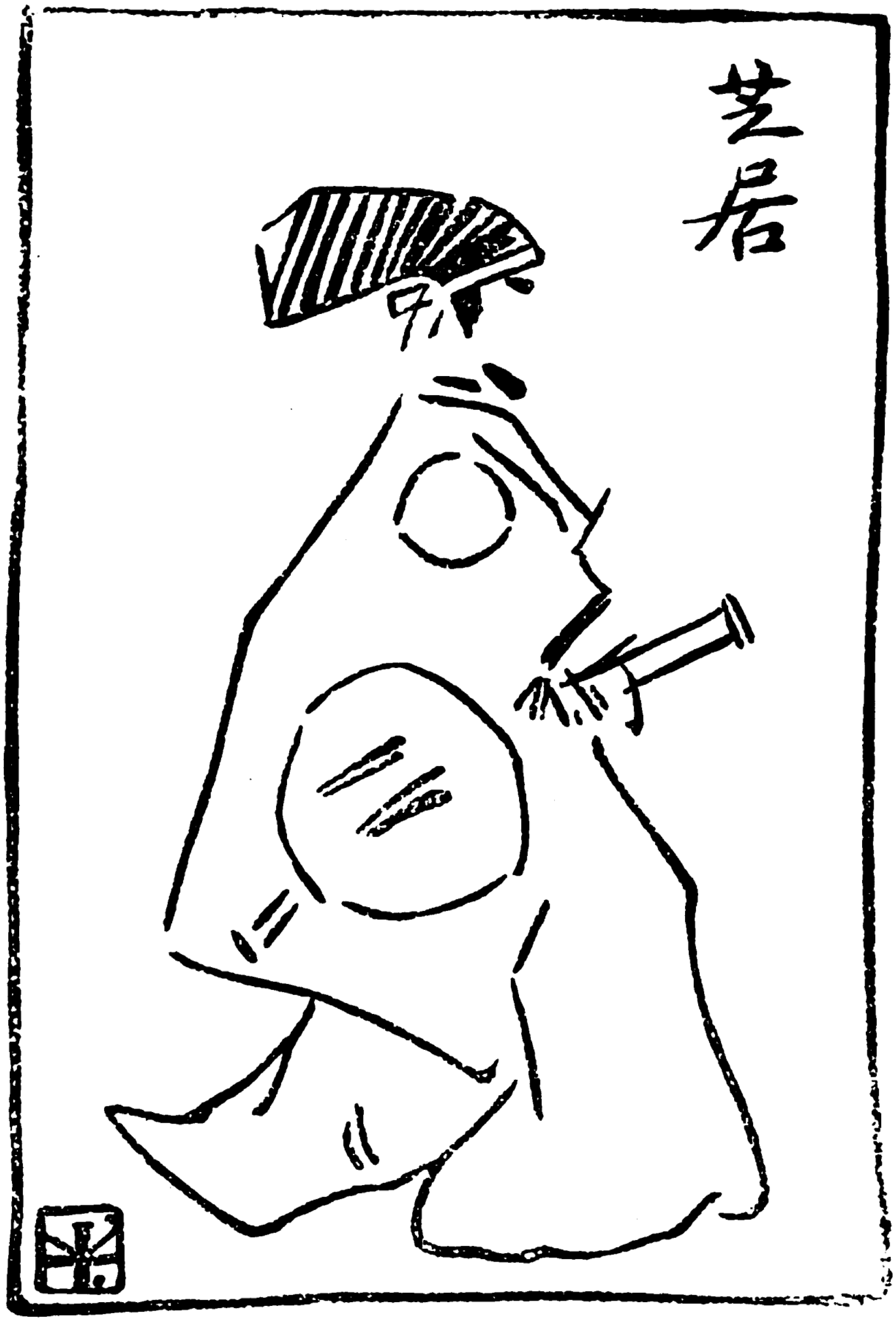
靜代樣如何御暮してすか、あと二月て御卒業といふ此頃、嘸や御勉强に餘念のない事と存じます、私も此頃は大變に忙がしいの、小さい乍らも一家の主婦となつて何もかも一人て引受けてせねばならぬ私には、御許樣の樣な境遇はいつの世の夢てしたやら、今は馴れぬ世帶に毎日失敗づくめて、此樣ならばあれもこれも習つて置けば可かつたと思ふ事許りてす、此間も味噌をつけよ澤庵積をせよとの父上の御言葉、御察し下さいな、本當に困りましたよ、それに內は商家ですから店の事もしなければなりません、昨日も簞笥の掃除をしかけて居ましたら、買物の人が來る親類の伯母樣が御出てになるてとう／＼抽斗しを晩迄開けたまゝてした、此樣て夫の御相手さへ思ふ樣にする事が出來ず、毎日忙がしい家事におはれて日を送らねばならぬかと思ふと、實に御許樣方が羨しう御座います、今若し御母樣が居て下すつて、萬事御差圖を受けたり相談したりして、家事をとつて行く事が出來たら、此の重い責任も少しは輕みませうに、雪子樣は御姑のある家に嫁つて辛い辛いと仰有いますが、姑だとて鬼ではなし誠實に仕へて何で平和に行かぬといふ事がありませう。私此家に來てから五十日にはなりませんが其間に得た經驗や智識は、十年間學校て學んだより、より以上だとつく／＼感じました、最二三日後には五日のひまを頂いて始めての里行を許されましたから、五日の間下女一人ても餘り御困なき樣用意しておいて、二十里の道を汽車にゆられて懷かしい母樣の膝下に着いたら、第一に赤飯や五目飯をたく事を習つて歸らうと思つて居ます申上度事はとてもつきませんが何分多忙のため、これも三日かゝつて書いたのですから、また後日ゆるゆる申上ます。

しつくりと落着いた好書簡、矢張り實際の事に力がある樣に思はれます（評）

○氷魚を送るにそへて（地賞）

根室　弦子

當地は殆ど日毎の吹雪にて外出は一寸も致さず、まことの箱入娘となりすまし居り候近頃の寒さは又格別近年まれのやうにて日中もなほ金物の手にベタ〳〵とくつつき申候て、とてもストーブをはなれては寒さに堪へられ申さず候、されば細民のうちにはまヽ凍死するものこれあるよし、實に氣の毒至極に御座候、かヽる寒さの中を當地の人々は生活の爲めに汲々いたしをり候て、三四尺も結氷せる海面に穴をうがち、その傍に小屋を作り、氷の上にてたき火しながら漁をいたしをり候、そは即ちこの氷魚と申す魚にて候、この魚は新らしき折はさしみにいたさば何より結構にて、煮付てもよろしく又潮汁、味噌漬などもよろしく、生干をてりやきにいたせば恰もうなぎの如く（但しそは見かけだけに候）口取りの取り合はせなどよろしく候、又よく干したるはやきて三杯酢に致せば御酒の肴によろしく候、今日御送りいたし候品は生干にて候間、餘り長持はいたさゞるべく候まヽ御手數乍ら、今二三日御干し下され度候



芝居　　上毛　きよ子

この魚を取るは甚だ面白きよし、海中よりあぐればビリ〳〵とはねて直ちに凍つてしまひ、丁度鹽したと同樣に固く相なり申候、何れ天氣よき日に一度見に參り度存じ居り候まゝその上は委しく御報申あぐべく候、まづは寒さ御いとひ遊ばさるべく、あら〳〵かしこ。

一つは珍らしき材料なるにも依りますが書き方もなか〳〵巧みに盡されてあります好箇爾です(評)

○今一度考えて(入賞)

京都市　川田益子

(五年二號小姑になつた姉よりをよみて)

文さんは此頃そんなにつまらないの、姉さんは御手紙を見て泣きましたよ、そしてどうすればそんなおもひをさせないでよからうと、いろ〳〵考えましたが文さんがそんなに思ふのも思はないも文さんの心一だとしか考へられませぬですから私の言ふことをよくきゝ分けて、今一度よく考え直して御覽なさいちつともつまらない事はありません、文さん、義姉さんは決して意地惡ではありません、そして學問はあり何から何までよくできて其上おとなしくてあんなよい人は又とありはしないよ、けれ共ねいくらよいつたつてもとは他の人、眞實の姉さんようなことはないでせう、それても文さんは眞實の姉さまだと思つて何事も「姉さん〳〵」と慕つてゐらつしやい、そうすれば乾度可愛がつて下さいます、どんな邪慳な人でも優しく慕ふ人に意地惡くは出きませんもの、けれ共文さん餘り不遠慮をしてはいけませんよ、又兄樣が優しくしてくれないとお云ひだけど兄樣は決してそんなつもりぢやないでせう、義姉樣にやさしくせねばならぬから、自然と文さんに少しはうとくなつたのでせう、それを文さんは心の僻みとてそんなに腹立つたのでせう、それに違ひありません、文さん、義姉樣の身になつて思つて御覽なさい知らぬ家に來たさへ辛いのに、其上みんなに氣に入るやうつとめねばならず、まして母さまへは、私共にはいゝ人だが人の噂を聞けば隨分ね……それで義姉樣はどんなに氣苦勞をして居らしやるかしれません、そして兄樣ばかり頼りにして居らしやるのですから兄さまが優しくして上げなければお可愛さうです、それに文さんは父樣や母さまの御傍に何の苦もなく暮して居るのだもの何も兄さまを不平なんて思ふことはありません、リボン買つてほしくば母さまに買つて頂きなさい、

文さんが云ふまでもなく姉さんはどこまでも頼りになります、けれ共ね姉さんは遠い所へきて今暫くは歸れない身、そう思ふ通りにはてきません、それて何かといえばやつぱり兄さまや義姉樣の御世話にならなけれ

ばならぬからおとなしく可愛がられるやうになさいね、母様だつて何も義姉様の御ひいきをなさるのではないけれど文さんが義姉様にきらはれないように文さんをお叱りなさるのです何もくやしい事はない、嬉んで言付をお守りなさい、そうして居れば決してつまらない事はありませぬ。

而し文さん、姉さんだつてこんなに云ふものゝ、さて其場合になつて見れば口惜しいともつまらないとも思ふでせうがそこは辛抱せねばいけません、辛い事も忍ぶのが身のためになるのですからね。

文さんも女、今に、義姉様にもつとやさしくして上げればよかつたに……と、思ふ時がきますよ、もういつまでも子供てないもの、そんな事はよく辨へなさい！、諺に「鬼千疋」とか云つて、小姑と云へばいけないものだそうです、文さんもそれにもれないものと云われない様になさい！そうすればみんなに可愛がられて賞められて、姉さんもどんなにか嬉びます、まだ〳〵書きたい事はありますが直き試験が來るので忙しいからこれで止めませう、そして試験がすんだら一度歸りませう其時には乾度よいお土産を持つて歸るから樂しんて待て居らしやい！父様始め皆様によろしくね、御身御大切にと、文さんも御用心なさいよ、さやうなら、

四月號の「小姑となつた妹より」と云ふ一文は餘程讀者の注意を惹いたと見えてその答へに擬した書簡が約三十篇ばかりも來ました、中には戒めたのもあり「さうとも〳〵」と何處までも同情したのもありました、此文就中委曲周到に情理並び備はつた筆つきで反覆縦横敍へられたのは出色の出來てあります、之に次て北海道の泉翠子、中尾菊子のも佳作と認めたが出す事が出來ませんでした。（評）此作者の原稿はどうも亂雑て困ります、もつと墨を濃くして注意して書いて下さい又行數が無暗に超過すると止むを得ず腰切りにするかも知れませんこれはこの作者のみならず申しておきます。

【秀逸】

○船中より妹へ

姫路市　富岡綾子

第一信

船の旅行はこれが始めてあるから詳細お報せします、今の處ではかう云ふやうに手紙も書けるのだから安心して下さい。

午後九時頃兄上様と大坂川口波止場に來た時には青木様がちやんと切符も買ひ荷物なども色々萬端お世話して下すつてあつたから、不案内の妾等までまごまごして叱られる事を助かつた。妾等の乗る船は第三共同丸と書いた提灯を出してあつて波止場にすぐ横付になつてあつた。兄上様についてこはごは右舷の舷門に架けてある板を傳つて入ると一種心地の惡い臭が鼻をついた、これが汽船の臭だなと思つた。青木様と其處て別れて左手の二等室に入つた。室を入つて直ぐ左のかゝりに妾等の毛布が敷かれてあつたから其處に座つた。この船室は船尾の方て周圍は茶褐色天井は白色に塗られて

中央に狹い通路があるその兩側には漸う人一人寢られる程の疊がずつと敷かれて腰掛もある。小さなランプが薄暗く照つて、窓と云へば丁度辨當箱位の廣さのが兩舷にあるばかり若し難船でもして御覽、妾等のやうな者は首を突込んで死ぬわ。

三十分も經つと澤山な人が乘り込んで來た。ハイ御免やす、どうかお先へ詰めて下さい、履物をぬいて下さい、お靜かにお靜かに、來たわ來たわ、皆兩側に陣取つて滿員になつて一番奧の高い處にも座つてる人がある浪が荒うなると轉げ落ちて下の人と喧嘩でもしさうだ、中には梯子を登つて甲板の一等室に行く人もあるあんたはどちらへ、わたいだつか一寸小松島へ、とか何とか、お爺さんもお媼さんも商人も官吏も奧樣も下女も皆喋舌べつて騷がしい所へ栗おこしや玩具やお酒など色々やかましう賣りに來る。ボーイが右に左に飛び廻つてる。地獄の釜のやうだ。エー一寸皆樣に申し上げますがね、と洋服姿の男の人が立つて何某先生が七年間研究なさつたね船の醉にばかりきく藥なんでね一袋が只の五錢と云ふ安いのでねとしきりに何とかしてねづくめの演說をしたが買ひ手はなく、折角の口上無駄になつた口惜さにか、沖へ船が出てからねイタラ藥々と云つたつて其時はありませんからね、後悔しても駄目ですからね、イヤモー時間ですから、と逃げて行つてしまつた。

まだまだ書くことがあるのですがボーイが枕や薄團なども持つて來たし、藥屋先生の云つた通り出帆の時間だから續きは後便に。

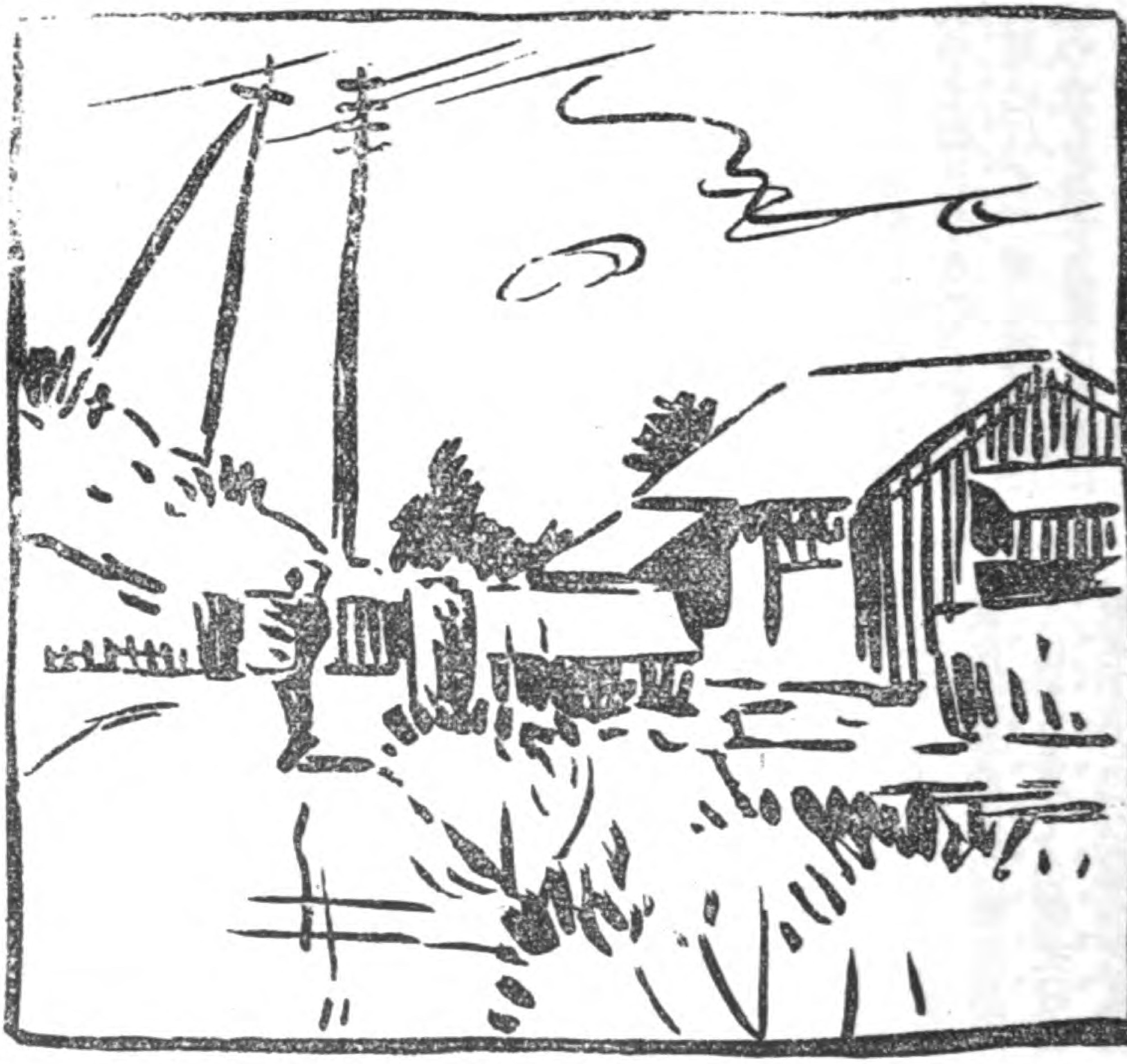
初めて船に乘つた情と中の光景睹るが如く描かれて居ます、達筆てす。（評）

○病床より友に

麴町　はぎの花

千代子樣、毎日如何御暮し遊ばして？先日御齒痛だつて仰しやつてらつしやいましたのもう御なほりになりましたか、お稽古に行つてらつしやつたでせうね、長恨歌はどの邊まで御進みになつて？君枝さんも毎日行つてらつしやいますの？此頃先生の御機嫌はいかゞ？やつぱり朝は御遲いでせうね六疊の方で御火鉢かこんで其の間例の面白い御話が出るのでせう、あゝ、行きたい、こう書く間もう飛んでいつてますの、千代子樣私いつになつたらなほるでせう、病氣が病氣ですからとても全快しやうとは思ひませんけれどせめても一度御一所に面白く御稽古にも行つたり、遊んだりする日が一日でも早くと祈つてますけれど、よく／＼考へれば御稽古にはとても二度と參れません身よ、何故つて御あやしみ遊ばさずにまあきいて頂戴、私きのふからとう／＼コルセットはめた樣になつてしまいましたの、もう臺なしてはお琴ひけないのでございますわ、千代

子樣此秋の御さらひには御模樣こしらへてもらつて御一所に殘月ひきませうつてあんなにかたく御約束しましたのはたつた此間ですのに、私夢みたいな氣がしてまだ涙もたんと出ませんのそれでもお醫者は脊髓といつても輕い方だつて慰めて下さるんですけれど、いつなほることですか、とうとうとすると去年の秋の納會に御一所に熊野ひいて手をたゝかれたあの有樣がそつくりあらはれたり、もつと以前、學校でテニスした時になつてしまつたり、そして目がさめるとコルセツトに氣がついてひとりシク／＼なつてしまひますの、御ひまに御寄り下さいましね、其うち臺も出來ますからそしたら合せて頂きたうございますわ、コルセツトの事はよつぽど申し上げずに置うと思つたのですけれど、あんまり心細くなつ　すぐに申しあげてしまひました、では御機嫌よう、御稽古にいらしつたら皆樣によろしく、



田舍道　入王子　乙幡もん子

○出しぬけながら

茨城　逸子

姉さん、この間は御手紙有難う、すぐ返事を上げたかつたのですが、生憎大至急と云ふ重ね物の注文がありましたので、昨日一昨日二日間といふものは、朝早くから晩おそく迄小時も暇がありませんでしたの、

姉さん、出し拔けにこんな事をきいてはおかしいけどあの最初一寸會つた時には、何だか虫が好かない樣な方でも、一緒になつたら、矢張り一緒になれるものでせうか、お母さんは若い時分には誰でも

最初そんな考を持つが、一緒になれば矢張り仝じ事だと仰しやるが姉さんそれは本當でせうか、最初好かぬ方でも、姉さん實はね妾今矢張りこんな事で悶えてるの、最早御存じか知れないが、あのこの間妾何の氣なしにお隣の春江さんと、あのほら姉さんの書齋でした離亭のお座敷に、障子をあけ擴げて一心にお針をしてたのすると母屋の方で向ひの叔母さんらしい笑聲がしたので、ヒョッと顔を上げると、直ぐ前栽のあの盤臺松の向ふに此方を觀て立つて居る方があるの、妾ほんの一寸見た丈で直ぐ春江さんの後に隱れて仕舞たが、何だか好かない方、姉さん御存じでせう、あの叔母さんの遠縁になつてると云ふ、義雄さんと云ふ方、向ひの小學時代にはお友達だつたとか仰しやる、お母さんの話ては極温順の方て學問はある、それに第一非常に財產家て、そして、男振りがつて――マアあの男振が？お前のには勝ち過ぎた緣だつて、それは大變てすのよ、でも妾には矢張り何だかこう好かない方、二三日經つて此度は叔父さんが見えたの、妾が心配してると案の定、當人が大邊何して是非共つて仰しやるの、妾本當に困つちまつて、あんな方に見込れて、妾此間戲談に飛んだ惡魔に魅られた、と云つたらお母さんは本當にして、蒼くなつて怒つたの、身知らずだつて、お母さんは最う非常なのよ、姉さん何うしたら可いてせう、最う妾後にも前にも此間が初めて一寸見た丈なのてすが、矢張り、あんな方？妾今てはあの時もつと能く觀て置けばよかつた悔んてるの、若しや妾の見方がと思つて、兎に角姉さん、最初一寸見た時には少し位はこう何だか好かない樣な方でも一緒になつたら、矢張り一緒になれるものでせうか、姉さん、今は姉さん一人が妾の味方なのよ、何卒姉さん何とかよい考を後生てすから、そして御序に、あの方の小學時代の御樣子を義兄さんにもよろしく、

感興に充ちた書簡てす、それも其筈内容が是れてすもの姉さんけ唐突に驚くと共にうまく書てるよ自分で好いてる癖にと思はれる事てせう（評）

○離緣となりし夫の弟へ

岡山縣　角田はる

夫があの樣なる身持になりさへせずば如何て生家には歸るべき、可愛き子供と別るべき、見なれたる門の柿の木を涙の目にて見返り候事は察し被下度候、

此頃聞けば夫の身持益宜しからず家さへも人手に渡し只一人の子供をすら養ふ事出來ず一切お前樣に投掛け候由、お前樣の御迷惑嘸ぞかしと推計られ候、其を聞くにもせめて小供丈けにても如何して私手許に引取り育てんと思ひ候へども母は義理ある中にて、私にさへも眞綿て首を締むる樣なる事を常々申候へば此上子供などゝは到底申されず心に思ふのみにて候、

併し何事にも優しきお前樣の許にて育てられなば今のみならず行末の爲も宜しかるべしと陰乍ら喜び居候、まだ四歲の物の道理も辨へぬ幼なれば嘸ぞお手に餘る時もあるべく其折は何の樣にもしてお叱り被下度候、此品は夜業の暇に作りし毛糸細工の足袋にて粗末ながら一足はお前樣の和子樣に一足は幼子にはかせ被下度候、

雪にもほゝ笑む梅の花、其にも思ひ出さるゝ子供の上他所ながら成長を祈る妾が身に比べて御面倒を見て下さらば此上なき幸と喜び申候、

眞面目書き方が今一息但じ大方は整へり（評）

○乳母へ

大阪　西戸政江子

乳母や妾しなぜお嫁になんか來たのだらうね、此の頃は妾每日泣いてばかり居るの、でもね、どうしたら可いだらう旦那樣はこゝ二三日前から何がお氣に召さぬのか何かにつけて荒々しく直き馬鹿だとか氣のきかぬ奴だなどとお叱りを受けるんだもの、お勤めの事でお氣に召さん事があるのか知らとお尋ねするとそんな事はお前の知つた事じやないとうるさそうに仰しやるし妾はもうどうしたら可いかおど／＼する、ね乳母やたとへお役にはたつまいけれどお心配の事があつたらこれ／＼と仰しやつて下されば又何とか仕樣もあるのに何事もお打ち明け遊ばさずに、つい妾の浮かぬ顏を御覽になつては「その泣顏は何んだ」と又してもお叱りを受ける、ねい乳母やなぜ妾はお嫁になんか來たのだらうね、今日もねお三が居ないものだからついお伺ひの靑物屋でお大根を買つて恰度出るときにあの八重子さんね、乳母も知つて居るでせうあのソラ小原さんに嫁らしつた、その八重子さんに出遇つたの、まあ奇麗なお召物で妾本當に羞かしかつたわ、お芝居に居らしつたの、けれど妾ねお芝居行なんか一寸も羨しくはない、只ね、旦那樣の御機嫌さへよかつたらどんなに嬉しいだらうと思ふともう堪らなくなつて一時間程泣き通したの、なぜ妾はこんなに不幸だらう、お阿母さんへは御心配遊ばすから何もお知らせしません、乳母にだけお話ししたのよさよなら、

現代の若き女の我儘氣質がよく出て居る、此人の書信兎に角眞を露はし得て面白い（評）

○此頃の賑はしさを友に

筑前　高松ひで代

雨の日といふといつも淋しい悲しい思出に過して終ふのですけれど此頃は雨の降るのも知らず面白い弟達がゐて呉れますので、淋しい沙汰か父もろ共每日／＼笑つて暮して居ります御宅と違つて腕白太將が二人もましますのですから其の賑はしさつたら有りませんのよ

あれ床が落ちるよとびつくりしては母が叫びだすんですよ、そして姉弟三人が一緒に床に入るのですから眼のつぶれるまでの騷々しさ、口々に唱歌を張り上げてはきやッ／＼いはせるし、末の弟が口をモグ／＼させてだまりこんでしまふと「ヤー榮チヤンが成佛してるよクスグツてやれと首のあたりをモヂ／＼させると「コン畜生」と足をドタつかせる、クス／＼笑ひ出す、かふしていつともしれず三人が夢の人になつてしまふのが毎夜のおきまりですの休暇ももう一週間ばかりになりましたものですからたゞもう食べることが御仕事今日は御萩、明日は團子ぜんざいと、會計もたまらないと此頃は母もこぼしてますの、三度の御飯がまち長いといふては矢の催足何から何まで恐縮して居ります幹さんの御宅では御娘様ばかりで被在るからさぞ御靜かで結構で御座いませうね、
何をして被居るの此頃の御たのしさを御しらせ下さいましな、

賑やかさを報らせろと云ふより騷々しさを報らせろとした方が宜いでせう、兎に角結構ですな御馳走を食べて飛ばれ廻つて眠るなんて(評)

○奉公先の妹へ

下野　み　つ　葉

ひとや輝で生血の垂れる手をついて「寢ずにでも働くから家へ置いてお呉れ」と、泣いて縋つた弟を、欺したり叱つたりして、漸と、御主人元へ送り込んだ。能く御主人に頼んで、内密で暇を告げて、大橋の袂へ來てふり返つて見ると、門の扉に凭れて箒を握つたまゝ悲し氣に此方を見送つて居りました。
安次は今年十三です、十三位の子供でさへ親の爲だと思へば辛い辛抱も致します。お前はもう牛にも馬にも踏まれないようになつたのですから、厭だといへば其れ迄ですが、出來るならば、何卒、今一年死んだ氣になつた勤めてゝ下さい。
之はお母樣のお頼みです。其事についていろ／＼ご相談申度いことがありますから隙を見て、一寸來て下さいさよなら

圏點のところが尤も宜ろしい、全體にわたつても宜ろしい但だ此手紙の出しぬしが姉からか兄からかよくわからない、まづ男子の手になつたものと見えます(評)

○病院より妹へ

神田　三好ふく子

多美さん、早いものね、停車場で別れて病院へ來てから未だ二三日の樣に思ふけれども、數へて見れば、やがて半年になる事ね、多美さんは毎日何をして居るの御父樣も御母樣も御丈夫、私はこゝへ來てから、大變に良くなつて此頃は海岸などを一人でどん／＼散步するのよ、今朝なども御飯を三膳も戴いたわ、驚いてしやう、今は半年前の妾とは違つて、大變肥つてそれは／＼おかしい樣よ、多美さんが見たら、きと笑ふわ、今度入らつしやいな、そうすれば妾、停車場まで、お迎ひに行つてよ、そして肥つたところを見せて上げましやう、ホ……

お伽噺

懸賞小波選



○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑傳說を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の燒き直しは許さず二十四字入十行以内凡て振假名つき罫紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

○十二の懲戒（天賞）

熊本市新分町壹番地　近野春子

今でもそうですが、昔は殊に宗教の異う人が外國に行くと、惨酷な目に會つたものです。今より大分以前に僅つと耶蘇教が起つた時分の事です。埃及に一人の王様が居られました。宗教の異つてる所から、其國内に居る耶蘇教國の人々を、夫は〳〵苦めてゐまして、大切な安息日にすら、御祭をするのを差止めた程なんでした。

こゝにイスラエル國に、モウセと云ふ人が居ました。或日、神様の御諭示に從つて、埃及に參り、王様に御目にかゝつて、どうか耶蘇教信者を苦めずに下さいと種々事を分けて願ひましたけれども、高慢な國王は、徹頭徹尾、相手にならぬ計りか「イエスなんて、如何な神だ。」などゝ、口を極めて、耶蘇を卑しめました。そこて、モウセは、こんな心ねじけた王様には、何と云つても、もう駄目だと思つて、口を緘んで立ち去る時、「王様、神様の御力は偉きう御坐いますよ。」と云ひ乍ら、持つて來た杖を地に投げると、一匹の蛇となつて、王様を白眼み付けました。が全体、此國の人は、蛇使が澤山てすから、杖が蛇になつたからとて、王様は左程驚きません。第二に、モウセがちよいと、ナイル川の水に手を入れると、河水が忽ち眞赤な血となりまして、魚と云ふ魚は、一匹殘らず死にました。魚は此國の人が、神として拜んでゐたものです。ても矢張王様は心を改めません。

次には、國内端から端まて、蛙がガア〳〵顯われまして、口々に王様を嘲りました。第四には、國中の家畜が、一匹も殘らず、病氣にかゝつて死にましたが、王

樣は「なーに、時候か何かど不順なんだ。耶蘇信者のだつて、死んだだらうもの。」と云つて、家來をやつて、見せさしましたが、不思議と、イスラエル人の家畜は一頭も死んでませんでした。次には、何氣なく、王樣が、竈の灰を一握投げますと、其灰が埃及全國にひろがつて、それに觸つた者は、手となく足となく、腫物が出來ました。けれども、王樣の頑な心は、軟ぐ事はさておいて、益々石の樣に堅くなつて了ふ計りです。第六には、大變な雹が降りまして、人も家畜も野邊の草木も、澤山損じました。翌年には大風が吹いて、家は皆倒れました尚其次の年には、大地震があつて、山が崩れるやら、地が



裂けるやら、火を吹出すやら致しました。第九には、三日の間、太陽が出ませんで、暗が續きました。次には國中の男の子が、皆不具になつて了いました。だが、相變らず、王樣は我慢して居られました。ところが第十一番目には、あらゆる地面に、一寸先も見えない樣に、蝗が生れ出て、穀物を一粒殘さず食べ悉しましたので、餓死ぬ者が澤山でした。そこで最後には、泥の中に埋まつてる、人の死骸や馬等の屍から、虱や蚤や、其他澤山の毒虫等が、ピヨン／＼ウジャ／＼飛出して誰彼の差別なく、取り付きましたので、これには王樣始め國中の人達も、非常に

困りました。何故なれば、一躰此國は、一同非常に不潔を嫌い、常に眞白い布を着てゐる程ですのに、今は其着物一面に、虱が集りましたものですから、其の不潔さ心地惡るさは、譬へ樣もありませんからでした。

そこて、さしもの王樣も我慢の角を折つて、モウセを呼び、汝達の神樣にお祈して、どうか此汚い虫共を退治しては呉れまいかと頼みました。すると何處からとなく、眩しい計りの金光が室内に流れ入りまして其光の中から厳に「汝王よ、着物などの外面の汚れたるを耻ぢ乍ら、何故、心の中の汚れたのを耻ぢんのだ？」と言ふ聲が聞へました。忸と耳を澄してゐた王樣は此語を聞くより早く、矢庭にモウセに身を投げて、心から、今迄の頑固な心を悔ひ改められました。

（評）いつもながら流麗の筆致只敬服の外はありません。

○お婆樣と子豚（地 賞）

兵庫　荻の里人

ある所に一人のお婆樣が住んて居りました。

其のお婆樣が或日の事家の内を掃除して居ました處がふと椽先に何かキラ〳〵した物があると思つて近寄つて拾ひ上げて見ますと少し汚れた五十錢の銀貨てありました、そこてお婆さんは此銀貨を仕舞つて置かうか何か欲しい物でも買ふかと考へましたが仕舞つて置いても仕方がないから明日町の市場へ行つて豚の子を一疋買つて來て飼つて見やうと考へ付きました。

翌日お婆樣は朝早くから起きて町へ行きました。

そして市場て子豚を買ひ又色々の買物をして自分の家へ歸つて來ました、處が入口まで來まして豚が動きません、お婆さんの家の入口は他の家とは違つて入口には階段があるのです、子豚は此階段を上る事が出來ぬと見えます、然しお婆樣は其樣事はなからうと思つて後から追つて見ましたが矢張チッと坐つて居ます。

仕方がありませんから内から犬をつれて來まして噛み付かそうとしました、お婆樣は犬に噛み付かせると子豚は驚いて此の階段を飛び上がるに相違ないと考へたのです。が、犬は噛み付かうとはしません、何故か豚の側へは寄りません、そこでお婆樣は又杖を持つて來て犬を打つと犬は必ず子豚に噛み付くであらうと思つて杖を持つて來まして、犬を叩かうとしましたが杖がお婆樣の命令を聞きません、假令お婆樣が叩かうとして何程あせつても杖はお婆樣に反對して少しも自由になりません、お婆樣は火を起して其の中へ杖を投込みました、すると火は其の杖を自分の側へは寄附けずバ

ツとはね返しました、お婆樣は恐つてバケツに水を汲んで來まして火へかけやうとしましたが何程バケツをかたぶけても少しも流れ出ませぬ、そこでこん度は牛小屋から牛を引連れて來まして「サアこの水を呑め」と云ひました、が牛は少しも呑みません、そこでお婆樣は近所の牛殺しを商賣にして居る人を連れて來ましたお婆さんは何程强情な牛でも自分の命を取ると聞けば必ず私の云ひ付を聞いて水を呑むだらう、水も呑まれようとすると又流れ出て火を消すであらう火も消されんとすると又杖を燒かうとするだらう、すると杖は犬を叩くだらう、すれば犬は必ず豚に嚙み付かうとするそうすると子豚は驚いて飛び上るだらうと考たのです。

お婆樣は牛殺しに「何卒此の牛を殺して下さい」と賴みました、牛殺しは「お賴みてはありますが殺す事は出來ません」と斷りました、そしてお婆樣が何程賴んでも聞きませんので到頭お婆樣は怒つて太い繩を持つて來て牛殺しを縛らうとすると、繩も亦お婆樣の云ふ事を聞きません、お婆樣こん度は何處で搜し出したか一疋の鼠を捕て來ました、そして「サア此の繩を嚙み切れ」と云ひますと、又も此の鼠も其の事を聞きません、そこでお婆樣は猫を連れて來まして「サア猫さん何卒此の鼠を殺して下され」と柔しく賴みますと猫は「ニヤロシー、お賴みは聞きませう」と申しました。

之を聞いたお婆樣は大層嬉んで「オヽ可愛奴ぢやサア早う喰ひ殺して呉れ」と云ひました。

猫は「然しお婆さん私にあの彼處に居る牛の乳をお皿に一杯下さい、そんならお賴みは聞きますよ」と申しますのでお婆樣は台所から大きな皿を取つて來まして乳をしぼらうと、牛の側へ行きますと牛は「お婆樣〳〵私に枯草を貴女の手に一杯持てる丈け持つて來て下さいそうすれば乳は何程でも上げませう」と申しますからお婆樣は家の側に積んである枯草を兩手に一杯かゝえて持つて來てやりました、牛はうまさうに食ひ終つて「サアおしぼりなさい」と云ひました、お婆樣はその皿に一杯しぼつて猫に與えますと猫は好まさうにしばらくの間にペロ〳〵と殘らずなめて仕舞ひました。

そしてお婆樣のお賴みの鼠を喰べやうとて引つ捕へんとしますと鼠も命はおしいてす、それで鼠も亦繩を嚙み切らうとしますと、繩も亦「切られては大變」と直ぐ樣牛殺を縛うとしました、牛殺も「縛られては」と思ふて腰の刀を拔いて牛を切らうとしますと、牛は驚いて云ひ付通り水を呑まうとしますと、水も呑まれては

堪らぬ」と、バケツから流れ出て火を消さうとしますと火も直ぐ杖を燒かうとします、と杖は吃驚してピユツと、犬の尻を叩き尙續け樣に叩かうとしますと、犬も「ワン」と一聲上げて子豚に嚙み付かうとしました、子豚は大變吃驚して逃げ樣としましたが後には犬が居ますので思はずピヨイと階段を飛び上がりました、そこでお婆樣は遂に家の中へ入る事が出來ました。

之れは猫に對して柔しくお婆樣が賴んだのと猫や牛の望を容れてやつたからであります。

（評）なか〳〵面白くよみました今一段の熟練を望みます。

○乞食の夢（入賞）

振洋　みなしご



母と子　鎌倉　たそがれ

昔々或山路の草の上に一人の乞食が、心地よさそうに晝寢をしてゐました。丁度そこへ一人の年若い旅人がきて、木の根に腰をかけてスパ〳〵煙草をのみながらその寢姿をつく〳〵と見てゐますと、どこからともなく、一羽の金色をした蜜蜂によく似た虫がとんできまして、寐てゐる乞食の鼻孔に入りました。これは不思議だと尙一生懸命に見てゐますと、間もなく出て、山奥の方へとんで行きました。暫くするとまたとんできまして前の通りくりかへします、とんでいつてはかへり、とんでいつてはかへり、五六度同じ事をして、とう〳〵しまひに鼻孔の中へ這入つたきり、てゝきませんでした。旅人は我を忘れて見つめてゐますと、やがて乞食は何に驚かされてか、寢返をして「あ

ゝつ」と云つたかと思ふと、パッととびおきて「あゝ實に好い夢を見た」と欠伸まじりに、獨言ちて居ます。若い旅人はハッと我にかへりまして「一躰どんな夢を見たの」と問ひました、「イヤ實に好い夢を見ましたが話すことはできませぬ」と云ひます、旅人はよほど賢い人だと見えまして「ぢやあ其夢を賣つてくれないか、お金はお前の好きな程、すぐこゝで出してやるが」と云ひますと、根が乞食の事ですから、わづかのお金ですぐ承知しまして、きかして吳れました。

これから一里半ばかり山奥に一軒の草小屋があつて、老爺と老媼とそして一人の娘とが住んでゐる、其家の後に、高い山がずうつとつらなつてゐる。それはどれもどれも砂金ばかりからなつてゐるので。私はそこへ行つて見てきました」と

旅人は雀躍して喜びました。いつて見るとあるわあるわどちらを見ても砂金ばかり、折しも沈みかけた夕日にはえてキラ／＼と。其美しさつたらありませぬ、風が吹くとサラ／＼と云ふに云はれぬ好い音がして上のが下へ落ちてきます。若者は恍惚なつて居ますと。老翁と老媼とが出てきまして、大變喜び、御馳走をしてもてなし、美しい一人娘のお婿さんにしました。

若者は澤山の砂金を此まゝすてゝおいては、何にもならないからと云ふので、とつても／＼つきない其砂金を、毎年都へつみだして、金貨をつくらせ政府へさしあげる樣にしました。時の帝はたいそう、その行ひをお賞めになりまして、黄金山長者と云ふ姓を下さいました。人間の運と云ふものは、どんなところにあるかわからないものです。

（評）今回の當撰には西洋式の話材が多い様でしたこれ等も其一つですお文章輕妙になか／＼よくかけて居ます。

【秀逸】

○團子物語

陸奥　屋間田輝子

上

むかし／＼或る田舍に貧しい暮しを立てゝゐるお爺さんとお婆さんとがありました。恰秋のはじめ頃でありましたが、御飯をたく薪木がなくなつたのでお爺さんは「婆さん、今日はお天氣も好いし薪が無くなつたから柴がりにでも行つて來るから團子を拵へておくれなはれ。」といひますとお婆さんは早速に、

「はい／＼拵へて上げます。」といつて戶棚から粉を出しにかゝりました。暫くして婆さんはびつくりした聲て、「おや／＼お爺さん大變ですよ一升もあつた粉が一

つもありませんよみんな鼠に引かれたんですよ。團子を拵へることが出來ません。どうしたらいゝでせう。あゝさう〳〵キビ團子が一つ殘つてゐましたつけ」と獨でしやべつて、僅一つのキビ團子をお爺さんに渡しました。そこでお爺さんはそれを持て山へ行きました。それから一生懸命で薪木を取つたものだから大變くたびれましたそこでお爺さんは一寸手を休めて、

「あゝくたびれた、どれ一ぷくやつて團子でも食べよう。」と其處の芝生の上にドッカと腰を下し煙草をのみ始めた。そして脊負て來たキビ團子を出して食べやうとしました。お爺さんあんまりお甘しさうだから、しばらく膝の上に上げて眺めてゐますとその團子はひよいと膝から轉んで落ちました。お爺さんはびつくりして拾はふとしたら團子コロ〳〵ところんで行きます亦拾はふとするとまたコロ〳〵と轉んでさうして、何處までもコロ〳〵コロ〳〵と轉んで何してもお爺さんに捕へられないのです。お爺さんも困つて、終には、「團子殿、だんごどの何處まで轉ぶ」と拍子をとつたのです。すると不思議にも團子は口をきいて、

「川原の〳〵地藏堂まで」といひます。お爺さんもびつくりしてまた拍子をかけると「川原の〳〵。」をいひます。お爺さんは面白くなつて何度も之を歌ひながらづん〳〵行くと、とある川原に出て、成程地藏堂が立つてゐるのです。そこまで行くとキビ團子はその地藏さまの前へ轉がつていつてヒヨイと其お手に上つたのです。すると地藏樣は手をもたげてもぐ〳〵食べてしまひました。お爺さんは之を見て泣き出しましたそして

「地藏樣〳〵あなたは何故己の團子を食べました。一つしかないのを、腹が減つて死ぬようでございます」とをい〳〵泣きました。地藏樣は食べてしまつてから

「よし〳〵泣かなくてもよい。己も今腹がへつてゐたからお前からもらつたのだ。今にそのお禮に澤山金もうけをさしてやるから。」といひました。お爺さんも今度は喜んで、

「それではお願ひします。」と云ふと、地藏樣は「好し〳〵、それではお前はこの天井に上つて隱れてお居て、そうすれば丑の刻になれば鬼共がきて賭博をやるから其時汝は時を見計らつてコケコッコーと三度鳴くと好い、すれば鬼共はそら夜が明けたと逃げるからその時皆金を置いて行く程に汝はそれを持て行つたら好いだらう。」と親切に仰いました。それでお爺さんは喜んで早速天井に上つて夜の來るのを待つて居ました。

少女文壇



○規定　本欄は十五歳以下の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す年齢及び住所姓名學校等を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○お机倶樂部（天賞）

四谷第一小學校五年　河野貞子（十三歳）

たつた、二人きりの姉妹、其の上姉様は大の遊びぎらひゆゑ、私はいつもひとりぼつちで淋しいんです。それゆゑ、私はいゝことを考へましたの、お机倶樂部と云ひます。くらぶ員はけものも鳥も人もありますけれど、みんな口をききません、それはみんなカードばかりなんですもの、幹事は人形が致します、會塲はお机の上で、眞中にかんざしの花たばをかざり、マリヤ様を中に立たせます、さうすると、やさしいおひとみの光が生きてゐらしやるやうて、何となく會塲が尊く見えます。さて會長が開會の辭をのべ、プログラムによつて順々に、箱の上に立つて、お話をしたり、朗讀したり、唱歌をうたつたりいたします。此の間姉様に教はつてからは、かあいゝおひふを着た彌生さんは、「水靜かなる江戸川の」と云ふ詩をうたひ「チイングル〳〵リツトルスター」といふ英語の唱歌は眠り人形の、ミス、リリーです、なか〳〵ハイカラでせう。それはみんな、私がそつとうしろへ行つてするのです、見物人があればなほいゝけれど、ひとりでも樂しうございます。私は、會員のすべてが、みんな心があるやうてなつかしくてなりません、そしていつまでも今のやうにお友達てゐたいと思つてゐます。

事柄も少女らしくて面白く、文章もお上手です、姉さんのお手傳ひがありはしないかと思はれます（評）

○出産を賀す

佐世保市　古賀年子（十四歳）

姉様お喜び申上げます、可愛らしい男の御子だ相ですれ、お父様、お兄様は必ず大喜びでせう、此着物は私が眞心こめて縫つたのですから、赤ちやんに着せて下さい、又此おしめは母様と二人て縫つたのてす今週の日曜には參りますから、其時は抱かせて下さい。まづはお祝まで

○お花見

靜岡市　鈴木滿壽子（十四歳）

私は四月になると、伯母様と東京へ花見に行くのてす、それてお父様から赤いリボンを、姉様から、千代田草履を、伯母様から縮緬の帶を頂きました、それてもう仕度は皆んなそろつてゐます、私は四月が待遠しくてなりません。

○和歌

久留米　田中もゝ枝（十五歳）

柴戸あけて見れば淋しきふる庭の枯れし落葉は初霜のおく
朝まだきせ戸のやり水とだえして池面はあつきはつ氷かな
ふりつもる雪にもおそれぬ姫小松少女心にならひてもみむ

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも隨意なり賞內種

○昔氣質　（天賞）　石見國邇摩郡大森町　入島君子

自轉車に乘つた人通行中の婆さんに道を尋ねると「私も丁度今其邊まで行きますから御一所に……」。

○知つたふり　（地賞）　山口縣吉敷郡大內村矢田　椰良美奈子

植木師「旦那今度の五葉の松は枝ぶりもよし、年數も隨分たちまして、それは見事な者でございますよ。

外國人「うむぢやー、神武とか云ふ時代からでもあるのかえ。

○女の面の皮　（人賞）　岐阜縣大垣町　小岩菊子

若き姑、嫁に向つて『お母さん、驚くてはありませんか、此頃の糠は半分は砂だと、今日の新聞に掲てゐます』と云へば姑は左もこそと點首いて『さうぢやらうて、此節の女子は皆面の皮が厚い』

○電　報　松本市　川上めぐむ

下女「電報が參りました、」主人「アテ何處からだらう」下女「何でも近い所でせう、まだ封じ目が乾いて居ません。」

○言葉遣ひ　下總　仁木豐子

秀さんがお母さんに向つて
「お母さんもお父さんの子なの」
「なぜ」
「だつてお父さん〳〵と云ふもの」

○むらくも　長澤せつ子

私小さな妹と柿を食べながら、「おゝしぶいしぶい」と云つて顏をしかめると、妹は得意氣に「姉さんそれてはお砂糖つけて食べるといゝと思ふわ」と。

○按　摩　靜岡縣　高田花枝

或日母が近所の按摩に肩をもませました、秋がお茶を入ながらごくろう樣と申ましたらすぐこちらをむいて「へゝゝゝよひお天氣樣て御座いますお宅はいつもきれいにおそうじが出來て居りますと申あとて母と大笑

○小春の句　山城　安岡富美子

俳諧の宗匠髯をひねりながら『小春の句許り考へてろと何うも出來ん』と獨言を言つて居るのを下男が聞いて『何所の藝者か知らないがお年甲斐もない先生だ』

○お　召　廣島縣　田坂芳溪子

田舍出の下女「お孃樣お旦那樣が……」孃樣「御召かい」下女「イエお飯ては御座ゐません御呼びになるのです」

○わすれました　本所　上原和香子

先日同窓會がありました時私が大名友人が下臣になつてすこし言を云ひますと友人はつかえて言がでませんでしたすると何に思つたか秘密を要する所なれば御耳を拜借と云つて私の所へ來てわすれてしまいましたと申しましたので私は大そうこまりました。

○とんだ恥　京都　鹽田登美子

少し氣分が惡かつたので、新參の松に「若しお客樣があつたら一寸留守だ」と云つて吳れと申し置きましたら、少時經つて同級の久子樣が一寸お目に掛り度いと云つて入らつしやいますと、松は心得顏に「あのお孃樣が、そんなに申して居られました、只今は一寸お留守て御座いますが…」とんだ恥を掻きました。

○銀　貨　富山縣　米島艶光子

子供「お母さんこの銀貨はたれのですか。
母「私のです
子供「あらいつか私のもつてゐたのによく似てゐるは、と申しましたので大笑ひ。

衛生問答



産科婦人科専門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず葉書差支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第十九問　恥づかしい樣な氣がして　何故か妾はいつも人樣の前へ出ると恥づかしい樣な氣がして、聲もはつきりは出ません、どうすればなほりませうか、宜き方法にてもあらばお敎へ下さい。(ありの)

答　日本婦人には兎角羞恥と云ふ事が多い樣です或場合に於ては輕跳ならず驕矜ならず至極見能きものであります然し必要に應じて談話をせねばならぬ時に於ても餘り遠慮勝にして恥かしがりて計り居りては要務に於て要領を缺き自他の不利益此上も有りません、それですから或場合には內氣の方が能き事ですが又必要の場合には務めて勇を鼓し羞態なく談話なさい、之を爲すには矢張り習慣を附けるに限ると考へます、內に自信力ありて心健なれば如此習慣を馴致する事は敢て難事てはありません、自今此習慣を附ける樣に自己に於て御勉めなされ、別に他動的良法と申しては無いてしやう。

第二十問　化膿性中耳炎　今年の二月腸窒扶斯を病みましてからたえず耳鳴がして、普通の聲ではなか〳〵聞き取るに困難です、或る醫者は慢性化膿性中耳炎て兩方とも鼓膜が破れてゐるといふことてすが、醫療を以て治することが出來ますか。(橫濱、貞子)

答　鼓膜が破れて來れる重聽及び耳鳴は醫療を以てするも之を全治せしむるは不可能てあります殊に化膿性中耳炎の結果と申す事なれば全然治療法は無し。

第二十一問　肺病の豫防法　私の知人に十九歲の方があります、一番目の姉樣は五年前に肺病が傳染して十九歲てお亡なりになりました、二番目の姉樣も當年廿歲てやはり同病て亡なられました、最も其時は私の知人は別居して居りましたが、この方は大層自分も肺病になりはせぬかと怖れて居りますから、それに就て豫防はどんなにすればよいか、滋養物はどんなものがよいかお敎へ下さい。又此方は時々咽喉が痛くて醫者にかゝります これはどうてせう、それから、二月に一回位きつと風をひいて大層頭痛がいたします、又醫者は當時以上の學問をする事を禁じました。但し此方は父母共に肺病の系統を引いた方はないのです。(愛讀女)

答　父母に肺疾患なくとも二姉已に仝病に犯されて斃れたれば遺傳性素因は貴孃の知人に在るものと考へればなりません尤とも遺傳と申して疾患直接の遺傳てはありません肺患に罹り易き體質遺傳性を申すのてすそれ故、その人に於かれては平素健康を完全に保つ事に就ては頗る細密なる注意を要するものと認めます、豫防法と申して先づ寒暑に抵抗する丈けの體質を形成せねばならぬ、即ち如何なる寒氣烈き時に於ても寒に耐へ風邪に罹らぬ樣に體質を造るのです、之は別に難事てはありません、毎朝冷水浴、冷水摩擦を爲し可成多くの防寒具を用ひず皮膚の抵抗を強くするに勉むるのです、その他適宜の運動を爲し消化器の調節を計り、睡眠時間を一定し榮養に富める食料を撰び、淸淨なる

空氣（海邊又は山間）の中に生活する樣の事を以て全然健康を保つ事にするより他に豫防法は無いのです又肺患の人に接する事を避けるのも一の要件です。

滋養物と申せば矢張り牛乳、雞卵、牛肉、雞肉等であります、滋養物を用ひても胃腸の作用不完全なれば何の奏効も無き故、勉めて胃腸を健全にするを要するのです、又その方が咽喉が痛むと申さるゝが或は慢性咽頭炎の如き疾患が有るのかも知れません醫士の診斷を受け早く治療せられよ之に原因して喉頭、氣管枝、等に焮衝を起し或は肺患の誘因となる恐れがあります。

又醫士が勉學を禁じたそふですが或はその醫士が何か着目する所あつて禁じたのでしやう、然ならば適宜の勉學は差支あるまいと考へます人間と申す者は何か一定の職務が無ければ怠慢坐食の結果却つて疾病を釀す事となります此邊の所能く御勘考なされ。

第廿二問　火傷の痕　火傷の痕が未だに消えぬて困ります、何すれば消えますか。（或る女）

答　火傷の瘢痕は如何なる方法を用ゆるも之を消滅せしむるを得ず。

第廿三問　月經痛　私は月經の始めの日半日位は、腹痛て寢て居りましても身もがきばかりして居ります。又平生でも白血が下つて困ります、治療法をお教へ下さい。（心配女）

答　前號の第一問に月經痛に就ての答があります又白帶下は多く子宮內膜炎、膣加多留、子宮頸管カタルその他生殖器の疾患に附帶する所の一症候であります、專門家醫士の治療を受くるを可とす自家療法は無効です。

第廿四問　頭痛（外數件）　私は今年二十才の處女ですが毎日の樣に頭痛がいたします、四月猩紅熱の下地をしてから引續いて六月頃から腦が惡くて困ります、轉地もしました、が又去月あたりから頭痛がしだして時々目まいがします、自分では胃が惡いからだとおもひますがどうでせう。私は瘰癧といふ病氣はしましたが腺病質でせうか。冷水浴はよいと思ふが直ぐ冷やすとお腹が痛くなつて風を引きます。又私の姉は、一月に一度づゝきつと風を引きます、どうすれば引かないやうになりますか。（お伺の花子姉妹）

答　習慣性頭痛には種々の原因があります、御文面によれば慢性胃疾患がある樣です、胃の疾患は腦神經衰弱を併發し易く從つて頭痛を起す事は屢々見る所です、恐らく胃の疾患の結果であらふと考へます醫士の治療を受けられよ。

瘰癧は頸部の林巴腺疾患であります、所謂腺病質は瘰癧に犯されつゝある人を云ふのである。

風邪に犯され易ひ人には皮膚の抵抗力を強くするのが最も良き豫防策であります、冷水浴は此目的に最も適なふたる方法であります、冷水浴は寒き時より始むるは困難である、夏候の頃より習慣性に連續して行なへば敢て出來ぬ事はありません自己の健康を助長するには自己に打勝ち勉めて冷水浴を施されよ、寒風吹き荒み霜野に凍ほる時水浴を爲したる後の心地は常人の知らぬ愉快のもので冷水浴の効力は風邪を豫防するのみに留まりません、消化器を健にし血行器を調節し神經系統を强盛ならしむる所の偉効があります約言すれば健康の基です。

第廿五問　指を細くする法　指を細くするのと髮の毛の赤いのをなほす法はありませんか。（S子）

答　二つながら治療の法はありません。

第廿六問　六年を經ましたに　二十二才の女、結婚後六年を經ましたに未だ一子もあげません、最く月經は四十日に一度（或は月每に）

ありますがたゞそれだけで妊娠の障げになるでせうか。身體健康で子供の出來ない人もありませうか。(一婦人)

答　結婚後六年を經て妊娠せざるは不妊症と認めます、普通月經は二十八日毎に來潮するを生理的とす然し往々遲速あるは免がれません、あなたのは四十日毎に來潮するとの事ですが定期に來る所を見れば月經は異常あると申すのではない、不妊なるは或は子宮の位置に異常なる所があるか子宮口の比較的狹窄(多くは月經痛を伴なふ)なる爲めか或は他に子宮卵巢及び子宮附屬器に疾患有るが爲めか診察せれば不明てす、或は夫たる方に生殖器の疾患若くは不備の點あるのでは無きか兩方の調査が必要であります、果して兩者健全なれば妊娠す可き素質を具備して居るのです。

第廿七問　健忘症　私は芝居見に行てもそれが初めて見たのですともう歸りにはすつかり忘れてしまひます、やはり腦が惡いのでせうか。(足利、秋田喜代子)

答　健忘症と申すものゝ樣です之は大に腦に疾患ある時に來る然し多く見る所のものは腦神經衰弱症に附帶するのである醫士の治療を受くるを要す。

第廿八問　月經未潮　私は今年十九才になりますが未だ月經がありません、別に弱い所もありません、如何なる原因でありませう(駿河、愛讀女)

答　月花來潮は平均十六歲に始まる然れども本邦婦人の全體が皆然るに非ず、寒溫相異るの國に於て自から多少の差が有ります、又十九歲申して舊曆なるや新曆なるや若し滿十九年の婦人にして未だ月經の來潮せざるは稍や異常に屬するのである、診察を施さざれば不明なれども春機發動後の無月經の婦人には往々子宮の發育不全或は卵巢の發育異常若くは腔欠損等を見るのてす然らずんば全身は營養不良(種々の原因に由つて來る可き)にも月經の欠くる事があります、專門醫士に診察を受けて之を確實にせられよ。

第廿九問　一重瞼　俗にいふ一重瞼を二重瞼にすることはてきますか。(神田きみ子)

答　一重瞼を人工的に二重瞼にせればならぬ何か理由があるのですか恐らく美と云ふ點より考へられたるならんが醫士として殊更に刀を執れば出來能ふ事でありますが却て多少の瘢痕を殘す事もあるべし夫が爲めに美を望んで醜となる事になります、寧ろ父母より授けられたる儘ま天然の美に滿足せられよ。

第三十問　月經不順　昨年の十二月末から、今年の八月までは少しも滯りなくありましたが、それからこつちは一度もなく今になんの變もありません。何故でせうか。(失名)

答　月花初めて開きてより、尙年を經ざる少女には往々何等の故障なくして、數ケ月間の經閉を來すことは屢々見る所であります。然しより以上尙閉經するならば子宮の發育不完全若くは他の疾患故障等に原因して居らぬか醫師に診察を受けられよ。身體に全く故障なしとすれば敢て心配に及ばず。

第三十一問　顏のみ　私は顏が痩せてゐて困ります、顏のみ肥える法はありませんか。(痩面子)

答　顏のみを肥滿せしむる事は出來得ないです、全身の健康を增進すれば、身體すべて過不及なく營養佳良となり、生理的美なる人となるを得るのであります。

第三十二問(一)　芥子、生姜、鹽湯、芥子や生姜を食すれば逆上しますか。鹽湯を毎日呑みて差支えありませんか。又胡麻は如何でせう。毎日溫湯に浴しても逆上する事はありませんか

(二)結核性　結核性とは如何なる事ですか、肺病の事てはありませんか。(以上、玉子)

答　（一）芥子或は生姜の類は興奮性香料を含んでゐるを以て多量に食すれば逆上します適度に用ゆれば胃壁を刺戟する事その度宜しきを得て消化を補助しますから宜しい、鹽湯を飲むのは何の目的ですか、空腹時に余り多量に飲むのは能くありません胃壁を過度に刺戟して焮衝を起す恐れあり、胡麻も興奮性の成分を有して居りますから前記の事實に照し御考へなさい、鹽湯に浴する事は頗る宜しい、皮膚を刺戟して之を强健にする効があります。

（二）結核性とは結核菌に據りて釀成したる病竈を有する身體の部分に病變に對して醫士が申す事です例えば結核性關節炎の如き或は結核性腹膜炎等の如き類てす肺病と申しても悉く結核性ではありません種類多いのです。

第三十三問　暗闇にても見える　私は眞暗のところでも、久しく目を瞑つて明けますと、近所にある物體が薄すら見えますが一體なんといふ病氣でせう。（心配女）

答　夜暗に燈火を滅ずして物體の見へる道理は無いてす恐らく之を幻覺若くは錯覺と申して一種の心理的錯誤から起るのでしやう、腦神經衰弱或は精神病等に能く起る事てす然し一概に疾病の爲めのみでなく精神の過勞等よりも來る事も無いてはないです、能く御自分で注意してごらんなさい。

第三十四問　梅毒の黴菌　梅毒の黴菌は肺病の如く飛散して傳染する事はなきか、患者の膿が皮膚にふるれば傳染するか、其毒は唾分泌物より外に呼吸通便の中にもありや毒を受けても體質により傳染するものとせぬものとありや。（恐がり女）

答　梅毒の病源は近來スピロヘーテ、パリダと申す一種の病菌に歸着してゐます、空氣傳染の如きはありません、多く觸接傳染に依りて來るのです、體質の如何には關係ありません、茲に注意しておきたいのは唯だ素人の考へて居る樣に交接のみて許り傳染するのては無いてす、身體の或部分に多少の創傷ありて之に病毒が觸るれば傳染します、故にあらゆる傳染の機會は之に依りて御考へなされば御分りてしやう。

第三十五問　ヒステリー症　私は産後貧血してヒステリー症となり夜もろくに寢つかれません、又煙草が好きて止められませんが如何したらよいてせうか。（厭世女）

答　産后に「ヒステリー」症に罹る人は少くありません、ヒステリーと申す疾患は多く神經系統の過敏症を來す者てすから自然不眠症に陥る人があるのてす醫士に治療を御受けなされ、煙草は殊に神經性疾患のある方には害が有ります、御止めなさい、意志を强固にして克己心を奮起すれば止められん事は無いてす、然しヒステリー杯の方は意志も弱いてすから、克己心も起し兼れます根本から治療する必要が有るのです。

第三十六問　不姙症なりや　私事結婚後早四年になりますが未だ一子もありません、兩人共至極健全てすが、不姙症てせうか。（石川縣、岡谷久江子）

答　結婚後四年を經て姙娠せざるも不姙症とは斷言出來ませんが貴孃若くは良人になにか身體の異狀ある結果てはありませんか、御兩人共に健康と申しても素人の申さるゝ健康は唯だ自覺症の無いのをのみ健康と申さるゝのが多いのてす、醫士の所謂ゆる他覺的活眼に照せば、或は生殖器若くは全身の或部分に疾患が有るかも知れません、醫士に就て調査を御受けなさい。

第三十七問　痔　痔は不治のものでせうか。（靜岡、松風）

答　痔と申しても種類多き故、果して全治すべきか診察の上てなければわかりません。

誌友倶樂部



圖書換讀

○規定　本欄は誌友諸嬢の機關として隨意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

○拜借　長人の自白、生、春、青春、まひるの、みだれ髮、夢の花、お持ちのお方は一ヶ月程お借しくださいませ、文章世界、女子文壇女學世界の中お望みのもの一册付けてお返しします（福井縣丹生郡吉野村余田片山千里）

○進呈　私の許に「女子文壇四卷一號より本號まで」「少女世界三卷一號より本號まで」「冒險世界、婦人世界、女學世界、農業教育等數十册」皆不用になつて居ります郵税の切手さへ御送り下さるならばお望みにまかして幾册なり必ず必ず差し上げますこれて未だ私の心が疑はしいと思召す方には敢へて申し上げませぬ、（臺灣臺北艋舺江瀕街一三八稗貫美部子）

○文壇の花　皆樣の御手許に、文壇の花御不用なれば私の田口先生の「人の罪」の小説と御かへ下されませぬか。（和歌山市大橋鈴木支店内鈴木都子）

○おまちかね　皆樣の中に三十六年時事新聞の初刷「おまちかね」の繪を御持ちのお方は御送り下さい必ず御禮を致します（茨城縣北相馬郡藤代町近藤くら）

○古くとも　消息文の書物、及び婦人世界四十一年八月發行の分、何れも古くとも差支はございませんから御不用の方がありましたらお送り下さい、お禮は美しい舶來繪葉書を選びまして差上ます（本郷區湯島天神町一、二六、大隈方、入重子）

○漱石と獨歩　皆樣の内に漱石の吾輩は猫であるお持ち合せある御方は私の持つて居ります獨歩の欺かざるの記前編と交換して下さい（陸中伊手局區内淺井高橋洸）

○ストリーズ　皆樣私の手本に英語の本十四五册（普通の教科書でなく重にストリース）有りますから皆樣の何かと御交換下さいませ御望の方は七日迄に願ひます（佐賀市龍泰寺小路犬塚松美）

○不用書類　（福澤先生、女大學評論、新女大學）（澤柳政太郎君、讀書法）（元祿姉さん、呪はれたる女）（橋本青雨君、詩人ハイネ）（兒玉花外君、花外詩集）（中村春雨君、無花果）（久保天隨君、醉人の妻）（婦人世界、初號より二卷十一號迄）（婦人界、初號より二卷二號迄）（青年界、三卷四號より同十三號迄）あとは又追々……右お望みの方は他書、繪葉書、其他の物品と御交換願ひます。委細は往復葉書にてお問合せ下さい（京都市上京區日暮通下立賣上、木村方、深山木）

○明星とスバル　諸姉樣のお内て（明星終刊號）（本年二月發行スバル）御不用の方はおめぐみ下さいお禮としては詩集か上等繪はがきかお望みのを差上げます又私手許にハガキ文學ホトヽギス天鼓秀才文壇笑文藝倶樂部文庫新潮の不用がありますから切手封入して御申込次第差上げます（兵庫西宮内町杉山春翠）

○金色夜叉　皆樣の中で思ひ出の記お持の方はお送り下さいませ私の金色夜叉にお代樣全盛繪葉書添へて送ります（神奈川縣橘樹郡旭村駒岡稻葉松太郎方すみれ）

○萬葉　賢明なる諸姉樣へ、御手元に萬葉集の評釋御不用でありましたら、何卒惠んで下さいな、御禮としては私の大和田建樹先生著の「新體詩學」を必ず御送りしますから何うぞれ（四谷區市谷片町三五齋藤方味方こう子）

○詩集　皆樣の内で、牧水著海の聲、御風著睡蓮品子著常夏お持の方は私の戀ころ變、みだれ髮、まひる野明暗と御交換致しませんか（弘前市土手二二五廣田方川村露子）

○講義録の分與　妾の許に、修身、倫理、國語、漢文、作文、日本文學、東洋史、西洋史、日本歷史、日本地理、外國地理、英語、算術、代數、幾何、三角法、物理、化學、動物、植物、

編物、生理衛生學、教育學繪畫、和歌作法、簿記學等の講義錄あり。學問に御熱心の方に差上げます。御望の方は、自身の寫眞、繪端書を添えて御手紙下さい。（茨城縣稲敷郡柴崎村大字戌波新田山口利方橋本光子）

○いざさらば　諸孃の中で「いざゝらば」御持の御方は妾の魔風戀風と御交換下さい其節は妾のみにくきうつしゑ一葉上げます、（青森縣上北郡三本木稲生町七丁目葛卷りさ子）

○皆様の内で少女の友、日本の少女御不用でしたらいかほど古く共かまいませんから御送り下さいな、相當の書籍か、繪葉書で乾度御禮いたし升お願ひよ（磐城國丸森町山崎小野都音子）○妾の手許に、緣不緣。男女一代の運勢。教育的心理學。乳姉妹。女日用かゞみ。花吹雪。文章新辭典。文藝倶樂部。ふところ日記。キッス　特文茶の湯と生花。青春小說。寸光錄。等不用になりて居りますから皆様の中で不如歸。朝ばれ何でも家庭小說などを御持の御方は右の本と交換を願ひますよ（千葉縣山武郡白里村四天木里内山げん子）○諸孃様の御許に冒險小說の海底軍艦、東洋武俠團、塔中の怪、銀山王、初航海、世界冒險譚、武俠の日本、新造軍艦、これに限らず冒險に關した書物御持ち合せの御方は是非下名へ御送り下されませ御送り下された孃様は御禮として倍價の書籍雜誌と私の寫眞を差し上げます又御交際をも願ひます（攝津川辺郡長尾村阪上惣右衛門方熊子）○諸孃様の中に、不如歸。朝ばれ。はいから夫人。なんでも家庭小說御持の御方は妾の。緣不緣。男女一代運勢。教育的心地學。乳姉妹。女日用かゞみ。花吹雪。ふところ日記。茶の湯と生花。文章新辭典。青春小說。　不用になつて居りますから交換してくださいませんか、（千葉縣山武郡白里村四天木藍野きよ子）○皆様私の手許に次の不用書があります。（英語書）フエーマス、ストレース、神田さんの中文典、齋藤さんの國語文法、櫻井さんの三大物語及び女學世界女子文壇古き風俗畫報等數十冊、右の通りですから何卒皆様の中御心ある方は（英語書は未使用の物です）文藝倶樂部又は女學世界何れも四十一年以前の物と御交換下さいませんか、　英語書は相當代價でもよろしくあります（新潟市上大川前通り十一番町野村敬次郎方野村房子）○皆様の内に小說、（何でも宜しう御座います）お持ちの御方は妾にお惠み下さい、妾からは、お禮のしるしとして、本年正月號の文藝倶樂部新文林少女世界お望のを差上ます（栃木縣足利町榮町一丁目柳田幸吉方白露）○誌友の皆様の内に小說魔風戀風及び金色夜叉を御持ちの方は御送り下さい御禮として私の、月琴と月琴の歌とを御送り申上ます（滋賀縣野洲郡中洲村大字立田大西芳子）○お情け深き皆様妾は至て無學な少女で御座いますが永久にお交りを願ひます若し小說の古い御不用のがありますれば御惠み下さいませんかリボンか編物で御禮は致します哀れと思召しお情け深い姉様へお願ひ申します（牛込區水道町一〇辻知子）○皆様私の許に雜誌文藝倶樂部、女學世界、婦人世界、中學世界、文章世界、ムラサキ、ハガキ文學、本讀、太陽など數十冊不用になつて居りますからお望みの方は郵券封入にてお知らせ下さい直にお送りいたします　和歌のお上手なお方は御惠み下さいませんか御禮は必ずいたします、其外ゑはがきの交換も御願ひいたします。（千葉縣夷隅郡國吉町刈谷今井なほし）○満天下の愛讀諸孃よ今妾の手許に須磨の曲、青山白雲、處世訓、其他中學世界、女學世界等の不用書があります、皆様の内で西洋想夫憐の歌、菊水の歌、其他御寫眞と御取換　くださいませんか、妾は男子の方にても差支へありませんよ、どうぞ皆様御願ひ申ます（京都府宇治郡笠取村池の尾多田巳之助方隆子）○懷かしき誌友の諸姉様よ妾の手許に、苦學園、不逝の娘、（福田琴月著）の寫生文範、日本奇風俗、等が在ります故何卒諸姉様の讀物と交換して下さい又繪はがき寫眞や玉章もれ、若　次第　送附致します、女子の方に限りますよ宜しく願ひます（愛知縣知多郡半田町名切二十九番地村井久子）○私の手許に小說月魄滕之卷、青春、新ほとゝぎす、玉岫、令孃と勇兵、血の涙、其他種々の雜誌や寫眞、リボン、繪葉書、私の作りたる編物と皆様の婦人世界、女學世界、筆子、ハイカラ令孃、魔風戀風、文藝倶樂部、心の涙、天打波、中學世界、秀才文壇、戀と戀、百合子、花紅葉、女子文壇新美文、新朝顏日記、さゝ波と交換して下さい。（上總山武郡白里村南高古内方にて花村）、○妾の手許に金色夜叉合本、乳姉妹、魔風戀風、新不如歸、瀧口入道、青春、食道樂、夏子、血の涙青年歌集など御座いますから皆さん御所持なら、文章世界、紅葉全集、多情多恨、思出の記、己が罪、其他何なりとも右相當價値のものと御換讀くださいな、（岩代河沼郡飯谷村藤長谷川みつ子）○親愛なる誌友の姉様方よ今私の手許に「女子文壇」「女學世

界「婦人世界」少女世界等昨年の一月から十二月までありますから姉樣方の内に御不用の雜誌が有りましたらどうか御交換して下さいな（府・下北多摩郡東村山村字野口谷野光子）〇何卒金色夜叉其他女夫波御持ちの御方は御ゆづり下さらか又妾の罪子夫人、富と愛、血の涙戀無常二人女王と御交換下さい（靜岡縣引佐郡麁玉村伊藤部枝子）〇諸姉樣私は二月增刊より愛讀しました私は父も姉妹もなく誠に哀れな少女でございます末長く御れがい申升どなたか二月發行の文壇をわけて下さる方は有りませんか（近江彥根二番町佐和町小林久次郎方佐和多芳子）〇妾は小說やうた本が大すきですけれど家がまづしいので思ふようにかゑませんよみますればすぐ御返しいたしますからどうぞ御かし下さいませ誠にあつかましうございますけれど（近江彥根二番町小林久次郎方佐和田芳）〇誌友の諸姉樣よ私の手許にびん細工縫取繪葉書婦人の重寶通俗寫寳全書婦人世界女學世界誕掛袋物編物の雛形少女界其他のザッシ持つて居りますから何卒某編物ひじつき誕掛袋物雛形禮式裁縫編物料理等にかんする本と御交換御願ひ致します（近江蒲生郡平田村上羽田山岸やす）〇思出の記、夏子御惠みの方には私の寫眞と、私手製の繪葉書と、兼六公園繪葉書一組と御禮に差上ます、何うかよろしく（加賀金澤市西堀川町伊藤操）〇御姉樣方の中で小說がありますれば頂戴よ、御禮には繪はがきや古雜誌をお送り致します、（埼玉縣北足立郡安行村大字藤八新田中山ひろ子）〇私の許に金色夜叉の歌、魔風戀風の歌、乳姉妹の歌新派和歌評釋、二分間體操都會生活運命開拓法

女子日用かゞみ、こゝろの日記、等不用になつて居ます、お望みのお方は繪ハガキにておん申込下さい送ります、又私の鐵心琴か造花と、皆樣の詩集か又は絹ハンカチなどゝ交換して下さい（美濃國大垣町室、酒井とみ子）〇私の許に日の出島酒遊樂笛吹川黑髮涙六傑作集戀禍野婦系圖文庫詩集などありますから皆樣の怪光（上下）月魄（全部）鄉土柳子の話コブシ後篇其外面白い小說昨年の雜誌エハガキなどゝ交換して下さい先着五名の方へは當地名所エハガキ一組づゝ添へて差上げます（秋田縣仙北郡大曲町米町石橋波五郎方紫川女）〇懷かしい誌友諸孃樣に折り入つて御願ひがありますの、あのね妾の許に騷然、罪のゆくへ、婦人の絕叫、むら竹、戀學生婦人の調べ、大家小品文集、大家新體詩集、文壇獅子吼等の不用書が有りますが、皆樣の許に不如歸、奇美人、青春、伯爵婦人、獨歩集血薔薇、響、等の御不用書がありましたら、どうか御交換遊ばして下さいな、又諸孃さまの中に御寫眞を送つて戴いた御方には、女學世界、女子文壇、文章世界、中學世界、秀才文壇、文藝倶樂部等の諸雜誌一册を妾の寫眞に添へて御返禮いたします。（岐阜縣安八郡大垣町寺町小岩紫琴宛）〇お姉上樣私は今病の床にふして居る身でございます、何卒病のうつはらしてございますから、晶子先生の歌集、夢のはな、明星、みだれ髮、などお持のお方樣はどれなと一つ送つて下さいな、美文、俳句、小說その他の本でもお返し致します、（山城つゞき郡八幡町七九七、八田文子）〇妾の手許に探險世界文章世界趣味など不用のが合せて三十册有ますから宗敎の雜誌

或は繪葉書と御交換を願ひます（土佐國高岡郡越知町高橋綾子）〇諸姉上樣妾の手許には本誌の外女學世界婦人世界等が有るばかりで小說類は一切御座いませんが右の雜誌なら新しいのと古いのを取り交ぜて二百册以上御座いますからお望の方は寫眞又は繪葉書にて誌名を御指定の上御申込み下さいませ（東京府西多摩郡青梅町日向和田吉田欣子）〇皆樣中左の樣な園藝書類がございましたら送り下さいませ園藝十二ケ月、球根培養全書、植物繁殖法、作物栽培法、蔬菜栽培法、園藝全書草花培養法、其他園藝農事の栽培書なら何んなてもかまいませんから送つて下さいませお禮は極高等の草花種子、各種新小說、繪葉書、繪ハガキ帖、等にて致します（佐賀縣小城郡小城區蛭子町田尻貞子）〇諸姉樣方よ妾の許に小說墓地多情多恨ホトヽギス女道樂大變男と他に雜誌女學世界文章世界文藝實業少年等が有りますから「マカゼコイカゼ」の上中下の内一册か面白き小說と交換願ひ升（佐渡郡夷田村國三方貞子）〇私の手元に女子文壇一月號より二月號臨時增刊の新美文亦新文林昨年の十二月號より本年の二月號只今不用ですから皆樣の手元に多情多恨女の秘密不用の方は交換して下さいもしなければ自己の寫眞を添へて申し越し下さい直に御望みのを送ります（千葉縣海上郡飯岡町宇井花月）〇私は今度都合に依り左の書物お不用になりましたから皆樣の御手製の編物やひじつきと交換して頂きたうございます。魔風戀風。戀と戀。初姿。はやり唄。にせ紫前編。青果集。戀慕流し。阿鼻焦熱。女學生。風葉集。誓恩怨。無花果。金色夜叉前編。乳姉妹。月魄。

運夫覺。己が罪。村の人。姉葉集。不如歸。星由の配。靈夜寄。二十八人集。戀のピストル。火の柱。其人の自白。自由結婚。平凡。其面影破戒。吾輩は猫である。寶息子。夜の風。深山美人。血の涙。暴潮。熱狂。及び藤村詩集。天地有情。花ぞの。美辭寶典。他に文藝倶樂部。新小説。女學世界。女子文壇。新文林等古雜誌も澤山ありますから續々御申越し下さい（靜岡縣田方郡熱海町咲見町池田げん方土屋枯村）○皆樣の中に少女と文藝か文壇の花を御持ちの方は少年世界少女の友美しい繪葉書かと御交換下さいませ本は一册でもかまひません。（天鹽國増毛畑中町四丁目田中仙子）○私の許に悲戀、夕潮、己が罪、ハイ子の詩、百合子、夏子、濱子、ゲーテの詩、戀、花妻、新ほとゝぎす、全後、黒風天打つ浪、横戀慕、肉だん、草枕、金色夜叉、其他澤山書籍あり何卒諸嬢御持ちの小説類と交換願たし、御送付次第着順に御郵送申上ぐ、尚繪葉書交換願ふ、（靜岡縣駿東郡原町原杉山願）○誌友の皆樣の内で本誌の一卷一號から五卷一號まで完全なもの御持の方は何號にても又何册にてもよろしいから御讓り下さる人はありませんか御知らせ下さい（三重縣桑名郡七取村大字香取村上富子）○姉樣方の御寫眞でも御不用の小説御送り下さいませ私も婦人世界小説いろ〳〵有りますから御交換も寫眞も御望みならば御送りします（神奈川縣高座郡寒川村字一ノ宮新道木村伊勢子）○誌友の皆々樣よ妾の許に「不如歸の歌」「金色夜叉の歌」「女夫波の歌」「魔風戀風の歌」「思出の記の歌」「夜半之追憶の歌」等不用てすから入用の御方は繪葉書て知らせて下さい（千葉縣東葛飾郡福田村上三ヶ尾字佐見留江子）○私手許に雜誌數十册、畫報二十册、新小説、地理、歴史、作文、の辭典、習字書、繪葉書、全アツク、他の書籍澤山ありますから諸兄諸姉の御寫眞送つて下さい早速御指定のを送ります（武藏國兒玉郡賀美村大字勅使河原關口園月）○誌友の皆樣私の青春、金色夜叉合本、魔風戀風、歸郷記、不言不語、すみ子、不如歸の歌、夏子、新體詩學、和歌の友、婦人世界、食道樂其他三册ばかりとどなた樣か御所持の、鉄子、伯爵夫人、己が罪、血の涙、母の愛其他何なりとも古本と御換讀を願ひたう御座います又御望みにより讓り渡しても宜しう御座います。（岩代河沼郡飯谷村大字藤長谷川光子）○妾の許に不如歸思出の記金色夜叉、多情多恨、魔風戀風、我輩は猫である、女夫波、伯爵夫人、己が罪、青春夏子、鉄子、破戒、みだれ髮、ハイネ詩集、等ありますから御交換下さいませんか（千葉縣東葛飾郡福田村上三ヶ尾字佐見留江子）○諸姉樣の中に、（不如歸、新不如歸、後不如歸、己が罪、乳姉妹、魔風戀風、金色夜叉、少女の煩悶、多情多恨、罪の行方露子、夏子）御持ちの方は私の（少女世界、女學世界松山鏡、大江山、名所案内、不如歸の歌、片眼小僧、里見八犬傳（八）天うつ浪、戀無情）等と御交換を願ひます（近江犬上郡彦根町橋本大賀きぬ子）○諸友の皆樣よ手許に左の如き本が御座いますから御入用の方が御座いましたならばおゆづり申ます帝國習字速成學會女子手本二部、幾何學教科書一册女子作文大成全一册植物諸官立學校試驗問題集一册算術教科書、三册（女學校用）いづれも未使用のものて御座いますまた小説奇美人、奇戀愛、その日〳〵明治の合璧新ひざくりげ、ホーネムン下田先生家政教科書二册、香川習字帖、など御座いますが言海か枕の草紙か十六夜日記か袋東甲寶圖解か社會字彙良文雜誌などゝおとりかへ下さいませ御都合て代は差上まする（茨城縣結城郡絹上村石道石澤きぬ子）○私手許に神傳開運秘法と云ふ古書があります、中には不幸の人開運するの呪咀、夫婦愛敬一家和合の呪咀、商賣日夜大繁昌する呪咀、勝負事に必ず勝利を得る呪咀出產の子生れぬとき生れしむる呪咀、產婦の胞の下りざるときの法、乳出てざる時の符、大吉事來るの呪咀等が詳しく書いてありますの、それて私其中の一つを實行致しましたところ、不思議にも多くの幸福を得ました、御希望の御方には右書籍を謄寫して差上ますから、御不用の國語、數學等の教科書を御送り下さい、尤も送料實費とも二錢切手一枚以上御封入の事（東京麹町區飯田町四の十三瑞穗樣内田口千代子）○私の手許に婦人世界女學世界、冒險世界新小説文藝倶樂部朝鮮語研究書などの不用の雜誌ありますから皆さまの中て小説いとし子黑百合等と御交換願ひます又どんな古い雜誌でもよろしうこざいます（和歌山市三木町南山區諏訪たま子）○誌友の皆樣妾の所にハーモニカー、歸郷記破れ戀、ホトゝギス新體女子書翰文新舊約全書、詩粹附文と詩、ホトゝギスの歌、女子文壇四十一年より讚美歌等ありますから皆樣の内バイオリン、思ひ出の記短編小説、花袋集等御もちの方は至急御一報下さい（靜岡縣濱松町後道四九杉浦とみ子）○誌友の皆樣、色々の習字帖、女子

文壇、文藝倶樂部、女學世界。美しいひじつきや栞に寫眞を添へて下記の所へ御送り下さいませんか、御禮は明治少女節用、百海、文のしなり、色々の小說等、相當な品で致します。（下關市豐前田町一七七安部しげ子）○皆様私の手許に不如歸、後の戀、築擇び、深山の櫻、中學文壇、女學世界、少女世界、良友、其の他不用の物有ますから姉様方の金色夜叉、己が罪、乳姉妹、其他造花、絹布、手風琴等と御交換下さい（茨城縣稻敷郡阿見村大字大室庄左衞門方日下部喜美江子）○皆様の內で、紅葉全集の第六卷（壹册）を、お持つておいてになるお方は、私の貴族の戀へーグ奇怪塔、百雜旅行、文藝倶樂部、婦人世界ハガキ文學婦人消息文等百册もありますから交換して下さい（新潟縣岩船郡村上町細工町河島平作様にて成田聰子）

品物交換

○誌友の諸姉上様、皆様の御內に舊切手御持ちの御方は、御送り下さいましれ、私舊切手が大すきなのですよ、外國のめづらしきものを御送り下さつたお方には當地の繪葉書てきつと御禮を致しますよ（神戸市中山手通一丁目、四十六十四岸本あき子）○誌友の姉上様方よ何卒編物交換して下さい先著の方へは女學世界婦人世界等送ります（石川縣石川郡美川町川原せい子）○皆様の中でヷヰヲリン、か又は寫眞器械を御持て御不用の方がありましたら御ゆづり下さるか又は御指名の物品と交換して下さいませんか何卒々々御手數ながら本欄で御住所御知らせ下さいませ御願致します（大阪白舟子）○みな様私れ百海、晩風戀風の詩、新美文活法、美文解釋、英語本、等がございますからどなたかヷアイオリンと御交換下さいまし右の本をみな御送り致しますから…（横濱市相生町一丁目二十二番地桑原善子）○（內外古郵便切手及び古錢、古札）右の品にて珍らしきもの御惠みの方には須磨明石舞子其他神戸兵庫名所及び當地繪葉書其外小說雜誌類にて御返禮致します。（兵庫縣明石郡鹽屋村安井淑子）○女子文壇誌友諸姉よ妾は女子師範を卒業致しましたから何卒寫眞や編物の交換を願ひます（千葉縣長生郡二宮本鄕村眞名新町蒔田千代子）○誌友の皆様何卒永久に未使用繪葉書及びシチリ、ヒシツキ、リボンの御交換を願ひます男子の方にても情深い方となら御交際致します私は當溫泉に保養中です（北海道後志國昆布宮川溫泉五號室內寒月子）○皆様寫眞、アミモノ美しきリボン、シホリ其他珍らしきもの何でも御交換願ひます、私の寫眞もたくさんありますから、御寫眞をお送りの方には私のに婦人世界を添へてお禮いたします。（靜岡縣引佐郡田村鈴木誠一方白浪きみ子）○愛讀者の皆様何卒〳〵書物や寫眞、編物の交換等又御玉章も下さいな（長野縣更級郡靑木島村宮島千代子）○皆様三月號に出しました通り美しい花の種子たくさんございますからどし〳〵申込んで下さいどなたにも美しい珍種を下袋づゝ進上致しますけれど三錢と二錢との郵便切手はお忘れなくお入れをねがいます（佐賀縣小城郡小城臨蛭子町田尻貞子）○永久の紀念にして置きたいのは、誌友諸姉様の寫眞なのよ、どうぞ送つて頂戴な、妾の寫眞と小說、紀念繪葉書、りぼん、しほり、家庭の栞、なぞで返禮しますことよ、（新潟縣中魚沼郡水澤村村山德正方村山潮子）○妾は繪葉書が好きなの又、しほり、ひじ突き御惠み下さつた方は當地名所繪葉書及び美人繪はがきて御返禮致します尙先着五名には私の見惜き寫眞を御送り致します（名古屋市中臨門前町貳丁目太田五三郎方秀蘭）○誌友の皆様若し寫眞を御持ちの御方様は直にお名を記してお送り下さい御禮には金色夜叉歌。ホトヽギス歌。美文作法。家庭の心得等を進呈致します但し先着者六名限りてす（備中連島村大字大梵原こみれ）○お蘇はしき誌友の皆様御寫眞、栞、お惠み下さいませんか、御禮はお耻かしいけれど、私の寫しゑて（高知市升形三八山內しづよ）

交際を望む

▲記者より注意　此の欄の原稿中『私は片田舍に淋しく暮らしてゐます』『淺學な不束者』『あはれと思召して』『永久に』『御返事は必ずいたします』と云ふやうな文句は一切除き去りました、大抵の方は皆此の文句をお使ひになりますから、まるで版で押したやうになつて面白くありません、挨拶のことですから然う奇抜な文句も出ますまいけれど、今少し智慧がありさうなものです。

○封書　きよい封書の御交際をお願ひ致します（弘前市土手町二二五廣田方川村富子）

○身に覺えあり　おなつかしき誌友のお方に逆境にある私を哀れと思し召さば、どうぞお美しい繪葉書かお玉章や編物（寫眞かけかヒラツキ）をお恵み遊ばせ、私もお返しは怠りませんわ、妾の寫眞もまだ少しばかり殘つて居りますからお寫眞を下さつた方五名様には差上げます、私はこれまで他の人に寄稿寫眞を唯取りされた經驗がありますから、寫眞だけは私からお先には差上げませんからそのお積りで居て下さい、こう申しましても私は決して皆さんから只取なんかいたしません、私の身におぼえがありますかられ、（秋田縣山本郡藤琴村太夏瀬山梅澤すみれ子）

○お寫眞　御なつかしい御姉上様方、私は今まで小女の友や小女世界ばかり讀んでたのでしたが今年から本誌を讀む様になつてよ、私御姉上様方の御寫眞が拜見したくてならないの、どうか送つて下さいな、御禮には米國の兄さんから戴いた美しいエハガキを差上ますから、又先着の御三方には私の寫眞も添へて御送り致しますから早く送つて頂戴れ。（神田區駿河臺袋町十五、三浦方長谷川愛子）

○足なへ　皆様私は紀元節に友より本誌を借りてよみましたところ、大へんよい本でございました故本誌の愛讀者となりました、私は足なへの不具者で御ざいますが、何卒憐れと思召して御交際を御願ひ申します（長野縣小縣郡上田原町三丁目湊屋關いく子）

○理科の研究　諸姉様私は理科の研究がしたいからられ、各々國の押花や各國の異なつたる草木の性質をお聞かせ下さいれ（岡山縣邑久郡朔日村大字西片岡橋本末吉内桐木松子）

○文學と音樂　皆様私は高女に通學の傍ら文學音樂に熱心な趣味を有しますもので同趣味て清い深切な方が御坐いますれば御交際を願ひたう存じます又お手許に二絃琴お持ちの方はお讓り下さいお願ひ申します早速ながら下名へお知らせを（大阪市南區坂町一二八番屋敷加藤菊子）

○太陽の寫眞　誌友の諸兄姉様の内に雜誌太陽お持の方が有りましたら懸賞募集寫眞の口繪お恵み下さいませんか手製の栞かひぢつきにてお禮は必ず致します。十枚以上かためてお送り下さいましたお方様には見苦しいですが妾の寫眞添へてお返しいたします（神戸市楠通四丁目東川様方西村富子）

○越後の方に　私は新潟市の生れの者でありますが、市に限らず、越後の方と聞きますと誠にお懷かしいのですわ、何卒越後の諸姉様方よ繪葉書を以て交際して頂戴よれ、…私二月號に交際を求めましたら、男性の方よりの通信の夥しいのには實に驚きましたよ、私男子の方よりの交際は絶對に謝絶してよ（東京四ッ谷區片町三五齋藤方味方こう子）

○文學好き　御厚情に富んだ文學好きの御方々御交り下さいまし（但し男子は御斷り）而して東京の御方お願ひし致ます、（三重縣桑名郡古奚村瀨木八重子）

○つとめ　妾は下記の所に務めて居る者ですが、同じ務めをして居らるゝ方及他の同志ある方は繪葉書の御交換をして頂戴な、封書にてもよろしく必ず親展にして（北海道石狩國雨龍郡深川町堀江病院内藤枝運子）

○家庭報告　私は偏狹なる父、固陋なる母に育てられて其の上町から牛里程も離れて居ますので家庭の改善が致したく思ひます、それに偏狹とは言へ父が死しましたので下女を二人使用して居るのにも仲々私の獨學では修め兼ますのですから、眞實なる家庭の報告を願ひ度ふ御座ります、御禮は御手紙で申上げます尚ほ丹後丹波若狹の諸姉様御交際を願ひます、（京都府加佐郡高野村字高野由里高田きく枝）

○譜　皆様の中で何かヴアイオリンの譜をお持ちの方はどうぞおゆづり下さいましな必ずお禮致します（小石川區小日向臺二ノ十九高木きん子）

○妾姉妹も愛讀者になりましたからどうか玉章を戴き度う御座います尚寫眞栞も交換をして下さいな先着十五人の御方には寫眞に栞や繪葉書を添へて差し上げます（東京府北多摩立川村松盛堂内安田君枝仝房枝）○拙いものを投書するよりやつぱりお上手な姉様方のを拜見する方が樂しいですわ――私はれ――廣島から當地へ參りましたもので故郷の方の作物を拜見すると一層なつかしくなりますのよ（東京本所區柳島横川町十一三谷二葉子）○阿部秀子様に、中頸城郡長の御令孃で高田にお住居の方ではありませんか、私も生は高田其地には親類も家もありまして誠になつかしく存じて居ります（鹿児島縣川邊郡川邊村平山みゆき）○私は末長くいつまでも女子文壇を友としようと思つて居るので

す何卒諸姉上樣よ現御交をして頂戴なさよなら（千葉縣東葛飾郡福田村大字上三ヶ尾四三號卷けん子）○誌上の諸姐樣よ玉章や繪葉書の交換を願ひます（宮城縣宮城郡原町南目新屋敷淸水貞子）○妾は印旛の沼邊に住む至つて淺學のものですよ妹と思召して寫しゑ繪葉書其他を交換して御導き下さいな（千葉縣千葉郡豊富村行々林源兵衛方抑田雄枝子）○横濱一の正女樣に、妾も貴女樣と同じ境遇にある樣に存じます妾も誠に哀れな身…淋しき身…の一人です御互に杖とも柱ともなり慰籍の友に成らふてはありませんか御差支なくば御交りを願上ます何卒〳〵（下谷區谷中淸水町十二、吉信方曾井不律子）○妾は十七歳の處女ですが未使用の繪葉書五枚以上下さる方へは妾の見にくき寫眞及繪葉書添へ御禮いたします、尙末永く玉章や繪葉書の交換を願います（大阪市東區博勞町一丁目四番地丸山樣方木谷けい子）○皆樣どうか繪葉書や玉章又は寫眞交換を願ひます（和歌山縣海草郡日方町石川捨次郎方小西松枝）○妾は親しく語る友もなく只一人り女子文壇を友として居りますどうか御玉章下さい（神奈川縣高座町寒川村一之家木村伊勢子）○親愛なる誌友の皆々樣御玉章お惠み下さいまして有難く御禮申上ますあまり多く御座ましたのでとりまぎれ御返事差上げ兼れた方もある樣に思ふて居りますから其方々には誠に恐入りますが此の誌上で厚く〳〵御詫申上ます何卒惡からず（北海道札幌にて早崎貞子）○尾張の秋月さん淋しき敎員室の記事を拜見しまして誠にお氣の毒に存じます。私の學校はそれは樂しいのです男敎員十一人女敎員十一人居りますが何なするにも家族的で階級のへだてなどは少しもありません毎日談笑の中に事務を執て居ります（山口縣山口町伊勢小路出嶋芳枝）○諸姉樣よ何卒玉章や繪はがきの御交際を願ひます（山口縣玖珂郡由々村下横町上田内石澤英眞）○誌友の皆樣私は當年女學校二年ですが皆樣と交際致したくどうか御手紙や御寫眞下さいまし乾度私の寫眞を以て御禮いたします今より待つてよ左樣なら（栃木縣下都賀郡赤津村大字深澤關口すい子）○誌友の皆樣私此度當地に参りまして毎日女學校に通つて居ます、どうぞ相變らず御交際の程願ひます（廣島縣賀茂郡西條町吉田利助樣方秋田國枝子）○京都の綾子樣お玉章おなつかしく拜見致しました貴女より私の渡島に居る事を御存じ乃早速御返事差上げ度いのですけれど御住所が判然しないのでほんとに殘念ですわ失禮ですけれど今度至急御知らせ下さいなそれから誌友のお姉樣方私は誠に淺學な者で御座いますがお交り下さいませぬか御住所は誌上でお知らせ下さい（渡島にて元子）○誌上の皆樣私は高等女學校の四年ですが、繪葉書御手紙の御交換を願ひます、然し字は下手ですから遠慮な方と乾度願度いてす。男子の御方はいやですよ。（大阪府泉南郡岸和田町字本町金納たね子）○私は世にもわびしき山寺に朝夕心さびしき月日を送る無學無智の小女でありますがおなさけにて御交際を致ならぬ拙なき身をもおいといなくば折々寫繪や玉章の交換をも御ねがひ申上ます（三重縣桑名郡古美村石川辰江）○誌友の皆樣私は當年女學校一年ですが皆樣と交際致したいのです御手紙や御玉章下さいまし乾度私の寫眞を以て御禮いたします（栃木縣下都賀郡赤津村大字大柿石川はな子）○誌友の皆樣私は當年技藝二年ですが皆樣と交際致したいのどうか永久に見捨なく御手紙や御寫眞下さいまし此度私の寫眞を以て御禮いたします（栃木縣下都賀郡赤津村大字木大出とわ子）○誌友の御姉樣ヴアイヲリン御不用でしたら御讓り下さいませんか御承諾の御方は小包なり書留小包なりて御送り下さい男子の方でもよろしいから何卒御願ひ致します未使用繪はがき交換も（北海道後志國昆布居下宮川溫泉内鈴村かつ子）○一月の女子文壇の誌友倶樂部に投書いたしましたところが早速諸姉樣の親切なる御玉章下さいまして私ほんとうにうれしいわ、相變らず御玉章や繪ハカキの交換を願ひます（熊本市外白坪村田崎中山すゑ子）○何卒姉とおぼして水魚の御交りを伏してお願ひ申します（丸龜市瓦町堀藤枝）○誌友の諸姉よどうか此後は繪葉書御手紙ひじつきしをりあみものやいろ〳〵御交換してくださいな御願ひよ御返事はかみにちつかつて致します（大阪市北區旅籠町三七中野艶子樣方上田貞子）○何卒編物か繪葉書の交換を是非祈ります病り淋しき片田舍で暮す妾が心底を察し給はらば終生までも忘れません（奈良縣北葛城郡高田町高田郵便局内にて上島とよ子）○皆々樣玉章やエハガキ々御惠み被下私も御送致します（京都市五條通油小路東入ル大島裁縫所神崎ぬい子）○石田樣御玉章ありがたう早速返事差出す筈ですが御所がはつきりわかりかねますので雜誌の紙面なかりまして一寸御尋ね申します（京都府隆子）○妾は友人もなき不幸なる一少女

てありますが繪葉書の御交換を御頼み申します(大阪市北區曾根崎一丁目一四六野田かよ子)○誌上の姉上様繪葉書御玉章の御交換を御願い致します(大阪市東區船越町二丁目五 鈴村上内秋本峰子)○愛讀者の諸彦よ繪葉書や玉章の交換御願申ます(兵庫縣城崎郡港村氣比村 宮代初枝)○誌上の皆々様何とぞ妾しも繪葉書や玉章などの交換を願ひます(埼玉縣北埼玉郡井泉村今泉小久保房子)○諸姉様どうぞ繪葉書や御玉章の御交換を御れがい申します(石川縣金澤市下本多町三番丁六番地折坂登茂子)○大坂の大辭よし枝様御手紙は着きましたが御住所書をなくしましたから御返事を上げる事が出來ませんから御住所をくわしく書てもう一度御便り下さいませ。(熊本縣葦北郡田浦村青山幸子)○誌友の諸姉様よ何卒名所繪葉書の交換を願ひ升又寫眞の交換をもれ(石川縣鳳至郡七浦村字皆月茶木雄子)○情厚き諸姉様よ雪深き山里住ひのこの可憐女に玉章頂戴な御禮はきつと致します左様なら(岐阜縣惠那郡岩岡村新田西尾彦三郎内熊崎稜子)○どうぞ姉と思召され幾久しく玉章の交際をお願ひ致します御返事は必ず致します又寫眞の交換も是非れ(上野國館林町縣町山野茂三郎方佐川榮子)○私事は近所の方には繪葉書狂と申さるゝ程繪葉書好きです誌友の皆樣どうぞ御贈りくださいな(長野縣小諸町津金泣月)○誌友の皆樣何卒繪はがきやら玉章の御交換を願ひます(大阪市東區博勞町二丁目丸山マツ方野村すみ子)○誌友の皆様よ、妾は霞が浦の北岸に淋しい日を送つて居る者ですが寫眞玉章繪葉書などの御交換を願ひます(茨城縣新治郡牛渡村高崎長助方 志ん子)○諸姉上様よ私も本月より女子文壇の愛讀者となりましたから御交際を願ます(愛知縣知多郡是佐町花浦 病院内加納はる子)○幾十萬の諸姉様、繪葉書の交換や土地の風俗情況を御知らせ下さい、妾も此異つた新らしい目に觸れたことを拙いながら書いて送ります、繪葉書も戰役紀念や滿洲風俗、滿洲名所、又は普通の人物風景名所跡地など御望の品と交換します(南滿洲柳樹屯西街小杉洋行内重長蓋女)○私は今回初めてですからどうぞよろしくたのみます此後は繪葉書の交換をして頂戴ね(和泉國泉南郡佐野市場西坂方原田勇子)○繪葉書や玉章を下されし誌友の皆樣よ妾或事情のため御返事をしなくて申譯ありませんが惡しからず思召して頂戴。(遠州周智郡宇刈村春岡加藤敏子)○近頃男子で女子に交際云々と云ふ方で女の様に女の名を用ひ何々子等と麗々しく申し立てるお方があるが一體何故です。男と女は決して敵視してる者では無いだから男は男らしく正々堂々男の様に名乘つたら女だつて想ふ處があつてよ(大分縣速見郡東山香本小寶見七二本田一枝子)○皆樣、同情をお寄せ下さいまして有難、一一御希望を満す事の出來なかつたのが殘念でした、陸館の萱場稲子さん住所とお名は消印で分りませんでしたからお知らせ下さい文壇のこして頂きました。(富山縣 長瀬榮※)○先月誌上にて御交際求めましたところ田舍者にとの御さげすみも無く、美くしい御玉章や繪葉書、下すつて、まことに〳〵有難う御座ります男の方はきつぱり御ことはり致します、柿沼樣どうか惡しからず(草のいなりにて 櫻田芳子)○誌上の親愛なる諸姉上様妾豊岐の小島の片田舍に今宵く寂しく文學をのみ友として暮してる年少さき小供ですから、よろしく御導きの程願ひます(豊岐國白ばら)○文壇の姉上様、東宮殿下の昨秋東北御行啓の當時のはがきも澤山ありますから御申込み次第交換致します、どなたでも(秋田市保戸野窪盤つれ子)○姉様方片田舍に筆取る妾と御交際して下さいな玉章や繪葉書などの交換を願ひます(遠江國榛原郡萩間村大寄庄太郎様方にて島花子)○皆様何卒繪はがきの交換を願ひます御返しは當地の諏訪湖スケート繪はがきにて(長野縣諏訪郡永明村加藤鶴場内加藤芳枝)○おなつかしい高知の志津子さま度々お手紙有難う、私、ほんとにお優しいお姿とお心とを思ふとたゞもう嬉れしくつて……姉様私一生のお願ひですからいつまでも〳〵お見捨てなく、失禮とは思ひましたがあまりのうれしさに誌上に出しました、どうぞお許して頂戴。(大阪さよ子)○滿天下の誌友諸姉上様妾は今年始めての愛讀者ですが未使用の繪葉書交換を願ひます(名古市門前町貳丁目太田五三郎方太田秀閑)○皆様末へ長く御交はり下さいませ又折角お手紙下さつても住所のわからない方には御返事さしあげませんでしたから惡からず。(長崎縣立佐世保病院内安藤たし子)○姓名不明の方には返事差上ず、男子の方は無用(靜岡縣引佐郡都田村新木玉雲寺前鈴木さくえ子)○一枚限りでなく繪葉書の交際をねがいます(福島縣耶麻郡塩川村北村かね子)○皆様私は田舍に住むものです、一時的でなく末長き御交はりを願ひます。併し男子の方はお斷りいたします

（靜岡縣引佐郡都田町鈴木佐太平方 仲山きち子）
○お手紙下さつた諸姉様有難う一々御芳名書き申すべきですが私の心はこんな心とお察し下さいなほ今後も相變らず玉章の交換を諸姉に願ひます。　私都合に依り次の所に轉居してよ（牛込區若松町百十八番地尾崎方塚原けん子）　○給端書玉章の交換して頂戴な、寫眞お送り下さいましたら美しいヱハガキ（未使用）を以てお禮申します（奈良縣宇智郡五條町須惠山田翠子）○私三月號にて御交際を願つて置きましたが今度御交際申す事が出來ません様になりましたから惡しからず思召し下さい　御玉章下さいました方に御禮を申上ます（芝、中西榮）○誌友の皆様山家に住む不束者ですがどうぞ御交際を願ひます。（播磨三木町福井町月川まさ子）○誌友の皆々様私の様な者にも御玉章下さつて誠に有難く御禮申上げます尚御交り下さいませ愛讀諸姉の壯健を祈る（天滿堀留筋町北紀念通り佐賀八重子）○過ろ頃は諸兄姉様より美しき御自筆澤山御送惠下され有難たう感謝いたします　何卒繪葉書や肉筆書の御交換をお願ひ申します　（京都市蛸薬師寺町西入北田榮翠）○誌友の諸姉様私は慶の都に住む淺學な者ですがお手紙や繪はがきの御交換を願ひますそして浪花にお住居のお方はぜひ〳〵御交際をお願ひ致します　（大阪市南區 瓦屋町生田房子）

讀者通信

○豊北より　内地は未だ寒うございますかお正月には如何でした　當地は元旦單衣を着てかるた取りをしましたわ然し今は置れ着をしたい者なんですよ、年中て一番寒いのは二月なんてすもの、——綿入を着てゐる人さへありますわ（臺北稗貫みつ子）

○武生より　武生の女子實業學校には、今年から袴の白筋をとりました、なぜと申しますと實業學校の生徒だと、はつきり分る樣にしましたら、奢侈に流れたからださうです（やまざと）

○京城より　京城は例年にないあたゝかさて私の母など何だか氣味がわるいと申して居た位てしたが小寒も過ぎ大寒も過ぎて節分がすんだその翌日から初めて京城らしい寒さになりました、漢口も大牛結氷したと聞きました（二月十日ゆかり子）

○下總飯岡より　浪邊より一筆申上候當町にては昨今鰯漁夥しく約四日間に漁鰯したる寶高は五千圓位だそうです漁り來る鰯は大抵東京へ汽車にておくります、皆様の中で味う御方もありませう（三月三日宇井花月）

○龍山より　記者様私も龍山の山の中の事を少しばかり申上げませう、此のごろは龍山も軍隊地となつた爲め建築物もおもに陸軍の官舍が多く、韓人家屋はすみの方に小さくなつて誠に氣の毒な有様です、高樓盤を突くの大建築物も司令官々舍として着々歩を進めてまゐります（登里子）

記者と讀者

○記者様私は初めて投書といふ事をしました、これまで幾度も〳〵書いては不手なものばかりてどうしても出す事が出來ませんてした今度といふ今度もとても誌上に上る樣な者はありませんのですがもしもこの種々の中で一つでも印刷して出ましたら私はどんなに嬉しく御座いませう本を見るのは好きで種々見ますが作るのはいたつて下手なので御恥かしく御座いますがこれからは何によらず一生懸命になつてやつて見ますからどし〳〵お直し下さいまし　そして又少しは見られる樣なものが御座いましたら誌上のはしを汚さして下さいまし（駿河芙蓉子）記者曰、此月は何う云ふものですか、初めて投書をするからと云ふ方が澤山ありました、毎號いくらかは然う云ふ方があるのですけれど、此月のやうに幾十人となく然う云はれる事は珍しいのです此等の方が皆好い寄稿家になられると思ふと記者は密かに心強く思ひます、誌上もます〳〵新しい詩文で飾られるわけです、投書したいと思ひながらまだ恥しくて出さないなど云ふ方は、今ちやうど好い折ですから思ひ切つてお出しになるのが、よろしからうと存じます）　○記者様、私は不平でたまりません。新年號から少女文壇が設けられるとのことでしたから私は大さう喜んで居ましたらまあ何うでせう。自分の作の載つたのは嬉ししゆうございましたがたつた二頁は眞に非道うございます。そして二月號はたつた一頁、私は情なくなつてしまひました。それに一番終りにあるのですもの、も少し前の方に置いて下さつても好いでせう。私等の地方では何所に行く時でも子供を先に行かせます、記者様方の奥様だつて元は子供でしたわも少し前の

方に置いて下さい。そして三月からせめて四頁位にはして下さい(肥後、遠江)(記者曰、御もつともてす皆さんが好い作さへ出して下さいますなら、追々頁を增します、何分外の欄もそれ〳〵締頁て動きが取れないのてすが、記者の奥樣まて引合に出しての御注文てすかゝ、こりや何うしても四頁位にはせずはなりますまい)○私にはまた別紙のものを投書させていたゞきますこんな不便な山里へ住むやうになりまして自分もまことに不便のものてすが東京にゐる弟から送つてくれます女子文壇を唯一のお手本として長い月日の中にだん〳〵と稽古したら文らしい文ができるかと思つて未だなにも夢中てすがつゞいてならひたいと思ひますから無法な書きやうがあつた時には御序に御いましめ下さるやうくれ〳〵も願上ますあら〳〵(秋子)(記者曰、殊勝なお心掛に感服いたしました)○京都、木村さんに、折角てすが給獎書てはいけません(記者)○高知山内志津子さんに、何うも差上かねます(記者)○秋田、ゆき子さんに、貧しくて女子文壇を買へないやうな方には何うか貸してあげて下さい、投書も取次いて下さい、(記者)○以下に記す諸嬢からの御懇示は一々拜見いたしました、別にお答しないても差支へのないものは申上ません、參考になることも逐一了承いたしました、麴町、石井芳子。明石、落葉子。よれ子高岸紅女。日向、武田春子。武藏、白百合。高林鷹子。境野靜子。三重、杉澤さちへ。細見その子。大阪、少女。照子。京都、井上すみ子。北海道、愛讀少女。大分、郁子。昔和女。常陸りう子。村上とく子。佐賀、ゆかり子。佐山、ましを。羽後、古内たか子。山梨、小林みつ子高山かほる子。門司、志木夢子。てつ子。山口みちよ子。兵庫、一少女。青山けい子。姫路、綾子。石見、河合菊子。氷室女。磐城、登利子逝く春。淺草、土岐鶴子。茨城、中山登久子。南滿洲、重長孤女。篤子。森。備後、きみ子。備後、作田鶴代子。恒子。大阪、照野。笑耶子長野、千代子。大阪、石文子。千種の野菊。千葉、笑野綸みつ子。婦佐子。群馬、仙子。(記者)

問合せ

○本郷の山田千代子様　昨年二月お目に掛つて以來絶えて御無音に過ぎました其後如何遊ばして入らつしやいますか森川町とのみては分りませんから一寸讀上て番地をお知らせ下さい。私は昨年御地より歸國致しました近々又上京致す考へて御座います。(北海道にてTK)

○宮崎梅子様　横濱のフエーリス女學校にゐらした方てございますが昨年二月御別れいたしたまゝ更に音信がございませんが今何處に居らるゝか御承知の方は本誌て御知らせ下さい(本郷、峰子)

○小樽の岡田しづ子さん　御地女學校に許嫁武子樣が只今通學して居りますか町は勝内てす一寸下名まて通知下さい(新潟縣佐渡兩津町字夷田村良子)

○津田篠代様木岡治子様　御住所不明て困つて居りますからどうぞ委しく知らせて頂戴れ、(秋田松澤ふみ子)

○麻布の川和白帆子様　甚だ失禮てございますがあなたの御所書のある物を何にかか置忘れましたので其後御手紙差上る事さへ出來ず何卒御寄し下さいませ今一回御住所御認めの上御送り下さい(本郷峰子)

○金田香雲様　本誌て每號見受まする和泉の金田香雲子様、もしや貴女が信達高等小學校を去る二月前に卒業しなさつた男里とかの金田芳枝様てはありませんか左様てしたら何卒御手紙を下さいませ私は今下記の山家に住んて居ります(大坂府下泉南郡熊取村松本友治郎方橋うゑ子)

○辻本愛子様　先月の本誌々友倶樂部中にて御姓名を拜見致しましたが、貴女様はもしや、福岡縣小倉の御生れて、三十九年頃まて小倉高等小學校に御通學遊ばしてゐらつした御方ては有ませんか、もし其御方て御座いますならばなにとぞ、次號にて、今の御住所をくわしく御知せ下さいまし、御願ひ申上ます。(岩田靜子)

○井上一榮様　只今はどちらの御住ひてすか私は年賀狀を北海道旭川三ノ六左登號として差上げましたが更に之れなくと附箋して歸つて參りました、二三日經つて旅行先青森縣古間木にてとしたあなたよりの御端書あれば讀に受取りましたが御返出す事が出來ませぬから今一度詳しく御願ひ致します(岐阜縣町篠田とみ子)

個人消息

○今井華子　本誌誌友横濱の今井華子さんは去る二月十七日燈の祭に誘はれて花の蕾十八才なあへなく天國に迎へれました、皆様にお知らせまて(東京、青井女)

水野君より

東北旅行中の水野葉舟君は、折々私に宛て〻はがきをくれる、何處を歩いたかと云ふことが分るから左に順を逐ふて掲げる（啄木）

第一信

二月二十八日、日が暮れるころから、空が晴れた澄んだ空に月があつた、吉江孤鴈君と前田木城君とが來てくれた。八時五十五分の海岸線の急行に乘るつもりで家を出た。久しぶりに旅に行くので心が忙しい、出がけに巴里の高村君からの手紙が届いた、木城君がそれは途中で見ろと言つたのでポケツトに入れて行く（三月一日朝、仙臺にて）

第二信

今夜はあまり暖かで、何だか欺されたやうな心持がするのです、まだ東京の場末に居るやうにも思はれる。今夜はすつかり疲れてしまつて、うと〳〵してゐます、町を二度ばかり歩いた、東京でなら古ぼけた龜井戸近所の町のやうな處、その上に薄暗いことつたら……（三月一日夜）

第三信

仙臺でぐづ〳〵ついて、今日やつと花卷に向つて出發する、今松島の停車場に着く、明日鹽釜に行つて、山の……鹽釜神社の山の上から、型ばかりに松島の景色を見ました。珍しい景色だが、僕はそんなに嬉しくなかつた、たゞ白つぽい岩の色が、全體に太古の世界を思はせる點が心に殘つた。（九日、松島驛にて）

第四信

花卷にて――今夜はじめて旅宿に眠る事になりました、花卷の町は雪解けて、水がついて居るやう、今夜はこゝに一泊して明朝遠野へ出立のつもり、途はかなりわるいよし仙臺を發つてから、次第に雪が多く――深くといふのはもつと寒い中の事――なつて來ました。北上川の沿岸の廣野はまだ雪が一杯つもつて居た（九日夜、花卷の旅宿にて）

第五信

今――九時半花卷を發せんとす。今朝はこれが北國空の特長か、灰白色に曇つてまた冬の最中だ。明日は麗しく晴れ、暖かく日が照し、滊車の中の人も珍しい暖かい日と云つて居たのに旅の淋しさが心に迫るこれから遠野へ。（十日朝）

第六信

矢澤にて十二時。北上河を二度渡る、山中を行く雪、山をつゝめり寒さ漸はげしくなる。今夜八時か九時頃でなければ遠野へつけず、山間の家の建て方はすつかりちがつてる。（十日）

第七信

こゝは花卷から約七里の處、二三時間前ころから粉雪が降り出した。遠野への馬車は二臺、こゝで乘りつぐ、途中はなか〳〵景色が好い猿ヶ石川に添つた道が殊に好い。歩くことが多いのですがそれは今夜。（十日午後四時、宮守にて）

第八信

昨夜は九時少しすぎた頃着きました、雪の中を五六里も馬車にゆられへと〳〵になりました。着いてみると三四日前に、佐々木鏡石君が大不平の手紙を置いて行つてある、ヤレ〳〵と思つた、今朝もまたものを書く勇氣すら出ぬ、馬車ではれ上るやうにして一日乘りとほしたので腰が痛い。（遠野にて十一日朝七時）

第九信

昨夜はこゝに芝居かゝり。それを見にゆく、夕方から雪が降り出して、歸る時には大雪、眠る如き――雪にうもれ山にかこまれて――町を通りて歸る。

遠野のソバを食ふ、うまし――昨日久しぶりて佐々木鏡石君に逢ふ。（遠野にて、十三日）

雜報

婦人界消息

○竹田宮妃殿下の御慶事

前號にもお報せ致して置きました通、竹田宮妃昌子内親王殿下には、御產期滿ちて三月四日午後二時に、安々と王男子御分娩あらせられました、御產は誠に御穩かに、御母子共至つて御健全、殊に王子には御胎内の御營養十分だつたと見え、非常に御身大きく居らせらるゝ由であります、越えて十日午前十一時高輪御本邸で御命名式を行はせ給ひ、御名を恒德王と命ぜられました、竹の園生のいやしげりゆく御代、まことに目出度さの極みでご座います。

○久邇宮妃殿下の御渡歐　獨逸御留學中の久邇宮邦彥王殿下に御對顏、共々歐米御漫遊の爲め御渡歐に相成る妃俔子殿下には、二月十五日御出發に先ち、墓參の爲め京都に赴かせられ、四五日滯在御用濟、更に三月廿七日神戶發熱田丸にて調度頭長崎夫人の御隨行で御出發になります、猶ほ今回の御洋行費は、此間の梨本宮妃殿下と同じく、宮内省より二十萬圓御實家島津公爵家から五萬圓の御支出だと承はりました。

○韓國女官の來朝　韓國高級女官で、千尙宮(六十一)趙奉保、夫人(五十六)高尙宮(三十五)と云ふ三名の方が、我宮中の儀式制度及び上流婦女子の風俗習慣などを視察する目的で、三月廿二日の入京、春猶ほ淺き新橋驛頭に、唐繪の美人を視るやうな異彩を放つたさうでした。

○樂媛會の春季音樂演奏會　女子音樂學校の卒業證書授與式を兼れて樂媛會の春季音樂演奏會が三月二十日神田の青年會館で開かれました、少女子の纎手にて彈かれたオルガン、ピアノ、ヴアイオリン、箏曲の合奏や獨彈の樂聲のたゞよひ海のやうに、紅の唇もるゝ黃金のひゞき白銀の聲の音波のみだれ湧きつ靜まりつ、聽衆の魂は常世の春に浮かるゝ樣にもあつたらうと思はれます、樂しく美しき集會でありました。

○東洋高等女學校の生徒募集　東洋高等女學校は小石川丸山町に在て有名な村上專精博士の經營に係るものださうですが、今度の新學年には第一學年一百名無試驗で入學許可し、二三四各級も缺員若干名募集する由です、尙ほ目下壯大なる講堂新築中で、門前數十株の櫻花滿開の頃は落成するでせう。

文界消息

▲文藝院問題は今のところ政府の問題でなく、民間の問題になつてゐる、恐らく政府の考へと、民間の考へとは甚しき喰違ひがあるだらう、成立しない前から不贊成を唱へるのも野暮だが、成立した曉を豫想して力みかへるのも早手廻しだ、要するに文藝院設立は國家的文運の消長には大關係があるだらうけれど、文藝其ものゝ發展には、有つても、無くても大した相違はなからうと思ふ。

▲與謝野夫人は三月三日男子を出生した、母子ともに健在。名は麟とつけた。

▲太平洋畫會は上野公園二號館北部に於て、六月中展覽會を開くことに決定した。

▲青年畫家として近來頓に盛名を博した和田三造氏は近日歐州留學の途に上る。

▲目下歐州漫遊中の中村春雨氏は愈よ今秋歸朝すると言て來た。

▲水野葉舟氏は二月二十八日夜出發、雪の東北を觀光の爲め奧州地方の旅程に上つた、未だ歸京せず。

▲本誌には久しい以前から作物を發表して常に

優勝の地位を占め、『文章世界』にも其作を出して、評判ある水野仙子こと本名服部貞子孃は服部躬治氏の令妹だと云ふ噂であるが、然うらしく思はれる。

▲此れも嘗て本誌の寄稿家として才筆の聞えある高仲菊子女は、今回早稲田大學英文科卒業加藤信正（漆花）氏と婚約が成立した。

▲眞山青果氏、大町桂月氏は何れも關西地方に旅行した。

▲三月十日の『大坂朝日新聞は』創刊滿三十年の紀念號として百頁の大新聞を發行した、紙面の趣味は舊くとも關西の一王國たることは爭はれぬ。

▲『讀賣新聞』は三月十三、四、五の三日間本社新築紀念の爲め特に頁數を增し、文學的作品を滿載した。

▲豫て鎌倉に病氣療養をして居た生田葵山氏は漸く全快したので、近日から大いに創作をやると云ふこと。

女學生界

▲日本で海老茶袴の元祖は元の華族女學校、今の學習院女學部で、前校長下田歌子女史などは大いに之を推奬したものであるが、一時海老茶式部の語流行し、海老茶袴は嘲笑の的となつた爲め、大抵の女學生は紫とか紫紺とか鳩羽とかに替へ、海老茶は大變少くなつた、けれども學習院だけは超然として世評に省みず海老茶で押通して來て今でも同校の生徒は大部分海老茶袴で通學してゐる▲實踐女學校の矢絣更紗の制服は一派あるものだが、筒袖にしては、より緩い彼の袂は、下に普通の衣服の袖を三つに折つて入れて置く爲ださうだ價は一着一圓八十錢で出來るさうだから大變德用なわけだ▲成女學校の生徒は袴の裾に黑い筋が一本ある▲櫻井女塾の生徒の大部分は帝國大學生の許嫁か細君で良人が在學中に英語やお料理の稽古をして置いて卒業の曉にスヰートホームを作る準備をしてゐる▲女子美術學校の生徒は胸に美の字の徽章を附けることになつてゐる▲女子學院の生徒は英語と音樂に熟達してゐる▲女子英學院の卒業生も英語の力は殆んど完全してゐる、此期の卒業生は十六名ださうだ。

○片々

▲東京は陽暦で三月三日の雛の節句も過ぎました雛祭りも、家庭ばかりでなく社會的になつて六日午後一時半から、神田青年會館にお伽倶樂部の催ふして雛祭が公開され、巖谷小波、久留島武彦諸氏のお伽噺や、小舞手品などもあり、實に興味深く有益な娘の子デーで盛んだつたさうです▲柵の柳が芽を吹き運動場の櫻の蕾が脹らむと、大抵の學校は學期替りて色めいて參ります、學生も忙しいでせう、當局者も骨折てせう▲今度故藤村操氏の紀念碑が青山墓地に建てられるとか、碑は竪六尺幅四尺の自然石で、表面には樹を削て自書した例の巖頭の感を模寫し、其他撰文揮毫など皆當時同窓の親友に依てせらるゝさうです▲都は三月の十三日の午前八時頃と夜の十一時半頃とに地震がありました、朝のは微震で珍らしくも無いのですが、夜のは隨分の强震で震動期も二分と四秒の間ですから一時は騷ぎでした、東京の方には格別の被害は無いが瓦が落ちたり壁が剝げたり材木が倒れたりはしたところがあつて、當社の藏の壁も大分損害を蒙りました。しかし是れて陽氣も定まりました、初旬以來養花の曖雨しきりに催ふしたので、物の芽もすく〳〵と伸びて參りました、今に空かゞやき花が輝やくと、人の顏もかゞやいて來るとてせう。

○正誤

前號口繪「文士の夫人」中小杉天外氏夫人とあるは同氏の實妹なりしを、編輯の際誤つて挿入したるものなり此處に之を正誤す。なほ序に前號の表紙に第五卷第三號とあるは第四號の誤り故併せて訂正す。

新刊

○新體國語漢文辭林　小山左文二編著

本書は、小山氏が現今盛に世に行はるゝ中學校、師範學校、高等女學校及び各種實業學校國語漢文教科書二十餘種を精讀して、其の中より故事、成語、格言、俚諺、和歌、俳句、地名、人名、引用書等を摘錄し、更に新聞雜誌中に散見せる熟語を蒐集し、一々之れに簡明適切なる解說を附せしものにして、語數三萬有餘、紙數千二百二十餘頁の彪然たる一大辭典なり。其の排列法の新體なる點にあり。即ち、首字の總畫を按じて全字句を排列し、且同一畫の漢字中にても、採錄せる語數の多きものより次第に其の少きものに及ぼし、彼の一般の畫引法の如く、二樣の手段を費すの煩を避けしめ、又五十音順排列法の如く、未知の字句を索出する場合に於ける困難を免れしめたること是なり。其の他、卷首卷尾に於ける本書の索引は輕便的確なること、物を囊中に探るが如し。蓋し本書の如きは、中等學校學生が自修用、復習用として唯一の良辭典たるは勿論、一般の讀書社會の擧つて歡迎すべき好著述なりといふべし。（定價金貳圓＝東京京橋南鍛冶町松邑三松堂發行）

○淑女の美德　皆川正禧譯

所謂淑女とは何う云ふ資格を具へたものでせうか、本書を見れば淑女たる心得が詳しく書いてあります、座作進退の手近な處から、言語談話運動健康等のこと精神的には意志の鍛錬品性の修養に關すること等項目凡そ二十餘、西洋の博士が言たことだけあつて着實且斬新です、ありふれた修養書より遙に現代の人に適切なる點が多いやうに思ひます（定價五十錢）

○少女の操　宮地竹峯譯

これは小說です、佛國の大家ベルナルヂン、ド、サント、ピールの原作で、印度を舞臺とし、可憐な少年少女を主人公とした優しい小說です、其場切りで頭惱から說けてゆくやうな小說ばかり行はれてゐる時に淸新にして而かも時流に媚びぬ斯る好小說の譯されたのは世の子女の爲に欣ぶべきことです（定價四十錢）

○全國學校案內

內外出版協會の學校案內は此種案內書の元祖であるだけ、十數年の經驗に依りて殆んど完全したものです、此書一册あれば日本全國の官私各學校の主なる現狀、入學の手續等が其學校に就いて聞くのと同じやうに親切に分ります（定價五十錢）

○ツルゲーネフ短篇集　吉江孤雁譯

第三版成る（定價五十錢）（以上四書、東京市外巣鴨郵便區上駒込內外出版協會發行）

○和歌新辭典　金子薰園著

新派和歌の辭典です、四季と無季と人事とに三大別し各編數十項に分れ、各項每に櫻なら櫻の歌を作るに適した類語を並べむつかしい語には解釋を施し、次に引歌五六首宛を添へてあります、引歌は晶子、寬、通治、柴舟、夕暮、牧水、萬里及び著者の歌が大多數を占めてあります、和歌の初心者は之を座右に置き善用すれば人一倍上達が早からうと思はれます、菊版半截函入クロース本綴の美しい書物です（定價六十錢、麴町區飯田町新潮社發行）

○小理小情　沼波瓊音著

談理もあり、抒情もありと云ふので小理小情と云ふのでせう、多くは著者の實驗から來た感想を書いたもので、載する處十六篇、それ〲異つた面白みがあります、筆には癖がない、輕快なる文字と評すべきものでせう（定價三十五錢、神田駿河臺東京國民書院發行）

餘興課題　色彩

女子は男子より色彩に就いて、注意が深い筈です、若し諸孃の中で未だ注意の到らなかつた方があるなら此機を幸ひに色彩に注意して答を寄せて下さい

▲色彩とは云ふまでもなくあらゆるものゝ色です若し色彩がなかつたなら世界は何んなに淋しいでせう

▲單純に赤とか、綠とか、黃とかの好き嫌ひを言ふに止まらず、夕燒雲の色彩美とか果實の色とか、衣服の色合とか花の色澤とか、凡ての物に就いて色彩の好き嫌ひ又は其感じを聞かせて下さい▲色彩の配合と云ふことも大切です、之に就いても意見があるでせう▲色の無いものに色を與へて一種の思想を言ひ表はすこと、例へば赤き笑ひだとか、灰色の悲みだとか所謂象徵派の言ふところに似た考も面白いでせう▲要するに色彩のことに就いては云ふことが無數にあらうと思ひます

▲原稿は例の通り十六字詰十行內外、懸賞も例の通り。（しめきり本月十五日）

寫眞懇請

讀友諸孃にお望みいたします、本誌愛讀者の面影を紙上で紹介致したいと思ひますから、從來の如く盛んに御寫眞の寄送を願ひます、お一人の寫眞に限りません、愛讀者の方々が時々催小集の紀念に撮つた寫眞など最興味があらうと存じされるます、或は二三人連れてお友達同士お寫しになつたのも家族の寫眞も歡迎致します、女子の雜誌です結構です、なほ家族の寫眞から家族でも女子の方が多く寫つて居るのを希望します、女のお子様達の寫眞も好いのです、名所、風景、又は風俗寫眞も勿論掲載致します、風景などは成べく餘り世間に紹介されて居ない新しい場所が好いのです、以上凡人物以外には各地の『乞返送』と書添えて下さいますれば、用濟次第て御寄送の寫眞は直ぐ御返し致します、何卒賞與を懇請します、且人物風俗其他何れの寫眞にても、奇抜にして餘り世間に類の無い好い寫眞でしたら相當の報酬を差上るとになつて居りますから、其邊の所も御承知置きを願ひます。

投稿締切日

凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

○女子文壇投稿各種懸賞定額（四十二年一月より改正）

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

- 特別賞金五圓
- 甲種（短篇小說、美文）
  天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。
- 乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
  天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。
- 丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、教への庭、少女文壇圖畫は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る）
  天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。
- 各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す　壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す
- 賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分（一日定期發行）　毎月一回

一冊（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）　年四回

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部——十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	同前金貳圓三拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓六拾二錢

▼申込注意　振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割増（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

	一頁	半頁	一行
特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に比し無類の割安
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切　毎號十五日前

特約取扱　○京橋　日本電報通信社　○京橋　明治廣告社　○神田　博報堂

明治四十二年三月廿九日印刷
明治四十二年四月一日發行

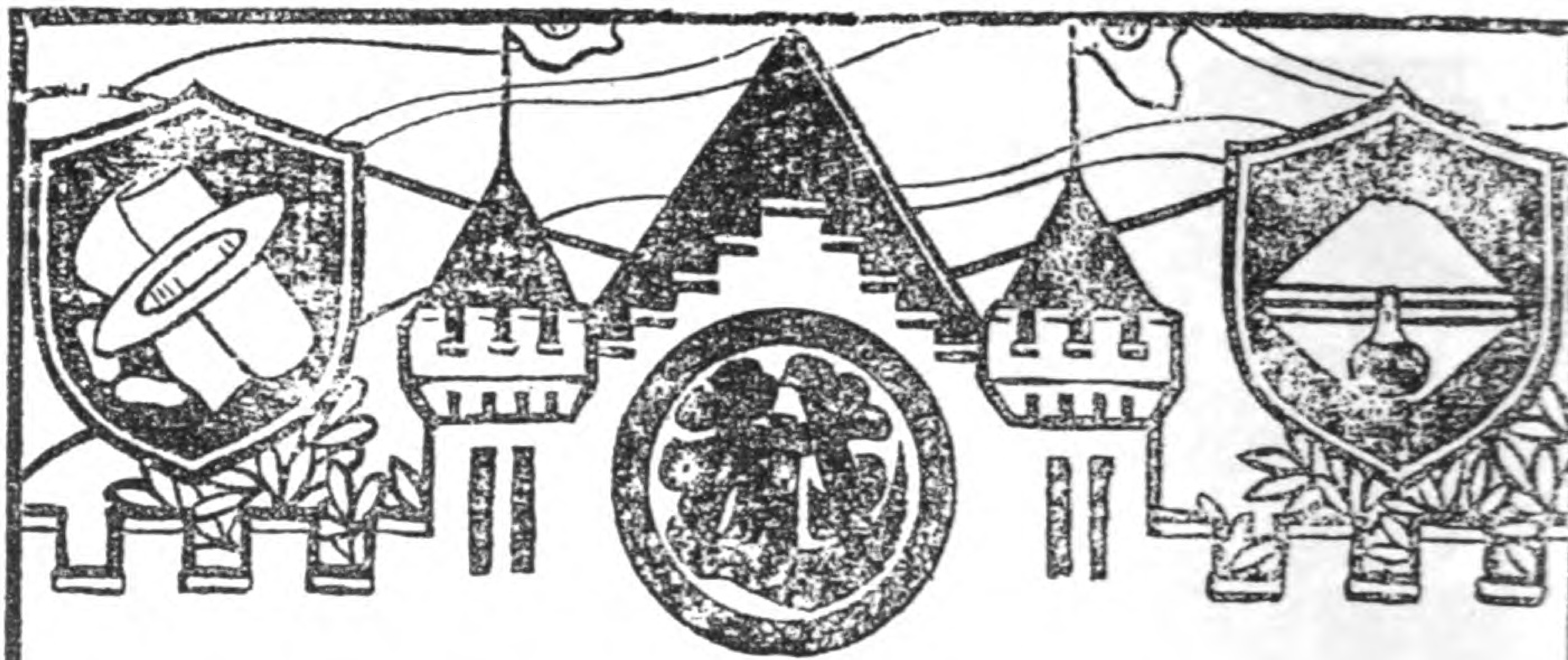
定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話〔本局六〇七番〕

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂





【東京秀英舍印刷】